

# でこぼこだらけの道1

奥村清志

## はじめに

一九九五年一月十七日早朝、起きてテレビをつけると、画面に信じられない光景が映し出されていた。赤い火の群れが、真っ暗な町を舐めつくしている。

なんだこれは。映画の特殊撮影だろうか。模型の町を焼いて、上から撮っているのだろうか。やがてゴジラがのっしのっしと現れたりするのだろうか。

だが数秒にして、これは模型ではない。幻覚でもない、リアルタイムの実映像だと知った。空恐ろしい現実だった。神戸の町が焼けている。全身が身震いした。

阪神淡路大震災であった。

この大災害において、コミュニティラジオや、黎明期のインターネットが、町の隅々の状況把握や人命救助に役立っていた。中でもインターネットは力を発揮した。

電話回線が切れ、テレビもラジオも地域密着情報を伝えられなくなっていた現場では、コミュニティラジオが人々をずいぶん励まし、ネットが刻々の被害状況や救助情報の発信源として活躍していた。

インターネットが日本で初めて現実生活に役立った場面であった。

インターネットは、主にアメリカで研究されていて、研究所同士の情報のやりとりなどに使われていることは、雑誌や新聞で知っていた。それが一般の実用に供されるようになったとも、伝わっていた。だが、私にとって、それはまだ遠い世界のメルヘンだった。世界をたちまち席卷することになろうとは、想像もしていなかった。

未曾有の大災害をきっかけに、日本でもインターネットの実用化が一気に進んだ。庶民の生活の隅々にまで、それは急速に展開され始めた。

私も遅ればせながら一九九七年二月、自宅にネット回線を引き、インターネットに加わった。

まず始めたのは『坊っちゃんだより』という日記風エッセーのホームページであった。たちまち全国から、いやアメリカ在住の日本人からさえ想像以上のアクセスがあり、メールをいただくようになった。ネットの威力に感嘆したものである。個人のホームページがまだまばらであった時代だからこそその現象だった。

この間に発信したページを抜粋し、我が精神史の歩みとしてとりまとめようと思いついた。

事のついでに、二十代、三十代という、人生の悩み多き時代にも思いを馳せ、古い日記等をひもといいて、多少の焦点を当ててみたいと思う。

## ■一九七一年三月一日《日》

二月二十日すぎから三月五日まで卒論の最後の仕上げ。特に三月に入ってから、連日連夜、徹夜に近い強行軍が続く。体調に異常はないが、無理がたまってゆくのがはっきりわかった。五日五時の締め切りぎりぎりに教務へ提出。

十日は午前中、卒論試問。主には清原先生から試問されたが、なんとか無難に答えることができた。試問を終え、春の近さが感じられる明るい日ざしの中を、自転車で下宿に帰る。昔、高三学年末の最後の授業を終えて喜びにあふれて家に帰ったときの解放感、安堵感に似た、なにも言えない解き放たれたものを感じた。

その日の夜、電々会館で卒業パーティー。清原先生、手島先生は来ていたが、池川先生は来ていなかった。また、北門も来ていず、ここに彼らのかたくなさの証明を見た思いがした。無責任との責めは甘んじて受けるが、池川先生への嫌悪感が、ぼくに特研の最後の報告をし、礼を述べるために研究室に行くことを許さない。先生に借りている原書の本は、明日の夜にでも、先生のいない時間に、研究室に返しておこう。

パーティーは、うわつづらの親睦を深めはしたが、実のあるものを感じず、面白くなかった。教授連中との日常の接触が薄かったからだろうか。

パーティーのあと、Zの合宿。これは実に楽しかった。いつまでも思い出に残るものになるだろう。

合宿が終わった十三日の夜、有村、松野、水落たちと、先斗町の小さな飲み屋で酒を飲む。夜は松野の下宿に泊まる。

そして今日、昼前、中郷の下宿にN社の問題を解きに行く、彼女と二人でまだ寝ていた。彼女、十八才だそう。大阪で看護婦をしている。九月に旅行先で知りあったという。はたしうまく行くのか、一抹の不安を感じたが、ともかくも祝福したい。

あと一日しか京都にいないのかと思うと名残おしい。この間に得た多くの友だちを今後も友だちとして残したい。大多数の友だちと最後の別れをしないで京都を去るのが最大の心残りだ。

七月に、中郷君と二人でN社の入社試験を受けに行き、合格したのだった。ぼくにとっては人生ただ一度の入社試験だった。当時は今のよう一年以上も前からリクルートに奔走するような時代ではなかった。のんびりしたものだった。

リクルートスーツなどというものもなく、普段着のまま、東京本社に出かけていった。専門科目の筆記試験と面接があった。どちらもなんとかクリアした。

驚いたのは、往復の交通費や昼の弁当がすべて会社持ちだったこと。会社というのはこういうところかと、つまり社員（あるいは社員になろうとする者）には、決して個人負担をかけさせないところ、それが会社なのかと、つくづく痛感したのを覚えている。

「N社の問題」というのは、事前に送られていた分厚い社史に関するものだった。それを読みさえすれば答えられるものだった。入社式の日に提出せよと書かれていたように思う。

## ■一九七一年四月一日《木》

二十四日に卒業式。いったん松山に帰っていたが、ふたたび京都に出かけて行った。

式のあと、有村や松野たちとボーリングをし、酒を飲み、十二時頃まで四条あたりをほつき歩いた。さらに有村の下宿で碁を打って、最後の学生生活を堪能した。

特研が不十分にしかできず、池川先生に迷惑をかけた以外、学生生活は満足できるものであった。悔いなく卒業することができた。学生時代のよい友たちと精神的にバラバラにならなかったのは大きな収穫だった。

今日が入社式。

寮には二十九日に入った。寮生活にも慣れてきた。思っていたより自由で、食事もよい。ただやはり、二人部屋の生活は経験がないので、ちょっと気を使う。でも、大したことはない。親しくなってしまうえば、同じことだ。

## ■一九七一年四月一四日(水)

本社受入れ講習などで会社幹部に言われたことから、様々なことを考えた。それを簡単にまとめてみる。

- 一．経営者は労働強化を悪とは考えていない。
- 二．経営合理化の裏側では、人間性が完全に無視されている。
- 三．利潤だけが企業の目標であり、社員や国民のためという発想は彼らにはない。これはV E (Value Engineering) などにより、更に完璧な方向に強められようとしている。
- 四．四次防、五次防の利用など、軍需の面にもためらうことなく手を出している。
- 五．人間工学、創造工学など、資本自由化の荒波を乗り切るための新しい企業の科学(?)が作られている。

あと十日余りでMに会える。五月の連休には二人でどこかに旅をしよう。

Mはぼくの妻になる人だ。小学一、五、六年生の同級生でもある。この時点ではすでに結婚を約束する仲となっていた。

## ■一九七一年四月二二日《木》

今日は、時間外勤務拒否。明日は二十四時間スト。職場はみな、賃上げのために闘うという点で団結がとれ、組合の方針が徹底されている。しかし、日常的に組合の活動に参加しているかという点、それは、そうとも言えない気がしている。

いま配属されている製造現場では、班長がそのまま自動的に組合の職場代表にもなっている。

これは社民的な組合の弱さの表れだろう。大きな問題点と思われるのは、

- 一．生産性向上運動を組合が会社と一体になって進めていること。
- 二．社会変革の目標があいまいで、基本的には資本主義のわく内での変革を夢見ている。ここから、政治活動への消極性、すなわち、経済主義に陥る芽が生まれてくる。
- 三．そのため、話し合いによって分け前をもらうという立場しかとれない。それはともかく、明日から三連休になった。誰かに電話して会うことにしよう。

「いま配属されている製造現場」というのは、入社後ひと月間ほど研修配属されていた、電話交換機の部品を作る工場のことだ。ベルトコンベアによる流れ作業を初めて体験した。そこで仕事をしながら、ときおり本社に呼び出されて「本社講習」というのを受けていた。本社への移動は、事業所間を頻繁に行き来していたメールバスという名のバスが便利だった。

### ■一九七一年五月一日《土》

連休中のことを書いておく。

四月三十日の夜、京都に行き、その晩は田所の下宿に泊めてもらう。藤井氏にも会う。

五月一日、岡山でMに会う。倉敷、岡山城、兼六園に行く。

二日は、津山でMの同窓会があったので一緒に行き、ぼくはその間、津山城跡（鶴山公園）に。晴れ渡った暖かい日曜日で、公園は弁当を持った花見客で賑わっていた。つつじが美しく咲きほこり、いかにも古い城下町らしいのんびりした感じ。その日は姫路に行き、夜の白鷺城を見る。

三日、宝塚に行く。遊園地は、万博並みの人、人、人。ジェットコースターは百メートルもの行列を待たねばならず、あきらめた。三時から六時まで宝塚歌劇の公演を見る。席は三階で、あまりよくなかったが、それでもけっこう楽しめた。夜は京都に行き、炎で少し歌ったのち、田所の下宿に行く。

四日はうつつとしい雨。新京極あたりをブラブラしているうちに夜になってしまう。

五日の朝、Mを大阪駅まで見送る。車掌が、いつまでも向き合ったまま別れようとしないうばらを見て、ここではよくあることといった顔で笑っていた。

十二日、寺崎が就職試験を受けに来て、寮に泊まる。十三日から明日までストと重なった四連休なので、十三日は寺崎と多摩動物公園に行き、午後新宿でボーリングをしたあと、寺崎のおじさんの家へ行く。

おじさんは、S銀行の京都聖護院支店長を定年でやめ、今は別の会社の重役をしているようだ。金の苦勞をしたことがない、いかにも重役らしい暮らしぶりの家だった。それだけに、家族一人一人がそれぞれ勝手にやりたいことをやりながら、全体としては明るくまとまっているという感じ。ぼくの家庭にもっとも欠けているものが、そこにはあった。

テレビが初めて家に来た頃によく見た「パパはなんでも知っている」というアメリカの番組、あの中に描かれていた自由奔放な明るさと解放性、それがおじさんの家にある気がした。日本にもこういう家庭があるのかと、驚き、かつうらやましくなった。

「パパは何でも知っている」は、アメリカのスプリングフィールドという（架空の）地方都市を舞台にした、コメディータッチのホームドラマだった。日本にはない明るさと解放性がぼくをとりこにし、当時六年生だったぼくは、スプリングフィールドという町に言い知れない憧憬を抱くようになったのだった。

### ■一九七一年五月一日《火》

今日から、教育の部屋が六工場から本館三階に移った。正門から近くなった分、タイムカー

ドを押す時間がこれまでよりも三、四分早くなった。四十四分の電車に乗っても、今日は八時〇八分のタイムカードになった。今までは八時十二分だった。

それにしても、こんなに一分、二分を争う生活をするのは何年ぶりだろう。高校時代以来、五年ぶりか。なつかしい気がする。あの頃は、何の疑問も感じずに、毎朝同じ時間に家を出て、同じ時間に学校に着き、同じ時間に授業を受けていた。そしてそれが楽しかった。

勉強も面白かった。昼休みに野球をするのも楽しみだった。放課後のわずかな時間を友だちとワーワー遊ぶのも楽しかった。帰りに県立図書館で勉強するのもよかった。受験を目ざした、楽しくも、また厳しい生活だったが、それはぼくの大切な青春だったのだ。

こんなことを考えていると、学校のあの暑い日ざしに輝いたグラウンドを思い出した。そして、それがもう二度と帰らない遠い青春だということも、胸に痛く感じたのだった。

青春とは何だろう。ぼくにとって青春とはいつのことだろう。こういうことをときどき考えていたが、今一つの結論が出たように思う。

高校時代のあの生活、暗い暗いトンネルだと感じられていたあの生活も、いま思えばやはり大切な日々だった。懐かしくてたまらないぼくの大切な宝物なのだ。

今はもう遠く離れてしまったふるさと松山。そこで必死に生き、育ったぼくなのだ。毎日見上げた城山はぼくの二十年間の友だった。そこに生きたあの時代は、青春の第一。これは、よき地で無意識のうちに育てられた時代だった。

青春の第二は、大学時代。これは、意識して必死にもがき、育った時代。初めて社会の中に放り出された自分を自覚し、集団の中で自分の役割を果たすことを覚えたのだった。仲間の中の生活は実に楽しかった。これはまさしく青春だった。第二の青春である。

それでは今後の生活はどうあるべきか。これからは、第三の青春を作り、これを長く持続させるべきである。すべてにわたって青春を作り、保つことを意識して実行しないとイケない。でない、人生は退化に向かう。それがこれからだ。

- 一、体を鍛えること。
- 二、多く読み、日々勉強に励むこと。
- 三、過去の友だちとのつきあいを保ち、さらに新たな友を増やすこと。特に前者には常に気を遣うこと。
- 四、Mと作る新しい家庭を、行動力にあふれた若々しいものにする。

高校時代をようやく肯定的にとらえられるようになってきたことがわかる。それまでは、小学生時代の無垢で明るく楽しかった時代を思い浮かべては、中学・高校時代を「暗いトンネル」のように思うことが多かった。

一ヶ月間の本社講習と製造現場研修が終わり、五月からはコンピューター部門の主力工場である府中事業所勤務になった。といっても、まだ教育中の身ではあるが……。

#### ■一九七一年六月七日《月》

五日の夜、京都に行き、六日の松野、福沢さんの結婚式に出る。すばらしい式だった。松野たちの幸せを願って温かい友情に花が咲き、その中で二人が幸せを体中にみなぎらせて、すば

らしい主役を演じた。ぼくにとっても、大谷さんや寺山さんらと久し振りで会えて、友情を確かめあうことができたのは収穫だった。

百三十人もの仲間たちに祝福された松野は幸せ者だ。しかも、あんなにすばらしい恵美子さんを自分のものにするのができたのだから。

二人の未来を心から祝福しながら、ぼくは、嬉しいような、うらやましいような、腹立たしいような、いらいらした複雑な感情を味わわずにはいられなかった。京都駅で新婚旅行に出かける二人を見送って、二人がなんだかぼくの手を離れて遠いところへ去っていくような気がしてさみしかった。ぼくにとっては、福沢恵美子さんは福沢恵美子さんのままでいてほしかった。二人がこれからもぼくと今まで通りつきあってゆくことを確かめるまでは、心の底から「おめでとう」と言う気になれない。

田所がぼくのことを「うらやましい」と言い、Mのことをほめてくれたのは、他のどんな言葉にもまさって、嬉しかった。松野たちへの腹立たしさを、この言葉がわずかになぐさめてくれた。田所との友情は一生続くだろう。大谷さんとも夏木とも。

福沢さんを奪った松野がにくい。

福沢さんは気づいていなかっただろうが、Mに出会うよりもうんと前から、彼女はぼくにとっても憧れだった、

それを知ってか、知らずか、いつだったか、松野や有村と碁を打っていたとき、松野が唐突に、「恵美ちゃんと話してみたらどうや」と言ったのだった。松野が福沢さんとデートの約束をしていた時間だった。松野は自分が行く代わりにぼくを行かせたのだ。それを真に受けたぼくは、デートの場所までのこのこ出かけたのである。まったくバカみたいな役を演じて……。

たぶん松野は彼女へのぼくの思いに気づいていた。彼女の方もかすかに勘づき（あるいは松野からほのめかされ）、「奥村さんと話してみたい」と松野に常々言っていた気がする。そうでなければ松野からあの言葉が出てくるはずがない。

百万遍の喫茶店で一、二時間向かい合ったと思う。だが、面と向かうと心の奥の真実を語れなくなってしまふぼくの弱さで、せっかくの機会が、実に情けない会話に終始してしまった。焦点の周りをぐるぐる空転するばかりで、いっこうに近づけない惑星のように、喉に突き刺さった小骨を吐き出すことも呑みこむこともできないまま、ただ苦しいだけの時間となった。

実はそれ以前にも、東三条あたりの喫茶店で、彼女と二人、向き合って話したことがあった。そのころはまだ、彼女と松野の関係が進展していなかったと思うが、彼女へのひそかな思いが深ければ深いだけ、結局何も本心を語れないまま、欲求不満をつのらせただけで終わったのだった。何も語れず別れたときの、虚空を引つ掻くようなむなしさは、今思い出してもたまらなくつらい。

あるいは、しんしんと冷える冬の夜、松野の下宿と一緒に数学の勉強をしているうちに、夜はすっかり更けて、そのままコタツにもぐって寝てしまった。明くる朝、目覚めるとドアにガチャツと鍵の音がした。すっと入ってきたのは福沢さんだった。まるで自分の部屋に戻ってきたとでも言うようなささりげなさ。

コートを脱ぐと、ためらいもなく長押しに吊されたハンガーにそれを掛けた。そして、無言でコタツに足を入れたのである。朝食用の弁当まで用意してきて……。

すべてがさりげない。これはもうどこからどこまで夫婦ではないか。

彼女はぼくに目で会釈くらいはしただろう。にっこり微笑みもしただろう。だが、もはや無用なよそ者にすぎないと覚ったぼくは、そそくさと逃げ出すしかなかったのだった。

彼女との思い出は、引っぱり出すとキリがない。

そんなあれやこれやの過去の履歴があった上での、この日記なのだ。

### ■一九七一年六月八日《火》

きのう辞令が出て、正式にコンピューター方式技術本部方式開発部（略称は方開）に所属することになった。とはいえ、これからもまだしばらくは教育が続く。今はDIPSのハードマニユアルと、コンピューター・アーキテクチャーを勉強中。プログラミング技術も学んでいる。

会社の雰囲気にも慣れてきた。意外に自由で、これなら一生やれるかもしれない。

仮雇いから、いよいよ正社員になったのである。仮雇い時代には、品川にある電話交換機工場でベルトコンベアに向かった流れ作業を体験させられたりもした。流れてきた機械を手にとって、それに小さな部品を取りつけては、次に流す。これをひたすら繰り返す。遅いのだ、取りつけにゆるみがあるのだと、ベテランのおばちゃんに叱られ通しの毎日だった。だが、これはこれで楽しい思い出になった。

### ■一九七一年六月一日《金》

ボーナスが出た。今度の給料からストの分を差し引かれると、結果はプラマイゼロというところ。もちろん、次からは上がることになろうが……。

社員を無視した会社側の傲慢には腹立つことばかりだ。スパーク10だのZDだのと、しばらくだけしぼっておいて、待遇は最低だ。将来は仕事給を五〇%ぐらいにするという。精一杯働かないと給料は殆ど上がらなくなる。これを組合は後押ししているようだが、人件費を減らすことを目的にした合理化にすぎないのは明らかではないか。

日電のよいのは、のんびり勉強できることくらい。

コンピューターは面白いから、しばらくは日電で働きたいが、将来はやはり教師になりたい。きのう、沖縄協定が、ロジャーズ長官と愛知外相との宇宙中継を通じて成立した。今日の読売を見ると、そのたたえようははなはだしい。侵略性と屈辱性にはほとんどふれず、一部の人々の喜びの涙ばかりを伝えている。

会社でのコンピューターの仕事に対して、「一生やれるかもしれない」と感じたり、「しばらくは日電で働きたい」という程度に感じたり、「将来はやはり教師になりたい」と思ったりと、入社早々、激しく揺れ動いている。

教師を目指す思いは、まだこの時点、そんなに強くはなかったと思う。それよりも、もう一度大学に戻って勉強に打ち込みたいという思いが、強く沸き起こっていた。

大学時代の不勉強を悔いる思いが、日を追って高まっていき、やがてはどうにもならないまでにくらんでいったのだった。

六月十七日に沖縄返還協定が成立した。米軍基地の沖縄集中や、核持ち込み疑惑など、その後の日米間の重大な懸案を積み残したままの「返還」であった。



## ■一九七一年六月二二日《火》

夏木と中山さんの結婚式の案内が来る。あんなにうぶな夏木が結婚するのかと思うとおかしくなる。だが、夏木たちの場合は、松野らと違い、すなおに喜べそうな気がする。

春菜町で下宿するそうだ。彼らのことだから、楽しくそつない学生結婚生活を送ることだろう。昔の仲間がこうして次々と結婚するのを見てみると、学生時代の気楽な毎日が、今はもう帰らない過去になってしまったのかと、心の底がなんだか感傷的になっていく。

営利だけを追求する企業での生活は、結局ぼくには耐えられそうにない。仕事のやりがいと、待遇と、そのいずれをとっても満足できない。困難からの逃避かもしれないけれど、やはり一生のことを考えると、本当にやりがいのある仕事を求めたい。

コンピューター、数学、語学、そして歴史、これらの勉強は、将来どういう道に進むにしても大切だ。十分にやっておかねば。

## ■一九七一年七月一日(木)

今日から二十日間ほど、DIPSの方に回されることになった。六月三十日納入の予定が七月三十一日になり、九月半ばになり、それすらおぼつかないという状態で、非常体制をとったのだ。チャネルの設計ミスが続いて、回路図、布線図、線付図の訂正が正確にできていなかったことが最大の原因らしい。不正確な布線図をもとに、また訂正するというようなことが続き、何が何だかわからなくなっていた。

方開やソフトから大量動員されて、人海戦術で、一歩目から順次確認して訂正するらしい。おかげで連日八時まで残業が続くことになった。土曜も出勤だ。

今の仕事を続ける決心がつきかけてきた。先日、Mに電話で教師になりたいというと、叱られてしまった。それが強い打撃になったが、かえって気持ちが落ちつき、Mと二人でなら東京で大丈夫やってゆけるという気持ちになってきた。

## ■一九七一年七月六日(火)

去年の夏を思い出す。七月末に琵琶湖に行き、おぼれて死にかかったこと。手足がつって動かなくなり、ああこれで湖底に沈んで死ぬのかという、ほとんどあきらめた気持ちを味わった。あるとき死んでいたならば、叶わぬ愛の切なさや、活動への倦怠感と、勉強が不十分なことへの自己嫌悪とが重なって、どん底の精神状態のまま、この世を去っていたことだろう。

あのあと、というか、その少し前から、どん底を抜け出す光明が見えかかったのだから、人生は不思議なものだ。

日本電気の就職が内定したのは七月はじめ。松野が言った。

「これで就職が決まり、あとは結婚だなあ」

と。そのころ松野は、結婚の相手は決まっていたが、就職が未定だった。ぼくはその逆だった。

琵琶湖から帰ってすぐ、母が来た。万博に行き、銀閣寺と比叡山にも行った。

活動ばかりの毎日から脱皮して、親への孝行を考える余裕が出てきたのが、去年の夏からだ。万博見物は、その現われだった。

母と一緒に松山に帰り、九月はじめまで、実に一ヶ月半の夏休みを松山ですごした。その中で、どん底の精神状態から一步一步這いだしたのだった。

まずは勉強。計画的にやった。それが前期試験の好成績を生んだ。やればできると自信がついた。

恋愛の面でも、八月末、Mを得ることができた。その後の大きな支えになった。

意義あるすばらしい夏休みとなった。もしもびわ湖で死んでいたなら、これらの光明はついに得られることなく、むなしく人生を終えたのだから、考えるとそら恐ろしい。

### ■一九七一年七月三〇日（金）

夜、方開の新社員歓迎会があった。場所は、新宿の「豪華」という中華料理店。

飲み放題、食い放題のバイキングで、腹がはち切れるほどになった。

帰りの京王線が、事故でダイヤが大幅に乱れ、長い時間待たされたあげく、特急なのにのろろ運転で府中まで来た。その中で、三松さん、久山さんと三人だけになり、いろいろ話す。ユネスコをボランティアということにして、学生時代、その中で普通の学生生活では学べない様々なことが学べたと言うと、三松さんはいい経験をしたねと喜んでくれた。三松さんはコンピュータ一筋に見えるが、詩も好きだそうだった。

久山さんの方は、今日話したかぎりでは、いわゆる専門バカという感じで、融通性に欠ける人のように思えた。

梅田さんはいかにも秀才という感じのする人で、下まで降りてこないの、人間的なあたたかみがない。光宗君と気が合うのも、二人の性格が高くともっている点で一致しているからかもしれない。

田舎人的な泥臭さを感じられて親しみを覚えるのは、水原さん、早川さん、鳥居さんなど。

しかし彼らとは今日はあまり話す機会がなかった。

三松さんと話していて、N社をやめたい気持が薄れてきた。本気で勉強すれば、ぼくにもやれないはずはないという自信が出てきたからだ。

### ■一九七一年八月二日（月）

○教師になりたい。

△埋もれてしまうのでは？

○真にやりたい目標を立てばいいのでは？

△その能力はあるのか？

○今の仕事よりは興味があるから、能力はつく。

△何をやりたいのか？

○本を読む、何かを書く。

△漠然としているね。何を読むのか？

- 文学、特に小説、詩など、それと数学。
- △何のために読むのか？
- 広い教養を身につけ、大目標達成の下地を作る。
- △大学時代に考えておくべき問題だったね。
- それを言うな。今だからこそ、問題をつきつめることができたのだ。
- 「モノ」を相手にした仕事には興味が湧かない。数学的なものならいいが。それに、競争、特に企業間および企業内の競争は、体質に合わない。
- △もっと深い問題があるのでは？
- 人間としての個性を伸ばしたいということだ。企業の中ではそれができない。この仕事に本当に興味がある者にとっては、N社という企業は住み心地がいいのかもしれないが。
- △教師になって、それができると思うか？
- 思う。教えること、考えること自体が人間的なことだし、それに、企業に比べて自由な時間が作れると思う。
- △企業よりも給料が安いかもしれないよ。
- それはがまんする。
- △再度聞く。今の仕事に本当に興味が無いのか？
- 「モノ」を相手にするのはおもしろくない。
- △大目標とは何か？
- 今はまだはつきりとはわからない。
- △漠然とでもいい。
- 本を書くことだ。小説でも随筆でもいい。
- △その目的は？
- 何が生きている真実かを、子どもにも大人にも老人にもわかってもらえるものを書きたい。童話も書きたい。
- △能力があるとは思えないが？
- やってみないとわからない。正直言って自信はないが。
- △自己満足に終わるのでは？
- 今からそんな結末は考えたくない。
- △客観的に見て非常に不安だな。
- そんなことはどうでもいい。本を書くのが無理だとしても、若者に教えながら、好きな本を読むだけでも十分ではないか。
- △隠遁的だな。第一線に立つ青年らしくないよ。
- 教えることは若さなのだ。
- △それだけでは説得不足だ。
- わからなくなった。考えさせてくれ。

しばらくして、

△終業の時間も早く、長期休暇もあるので、自由な時間がとりやすいのは確かなようだ。  
○そうだろう。

△しかし、やはり自己満足の殻に埋もれる危険を感じるよ。

○そうかもしれない。だが、やってみないとわからない。

△まあ、それはしばらくおくとしよう。で、今の会社でやれない理由を正確に挙げてくれ。

○自由な時間が少ない。能力を伸ばすだけの興味が仕事に対して湧かない。まわりの人間があまりにも物を考えなさすぎて、おもしろくない。金もうけが第一である企業というものが、体質に合わない。

△Mさんを説得する自信はあるか？

○説明すればわかってもらえると思う。

### ■一九七一年八月二一日（土）

昨夜、萩原葉子の「天上の花」を一気に読んだ。三好達治の半生を、萩原朔太郎の子、葉子の目を通して描いた力作だ。詩人、小説家として大成することの困難さが、陽に陰にとくとくと語られていて、大望をもつぼくに強い叱咤と鼓舞を与えてくれた。

私生活に満足できず、離婚、離縁を繰り返した達治にとって、学生時代から家に入出入りして師と仰いだ朔太郎は、一生を貫いて寄りかかるべき巨大な星であった。朔太郎の娘への異常なまでの思慕の念もここから生まれたものだ。

葉子さんが、わが子を見るような達治の愛情のこもった思いやりと厳しさのものとで、文章家として伸びていったことを知ると、ぼくにも努力すれば、今からでもやれなくはないという、自信めいたものが芽生えてきた。

ぼくの場合、民主運動への熱情が、桜木さんへのあこがれを一瞬のうちに烈火のごとく燃え立たせ、またそのあこがれが激しくなればなるほど、民主運動への確信が深まったという、あの経験を思い出す。その熱情がいまは文学への熱情に転化している。

今日から「鈴木禅学と西田哲学」（秋月龍珉）にとりかかる。いつか松野が提起した、梅本克己を批判するための西田哲学批判ということで西田哲学には関心があったが、そのことは意識せず、とにかく新しい知識と知見を得るといふ観点で読んでみたい。

学生時代に、もっと読み、もっと学んでおけばよかったのにと、今になって後悔する。会社勤めをしていると、思うにまかせた勉強ができない。

できるものなら、もう一度大学に入り直して、文学部で勉強したい。電気工学に入ったのは、大きな進路の誤りであった。京大なら、文学部の三回生から入れてもらえるはず。そこで、日本文学を専攻し、文学、歴史、哲学を思いきり勉強したい。

問題は、何と云ってもMとの結婚のことで、財政のことだ。再び親から援助してもらえない。二人の生活費として、月最低六万くらいは、やはりいりそうだ。これではやっぱり無理か。京都に住むという夢は実現しそうにないか。

なら、やはり教師なのか。

■一九七一年八月二三日(月)

隣の席の松井君が、会社の仕事が自分に合わないと言って、今日、辞表を提出した。彼の方がぼくよりもよほど、コンピューターが肌が合わなかったらしい。ぼくが思い悩んだ末、会社をやめて教師になろうと決意した瞬間の、突然の出来事だったので、啞然としてしまった。こういうことを考えているのは自分一人しかいないと思って、孤独感の中であえぎあえぎ今の決心にたどり着いたと思ったら、いきなり、ぼく以上のテンポで決心を実行に移した者が現れた。これには驚いた。

後ろから頭をぶん殴られたようで放心状態になった。うれしいとか、哀れとか、勇気づけられたとか、具体的な感情の湧く間もないほどのショックだった。松井君が前ぶれもなく課長に辞表を出し、課長が声をふるわせながら何か話しているのを聞きながら、ぼくは机上に置いた資料を、読むともなしに、ただぼんやり見つめているしかなかった。

哀れな松井君、勇気ある松井君。

君はまだ自分の進む道を見出していないという。

それではただ、絶望にうちひしがれた哀れな落伍者にすぎないではないか。

自分の才能を見よ、見よ。

誰にも劣らぬ自分の才能を。

それに向かって手を広げたとき、君は

勇気ある栄光者になる。

教師になることは妥協なのか。逃避なのか。

都会で先端の技術に接することと較べれば、大きな後退になる。しかし、人の一生を幸せにする仕事という点から見れば、教師の方がはるかに直接的で、大切に思える。もちろんコンピューターも、社会を豊かにする大事な要素ではある。しかし、企業の営利を目的とする今日のコンピューター産業においては、それはかなり割り引いて考えねばならない。なぜなら、企業で開発される技術の多くは、純粋な技術の向上というよりも、同類他社との競争に打ち勝つための技術という要素が強いからである。

だからといって、ぼくの能力、興味の対象は、本当にコンピューターよりも、文学や社会科学の方に強く向いているのか。高校の数学教師をやりながら、文学、社会科学を余暇に勉強するという生活に本当に満足できるのか。よほどの才能がないかぎり、そこから真の満足は得られないだろう。結果はわかっている。夢にすぎないのかもしれない。だけど、追いかけてみたい夢ではある。

今の仕事も、まじめに続ければ楽しくなってくるだろう。今やめるのはやはり挫折だろうか。能力を伸ばし、それを仕事と結びつけるには、今の仕事の方がはるかに適当ではないのだろうか。

易きに就つこうとしているのではないのか。逃避なのか。

■一九七一年八月二六日(木)

夜、家にMが来ていて、そこから電話してきた。先日出した速達の件だ。おばあさんにも話し、宮内のお父さん、お母さんにも話したらしい。もちろん、ぼくの両親にも。

会社はいつでもやめられるんだから、少なくとも一、二年はがんばってほしい。正月にゆっくり相談しよう。

そう母から涙声で説得されたのが一番きつかった。文学なんていうのは、誰にでもできる甘いものではない。長年かかって成るものだ。せっかくがんばって日本電気に入ったんだから、会社に行きながら勉強するのならしてほしい。そう言う。

もう何も言い返す言葉がなかった。ただ「うん、うん」とうなずくだけ。

母のこの説得で、相当動揺した。

今日、会社で、またやれるかもしれないと小さな決心をしたところだったので、反発する気持は全然なかった。あの手紙がこんなにも大きな反響を及ぼしたのを知って、悲しくなった。

今こそ、どちらにするか、最後の決心をするときだ。続けるとすれば、もはや動揺しない決心をしないといけない。本当に教師になるとしたら、あくまで主張を貫かねば。

教師になるのは甘いことではない。なれないかもしれない。

まず十二月までは必死に会社の仕事をやってみよう。よそ見はせずに。

そして、正月にもう一度よく考えよう。

■一九七一年八月三〇日(月)

母から長文の手紙が来た。電話の調子で責められるんだろうと思ったけど、そうではなかった。

ぼくが文学に情熱を抱くのは、母が若い頃、果たそうとして果たせなかった文学に対する情熱が血として伝わった、一種の宿命であろうという。宿命という言葉に、これまで感じたことなかった神秘が感じられた。ぼくが生まれるよりもずっと前、母は文学に志す夢を持ちながら、苦しい日々の暮らしに追われて、それを果たすことができなかった。

祖母(母の母)が死んだ不運な家庭には、母の望みを理解し、温かく包みこんでくれる者がいなかった。母は女学校を中退し(中退させられ)、死んだ母親に代わって幼い弟たちの世話や家事に追われる身となった。夢を抑えて生きる母の人生は、こうして外からの強制で始まったのだった。

結婚し、兄が生まれて間もない頃、その日その日を忙しさにまぎれる生活に我慢がならなくなって、母は寒い夜、兄を抱いて、家出を試みたことがあるそうだ。しかし、迎え入れられる家はどこにもなく、結局は夜遅く、また帰ってくるしかなかった。もしもそのとき、他に行くところがあつたなら、父と別れていたかもしれないと母は言う。そのときの母の思いつめた大決心が、ぼくには自分のことのようにわかる気がする。

その後の長い年月を母の血の中にくすぶり続けてきた何かが、今ぼくの中に燃えようとしていると母は言う。これが宿命である。

だが、母も言うように、会社をやめて文学に志すというだけでは、この情熱は実らない。ぼ

くは今、会社の仕事にも大いに魅力を感じている。

情熱は、あせらず、一步一步能力を高めていくことによって、いつの日か開花する日が来るのを待つしかない。母の夢を代わって実らせるため、受け継がれたこの血を、濁らせることなく純粹なまま伸ばしていきたい。

ぼくにとって、Mは母とともに、大事な助っ人だ。Mのようないい人がぼくの一生の伴侶になってくれることに感謝したい。

### ■一九七一年九月二四日（金）

新入社員の中でも、特に浜川君などは、人間関係の面において、寂しそうだし、何かを求めている気がしていたので、思い切って、ハイキングに行こうかと話しかけた。すると、一も二もなく同意した。熊本君にも話し、光宗君にも話をする、みんな賛成し、ドライブしようということになった。先輩にも声をかけた。結局、久山さんを含めて十二、三人のメンバーが確定した。

みんな、口には出さないが、楽しく話し合える仲間を求めているんだなと実感した。そういう雰囲気がこのグループにはないと最初から思っていた。言い出す人がいなかったのだ。

十月九日に富士五湖、箱根方面に行くことになった。

すさまじいスピードで話が進んでいった。

府中図書館で「信仰、個性、人生」（飯沼二郎）、「いっぴき狼」（湯浅芳子）、「流れる星は生きていく」（藤原てい）の三冊を借りてくる。

読書というのは進んでいくと互いに関連してくるものだ。宮本百合子と湯浅芳子の関係は、百合子の側からは「伸子」で知っていた。芳子の側からは「いっぴき狼」で知ることになりそうだ。

### ■一九七一年九月二六日（日）

「一匹狼」を読み終えた。

宮本百合子に対して圧倒されるようなあこがれを感じる。

「伸子」、さらには「まずしき人々の群」を読んだときの百合子に対する漠然とした感情と、基本的には、今のあこがれは変わっていない。

自分の信念をどこまでも貫き通す気迫をもちながら、しかも、お嬢ちゃん育ちの甘ちゃんであるところに、百合子の言い知れぬ魅力がある。親近感を覚える。

湯浅芳子の百合子評。

「こうした科学的実験的な学問を好む頭の傾向が、トルストイなどのヒューマニズムを経て、やがてマルキシズムに行き着いた過程はおもしろい。これはゴーゴリーの経た道とたいへん似ている。似ていないのは社会のどん底から這い出したゴリキーに比べて、百合子は裕福な家庭に育ち、貧乏の辛さを知らなかったこと、いわばお嬢さんだったことである。しかし、世間知らずのお嬢さんであることは、必ずしも否定的な面として存在するとは限らない。ときにそれは美しく、ほほえましいものでもある。彼女のおめでたさ、世間知らずな向こう見ず、甘ち

やんな熱中、憧れなどは、結局百合子のすぐれた資質の一つである。それがなければ、百合子というすぐれた作家も存在しなかったであろう。つまりこの資質が、百合子という人間および作家の主たる原動力であったと言えよう。」

「流れる星は生きている」を半分ばかり読む。

満州の新京にいた観象台勤務員の家族四十九人が、終戦直前からそのあとにかけて、南に逃げてくる記録だ。

この中で、個人主義ということについて考えさせられた。

故郷に帰るといふ共通の希望をもちながら、家族の心はみんなバラバラ。お互いに警戒心をもって自分の財産（現金、時計など）をひた隠す。共同出資で米など買ってはくるのだが、出費する金が尽きた人は、周囲の人に援助してもらえない。

夫が側にいる夫人と、いない夫人との敵対意識。男がシベリアに連れて行かれたとき、その組に入らなかつた家族の満足げな顔。

人の不幸を自分の幸福と思ひ、人の幸福を自分の不幸と思う。これが絶望にさらされた集団の中で、当然の心理になっていくのが、ぼくには信じられない。しかも、その集団は、元は同じ職場の仲間だったのだ。

突き詰めていけば、結局、生きることへの執着ということになるのだろうか。生と死の境では、生への執着が、職場の仲間意識なんてものを吹き飛ばしてしまう。最後には個人主義が最高の理念とならざるをえない。

これと対照的なのが、金さんという南方の戦場あがりの青年だ。死んだ戦友が作った歌を歌い、何の私心もなく、この集団の中に遊びに来る保安隊員だ。ポケットには必ず子どものためのアメを入れてくる。

必ず死ぬという状況に追い込まれた者のみを知る、仲間と共に行動する理念を金さんは身につけている。

「いったいどうしてあなた方は生きていますか。私たちがさえ生きるのに苦しんでいるのに」

金さんのこの言葉は、実に印象的だ。

### ■一九七一年一〇月一〇日（日）

きのうのドライブ、参加者は十二人。

絶好の日和で、気持ちよかつた。高速道路を百二、三十キロでぶっ飛ばすのだから、前の車が急ブレーキをかけたら追突して即死だなあなどとハラハラしながら、スピード感に酔っていた。

河口湖、西湖、精進湖、本栖湖と回り、本栖湖で昼食をとる。あたりは富士山の噴火による溶岩がゴロゴロしている。手にとって、ブツブツ穴があいたコークスのような石を眺めていると、何千年、何万年という時間の隔たりを忘れてしまう。富士山の周囲は全面がこのような溶岩と噴火灰でできているのだ。湖に投げようと思つて拾う石はどれもこれも溶岩のかけらである。



樹海と呼ばれる一帯は、今なお人跡未踏の原始林であるらしい。中に入ると、磁気を帯びた溶岩のために磁石がきかず危険だという。その中にわずかに開かれた道路を車で走り抜けた。自然林と草原が続く広大な富士の裾野を車で疾走するのは爽快だ。ところどころ、牛や馬が放し飼いになっている。広い裾野は延々と続くゆるいスロープだ。車は三合目まで登ったが、普通の山のように崖つぶちを登るのではなく、ゆるいスロープの高原を突っ走っているうちに、いつの間にか一五〇〇メートルまで登っている。間近に迫った富士を見上げると、頂上近くは薄く雪に覆われていて、頂上の測候所のドームが小さく見える。

四時頃三合目を出発し、ゆるい下り坂を御殿場に出る。東名高速を横浜まで疾走すると、いつの間にかあたりはとっぴり夕闇に包まれていた。富士を三方から見上げて遊んだ長い一日だった。

### ■一九七一年一月一四日(日)

昨日は陣馬山から相模湖へハイキング。足腰の痛みがまだ残っている。石ころがずり落ちる乾いた急な小道をぴよんぴよん飛び降りたり、ゆるやかな尾根の下り坂を走り降りたりしたものだから、運動不足でなまっている足腰には運動が過ぎ、今日になって、足を引きずりながら歩くようなことになる。

ハイキングでは、技管、プロ開などの大卒の新社員の女の子と知りあう。みんな二十二、三歳には見えないうぶな感じだ。特に服部さん、高岡さんなどは、七、八歳の女の子がそのまま大きくなったような感じの人だった。

陣馬山頂を目前にした木の石段あたりから、宮田さんと二人で先頭を歩くようになり、以後何となく気が合って、結局最後に多磨霊園駅で別れるまで二人で話した。

陣馬山頂から相模湖までの、多少の起伏はありながらもやるやかな下り坂の二時間ほどは、他の連中を大きく引き離して、宮田さんと二人で先頭を歩いた。京都の話、旅行のこと、会社の仕事のことなど話しながら歩いた。どうしてそういうことになったのか、不思議だ。

相模湖では五十分くらい、暗くなるまでボートに乗ったが、それでも当然のように二人で乗った。文学のこと、恋愛、結婚について、学生時代の失恋のことなど、東京に来て初めてぼくらしい打ち解けた話ができた。宮田さんにも恋人がいて、ぼくにもMがいるのだが、学生時代の藤川さんや福沢さんなどのように、楽しく会って話せる友人になれればと思う。今まで東京では探しても得られなかった、互いに理解しあえて話し甲斐のある友だちが見つかったようで、嬉しかった。

宮田さんは、寂しくなると恋人に会いたくなくなるという。でも本当に好きなのかどうかかわからない。相手は、今年名古屋の大学を出た二十二歳の人で、「いつまでも離れない。結婚する」と言うけれど、卒業するまで親の元ですごした無口な青年で、宮田さん自身、いつ結婚することになるのか、また本当に結婚できるのかもわからない状態らしい。

人生の問題で話のできるこういう人ができたのは、偶然とはいえ、そこに何か引き合うものがあったからかもしれない。寺崎君が昔つき合っていた女の子に似て、一人立ちした考えのできる気の強いところのある女性らしいので、話し友たちとしてはよさそうだ。

ユネスコの仲間とは、仲間という言葉が表しうる最上の意味をもって、人生について語り、毎日の問題について相談しあった。今後の長い一生において、決して忘れられず、離れられない関係として、この仲間の友情はいつまでも続くだろう。ところが、東京に来てからの半年余り、職場の仲間、寮の仲間、囲碁の仲間と、接した人は多いけれども、深く腹を割って話しあえる友人、人生の悩みを話しあえる友人には出逢うことがなかった。

だから、悩み多いぼくにとって、相談相手は遠く離れたMしかなく、多くの場合、一人で苦悩してきたのである。こういうときに、大谷さんなり、田所、寺崎、松野、藤井さん、原などがいたら、どれだけ心強いだろうかと、何度思ったことか。

ぼくにとって心の支えは、京都で結ばれた友情であり、京都の地そのものである。宮田さんという、京都を愛し、文学を考える友人を得たことは非常に大きな意味をもつ。彼女の悩みを聞き、生きる意味とともに語り合うことができるなら、そして、それを元にして、より多くの仲間をふやすことができたなら、どんなにすばらしいことだろう。

## ■一九七一年一月二四日（水）

十九日夜から二十三日夕まで京都に。Mも、二十日夕から二十二日昼まで一緒。二十三日は大谷さんと赤松さんの結婚式に出る。

四日間の京都滞在で得た大きなことがらを列挙してみる。

一・Nさんとわだかまりなくすなおな気持で友情を確かめあったこと。それができたのは、大人に脱皮したぼくの態度によると思う。昔のように卑屈にならず、対等な立場で、笑顔をもって話しかけられた。これで彼女の警戒心が解け、さらにMと会ったことにより、Nさんのぼく（ら）に対する新たな関心、それも物見高い好奇心による関心ではなく、相手の存在が自分の内に大きな位置を占めたことにより自分をまた相手の中に反映させたいと願うたぐいの関心が強まったことは確かだ。ぼくもまた、謙虚な気持でこれに応えたい。

二・永観堂、東福寺、国立博物館、市美術館等、これまで京都にいながら滅多に行かなかった京都の伝統美、京都のよさを心の底から味わった。

三・京都に多くの仲間たち、中でも松野夫婦、大谷夫婦、田所、藤井氏、河野などと旧交を温めることができたこと。

四・Mを仲間で紹介して、好感をもたれたこと。

伊崎評 M II（桜木十有田）／2

田所評 ぼくから奪い取りたいほどかわいい。

四日間ではあるが、すべての時間を仲間との語りいと研究と遊びに使える学生生活をもう一度味わえた気がして、昔は当たり前と思っていたこの生活が、人間の自由な思考にとっていかに貴重なものであるかを痛感させられた。逆に、そういう学生生活からは、ややもすると無責任で不安定な思想、プチブル思想が生じやすいものであることも知る。

一日の大半を会社に縛られて働いている労働者と、一日のすべての時間を思うままに自己実現のために使うことのできる学生との決定的な違いが、その思想の中に現れてくることを、今回ほど実感したことはない。一日の日付が変わろうとする時間に人の下宿に上がり込んできて、

寝てるいるのを起こし、学部新聞の原稿を書いたり、恋愛論を語ったり、そのあと夜食を食うに行くなどという生活は、今の我々には考えられないことだが、かつては当たり前だった。

この違いをぼくはどうしても受容できない。納得できない。会社での生活と対比させて、どうしても納得できない心の底のわだかまりを感じてしまう。本当に自分の能力を伸ばすことのできる仕事を探したい。その気持が、今までになく強まってきた。

### ■一九七一年一二月二五日（土）

青山出身の山野さん、上村さんなどのガチャガチャ娘はどうもぼくには合わない。話していて、あるいは話を聞いていて、表面的にはおもしろいけど、内面的には底が浅すぎる。適当に相槌を打って話を進めることしかぼくにはできない。

彼女らに慕われている徳永さんがどういう人なのかわからない。どういう点が慕われているのか。東大ドクターという肩書きなのか、二七、八歳という年齢なのか、年齢の割には世間を知らない坊っちゃん坊っちゃんしたところなのか。それを徳永さん自身どう考えているのか。ぼくがもし彼の立場にあったとしたら、多くの女の子に慕われることは最高に嬉しいだろう。しかしそれが本当に人間のふれあいの喜びに変わるためには、自分が持っているものを表に出して知ってもらい、また彼女たち一人一人の生活や心の底にあるものを引き出して、知ろうとするだろう。徳永さんは今の状況で満足しているのだろうか。結婚相手を見つけようとして努力しているのなら、それはそれとして評価できる。恋愛というのは人生を知る上で大きな意味をもつものだから。しかし、それにも本気でないとしたら、ぼくには徳永さんが何を考えているのかわからなくなる。

宮田さんという人もわからない。最近、早川氏にやたらベタベタくっついていて。悩みを相談しようとしているのか、それとも別の意味があるのか。早川さんは、宮田さんが持っているような意味で深い考えを持った人とはぼくには思えないのに……。

彼女はぼくに対しても打ち解けてくる。しかし、それが真剣なのかどうかわからない。気持の大半が早川さんに向かって今となっては、ぼくの方から声をかけてみる気にもなれない。彼女には、恐いと感じる何かがある。それが彼女のきつい顔立ちから来る単なる思いすぎなのか、それとも実際そうなのか、一度ゆっくり話してみないとわからない。今は、彼女がどういう人だと断定することは、ぼくにはできそうにない。ともかく彼女は神秘の人、不思議な人、恐い人だ。

西野君はきまじめな男だ。先日彼のアパートに行ったが、そのとき、自転車で角を曲がるたびに、いちいち手を上げて合図するのは驚いた。交通規則を百分百守らないと気が済まないのだろうか。アパートに帰ると、毎日一時間、ラジオ英会話をやっているという。偉いとは思いますが、ぼくから見ると、退屈な人間だ。一度こうと決めたら、目がそこから離れなくなってしまう人間だ。面白味がない。奥さんになる人もまたまじめなおとなしい人だ。ぼくより一学年下らしい。二人の間では結構うまくいっている。

Mと二人で考えている家庭とはずいぶん違うようだ。家庭中心主義で、友だちとのぎっくばらんなつきあいを彼らは知らない。また、社会と家庭とを切り離している。要するに人生観の

ない毎日になっている。

## ■一九七二年一月一七日(月)

桜木さんから葉書が来た。久しぶりに彼女の達筆に接して、懐かしいやら嬉しいやら。嬉しかった理由は、彼女がぼくと同じ日に結婚すること。

相手は「生粋の労働者」だという。一年ほど親の猛反対で話し合いを続け、やっと親があきらめるという形で日取りも決まったそうだ。「親一人子一人の家庭に入ることになるので、決して楽な生活が待っているとは思いませんが、仕事と家庭と私なりに頑張るつもりです」とのこと。

これまでに彼女から来た手紙や年賀状と違い、紙面いっぱい素直な気持ちを書いてくれている。嬉しい。かつてぼくが出した求愛の手紙に対して、二度ほど来た分厚い断りの返事以来の、心がこめられた文章である。

親との長い争論の末に、愛する人と結ばれることが決まり、今は晴々とした気持ちで間近にひかえた結婚式を夢見ている桜木さんの張りつめた喜びが伝わってくる文面だ。「楽な生活が待っているとは思わない」と言うが、これも長い苦闘の後に実らせることのできた二人の愛情の前には、苦労のうちに入らないだろう。喜びと希望に満ちた桜木さんの笑顔が目に見えるようだ。あごを宙に浮かせたようなあの独特の笑顔が……。

かつてぼくが活動を始めた頃、理想の活動家として仰ぎ見た桜木さん。その尊敬の念が愛情に変わってラブレターまで出した桜木さん。猪突猛進な求愛の言葉に対してするりと逃げて無鉄砲さをとがめてくれた桜木さん。自己を深く見つめてたゆみなく前進し続けた桜木さん。そんな桜木さんの姿が思い出されて、その人がぼくと同じ日に結婚して人生の新たな出発をするのかと思うと感無量である。

彼女がぼくの求愛をさらりと流してくれたことで、妙な意識過剰の状態を短期間で終わらせることができた。そして、尊敬の念だけを残すことができた。

ぼくは科学性よりも、その場の感情ですべてを判断してしまう悪いクセがある。二年前のユネスコ追いコンで、松野にズバリそれを指摘された。

「君の意志を、全ての習慣、全ての感情よりも強くもて」

松野が書いてくれた言葉だ。百万遍の路地裏二階の喫茶店で原に指摘されたこともある。ぼく自身反省しているが、いまだにそのままだ。どうしても、その場の気分流されてしまう。

松野の言葉は、今振り返ると、「感情よりも」ではなく「君の意志を」の方に力点がありそうに思える。意志を貫けないことを指摘してくれている。桜木さんから見てもそうだったはず。原から見ても、あるいはNさんから見ても、その点が頼りなかったのだろう。今もその通りだから情けない。

## ■一九七二年一月二四日(月)

きのう、例の家に行き、家はなかなかいいので、ほぼそれにすることで約束してきた。

難点は交通の便が悪いこと。二、三〇〇メートル行けば商店街らしきものがあるので、その

点はまあまあだが、バスの本数が少なく、しかもバス停まで遠いのが問題だ。附近の環境は、一見、新開地という感じもするが、荒れたところではなく、学校がある落ち着いた住宅街だ。ぼくらが住むには少し高級すぎる感じもする街並みだ。

二月のはじめに移ることにしたい。

宮田さんが福永武彦の「死の島」という長編小説を貸してくれた。借りたともなんとも言うっていないのに、「読んでみたらどう？」と押しつけられた。まだ読んでいない。

宮田さんがどういふ動機で何を求めて早川氏とつき合っているのか、いまだにわからない。宮田さんって、いったいどういう人なんだろう。

寂しいから恋人とつき合っているとは、以前言っていたこと。あのときの恋人とはおそらく別れたんだろう。それに代わるものを早川さんに見出したのだろうか。

しかし、そんな消極的な気持ちではなくて、彼女の内に何か積極的なものがあるのを感じることもある。それをぼくはかつて「恐い」と感じた。彼女の内にある陰うつな恐さ。だが、具体的には何一つわからない。

福永武彦に共鳴しているのでもなさそうだ。かといって単なる感傷主義でもない。かつて彼女に、頭脳の中だけのプチブルの極左をイメージし、彼女の言葉の端々から、学生時代にそういう考えを持って活動していたのではないかと思うこともあった。だけど、福永の小説を覗き見るかぎり、そういうものでもなさそうだ。

日本の伝統的的女性でないことだけは確かだろう。遠慮しないで自分のしたいことをし、言いたいことを言うタイプの女性だと思う。また、同じ女性としての力強い生き方であっても、宮本百合子や桜木さんなどのように、やさしさとはにかみを内に秘めている人でもなさそうだ。これは、彼女を見る上で大切なところだ。家庭環境からきているように思われる。

彼女についてわかることはそれくらいだ。

百合子が「道標」で、何だかぼくを突き刺すような辛らつなことを書いている。

「利根さんてかた、何をしても、何かそこで味わうものを発見して、そういう風に味わえる自分の能力を味わうっていうタイプじゃないのかしら」

### ■一九七二年二月一四日（月）

残った問題は、ぼくがいつ新居に移るかということだ。ぼくとしては、三月に移って、少しずつ一人でも買える身の回りの物を買いながら一人で住んでみたいという思いがある。しかしMは、三月いっぱいには寮にいた方が食費が安く、体も楽だからいいと言っている。それに従うことにする。早くも尻に敷かれそうな予感。

十二日の夜、浜川君、山田さんと三人で、調布文化会館に映画「羅生門」、「つるのすくもり」を見に行った。大映労組が、永田社長をはじめとする大映幹部の責任回避に抗議して、自主上映したもの。

京都の教文センターでの労映のように、ロビー入り口にわか作りの受付が作られ、腕に腕章を巻いた労組員が待機して、来る客の券売りや会場への案内をしている。商業的でない無骨な親切さがさわやかだった。

白壁の上に田舎の幻灯のように一枚レンズで映された画面は小さくて、傾斜のない後ろの席からは背筋を伸ばして反り返るようにしないといふ人の影で見にくかった。でも、二本とも内容はよかった。楽しめた。

昔、農業会館でときどき行われていた映画会を思い出した。砂川闘争を扱った映画が少し記憶に残っているだけで、あとはすべて忘れてしまったが、子ども同士で連れ立って行き、イスの間を走り回ったり、会場の後方の壁に積まれた机やイスに登ったりして遊び回ったのが懐かしい。

### ■一九七二年二月一七日（木）

書記の小林さん、須藤さんに、結婚のことで半分冷やかされ、半分うらやましがられた。方開でも結婚する人は次々にいるけど、みんな全然嬉しそうな顔をしていない。なのに、ぼくは本当に嬉しそうに話すと云って、ほめられた(?)。

小林さんは二十二歳で、結婚して一年余り経つそうだ。小柄でハツカネズミのようによく動く。性格も陽気で、ペラペラよくしゃべる。それでいてどことなくただの子どもっぽさでない何かがあると思っていた。そうか、結婚していたのか。「給料が安いのに、よく三部屋の家にれるね」などと冷やかすものだから、じょうだんに怒って、彼女の頭を押さえつけたとき、よくブラシされ、カールされたつややかな髪の毛の感触に、夫のいる女性をつつましい色気を感じてしまった。

須藤さんは二十一歳。独身。いつも膝頭がかくれるくらい長い長いスカートをはいでいて、最初見たとき、異様な妖精のような感じがしたのだが、近ごろでは、出会ったときフツと見上げる目に、かわいい娘らしさを感じるようになってきた。仕事もまじめで丁寧で、好感が持てる。

黒川さんからの電話が、今日やっとつながった。きのうも、ぼくのいないときにかけたらしい。夢が破れて、十九日に引越すことになったという。保育所のこと頼んでいたけど、いらなくなつたという。「夢が破れた」とは、子どもを連れて出ることができなくなつたという意味。急に涙声になった。彼女のことで一番心配していたのがぼくだから、十九日に引越したあと、いつか会って話したいと言いつ、もちろんぼくも同意した。まだSさんにも話していないという。

読書会を、隔週水曜日にぼくの家でやることにしている。メンバーは今のところ四人。その上に、山田さん、黒川さん、西野氏なども、話せば来そうな雰囲気だ。

### ■一九七二年二月一八日（金）

昼休みに屋上で西野君とキャッチボール。久しぶりに動き回って体がすっきりした。また月曜にもやることにしている。暖かい日光を浴びて汗を流して走り回るなんて何ヶ月ぶりだろう。体がほてり、顔がゆでだこのようになった。

ハードの新人社員の運動嫌いにはうんざりする。頭がよくて、勉強量はぼくなんかとは比べものにもならないが、人間としては、辟易するほど幅が狭い。

梅田、浜川の秀才ラインには、ぼくはどうしても素直に入っていない。専門的学問と、学校的常識と、アメリカ的合理主義以外には生きる指針をもっていないのが梅田氏だ。浜川氏は

一般的思考力のよさだ。

キャッチボールを終えたあと、全身を汗だくにして下に降りると、例によって梅田、浜川、光宗、熊本といった連中がブリッジをしていた。顔を洗って帰ってきてても、まだやっている瞬間は、陽に当たらない陰うつな嫌らしさを彼らに感じ、バネに跳ね飛ばされたようにパツとそこを離れて、ソフトの方に行ってしまった。

ソフトでは、石田氏、渡部氏、中郷氏などが、けん玉に興じていた。ぼくはその笑いの中に自然なものを感じて、一緒にそれに加わった。高専出身の小泉君の、それを見ながら笑う、ほのぼのとした謙虚な笑いにも、ぼくのとけこんでゆける暖かみがある。

技管やプロ開の女の子にも、真心でぶつかってゆける人間味をもった人は多い。それに比べると、ハードの新社員はどうしても味がないだろう。梅田氏のペースに引き込まれているからだろうか。久山さんの味が浸透しないのはどうしてだろう。久山さんはもううんざりしてあきらめ顔だ。

一筋の光明は、浜川氏が、本心では友だちを求めていることだ。表面だけの遊びの友だちではなくて、もう一步深い友だちを求めているのは確かなようだ。だけど、自分からそれを作っていく力は彼にはない。ずっと前、ハイキングに行こうとさそったときの彼のうなずき、先日映画にさそったとき、「うん、行こうか」と言ったあの内心ぽつと浮かんだ嬉しそうな笑顔。彼とはまた、三月の労演で「夕鶴」を見に行くことになっている。今後、いい友だちになれそう

だ。それとあわせて、ぼく自身もっと専門の勉強をしないとイケない。今のままだと、周りから引き離されそう。

### ■一九七二年三月四日（土）

きのうまでの三日間、夜、新宅に行き、読書と文章書きを楽しんだ。四畳半の部屋のほかは空っぽで、人気のない薄暗がりはいわいほどだが、しかし誰も来ることのない一人だけの世界にしていると心が落ち着く。一人で過ごすには広すぎるくらいだ。

きのう転入寮者が大量にあり、寮も住む人がどんどん変わってきた。思えば、この寮に入ってから一年が経とうとしている。二十六日に引越すとすると、ちょうど一年いたことになる。

一年前、初めて京王線に乗って多磨霊園駅で降り、スーツケースを下げて寮まで歩いた日のことが思い出される。この先、何が待っているのかはわからないが、何とかなるだろうという気持だった。

あれから一年。府中にも慣れ、友人も増えた。孤独に本を読み、物を考える楽しみも覚えた。書く喜びも味わえるようになった。自分の手で新生活を切り開いていこうという自覚とエネルギーも湧いてきた。

だけどこれまでのところ、燃えだしたエネルギーを押さえに押さえ、外の流れに身をゆだねてきたのが実状だ。言いたいことをこらえてきた。Mとの結婚で新しい生活が始まるのだから、これまで押し込めてきた言いたいことややりたいことを発展させ、新しく進む道を具体化させたい。

今の会社を続けるのか。  
大学に入り直すのか。  
就職先を変えるのか。

三つに一つだ。もし一人身ならば、言うまでもなく第二の道をとるだろう。Mがいるからそれは難しい。

だけど、エスカレーターに乗せられるのはいやだ。自分の道を切り開きたい。

#### ■一九七二年三月一二日（日）

きのう、山本安英の「夕鶴」を見に行った。解説は読んだことがあったが、じかに見ると、その面白さ、すばらしさは、イメージしていたものとは比較にならない。

まず驚いたのは、これまでは短い戯曲と思っていたのが、実際には仕草や間があるために、一時間半もかかるものであったこと。第二は、山本安英が演じる「つう」の若さ。声といい、軽やかな跳ねるような動きといい、歳を感じさせず、完全につうになり切っていた。貪欲や偽善を理解することのできない純朴なつうの心が、山本安英の名演を通して、ほのぼのとした明るさの中で現出されたのはさすがだった。

浜川君と行った。帰りに喫茶店に寄り、読書会のことを話し、来ないかと言うと、行こうかということになった。彼は明らかに仲間を求めている。読書会は今、着実に少しずつ発展している。会社での表面的な付き合いを打ち破るものになりそうだ。

#### ■一九七二年三月二二日（水）

一七日に寺崎から手紙が来た。寺崎は裏切らない。嬉しかった。文学部への転入が可能であることも調べて知らせてくれた。寺崎は三十一日に東京に来るそうだ。

きのう、会社の帰り、小泉君に、ぼくが中郷と同じ年には見えない（つまり老けて見える）と言われた。こうはっきり言われると愕然とした。孤独を楽しむようになり、行動に勢いがなくなつた現れだろうか。ぼくもそう感じる。二回生の頃の、何もかもが新しく見えた頃とは明らかに別人になってきた。しかし、本の中に新しいものを見出しつつあるのもたしかである。

今日、文体のソフトボール大会。逆転しかけていたのに、時間切れで負けてしまった。後味の悪い負け方だった。

#### ■一九七二年四月四日（火）

三月二十六日に寮を出、現在、新しい家に一人で住んでいる。始めは広い家に一人で住むことになじめず、今にも誰かが入ってきそうな恐怖感に襲われたが、慣れると家が自分のものとなり、落ちついてきた。

一日の夜、寺崎が訪ねてきた。寮で住所を聞き、地図を頼りに来たという。よく来られたものだ。寺崎は卒業間際に資源の事務員が好きになり、京都を立つ直前に交際を申し込んだ。だが、「困るわ」と言って断られたという。親が探してくれる相手と見合いせざるをえなくなっている感じだ。



二日は寺崎と本郷の東大に行った。京大に比べると起伏があって、自然美のすぐれた地形だ。京都の百万遍から農学部あたりの街並みを思い起こさせる本郷の静かな環境に、学生への郷愁をそそられた。

寺崎は、六日まで旅館に詰め込まれ、そのあと松坂に実習に行くそうだった。七月に実習が終わると、あとは東京近辺になるのだろう。結婚式にはぜひ行きたいとのことだった。

本箱、家具等を買わないと。押し入れががらくたと本でいっぱいだった。

Mの来る日が待ち遠しい。新婚旅行が晴れてくれればいいが。

風邪を引いて本が全然読めない。頭が痛くて長続きしない。明日から、サルトルをやろうと思っている。「想像力の問題」、「存在と無」。

### ■一九七二年四月一三日（木）

読書会の記録。

第一回 二月二十三日（水）

（宮田、小泉、気仙、佐々木、奥村）

テーマ「播州平野」（宮本百合子）

第二回 三月八日（水）

（宮田、山野、小泉、中郷、油木、中田、奥村）

テーマ「忍ぶ川」（三浦哲郎）

第三回 三月二十九日（水）

（山野、中郷、浜川、光宗、奥村）

テーマ「海と毒薬」（遠藤周作）

第四回 四月一二日（水）

（中郷、小泉、浜川、滝沢、奥村）

テーマ「変身」（カフカ）

### ■一九七二年五月一六日（火）

人生の第一コーナーである結婚式を四月三十日に終え、今は、あわただしさも静まって、新たな門出の喜びが体の奥から湧き上がりつつあるところだ。Mとの生活も、新鮮な驚きと喜びだけを求めるのではなく、日常生活における感動の積み重ねを重視する方向に向かいつつある。

二十六日の夜、東京を発ち、二十七日の昼すぎ松山に着く。松山は初夏を思わせるあたたかな春の盛りであった。ポストンバッグをさげ、異国人を見るような視線を浴びながら、バスで福音寺に着く。懐かしい砂利道を踏んで家の前まで来ると、向かいのおじいさんが日向ぼっこをかねて庭仕事をしていた。家の門をくぐると、母の手入れで季節の花々が咲き乱れ、縁側の下には、ベルの代わりに灰色の小さな犬がすわっていた。ベルは一月初旬に死んだのだ。聞くところの犬、Mが四、五日前にペットショップで買ってきたそう、マルという。

式は、小学校同級の者や、ヤマハの友人たちが一生懸命準備してくれていて、楽しいものになった。

式のあと、親しい仲間ですち上げ会を開き、九時十分の関西汽船に乗る。棧橋まで多くの友だちが見送りに来てくれた。生まれて初めてテープを投げられる身になって、なんだか晴れがましいやら、気恥ずかしいやら。一生に一度のこんな立場に感動した。

新婚旅行については、日記にひと言も記されていない。気持ちの前へ前へと向かっていたときだから、わずか数日前を振り返ることさえできなかったようだ。

記憶をたどっておく。翌朝大阪で船を下りたあと、湖西線経由の特急で金沢へ。金沢で一泊。翌日からはフォッサマグナに沿って南下。白馬と美ヶ原に泊まり、自然美を満喫。山や高原を歩いた感動は忘れられない。美ヶ原から八王子に出、最後は京王線で府中に向かった。

美ヶ原あたりの広大な草原には、その後もしばしば会社の同僚と出かけることになったが、その都度、新婚旅行を思い出したものだ。

### ■一九七二年六月一日（木）

結婚生活ちょうど一ヶ月目の五月三十日、夕食のとき、電気を消して大きなロウソクに火を灯し、一ヶ月を祝う会をした。まだ新生活に慣れないために、感情が完全に一致しているとは言えないが、二人でこれからの長い人生を乗り切ってゆこうという決意めいたものが湧いてきた。

Mの交際範囲は、隣の平井さんから始まって、八百屋や酒屋、さらには、今日から行き始めた府中市の合唱サークルと、少しずつ着実に広がっている。一人で一日家の中にいる寂しさからは抜け出している。

ピアノ、エレクトーンにも力を入れ始めている。

### ■一九七二年七月一五日（土）

十三日に池田さんがインタビュールに来、今日、Pの人たちによる祝う会があった。出席者は十名余りだったが、二十五名くらいの人がお祝いのカンパをしてくれていて、トースターとコーヒーカップのセットを贈られた。他に、土井大助の詩を安倍さん（筆名清山）が書いた額縁も。

池田さんが来たときもそうだったけど、久しぶりに学生時代の思い出や、いつもは包み隠している多くの生の姿をさらして話すことができ、気持ちのよいさわやかな数時間となった。Mにとっても、何か感じるころがあったと思う。

### ■一九七二年七月一八日（火）

中郷が滝沢さんに手紙を出したらしく、今になってハッと気づいたが、彼女が読書会に来られないなどと言いつ出したのは、この手紙が原因だったのではないか。読書会はいつの間にか中断状態になっている。

夏休み（十二〜十六日）に松山に帰るが、途中、京都に立ち寄って昔の友だちに会いたい。できればNさんにも会いたい。このことをMに話すと、Mはすねてしまったが、結婚式直前の彼女からの電話で、またいつかゆっくり話したいですわねと言っていたことを思うと、やっぱり

会いたい気持は強い。もちろん、昔のように新たな関係を作っていくなどという気持ちはさらさらない。だけど、他の友だちに会いたいという気持とはどこ違った感情があるのはたしかだ。

この特別の感情とは何だろう。第一は、Mを知る前、ぼくを最もよく知ってくれていた人がNさんであり、またNさんを一番よく知っていた人がぼくであったということである。このように、お互いによく知りあっていながら、ぼくの無鉄砲さと、彼女の子どもっばさから、結局は結ばれないまま破れてしまった関係であったということ。このことは、ぼくとNさんとの間に、人にはわからない特殊な感情のふれあい、牽引力を生み出している。これが愛情に転化することはもう決してなく、互いに幸せな結婚をするだろうが、それでもやはり、この特殊な系は切れないまま残るような気がする。

友情でもない、愛情でもない、同志愛でもない、もう少し別なゆとりの系である。この系は、決して張りつめることはなく、常にあってもなくてもいいほどにゆるんでいるが、どこからともなく微小振動によって相手の存在が伝わるのである。Mがこれを読んだら怒るだろう。でも、これはぼくとMとの愛情に絶対により結果をもたらすものだから、心配しないでほしい。このところをよく理解してほしい。

第二は、以前あれほどぼくがNさんとのことで苦しんだことが、決して空回りではなかったことを、Nさんとの面と向かった話の中で確認したいこと。かつてぼくがやってきたことが決して無意味ではなかったことを確信し、これからのMとの愛情を育てるための礎にしたいのだ。

### ■一九七二年八月二日（水）

七月三十、三十一日、職場の同僚七人で、入笠山に登った。

中央線富士見を降りて、三時間あまり歩く。途中、貸別荘、アトリエ、キャンプ場、趣味の店等、この山を愛し、そこにアイデンティティーを求めて真摯に生きる人たちの姿を見、あこがれの念を禁じえなかった。

入笠山はバスでも登れる。ある意味、非常に俗化された山である。しかし、この山を昔から愛してきた人々の血は確実に受け継がれ、自然の醍醐味は守られている。

途中、眺望のいい場所から眺めたハケ岳、赤岳、たてしな山脈等の山並がすばらしかった。もやがかった空間を通して眺めるそれらの山々のやわらかで女性的な姿は、疲れた体をいやしてくれる。

小鳥の音がきれいだった。ウグイスは最高だ。

入笠小屋で一泊。

三十一日早朝、ハケ岳から昇る御来光を見ようと、一人で起き出し、皆が寝ているところを抜けて外に出、朝露にしめった冷んやりした空気の中、山頂をめざした。登りきらないうちに日は出たが、目を向けられないほど強烈に輝く朝の御来光には、夕日と違って、無から有が生じた時の新鮮な、骨身にしみる響きがある。チラッと姿を見せたたん、一日の始まりを示す高貴な強い輝きがハケ岳の山頂にあふれ、それが一面の雲海の上をサツと走って、ぼくの胸に「直」の字を刻みこんだ。

山頂に登れば八方が雲海で、その上からアルプスの山々が顔を出し、遠く富士の姿が美しい。自信に満ちて、自分のあるべき所を微たりも変えず、すわっていた。

### ■一九七二年九月二四日（日）

Mが名曲堂に頼んで、ピアノのレッスンができるようになった。今のところ、東府中で五人。家で教えている子たちをあわせると十人を越える。速いテンポで事は進んでいる。

眠れない日が続く。頭の奥のどこかが張りつめていて、それが眠りに陥ることを妨げている。体はそれほど疲れているとは思わないが、ときどき急に疲労が出てくることもある。そんなとき、横になって眠ろうと努めるが、やはり眠れない。体の方も、本当は疲れているのに感じなくなっている。これがいつまでも続くと、意識が目覚めているうちに、肉体のどこかが悪くなってゆくのではないかと思うことがある。

きのう体力測定があり、握力が右で四七しかないのに驚いた。ひところは六五はあったはず。知らぬ間に老化現象が進んでいる。

今日、表札を作ってもらった。府中駅の駅前に路上の店を出しているおじさんだ。人のいいおじさんで、

「書というのはいくらやっても極めることができない」と言い、

「だけど最近気分が左右されることがなくなった」とも言っていた。

三五〇円で、立派なのができた。道を極めた人の手になるみごとな字だ。自分の名前がこれほどみごとに書かれているのを、生まれて初めて見た。感激だ。

父も字は結構うまい方で、父が書く「奥村清志」の字にはいつも感心していたけど、このおじさんの字は父よりも数段上、というか段違いだ。さっそく今日玄関に出した。

### ■一九七二年九月二九日（金）

先日田中首相が訪中し、今日、日中共同声明が調印された。戦争状態の終結がうたわれ、平和友好条約の締結が約束された。それに伴った大平外相の説明で、日台条約が自動的に効力を失ったことが明らかにされた。

日中の国交正常化は大きな意味を持つ事件だ。国と国の民主主義の問題、そしてアジアの平和の上で、これがもたらす意義は大きいと思う。

今後に残された問題もまた大きい。それは日米安保条約と、それに伴ったアメリカの極東戦略への日本の加担である。アメリカは相変わらず一つの中国を認めず、ベトナムでは侵略戦争を続行して、社会主義国、民族解放勢力への武力による敵対行為を続けている。日本はそれに、軍隊の派兵以外の可能な限りの援助を与えている。この現実と日中国交正常化をどう結びつけるのか。今後の大きな課題であろう。

梅田さんのアメリカ的合理主義にはあきれられる。仕事とゴルフとブリッジ以外には全然興味がないらしい。仕事に関しては、たしかに大きな能力を持っている。だけど、人間的に見た場合、

哀れなチンパンジーだ。頭の毛が数本抜けている。組合には一切関心を持たず、組合の回覧は一瞥もせず次に回し、ビラはもらわず、組合の新聞は見もしないでくずかごに捨てる。どう生きるかなどという問題は彼にはまったくなくいらしい。そのときそのときをうまく立ち回ることができればそれでよしという発想だ。それが彼のプラグマチックな合理主義だ。

### ■一九七二年一〇月一五日（日）

『金子光晴 青春の記』より。

金子光晴、彼は霧雨に煙る窓辺の机に向かって何回となく新しい自分の名を書いてみた。人間はこの世に生まれるときは母性から誕生する。だが、いつかはそれを脱却して自己誕生をなしとげなければならぬ。金子光晴という人間にとって、改名したその日が新しい自己誕生の記念すべき日となったのだ。

ぼくはいつ自己誕生を迎えるのだろうか。実を言うと、ぼくは近ごろ人間として新しい変化を迎えつつあるように思っている。

京都では、Uを知り、Pを知り、それを通じて多くの仲間を得、限りない経験をした。今思えば、時間に束縛されない、いかにも自由で、学生でなければ味わえない生活であった。そうした生活を通じて社会科学の醍醐味を知り、古い家族的拘束からの脱皮心を培ったのだった。これは第一の変化であった。

第二の変化は、卒業の直前に始まる。それが顕著になったのは入社して半年ばかり経った頃だった。変化は、直接には文学への志向、間接には学生生活への反省から始まる。

自己を捨て、外的社会に目を向けすぎたことへの反省である。反省というより、深い悔恨の念である。学生時代にいったい何をやったんだろう。たいして本も読まず、専門の勉強もまともにやっていないではないか。ただ仲間と語り、雰囲気に酔っていただけではなかったのか。自己の真の成長は停止していたのではなかったのか。

文学にしろ、電子にしろ、数学にしろ、社会科学にしろ、何一つ納得ゆくまで自己の力で極め尽くしたものはなかったのではないのか。あれほどたっぷりの時間があつながら、いったい何をやってたんだ。

こう思いはじめると小さな頭が狂わんばかりになって、いつそN社をやめて、学生に戻り、再度出直そうという気になったのだった。これはかなり深刻な問題であった。もしもMがいなければ、あのときぼくは会社を辞めていただろう。

そんなことを経験しながら、ぼくは文学に対するひそかな情熱に燃えていったのだった。なぜ文学なのか。それはぼくの、ぼくだけにしか生きられない道を探し出す上で、文学が最良の友となるからだ。文学を通じて、過去の、あるいは現代の多くの悩める人たちの悩みを知り、喜びを知り、探索を知り、確信を知ることができれば、それによってぼくの悩みを突破して、生きる道を見出すことができるかもしれないか。

第三の変化は、今これから迎えようとしているものだ。これがおそらくぼくの「自己誕生」になるであろう。学生時代から一貫して共に歩んできたPに対して、いま、ある面では信頼を深めつつも、ある面ではどうしても一体になれないでいる。その正しさは疑えない。ぼくの

心の糧である。この点は今後も揺るがないだろう。しかし、今は自然な気持ちで身をその中に置くことができない。必死に活動していた頃が、遠く儂い夢のように思えるのだ。

もっと自分らしい自然な生き方はないのだろうか。自己の真の成長を伴った新しい生き方はないのだろうか。普遍化するのはいずれの問題としても、とにかく自分にしか生きられない、自分らしい生き方を、いまは探っていきたい。新しい道を見つけない。

ぼくの自己誕生は、拠り所であったPから精神的にも実体としても乖離する、その日から始まるように思う。

中西が死んで二年あまりになる。工学部に入学しながら、志を新たにして文学部に転部し、何とか生きる道を探ろうとした彼。電車でも人と顔を合わせることができず、常に窓に額を押し当てて、外に向かって一人思いに沈んでいた奴だった。そんな彼をぼくは好きだった。何とかしてやれないかと思っていた。だが何もしてやれなかった。何度か彼の下宿に行った。だがぼく自身の内向的性格もあって、彼の心の奥底にまで入り込むことができなかった。遊び好きの彼の父親のこと、家を継いだ兄のこと、家庭内での孤独などを聞くことはできて、そこから先に進むことができなかった。

あるとき彼は一人の女性に恋をした。中山裕子さんだ。おおらかで子供好きの美人である。裕子さんの方ではことさら彼に関心を抱くことはなかった。無精ひげを生やした神経質でぶっきらぼうな彼に、彼女の関心は向かなかった。しかし彼は夢中になった。手紙を書いた。彼女の下宿にも行った。二人だけで会ったこともあるらしい。だが所詮、実る恋ではなかった。

その後、裕子さんは夏木に恋をし、二人は去年結婚した。

中西にとって、裕子さんとの恋が破れたショックはどれほどのものだったろう。三年前の夏、琵琶湖でUのキャンプ合宿があったとき、夏木と裕子さんが浜辺で仲よく寄りそっているのを横に見ながら、中西は一人、一見すると何の悲しみもないかのように淡々と泳いでいた。ぼくは中西の心を占めている癒やしような哀しみを思っ、ほとんど泣きたいくらいだった。誰も彼の心に気づく者はいなかった。

また、あるとき中西が、文学部の連中がやっているロシア文学研究会に来ないかと誘ってくれたことがあった。近衛通りの喫茶店でやっているという話だった。誘いに乗って出かけていった。しかし、喫茶店の扉を開けて中を覗いただけで、ぼくは帰ってしまった。熱血的な文学青年たちが口角泡を飛ばして激論している場の雰囲気気後れし、とてもぼくなどが参加できるレベルではないと、一瞬にして退散したのである。

あれは中西との近づきを妨げた原因になった。

中西とのつきあいにぼくがもっと真剣であったなら、彼は死なずに済んだのかもしれない。ぼくにも文学への道が少しは開けていたのかもしれない。中西の真の友だちになれなかったのが悔やまれる。

彼の死は自殺だったと言う者が多い。自動車で大木に激突したのだ。単なる交通事故とはぼくにも思えない。彼の霊にむくいるためにも、本当に自己誕生しなければ。

■一九七二年一月五日(日)

先日、米本に電話して会う約束をし、自転車で府中駅まで行った。その後、二人で家に来た。富士銀行前で彼が自転車に乗ったまま片足を歩道の端に立てて待っているのを見たとき、体つきは昔のままなのに、顔が少し変わったように思えた。あごのあたりに丸みができて、人のおじさんという感じになっている。彼の几帳面さを示すひげそりあとさえ新鮮に見えた。

彼は京大から栄転になって、今年六月から文部省の本省勤めだという。今国会では、文部大臣の答弁書の清書をしたと、得意そうに言っていた。その喜びように、単純な軽躁さえ感じてしまった。

来年五月に結婚するそうだ。同志社の恩師の勧めで見合いをし、その後、必然の系にたぐられたようにスルスルと二人の気持ちが進んで、結婚するというのだ。うまくいくときはこんなものかと彼は言ったが、これはぼくとMにも言えそうで、なるほどとうなずいた。しかし、何か物足りない。彼の生活感に鋭さが無い。

六月にこちらに来てから、新宿にも途中下車したことがなく、まして府中の町についても、寮と駅の間以外は何も知らないという。毎日を寮と文部省の行き帰りに費やしているだけ。寮においても、休日洗濯などですごし、寮生との交友もほとんどない。それを苦にする様子もなく、淡々と暮らしている。ただただフィアンセに思いを寄せて……。

昔ランブルで話し込んだときのことなど思い出し、学生時代はこんな奴ではなかったのにと、驚き、あきれてしまった。彼は今、将来を約束されたエリートなのかもしれない。だが、そこに矛盾、葛藤を感じないのだろうか。社会の矛盾に裸でぶつかっているのだろうか。ただただ毎日を漠然と流されているだけではないのだろうか。

話を聞いていて、もどかしさや物足りなさを感じるのを、どうすることもできなかった。何が彼から抜け落ちている。それは夢だ。今気づいた。

■一九七二年一月一九日(日)

きのう、方開のメンバーで蓼科ヘドライブ。

新婚旅行のときと似た季節感だった。高原の草がすべて枯れ尽くし、一面土色の芝のような草原が波打っている。あのとときと同じだ。白樺湖から霧ヶ峰にかけての高原のハイウェイは、あのとときも通った道であり、白樺湖を前にして勇んで降りてきたところにあった料金所、車山のスキーリフト、遠く広がった広大な八ヶ岳の稜線、廃墟となって崩れかかった大きなモービルの跡、ゆったりと起伏する高原の味わい、それらすべてがあのとときのまま。Mと二人で眺めて楽しんだあのとときが、きのうのこのように思い出された。

女神湖の近くのレストランで昼食。山菜の釜飯は風味がよくてうまかった。

なだらかな草っ原の斜面でバレーボールやサッカーをやる。

新鮮な空気を吸って楽しい一日であった。

思い返すと、在職中、方開のメンバーでいったい何度ドライブやサイクリングや登山などに出かけたことだろう。言い出しっぺはたいいいつもぼくだった。しかし、必ずそれに「よし行こう」と答えてくれて、メンバーが集まる。不思議なグループだった。

行くとなると、細かな計画を立ててくれるのは大阪出身の数人のグループ。そうそう、方開の中では、大阪弁がまるで標準語のように飛び交っていた。思い出すと懐かしい。最も強く印象に残っているのは、北岳登山だろうか。北岳は富士山に次ぐ全国第二の山だ。山小屋から見た満天の星空は圧巻だった。隙間がないまでに、空が星で埋め尽くされていた。人生観が一転するほどの迫力だった。

### ■一九七三年二月四日(日)

正月に松山に帰り、Mとともにクラス会に出席。

古照遺跡に出かけて松山平野の遠い昔をしのぶ。

足が遠のいていた牛淵にも風雨の中、Mと二人で歩いて行き、深夜まで碁を打つ。

父と母に大きなカラーテレビを買ってあげる。

宮内のおばあさんは少し足を弱めはしたが、相変わらず元気。

父のキャベツ切りは世に出そう。

春生ちゃんはヨーロッパに旅行。

宮内のお父さんはぶつぶつ言いながら絵を描いている。

和代ちゃんは大学受験目前。

松山は相変わらず平穏な日々であった。

だが、ぼくの中には冷たい風が吹き、胎動の波險しかった。どうしてぼくは生きているのだろう。ぼくがこの世に在る意味は何なのか。ぼくは何をすればよいのか。ぼくの仕事は何なのか。自由とは、自主性とは、個性とは。

いまだになにも結論は出ない。長い時間をかけて求めるしかない。しかし、会社の仕事はおろそかにせず、一つ一つやりとげること。完遂の喜びを得ること。周囲の人たちとの関係を濃密にすること。日々読書と思索を怠らぬこと。

要は、空虚のない充実した日々を、それも他人に対してではなく自己に対して空虚でなく、充実した日々を送ること。

笑いを取り戻すこと。目標に向かう自信と喜びを得ること。過程を楽しみ味わうこと。

これがとりあえずの結論だ。

### ■一九七三年二月八日(木)

小林多喜二の没後四〇周年が来ようとしている。拷問による虐殺の残酷さは言うまでもないが、彼の文学に対して、ぼくはこれまで多分に誤解していたようだ。文学の政治への従属を實踐で示した人としてしか彼の文学を見ていなかった。実際、「党生活者」や「一九二八・三・一五」などを読むとその感を強くする。だが、彼の青年時代（小樽時代、銀行員時代）の習作における人間性探求、党生活者時代の日記や手紙等で明らかにされた芸術性を考えると、彼への見方を変えねばならないようだ。個人としての彼の思考の中では、ブルジョア作家と言われた種々の作家の小説を読み、旺盛に吸収し、日本の文化的遺産を継承した上での革命的文学創造の道を探っていた。しかし、血気にはやる青年の彼にとって、その手探りの内容を現実の



創作に生かす時間の余裕はもはやなかった。

投稿によって腕を磨いた彼の文学青年時代の姿を想像すると、温めるべき古傷をもつものだけが味わえる悲しい郷愁を覚えざるをえない。

多喜二が若くして殺されたことは、プロレタリア文学にとっても、日本文学全体にとっても大きな損失だった。彼が今日まで生きていたなら、人間性あふれる芸術が開花し、円熟味を増した作品が生み出されていたことだろう。宮本百合子と並ぶ力量をもった作家だったと考えられる。

### ■一九七三年二月二日（木）

雨は降りぐせがつくと底なしに降るものらしい。しばらくやんでいた雨が今日の午後からまた降り出した。カサを持って行かなかったので帰りはずぶぬれだった。人通りの絶えた道を、雨に打たれてメガネを曇らせ、全身ずぶぬれになって自転車を走らせるのは、惨めでいやなものだ。

だが、車のライトがぬれた路上に長く尾を引くのを見るのは楽しかった。信号の赤黄緑も路上に映って鮮やかだ。

この鮮やかな色彩も、曇ったメガネの奥から見ると狭い世界では、薄暗闇に浮き出た虚像にすぎず、かえって寂しさを誘う。田舎から上京し、知人もなく一人ネオンの町に放り出された青年が見る町の賑わいも、またこのようなものだろう。孤独は孤独であるかぎり、楽しいものだ。夢をふくらませ、希望に生きることできる。しかし、その孤独がひとたび世間の波に触れてしまうと、夢は吹っ飛び、楽しさはわびしさへと変貌する。あてもなくさまよううちに、自己がいかに小さい存在であるかを知って、絶望に駆られる。

人はこの絶望を乗り越えたとき、強くなる。絶望を抱くまでに自己の理想をふくらませることをしない人、あるいは絶望に耐えかねて、世間から遊離した自己満足の道に走る人。どちらも人生を強く生きる人とはなりえない。前者は世間に多いマイホーム亭主である。矛盾に気づかないで潮流に流され、誰もが行き着くところに行き着くという意味では幸せかもしれない。後者は、前途に開ける広大な自己解放の海を目の前にしておきながら、最後の壁を突き破ることのできなかつた悲劇の人である。自己満足の道に入れればまだよいが、それもできずに一生を苦しみ続ける人、あるいは本当の悲劇を迎える人、……。ここから生まれる破滅は計り知れない。

では絶望を乗り越えた、本当の自己解放の道とは何か。それはこれからぼくが人生の実践を通して探ってゆく道である。

### ■一九七三年三月一九日（月）

不眠症は治ってきた。今度のは長く、十日以上も続いた。どうやら原因は自分の内にこもってしまふ気分にあるようだ。本の中、空想の中、思考の中に自己の気分と志向の場を閉じ込めてしまい、その中のみ満足を求めようとしたこと、自己以外の他者（Mも含めて）と精神の交流をはかることをおっくうがったこと、それによって引き起こされた不眠体が今度は逆に原

因となって内向的空想性を助長したこと、さらにこれらと渾然一体となって運動不足が重なったこと。これらもろもろが不眠症の原因を形作っていたらしい。

自己の人生上の価値の追い求めることをやめ、Mとの遊びの中に自己を解放してみると、その晩からよく眠れるようになった。自己の価値と外界との接触、この両者を愉快に統一でき、こそ人間としての真の成長はあるのだと、この経験を通じてつくづく思った。

自己を見つめることを怠って流れに身をまかせること、その反対に自己の精神活動にのみ自己の活動を埋没させて周囲との接触による人間性の成長を見失うこと、このいずれも人間としての健全な生き方ではない。しかし、これを統一することのいかに難しいことか。

午後、Mと日本橋の三越に行き、父のキャベックが出品されている発明コンクール展を見た。

父は今、このキャベックにかかりつきりらしい。出資者や共同者も多く現われ、五月ごろからは本格運転に入るらしい。そのため家も改造しているという。一花咲かせてもらいたい。

### ■一九七三年六月五日（火）

五月二日～八日、ハワイ。

ハワイの人は人なつっこく温かい。

からりと晴れた空気が気持ちいい。

海の青さがすばらしい。

読書会再開。今度は去年よりも長く続きそうだ。

### ■一九七三年七月二五日（水）

昨日はいやな日であった。一昨日の月曜から話は始まる。

石田君との約束で次期職場委員選出を月曜にやろうと前々から話をしてあった。それで、月曜日にまず申込受付の告示を回覧で回した。月曜日いっぱいを受付期間にするというもの。すると昼前に伊東さんと桑原さんがやってきて、立候補するという。去年の早川さんと水原さんの時と全く同様に、一人を補佐役として二人で共同行動をするのである。しかも、ぼくを少し離れた席に連れ出して多少の嫌みをこめておどしをきかせたのまで同じである。去年のことがあからずぐにハハーンときた。組合と会社の後押しによる職場委員候補である。誰も立候補する者がなく、自動的にぼくに決まるだろうと考えていた思惑はずれた。組合と会社の後押しというのは強力である。職制を通じて強引に票を組織してゆくその力はすさまじい。個人的にはぼくに入れるはずと思われる人までが、会社から首を握られている弱みで、すべて伊東さんの側に回ってしまうのだ。

これは大変なことになったと内心身震いした。そこで、ぼくが選管をやっているという特権を生かして、選挙区割を決めるなどの手を尽くしてみた。しかし、後押しを受けているという伊東さんの自信に満ちた迫力の前に屈せざるをえなかった。彼は彼なりに責任感を感じていたのだろう。その迫力はすごかった。かなり教育されているなと思った。それも組織的な教育を。桑原さんとの共同行動についても然り、反執行部であるぼくを意識しているとしか思えない攻撃ぶりも然り、偶然便所で立ち聞きした「お前の方うまくいってるか」という会話についても

然り、とにかくかなり早手回しに系統的な組織作りを行っていたことがわかった。ぼくはごく然とした。これだけやられてちゃあ、ぼくなどの割り込む余地はもうないだろう。

というわけで、届け出の期限である月曜の夕方までは、誰にもぼくが立候補することは明かさなideおいた。そうすれば敵側も強力な票読みは行わないで安心しているだろうというはかない望みを秘めて。票固めの進まないうちに翌日の朝、いきなり投票をやってしまったというのがぼくの腹であった。大木君とも相談して、そういう方向でやろうということになった。とにかくぼくが伊東さんに勝たないことには支部委員を伊東さんに握られることは火を見るより明らかである。

選挙戦術上の取りうる手は尽くして、翌朝の選挙にのぞんだ。結果は惨敗であった。権力を握った者の組織力の強さをまざまざと見せつけられたのである。

伊東さんにしろ桑原さんにしろ、普段は和気藹々の同僚である。ハイキングも登山もドライブも、必ず参加して一緒に楽しんでる。だが、こと職場委員選出になると、いきなり猛烈な党派性を発揮し始める。これは言うまでもないが、彼ら末端候補者の党派性ではない。後ろで操っている組合幹部の党派性だ。

前年の選出の際、ぼくという存在を甘く見ていたために痛い目にあった。今度は絶対に失敗しないぞという強い決意が、組合幹部と会社中間管理者による組織的テコ入れとなって現れていた。その日が来るまでまったく気づいていなかったぼくが惨敗したのは必然だった。

### ■一九七三年九月一日（火）

Mの風邪がいつこうによくならない。それで夕方、近くの内科に行ってみた。新町二丁目の町並みを少し外れた目立たないところにある病院だ。行ったとき患者は一人もおらず、診察時間にもかかわらず玄関のカギがかけていられた。呼び鈴を押すと、しばらくして和服を着たおばあさんが出てきてカギを開けてくれた。「どうぞ」と言う。

流行っている感じは全くしない。医者も無精ひげを生やした色黒の背の低いおじいさん。しゃべり方は間延びしていて、いかにも人のよい好々爺。どこをどうさがしても営利というものを感じられない。看護婦もいない。薬も医者が自分で調合してくれる。前近代的な村の診療所長という印象だ。

流行る流行らないは問題にせず、人の病気を治すことだけを楽しんでいるのだろうか。あるいは、流行らすだけの商業的力量がないので、半ば意地とあきらめ、細々と続けているのだろうか。病院に勤めていたのをやめたというから、人間関係の煩わしさを逃れて一人我が道を行く楽しさ、というか、道楽のつもりでやっているのだろうか。

そんなさまざまな想像を抱かせる、のんびりした町医者であった。

### ■一九七三年一〇月七日（日）

教師になることをMがやっと認めてくれた。

一年半後の四月には教師になれるというメドが立ったことは、何としても嬉しいことだ。将来の展望が開けてきた。それにしても一年半は長いなあ。この間に、大学の通信教育で教員免

許をとろうと思う。

沢村部長あたりの思惑でぼくに對する具体的差別が進行しつつあるようだ。同期の浜川君はまじめで言われた通りすなおによく働くので重視されているが、ぼくには重要な仕事は与えないという方針らしい。沢村部長の腹の黒さは、顔を見るだけで吐き気がするほどだ。

それにしても、浜川、光宗、梅田などという人は、会社組織の中で上から言われたことを何の疑問もなくこなして、流れに乗ってやっている。まったく感嘆する。会社の利益を自分の暮らしや精神生活よりも優先するというのは、ぼくにはとうていできないことだ。

会社でいつまでもやっていける人というのは、ああいう風に流れの中で自己を犠牲にできる人が、または、会社は会社、自分は自分として割り切ってしまう人か、いずれかだろう。とにかくこの一年半を教師になるための準備期間として活用せねば。

### ■一九七四年一月一八日（金）

腹の中の子が死んだ。二人の生命を受け継ぐ子が死んだ。悲しむべきことだ。

肉親を失った経験を持たないぼくには、まだ見ぬ腹の子がいつともしれず死んでいたという事実は、死を我がこととして悲しんだ初めての出来事だろうと思われる。だが、その悲しみも、悲しむべきとする意図にかかわらず、不思議にも、いや、悲しいことに、ぼくには死たるものとして実感が湧いてこない。

妻の体さえよくなって、二人で温泉にでも泊まりに行つてゆっくり体を休めることができたなら、それでも今の苦しみはご破算になって、ふたたび未来への歩みに期待をかけるのみ。これが今のぼくの正直な気持だ。

妻からこうした話を聞かされて、悲しくて泣いた人がいるという。その人は、肉親の死を体験したことがあって、人の子の、しかもまだ生まれぬ子の死を聞いただけで、つまり死という事実を体の一片に受け止めただけで、肉親の死に直面したときに体を突っ切った悲しみがよみがえってくる人か、又は、六月に子どもが生まれるということを成るべくしてなる必然の事柄として受け止めていたために、それがならなくなった、例えれば親などというものは生まれてこの方、身近に常にあるもの、あるのが当然のものとして自然に受け止めているものであるが、それがあつた時ふと永遠に消え去ってしまったとすると、つかもうとしてつかめない、もつていきよのない悲しみが全身を包んでしまうだろうが、ちょうどそれに似た、あまりにも突然の消失に面食らつて泣けてきた人か、あるいは又、情にもろくて、人の悲しみがそのまま自分の悲しみに同化してしまう人か、あるいはそのいずれでもないとすれば、もともと涙っぽくって何か胸をつく出来事に突き当たればどうしようもなく泣けてしまう人か、それらのいずれかである。

ぼくは自らのことでありながら、何か胸のつかえがおりたような、さあこれからというさっぱりした気分である。しかし、さっぱりした気分になるということを分析してみれば、それは、妻から腹の子が死んでいるらしいと聞かされたときのショックがいかに強かったかの証拠でもある。それを聞いたとたん、それまでの、おしめを作ろうとか、名前をどうしようとかいう、夢を見るような考えが吹っ飛んでしまつて、とたんに妻の体は大丈夫だろうかという心配が前

面をおおってしまったのである。そして、それがどうやら大丈夫らしい、しかもまだ若いんだからこれからまた子供は作れるということを知ると、腹の子が死んだ悲しみよりも、安堵感の方がはるかに大きくふくらんだのである。安堵感にはショックの強さに比例するものなのである。

### ■一九七四年三月九日（土）

◆会社での仕事は、ぼくの二十四時間の全生活を通して追い求める対象にはなりえない。興味が出てこない原因は、仕事の内容が、自らの内に響かない空虚な隔たりを持っていることである。さらにその実体を探っていけば、機械を主体とし、その周囲の人間を魂のない客対物として考えるシステム論、あるいはオペレーションズ・リサーチの手法、さらにそれらを基本にすえた経営管理というものが、ぼくをその中の一員として融合させることを拒んでいく。

原価管理、利潤追求になりふりかまわず突っ走る会社運営の、いったいどこに人間を大切に  
する視点があるのだろう。われわれ一般社員は、利潤追求を至上命題とした一部幹部の意向  
にいつさい構わず押し流されているだけである。従って、仕事そのものも、機械をどのよう  
に働かせるか、その機械をどのように巧みにマーケットに乗せてペイさせるかという、我々  
の日々の暮らしや精神生活とは何ら縁のない視点から、ときとして唐突に降って湧いてくる  
問題に慌てふためいて対処してゆくだけである。

巨大な会社組織であるために、このような受動的な環境は、大勢に流されるのに甘んじられ  
る人には、これくらい安心できる場所はないとも言える。しかし、主体的に自らを見つめる  
目を見開こうとすれば、この環境は有毒である。なぜなら、ひと頃よく言われた猛烈社員、  
近頃も根深く存在する排他的な愛社精神、こうしたものが自然な思想として身につくよう、  
自らの思想を変質させなければ、このような会社環境に身をさらし続けることはできないの  
だから。

ぼくは会社の環境の中に自らを融合させることができない。一定の距離をおいてしか対峙で  
きず、従って、その仕事に興味と精力のすべてを出し切ることができない。

◆もう一つ、自我に目覚める人を監視し、這い上がろうとする人を容赦なく元のつばに突き落  
とすための秘密組織が、会社には縦横に張り巡らされている。そして、それに組合組織が協  
力的に一枚かんでいる。人を無気力にする要因である。

ぼくは、仕事と人生観が乖離せず、微力ではあっても自分の意志を生かせる仕事をしたい。  
それは教師であろう。とはいえ、教師の世界にも、やはり無気力と権力追従を旨とする人々が  
多いだろう。これは容易に想像がつく。だが、同じ無気力や権力追従と言っても、それは利潤  
追求を第一義とした巨大ないや応なしの企業体とは違い、せいぜい個人の私利私欲がからだ  
出せ問題程度のものである。会社よりもぼくにははるかに処しやすい。

教師の仕事の場である教室では、各人の個性が相当程度生かせるであろう。これが魅力であ  
る。自己の私利私欲やつまらぬ出世などを意に介さなければ、教師ほど自主性を伸ばし自己研  
鑽に励める仕事はないように思えるのである。

■一九七四年五月二三日(木)

銀杏の新緑は太い幹から直接生えてくるからおもしろい。生え始めの頃は、まるで一枚の葉っぱが一本の枝であるかのように、扇形の小さい葉を幹から精一杯に伸ばして、親につきまとう幼児のように幹にとりついていてた。二本、三本と、ぼつりぼつり危なっかしげに生え初めるのも趣があった。農工大演習園わきの銀杏である。

それが今日見ると、野獣の屍にハゲタカが群がるように青々と幹にとりついていてた。その房々とした姿は首巻きのように。ふとプードルを思い起こした。

会社の仕事は惰性的でおもしろくない。学問的な進展や、自らの成長とはまったく無縁だ。梅田さんや浜川君はともかくとして、多田さん、水原さんなど、いわば野生組が、さして矛盾を感じる風もなく長年やってきているのが不思議でならない。高橋さんもうんざりしながら仕事を続けている。

趣味をもたず、人生観などさらさらもたず、ただ狭いオリの中で、その場その場の仕事に精を出している人にとってのみ天国である会社の生活にはぼくはついて行けない。

労務管理を念頭に置いた腹の黒い部長連は、顔を見ただけでジンマシンが出そうだ。ぼくはどこまでもマイペースを貫こうと思う。

■一九七四年六月八日(土)

新町会館三階の図書館閲覧室の窓から浅間山の方を見る風景は、いつ見ても松山の城北を見る思いがする。昔、高校から城山を見た感じにそっくりなのだ。浅間山のくすんだ緑、低く並んだ家並み、その上にのどかに広がる大空……。目に入る大局的な構成が、少年期に見なれた松山城北のイメージと重なり合い、脳裏で共鳴しあう。今日もその共鳴音を聞いた。

■一九七四年六月二八日(金)

元山君が今日、会社を辞めた。九州に帰るといふ。この先どうするのかは聞いていない。自主性を伸ばすことのできない会社の枠組みに満足できなくなったのか、アカデミックな研究意欲を押さえきれなくなったのか、それとも田舎に帰ってのんびりした生活を楽しまなくなったのか。あるいは、もっと別の何かがあるのか。いずれにしても早く決心したのはよいことだ。結局のところ、多少なりとも自己を環境の中で客観的に見ることでできる人は、利潤追求のみを第一義とする非人間的な会社の中に長居はできないということだろう。

■一九七四年七月一六日(火)

自己の足どりをしっかり固めながら、着実に前進してゆくのは、なかなかむずかしい。ややもすると、外からの枠組みに組み込まれてしまい、知らないうちに流されていることが多い。会社での時間があまりに長く、家に帰ると自分を見つめ直す暇がないまま、暗黙に作られたMとのムードに寄りかかってしまうのだ。

一人で下宿生活をしている自分を想像してみると、さあ飯を食いに行かにはやあならんとか、

机をちょっと片づけようとか、汚れているから掃除でもするかとか、疲れたからちよつと散歩してこようなどと、やることすべてが能動的で主体的である。だが、今の自分は、家に帰るとずるずるとMに、あるいは空虚に向かつて、自己をまかせきってしまう。夫婦生活をマイナス面でしか活用できていない。

これは、ぼくの二重生活に大きな原因があるのかもしれない。会社での生活と、家に帰ってからの、本当のぼくの仕事との二重生活。このような二重生活は、あと半年あまりで解消されようとはしているが、それを待つのではなく、なんとか早く両者の歯車をかみ合わせ、統一した主体を確立しなければならぬ。

今はとにかく、やりたいこと、やるべきことが多すぎる。主体を分裂させ、しかもそれに気づきながら、統一させる余裕なく走り続けている。周囲との交際を深めるゆとりを持たず、ひたすら内へ内へと意識がのめり込んでいる。そこから脱却するには、まず外の主体との統一、協調が必要だろう。そしてまた自然との深い交わりが必要だ。

### ■一九七四年七月一九日（金）

梅田さんが今日を限りで府中を去り、アメリカのフェニックス社に二年間の出張に出かけることになった。出発は明日だという。黄色の半そでシャツを着て、さりげなく、「また帰ってくるんだから」などと言って去っていったが、もう彼に会うことはないだろう。餞別に絵を描いて贈った。腰を曲げ杖をついた彼と、その背中で恨めしそうに彼の顔をにらみつける赤ん坊。それと彼に手を引かれていやだいやだと涙をポロポロ流して泣く幼い女の子。その二人を連れてうれしそうに歩き出そうとしている彼。ぼくとしてはかなり傑作の部類に入る風刺マンガであった。

### ■一九七四年八月一七日（土）

七月三十一日朝、ぼくがまず一人で東京発。京都に行き、京大、大文字山、下鴨神社で遊ぶ。そして、後発のMを迎えるため京都駅へ。Mは、予定より早く来ていた。二人で神戸へ。春生君の下宿に泊まる。

八月一日夜、松山までの関西汽船に乗り、翌朝着く。

八月二日は宮内に行き、夜も宮内泊。

八月三日朝、宮内の父と春生君が帰ってくる。昼間はMと二人でぼくの家。昼、兄と碁を打つ。余戸のおじさんが来ていた。指を切断したとのこと。前には胃潰瘍になって手術したことがあるし、災難の多い人だ。

Mと裏の畑に水をやる。大きなイチジクがなっていた。あのイチジクを挿し木して植えたのはいつだったか。台風で倒れかかったことなど思い出す。

夕方から町に出る。大街道と湊町を歩く。土曜の午後と日曜日は歩行者天国になっているらしい。土曜日というのをやっていた。京都の新京極のような人ごみだった。松山も大きくなったものだ。亀屋でうどんを食う。Mは宮内へ。

四日朝、父と宮内へ。ぼくの進路問題で話し合う。ぼくののっぴきならない気持は一切聞か

ず、Mを不幸にするという意識を裏にありありと込めた調子で、経済問題をどうするかということばかり。フラフラと方向が変わるとか、教育界の刷新（？）のために教育方向に進むことを不純なことのよう、くどくどと言う。教育界の刷新なんて、いつ誰が言ったのだ。勝手な作り話ではないか。ぼくが何を求めているのかは、聞きもせず、ひたすら無視する。ふだんから、ぼくら夫婦のことに内政干渉しすぎることに腹立ちもあって、見当違いの話ばかりの場にいられなくなって、飛び出してしまった。

行くあてもなく、まずは梅本の駅に行く。駅まで歩いていっているうち、涙が出るほど悲しくなったり。子のやることにいちいち干渉する親は、結局子をダメにしてしまう。つくづくそう思った。中流家庭の不良化の原因もこれだろう。親はもっと大きく構えて、子のやることの枝葉にとらわれず、本質を見なければならぬ。その点、ぼくの両親はましだ。ましだというより、最高だ。

電車で市駅に行き、城山に登ったり、市内をぐるぐる歩いたりして、最後はバスで帰る。むしろしゃくしゃくした気持ちを静めるのには時間が必要だった。帰ると、Mが来ていて、座敷で昼寝していた。そのあと、また話し合っ（宮内の両親がいないので話が少しでも本質に近づく）、結局現実的にぼくの気持ちをかなえる道は教師になることだということになる。そして、翌日、母も一緒にA学園の校長とS学園の理事長を訪ねることになった。

五日にA学園の校長を訪ねる。すぐには無理だが、やがて補充が必要になるので、そのときとってもらえそうな感触だった。続いて、S学園を訪ねる。母の教会の知り合いだが、さほど好意的でない。しかし、まあ望みなきにもあらず。

八月七日、離松。Mは残る。

そして今日、Mが帰ってきた。

### ■一九七四年一〇月一四日（月）

万葉集を読んだ。

死や戦争に直面した人が、ロマン的に自然への愛惜を詩う日本的叙情詩には味わうべきものが多い。社会的変動や個人の死を、決して直情的に歌わない。悲嘆を越えて静寂の心境で自然にとけこんだおらかな心情を歌っている。社会的背景を知らずに読むと、のんきな自然謳歌にしか読めない歌も、それを詠んだとき処刑の場に臨んでいたりする。

死を前にした人が一切をあきらめて超越の心境でうたう辞世の句なんていうものとも違う。後世になってからできてきた、そんな作り物としての構えがない、自然と団体になった悲哀が伝わってくる。古代日本人の雄壮なロマンだ。

### ■一九七四年十一月一日（金）

今日はいれしくって、男泣きに泣いてしまった。会社から帰ると、A学園から手紙が来ていて、来春から来てもらうことになったという。

Mは里帰りしていないので、一人呆然と、突然の喜びをかみしめた。涙がこぼれて、こられることができなくなった。顔をくしゃくしゃにして泣いた。感動で泣いたことは、これま



で何度もあったが、自分の喜びで泣いたのはこれが生涯で初めてだろう。大学入試で合格したときも、泣きはしなかった。

生涯をかけて進む道がやっと開けてきた。手でさわれるところまでやって来た。希望と熱意はあっても、のれんに腕押し状態で、どこまでも不安がつきまどっていた昨日までは、もう過去になった。今日から、新しい道に向かう現実的な歩みが始まることになる。この喜びをどう表現したらよいのだろう。

まずは校長先生に感謝しなければならない。Mにも母にも感謝しなければならない。今日は、ぼくの人生の歩みの中で画期の日だ。ブラボーと叫びたい。

会社での苦しみからも、これでやっと解放される。苦しかったが、きつとよい経験として今後の土台になることだろう。

人生、悪いことはばかりは続かない。やることなすこと壁にぶつかり、何と不運なめぐり合わせに生まれたものと、嘆くことしきりであった一方で、そろそろいいことも起こるのではと、あてのない希望と予兆を抱いていた矢先でもあった。その予兆がいともあっけなく実現してしまった。

人生の転機というのはこんなものなんだろう。訪れはあまりに突然なのだ。訪れがあつてからが本当の人生だ。

人生はすばらしいではないか。再度、ブラボー、ブラボーだ。

### ■一九七四年一月一二日（火）

十六日にA学園に行くことになった。

行ってみて「やっぱりダメです」なんて言われたらどうしよう。まさかそれはないだろうが。

先日、久しぶりに田村さんを訪ねた。位相数学を勉強するんだと、本を買ってきていた。新聞の切り抜きで資源問題、オイルダラー問題などの新経済の勉強にも余念がない。旺盛な前進意欲にはまったく感じ入る。創造と発見の喜びこそが人間の前進の原動力だという、ぼくの持論の裏付けともなる田村さんのすばらしい姿であった。

質素な生活で家財道具も最低限しかないが、部屋には崇高な知性の香りがただよっている。常人なら孤独の輪をどんどん狭めて老いてゆく年金生活者だが、田村さんはその生活を楽しんでいる。外に出かけて新鮮な空気を吸い、自己を見失わず、社会の動向にもしっかりと目を向け、悠々自適の毎日である。死をも恐れていない。自然を愛し、同化している。これぞ大人だ。

碁を打った。四目でぼくの勝ち。五目程度が妥当か。また打つことにしている。

碁も楽しみだが、学問的素養の片鱗を伺うのが何ともいえず楽しくてならない。学問への新たな意欲をつのらせてくれる。学問とはああして無心に謙虚に、しかも楽しみながら一人コツコツやるものだ。その原動力はあくまで、無知の知と、その克服による発見と創造である。

### ■一九七五年二月二七日（木）

辞職の件、羽田さんに話をしようかと昨日から機会をうかがっているが、昨日は羽田さんが午後から外出してしまったし、今日は退社時間間際まで、MTで直面している問題を解決するた

め羽田さんと二人でかけずり回ったりしたので、積極的な姿勢から途端に消極的な辞職の話など持ち出すのに気後れし、結局話せずじまいだった。あと二週間ほどでやめるつもりなんだから、明日こそは絶対に話さないとけない。

考えている間はいいけれど、いざこのような重大問題を話そうとすると、その改まりようがしっくりなくて、どうも言いそびれてしまう。まわりの聞き耳も気になるし。かといって、羽田さんと二人だけの場を作るのもあまり改まりすぎるし。

先日春一番が吹き、Mが買い物から帰るのに、砂埃が目に入って、涙をポロポロ流しながら帰ってきたと話していた。家の前で隣の松田さんに出会い、涙を流し、目を赤くしながら挨拶したので、松田さんがあとをふり返り、ふり返りしていたとのこと。

### ■一九七五年三月一日（土）

昨夜、田村さんを訪ねる。碁を二番打ち、うどんを食わせてもらう。奥さんはいい人だ。メシ時に行っても、いやな顔一つせず、うどんを作ってくれた。ぼくらが碁を始めたので、おぼさんは一人隣室にこもって休んでいたが、しばらくしておじさんが隣室をのぞき、

「テレビでも見ないか」

と声をかけ、

「いいのはいよ」

とおぼさん。

「時代物しかないか、じゃあしかたないな」

と新聞を見ておじさん。何気ないやりとりだが、田村さん夫婦のあたたかな思いやりが感じられてうれしかった。碁が終ると、また声をかけ、

「終わったよ、もういいよ、テレビでも見よう」

と、まるで新婚夫婦のような気のかいようだ。

田村さんに初めて会ったときから見ると、若返ったように思う。風ぼう、気づかい、すべてが繊細であか抜けしてきた。おぼさんが糖尿病で、何かとおじさんが世話をしあげないといけなくなったのが理由の一つかもしれない。少しでも体を動かし、気を他に向かって遣えば、人はすぐには老化しないものだ。

せっかく親しくなったのに、あとひと月足らずで府中を去らないといけない。心残りだ。おじさんも、言葉には出さないけれど、寂しく思っているらしい。松山の母へのお土産をあげようとか、帰るまでに一度ぼくの家に来るとか、ひとかたならぬありがたい心遣いだ。

いつ、なにがきっかけで、ずいぶん歳の離れた田村さんと親しくなったのかは、今はもう思い出せない。まるで同世代の友人のように、いや、崇拜する仙人のように、ぼくは田村さんをしばしば訪ねて、互いが専門とする学問分野で刺激を与え合っていた。ぼくが語る数学や情報処理の最新の話題を、わかるうがわかるまいか、目をキラキラさせて聞いてくれるのだった。知的好奇心にみまぎった老人、いや、仙人であった。

## ■一九七五年三月六日(木)

やりかけの仕事にとにかく区切りをつけるため、三月二十日までは会社に行くことにした。でない、羽田さんに申し訳ない。

LESSON生に他の先生を紹介するというMの引き継ぎの仕事も、今日でともかく終わったようだ。段ボール箱に荷物をつめるという仕事は、昼間Mが着々と進めてくれていて、もう小物についてはほとんど済んでしまった。

府中での生活は、すべて終焉に向かっていている。立つ鳥跡を濁さずで、今は最後の店じまいの仕事で手一杯。新生活に向かう準備、心構えは、この慌ただしさの中では隅に追いやられている。その余裕は松山に帰るまでないだろう。

## ■一九七五年三月二一日(金)

十七日に羽田チームで送別会をやってくれ、昨日退職。あまりに長く夢に見続けてきたことなので、その日を迎えてしまうと、なんだか気が抜けて、現実的な喜びが湧いてこない。というより、会社をやめた実感がまだない。昨日まで、毎日毎朝、自転車を踏み、通い続けた会社である。今日から行かなくていいとなっても、気分がそこまで転換しない。松山に帰るまでは、荷物の整理や後始末が残っていて忙しいので、気分を転換させるゆとりもない。ゆつくり喜びをかみしめるのは、松山に帰ってからだろう。

喜びが湧いてくれば、きつと同時に府中への郷愁が胸を締めつけることになるだろう。

昨日は、一昨日のカレーの残りを少し口にして、いつもの通り、朝七時五十五分、自転車で会社に向かう。降り出しそうな曇り空。学園通り郵便局の信号を越え、犬猫病院角を斜めに入り、角に保健所があるところでけやき並木通りに入る。途中、通学中の小学生の間をすり抜ける。すべてはいつもの通り。

けやき並木の五つ目の角を右に折れ、桜並木通りを西に進む。四月になればすばらしいピンの桜アーチのできる通りだ。そのあたりは車も人も少ないので、自転車のピッチが上がる。これもまたいつもの通り。左にゴルフ練習場の緑のネット、右に野球場を見ながら、府中街道に突き当たる少し手前を斜め左に折れる。百メートルばかり行くと、府中街道に斜めにぶつかる。近道なのだ。府中街道を南に行くと甲州街道に出る。

甲州街道の歩道は小学生の通学路なので、交差点では安全旗を持ったおばさんが毎朝子どもを誘導をやっている。いつも同じおばさんなので、向こうは知らないだろうが、こちらは顔見知りになってしまった。ひざの突き出たズボンをはいた、背の低い小太りのおばさんだ。いつも見ても旗振りがぎこちない。それでも小学生には絶対的な信頼の的。彼女の一挙手一投足が子どもを進ませもし、止まらせもする。そこを越えると、今度は甲州街道を西に進む。途中、廃線になった下河原線の踏切を越える。信号を四箇所すぎると、旧甲州街道とぶつかる三叉路に出る。

そのあたりまで来たとき、毎朝息を切らしてこの道を走るのも今朝が最後なんだと、ちょっと感傷的になった。

三叉路を越え、西部出張所を左に入り、南武線の踏切を渡り、小学校わきの坂道を下りると

会社である。八時十二分着。いつもの通り。

仕事はすでにすべてすませているので、会社に入って最初の仕事は、机やファイルの整理であった。十時くらいにそれは終わった。四年間使い古した机の引き出しから、日々の仕事の結晶である書類や文房具を片づけてしまうと、頭の中までもぬけの殻になった。あとは、技管、第一ソフト、一開、プロ開、基礎開、二開、磁気と、世話になった人たちに挨拶をして回り、途中心退職金をもらったたりして、すべてを終えて席に戻ってきたのは五時に近い頃だった。

五時十五分のベルが鳴ると、いつもの退社時とまったく同様、ドアを開けて廊下に出た。振り返りはしなかった。いつもと違うのは、「退社」の札を机の上に置くかわりに、「退職」の札を新たに作って机上に置いて出たことだけ。

浜川君と一緒に正門まで歩いた。これもいつもの通り。だが、ぼくにとってはロッカーでの着がえ、タイムカード押し、正門までの道のり……、これら一つひとつが最後なのだ。

実感は少しも湧かないので、感傷的にはならなかった。

正門で交わした浜川君との別れの言葉には、いつもの「さようなら」に「お元気で」がつけ加わった。あっけないが、これが別れというものだ。おそらくもう、浜川君とぼくの人生が交叉することは生涯だろう。

昨夜、S君が来た。今日は、K君とW君が来た。明日は、丸木先生と会い、あさってはO君が来る。松山に帰るまでは、ゆっくり落ちつく暇がない。

### ■一九七五年三月三〇日(日)

二十四日に運送屋が来て荷造りをし、二十五日、トラックで運び出した。そして、二十五日の昼すぎ府中を立つ。Yさんがバス停まで見送ってくれ、Nさんとチーちゃん、ノリちゃんらが東京駅まで見送りに来てくれる。こうして、考える暇もなく、あわただしく東京を去った。

二十五日の夜は、京都タワーホテルに泊まる。Mが疲れていたもので、夜の船で帰る予定を変更したのだ。そして、二十六日の昼、京都を立ち、夕方松山に着く。

二十七日には荷物が着き、近くの空き地に止まった大型トラックから、父の小型トラックを使って積みおろす。その後は荷物の整理に毎日追われ、今日なんとか一段落。

まったくこの一週間、自分を見つめる暇もないままバタバタと過ぎてきた感じ。

途中、校長に電話して、四月二日に学校を訪ねることにした。学校というところは本当のんびりしたところだ。会社だと、いつでもそこに来るようにと、知らせがまず届き、その後は入社式、講習などと続いて、配属ということになるのだが、学校だと、校長と二人で都合のよい日取りを決め、その日に会いましょうと言うだけ。今までのところ、校長との私的なやりとりだけで、事がここまで進んでいる。正式な契約も何もないので、これでいいのかと、不安になることもある。

それだけ教師一人ひとりの自主性が重んじられ、責任も重いということか。時間の足かせがはめられていないので、マイペースで仕事ができそうだ。

教師になったという現実的な自覚は、まだまったくない。あわただしすぎて、自覚を持つゆとりがなかったのだ。四月に入れば、少しずつその方向に気持が向いてゆくことだろう。

## 初期教師時代

### ■一九七五年九月一四日(日)

夏休み最初の日曜日である七月二十日に砥部に引っ越した。労住協の新しい団地が砥部にできるのというので、申し込んでみたのだった。倍率が高いので当たるはずはないと思っていたが、なんと一発で当たりくじを引いてしまった。何度申し込んでも当たらないと言っている人が大勢いた中で、申し訳ない気持ちだった。

というわけで、Mの実家の侘しい納屋住まいから抜け出して、マイホームに引っ越した。国道端でないので、実に静かだ。とはいえ、これから借金を返済していかないといけないのだが……。

近所では続々、塀や門ができていく。豪華さの水準があるかのように、どこも高価な装飾ブロック。セメントのほこりが舞い上がって、味気なさの標本みたい。我が家はサンゴ樹の生け垣にした。

自動車学校は、仮免が終り、修了試験まであと一步。あとは路上だ。このために夏休みが十分な休養のときにならなかった。しかし、免許はとってしまえば一生ものだから、一時期の犠牲はやむをえない。

愛大の聴講も九月一杯ではぼ終了。十月の試験を残すのみ。自動車と愛大が終れば、本格的にマイワークにはげめる。教育を土台としながら、数学と文学を我が道としたい。

世界は常に流動的。自分の生きる時代だけは平穏だろうというのは幻想らしい。ベトナム、カンボジア、ラオスの解放は、世界をゆるがしたすばらしい変動。中東和平も具体化しつつある。だが、まだまだわからない。ポルトガルなど、むずかしい局面。バン格拉デシュのクーデターもよくわからない。インドのガンジーのファッショ化も困りもの。いろいろ考えると、中ソの対立が大きなガンになっているようだ。なさけない。

九月……

秋風さやか、

真紅の落日、

寂し。

さえわたる月夜、

川底のきらめき

老いぼれ犬、

悲し。

不和……

ゆらぐ心に

鋭くささる

九月のつばやき。

残り居る

夏の輝き、赤く燃え、

はじけ飛ぶ

これぞ悪しき性

「愛大の聴講」というのは、教員免許をとるためのもの。正式の教員免許なしに、いわゆる「仮免」と呼ばれる免許証で、初年度の教師生活を始めたばかりだった。こういう制度が実際にあった。それを学校が認めてくれたのだった。

### ■一九七五年九月二六日(金)

今日、自動車の卒業検定。あぶなかったが何とか合格。卒業証明書をもらう。二ヶ月にわたる気が減入するような生活からやっと解放された。車に乗り始めて一ヶ月半、学科を受け始めてからだと二ヶ月余り。大事な時間を潰されてしまうつらさと、試験の厳しさとに、何度やめようと思ったことが。

とにかく関門突破、あとは大加賀の学科試験のみ。これはどうということもない。すでに高のとき、二輪の学科で経験している。

Mのとげのある言葉に何度泣いたか。安らぎを求めて家に帰り、ゆっくり楽しくメシでも食おうと思うと、じわじわと言葉のとげが飛んできて、気分がめいり、腹立ちという感じが、おむかとかこみ上げてくる。その都度、溝は深まるばかり。あとですぐに仲直りするが、刻まれた溝は決して消えない。次また覆いがはがれ、溝が現れると、ますます鋭くそれはえぐられていく。

一昨日と今日、それがついに爆発した。一昨日は点火時点でMを畳にたたきつけてしまい、今日はいなりずしを台所の床にころがして、テーブルの上にもカ一杯投げつけてしまう。これはどうにもしようがない。今日の場合は、あとで理性が戻ってきても、腹立ちという気持ちはまったく消えない。口もききたくない。

### ■一九七五年一〇月三日(金)

九月三十日に大加賀で学科試験。合格。十月十四日に免許証がおりる。難産の末に味わう解放感だ。すばらしい。

昨日から愛大の試験。昨日は中等教育原理、今日は数学科教育法。いずれもまずまずできた気がする。

このあとは、八日に教育原理と教育心理。九日に青年心理。十四日に道德教育の研究。

愛大の試験が済んでしまえば、外から強制される勉強はすべて終わる。その後は、好きな勉強を好きなだけやれる。胸が踊る。

愛大での授業は、勉強意欲をかき立てられる有意義なものだった。どの先生も個性的で、自由主義的、民主的であった。権力からの独立の気概をみな内に秘めていた。

京大時代には、授業への出席に大きな価値を見出すことができず、自分で読んで学ぶことだけが勉強だった。その意味で、この半年間の経験はまったく新鮮で、意義深いものだった。本業をそれたところで人生の価値を見出そうとしても、それは空虚な努力、空回りにすぎない。本業に深くかかわってこそ、真の人生観、世界観は開けてくる。つくづくそれを実感した。

### ■一九七五年一〇月一二日（日）

学校の住宅資金融資を受けられることになった。その保証人の印鑑証明をもらいに福音寺に行く。夕方、小雨の中だった。今日は一日雨なのだ。七日の秋祭りの日が授業だったため、母が今日、巻きずしを作ってくれていた。夕飯の半分を親の家で巻きずしとトンカツでやり、半分は砥部に帰ってからやる。巻きずし三本とトンカツをもらおう。

キャベックの方、好調のようだ。毎日注文が多くて、追いつかない程だという。テレビのモニタリングショーから話があったが、そうなるにとっても製造しきれなくなるので、結局断ったという。父の技術と熱意、母の献身的な協力が、長い労苦の末に、今まさに報いられようとしている。この日の来ることをどれだけ夢見ていたことか。

経済的に余裕が出てくれば、ぼくの家の資金にも多少援助してくれるというが、そんなことはしてもらわなくてもこちらは大丈夫。それよりも父と母の住む家の改造等に回してほしい。二人が毎日生き生きと仕事をし、経済的にもゆとりのある生活をするのが、そしてそれを見ることが、ぼくにとっては何よりの幸せなのだから。人は一生苦勞のしっぱなしということはないものだ。本当によかった。

人を雇わないと追いつかないので、近々職安に行つて人探しをしようと言っていた。

### ■一九七五年十一月三日（月）

教師への道が内定してから一年になる。日電での苦惱の日々を思うと、今は自由に満たされた別天地だ。松山の空気はぼくの心を踊らせる。人工的な東京と、天然の味松山。砥部から平井への田園の道は、いつ通つても気持ちよい。重信川もすばらしい。工場排水に汚染された多摩川と違い、緑豊かな田園を流れる重信川はよい。東京に住もうという気はもう起こらない。きのう県展を見る。日展の迫力は県展にはない。しかし、それだけに泥くさいわかりやすさ、学校美術的な素朴な構図が楽しい。自分も来年に向けて描いてみようか、などと思つてしまう親しみがある。地方文化は大切なものだ。

午後、Mと砥部焼センターに行く。観光客のよく来る大きな店だ。表は売店、裏は製作所、その中間に客の絵つけ場がある。連休でもあり、大変な混みよう。湯飲みを買う。

さらに衝上断層に行く。家族総出で刈り入れをしている農道を抜けると、すがすがしい溪流に出、その少し下流、小さな滝つぼのような場所が断層の現場だ。西日本を南と北に真っ二つに断ち切る中央構造線が牙を剥いている現場である。

Mとおにぎりを食いながら休む。ハイキングの場所としても最適だと思った。

■一九七六年二月三日（火）

高校卒業式。イスラエルの戦争を聖戦と言い、マルクス主義を憎しみの哲学として排斥し、戦後民主主義を日本精神の喪失として嘆く、徹底右翼のカトリック信者田中校長の訓辞を、唯然として聞く。

先日校長宅に年始の挨拶に行ったとき、二十五周年を機にカトリック精神を前面に出したいと言っていた。それがこれなのか。

ぼくの校長像が崩れてしまった。同時に、校長自ら卒業式をぶちこわしてしまった。

本当に校長はこんな軽薄で軽率な人だったのか。なにか焦りがあるのではないのか。あまりに突然の変貌が、不思議でならない。

■一九七六年四月六日（火）

二日、Mと四国旅行に出発。その日は琴平泊。

三日は、金比羅参り。小豆島に渡る。寒霞溪、銚子溪。霧と雪と坂。人なつっこい放し飼いの猿。観光客用ドライブ道路。岩石の島。

Mが猿にバッグをひったくられそうになる。逃げると、かえって追いかけてくる。ぶつ真似をすると、フーツと顔を真っ赤にして威嚇する。ぼくには何もしないのに、Mにはサルを怒らせる何かがあるらしい。

四日、丸亀に立ち寄り、帰松。丸亀城は花見客でにぎわっていた。

旅行から帰ったあとは、思い切り読書で過ごした。「平将門」、「クプクプの冒険」、「文学と人生」。

■一九七六年五月一六日（日）

近ごろ油絵を始めている。十数年ぶり。仙波先生の教室に通うようになった。絵の具の塗り方、光のコントラスト、色彩の豊かさ、いずれをとっても自我流のときとは雲泥の差だ。

今、教室での第二作「バラ」の制作中。先生が一筆加えるだけで、断然の輝きを見せてくるのは驚異だ。その都度、先生の爪の垢を一口煎じて飲ませてもらった気がする。長い進歩の階段を一步一步這い上がっている。

学級担任としての大仕事、下宿訪問が始まっている。これまでに三軒。なかなか楽しい。生徒や下宿主との、生活の場での接触は、ぼくの最も好むところであるらしい。かつての子ども会活動を思い出す。

昨日の父母の会学級懇談会を楽しかったと言ったら、浜田先生が

「初めての経験を楽しいなどというのは大したものだ」

と、あきれたように言っていた。ぼくにはこういうことは、子ども会活動の中で何度も経験していることであり、その思い出とともに、楽しいとしか表現しようのないものなのだ。



### ■一九七六年五月一九日(水)

下宿訪問も合計六軒になった。金銭的余裕のある家ばかりだが、どこも一樣に下宿生を我が子のように扱ってくれていることに感謝し、かつ驚く。

表の顔はニコニコと何でもない風をしているが、裏では大変な気遣い、苦勞が絶えないのではなからうか。寮が完成するまでの一時的な下宿とはいえ、人の好意に易々と甘える校長、神父たちには、ほとほと感心するとしか言いようがない。頼まれれば断れないのが日本人だ。それを主体的な救いの手だと平然と思いきんでいる。人の上に立てばこうも傲慢になれるものか。それともこれはカトリックの特質なのか。

塾の影響のなんと大きいことだろう。下校後の勉強はすべて塾。受け身の勉強しか知らず、一人机に向かう孤独な勉強を一切経験することなく入学してきた者のなんと多いことか。教材を与えられ、指示されなければ、自ら勉強することのできない哀れな中一生よ。山奥で孤独と困難に耐え抜いて勉強してきた者と、君ら甘ちゃん坊やの勉強人形と、いずれが次代を担う人なのか。

下宿させ子よりも親が寂しがる、この親はかちゃんりんが教育をダメにする。

受験産業、学習産業によって食い物にされた親と、哀れな道化師に仕立て上げられた生徒ら。現代の一大喜劇、いや悲劇だ。君らには野性の個性も、孤独な誠実もない。真の勉強の意欲は、そこからしか湧いてこないはずなのに。

君らが世の中核になったとき、はたして君らは独立独歩の気概を持った指導者になれるのだろうか。強者にはへこへここと頭を垂れ、弱者には厳しい指導者にだけはなってほしくない。

### ■一九七六年五月二五日(火)

先週の木曜日、父がプレスを運んでいて転び、肋骨を折る。兄から電話でそれを聞き、なんだか暗い感じを受けた。いつまでも元氣だと思っていた父が大けがをした。全治一ヶ月という。

それを聞き、ふと、若かった昔の父を思い出した。学校に行くのがいやだと言って母にごねると、アゲを作る手を置いて飛んできて尻をなぐられた、あのときの父。道後の公園に四〇〇円のカメラをもって、一緒に自転車写真撮りに行ったときの父。いつも汚れた作業着を着て、休みなく働き続けた父。

仕事に明け暮れた毎日だった。その父に、キャベツの成功という、ほのかな光明が差しこんだ。そこに襲った突然の事故。まったく予想もしていなかった不幸だった。

日曜の夜、Mと見舞いに行った。肋骨が二本折れていて、咳をしたり、寝返りをしたりすると痛むという。でも案外明るく、病院まで自分で車を運転して行くというから、ひと安心。骨が完全に癒着してしまうまでに動くと、慢性化してしまう。今が大事。仕事があるのでいつまでもは寝ていられないと言うが、ゆっくり養生してもらいたい。

二週間分くらいのストックがあるから何とかかなるとはいうが、そのあとが心配だ。

### ■一九七六年五月三一日(月)

昨日、郡中のミヨ子さんを訪ねたついでに、A君の下宿に寄る。親の大変な過保護の中で育

ってきたことがわかる。不自由など何一つ知らず、欲求のままに生きてきたのだろう。下宿での生活をうかがっていても、それがあらわだ。

夕食のとき、皿に載った魚の大きさを見くらべて、下宿主のおじさんの方が大きいと、「ぼくそっちがいい」

と言って、交換をねだるという。勉強も、三十分もすれば、すぐにじっとしていられなくなって、テレビを見に下りてくる。人にしかられても、芯から身に受けることができず、翌日になれば、けろつとして、また同じことをくり返す。

楽天的と言えば聞こえはよいが、欲望を制御することができない。

親の教育バカぶりもはなはだしい。一日おきに長電話をかけてきて、ことこまかに成績のこなど問いただすという。

親にほったらかされて育ったぼくなどにはとても信じられない過保護ぶりだ。

### ■一九七六年六月九日（水）

一昨日、皮膚科に行って、ジンマシンの注射を打ってもらった。注射にはカルシウムが入っているようで、打ったとたん体中がぼかぼかと暖かくなる。血液循環の速さを実感する。おかげで体中の得体の知れないかゆみは、その夜のうちにとれてしまった。

問題はその後だった。昨日の朝起きると、頭がボーッとぼやけて、いつまでたっても目が醒めず、手足にも力が入らない。学校に行かねばという意識がなければ、いつまでも布団の上で伸びていたいたい気持である。どうやら薬の中に精神安定剤が何かと一緒に入っていたらしい。ジンマシンというのは自律神経失調の一種であると、家庭医学の本に書いていたのを思うと、なるほどと合点がいく。

とにかく参ってしまった。それでもなんとか車を運転して学校まで行きはしたものの、いっこうに頭が醒めてくれない。三、五時間目の二時間の授業しかなかったのがせめてもの幸い。授業の前に濃いコーヒーを飲み、何とか体をしっかりさせて教室に行く。教室から戻ると、また半分眠りこけたようになってしまう。まったく情けない状態だった。

昨日の二杯のコーヒーと疲労、それに薬の影響とで、今朝は頭が重くて起き上がれなかった。学校を休む。

先日そごうで注文しておいた屋久杉の文机が、昨日届く。今朝包みを開けると、かぐわしい木の香の、みごとに文机が出てきた。だが、よく調べると、想像していたような屋久杉の一枚板ではなかった。合板らしい。なんだかだまされた気になる。でも悪くはない。気に入った。

### ■一九七六年六月二〇日（日）

先週に続き、今日も、日曜はキャベツの手伝いに行く。カッターで一五〇枚切る。運動不足でなまった体には、心地よい疲労となった。これが親孝行につながると思えば、なおのこ爽快感だ。

父のけがは大部よくなったのか顔色がよく、無精ひげを剃ってこざっぱり。こんな日はこちらまで楽しくなる。

田んぼでは今、田植えの盛りだ。早苗を一輪車や小型トラックに乗せて運ぶ姿が、福音寺に向かう田中の道のあちこちに見られた。田植えを終えた田では、細い苗が一年の幸を一身に担って、一年生のようにいきがっている。まだの田は、満々と水が張られて、祭の前の静けさだ。そんな中、人々が忙しそうに動き回っている。いつもは田に出ない、今日だけの一日百姓も、一人前の姿でおぼつかない手を振るっている。家族総出、いや親戚総出の和やかな田植え風景だ。

久しくこのような土着の風俗を目にしなかった気がする。土に根ざした人々の太古からの習俗は、確固とした自信を秘めて、演ずる人は変わっても、常に営々となされてきたのだ。自然の中に、そして習俗の中に溶けこんだこの行為は、見る者に不安を与えずさわやかだ。田植え時と刈り入れ時のあの家族総出の農作業は、日本人の魂だ。永遠に続く魂だ。

我が家の庭の畑は、狭いくせにMの丹精のおかげで、種々の野菜が実をつけている。中でもキュウリのできはすばらしい。青々と茂った葉の間から長く垂れ下がっている何本ものキュウリ。今日は新鮮なのを三本収穫。そのほか、サヤエンドウ、枝豆などができている。トマトもまだ青いけど、たっぷり実をつけている。

自然界との楽しい交歓だ。

### ■一九七六年七月四日（日）

今朝は砥部町ソフトボール大会。九・三でコールド負けしてしまったが、気持のよい試合であった。ぼくは三番ライト。初回いきなり三点を取って氣勢が上がる。だが、それ以後は打力が劣ってじりじりと負けてしまった。ピッチャーが悪い。打撃も悪い。ぼくが三番を打つくらいだから、悪いに決まっている。ぼくの成績は、三打数一安打、二フォアボール。

午後は父の手伝い。砥石の整理、機械の移動など、いつもは父ができない力仕事をする。さらに、東側のトタン屋根の下に段ボールを打ちつけて防暑対策。

六時近くまでかかる重労働だった。最後には足のふんばりがきかなくなったが、実に爽快な疲労であった。机に向かう勉強もぼくにはこの上ない魅力だが、こうした仕事もまた格別だ。

つまらんことで時間を費やすのは、その間の勉強の進捗を思うと、後味の悪い後悔を呼び起こすものである。つまらんことと大事なことを区別する今の最大の価値観は、勉学の向上と体力の向上であろう。大変な個人主義とも言える。いずれも、他人との協調をほとんど必要としないのだから。やがては、今の努力が報われて、榮譽とか、あるいはもっと別の形で自身にはね返ってくることを期待する気持がまったくないとは言わないが、しかし、今はそれよりも、知能、体力の向上そのものに魅力を感じ、全力を尽くしている。芸術の面でも、可能な限り多くの接触をもつよう努めている。一言で言えば、自己の成長、発展である。

それに役立つと思えないことについては、人との接触到魅力を感じない。学生時代と比べると、大きな変化である。

### ■一九七六年七月二八日（水）

二十二日から二十五日の林間学校は、台風のため、一日早く切り上げられた。二十四日の夜、

高浜に帰る。林間学校では、教師は見回りや小宴会で夜更かしをするため、睡眠不足になって困る。台風のために疲労の蓄積が一日少なくなったことは不幸中の幸いだった。

昨日と今日は、父母面談。二日で正味九時間の面談は大変な疲労だ。でも、短時間ではあれ、直接父母と話ができることは、生徒の内面を知る上で大きな意味を持っている。十把一からげで生徒をとらえてはいけなさと、つくづく思った。どんなに目立たない生徒にも、成績の悪い生徒にも、その将来に期待をかけているかけがえのない親がいる。それを常に心に秘めておかないといけない。

当たり前のことだが、これは大きな発見だった。活発で目立つ生徒や、教育熱心な父母にのみ目を奪われてはいけななのだ。物言わぬその他大勢をこそ、一人一人注意して見てあげないといけない。口で言えば当然のこのことに、心新たに思い当たったことが、面談における収穫であった。

### ■一九七六年八月一九日（木）

十五日に牛淵のおじいさんの見舞いに行く。

やせて弱り切った様子に驚く。時折苦しそうにウー、ウーとうなる姿が、見ていてつらい。去年の夏は、まだ起きて話すことができたのに……。

食事が喉を通らず、サイダーやジュースをコップにほんのわずか飲むだけになっている。氷がいいと言って、枕元のコップに入れた氷を横に寝返って手にとって食べたりもする。

もう八十八で老衰と言ってもおかしくないが、それにしてもかわいそうでならない。

昔の元気だった頃を思い出す。小学生の頃、夏休みに遊びに行くと、朝早く、ヤギの草を刈って帰ってくるのを見かけることがあった。ヤギを世話して乳をしぼるのはおじいさんの仕事だった。

ヤギの足をクイにしばり、大きなバケツを用意して、シューツ、シューツと乳をしぼるのだ。張り切った乳がしぼり尽くされてしなびる頃には、バケツの中は白い乳で一杯になっていた。

牛淵に行けばいつも暖めたヤギの乳を飲まされるのだった。ちょっと臭みはあるけど、新鮮でおいしかった。

朝の仕事が終ると、二階でラジオを聴くのを楽しみにしていた。枕元にラジオを置いて、ふとんに入って聴いていた。

何かにつけておじいさんはハイカラだったらしい。母の話だと、村で最初に自転車に乗ったのはおじいさんだった。玉突屋をやったこともあるという。小さかった母が店番をさせられたりもした。ぼくが中学生の頃、カメラと週刊誌のクイズにこつていた。鷹ノ子のヘルセンターに通ったこともあった。奥さんが早く死んだ上に、長男に仕事をまかせて若くして隠居したので、長い後半生は楽しみながらのんびり生きてきた。気楽な人生だったとも言える。

東一万の家に何度か来た。ぼくら家族をよく写真に撮ってくれた。バスで四国八十八ヶ所を回ったとも聞く。独り身の寂しい後半生ではあったけど、やりたいことを気ままにやった人生ではあった。

くりっとした大きな目と、しゃがれた声とは昔のままだが、骨と皮だけのようによせこけた

姿は、衰えきつている。哀れでならない。

十七日にも行ったが、そのとき持って行ったブドウジュースが口に合ったらしい。少しではあるが飲んでくれた。

### ■一九七六年八月二日（日）

ついに牛瀧のおじいさんが逝く。死ぬ直前まで意識があった。本当にかわいそうだ。

十九日頃から、夜もつきつきりでないといけないう状態になり、母が行く。その後、今日まで母はほとんど寝ないで看病していたらしい。

状態が本当に悪くなって苦しみ出したのは、今日の朝十時頃。息を引き取ったのは午後三時十分前。これまではまだサイダーやビールを飲んでいたが、ここの二日は水しか飲めなくなっていた。それも、吸う力がないので、脱脂綿にひたして吸わせてあげていたという。末期の水は格別においしいらしい。死ぬ前には脱脂綿で吸うのもつらくなり、声にならぬ声と、不自由な手まねで、筆がいいと言った。しかし、周りのものは誰も筆とはわからなかった。母が長女の勤で、「おじいさん、筆かな」と聞くと、おじいさんは「うん、うん」とうなずき、意の通じたことを喜んだ。

そこで、大急ぎで筆を買いに行かせ、氷水を筆に含ませて、唇をひたしたり、口に含ませてあげたりした。

そんな中でも、おじいさんの意識ははっきりしていた。医者が楽にしてあげようと麻酔の注射を打つても、全然効かなかった。苦しみは増すばかりである。周囲が見守る中で、おじいさんの求めるものは水ばかり。そして、三時十分前、おじいさんは自らの全生命の途絶える苦しみに、全身を引きつらせ、声ならぬうめきを上げて、手足を残る全精力でもってばたつかせ、そしてその後に、息を絶った。

そのあとも、一、二度は息をしたが、三時少し前、心臓が止まる。八十六年間、一瞬の休みもなく働き続けた心臓が、ついにここに停止した。おじいさん、幸せに天国に行っておくれ。半世紀ぶりに梅代さんに会える喜びを味わっておくれ。

おじいさんの最後の苦しみは、キリストの処刑の苦しみに似ていると、母が言う。キリストの処刑は午前十時。おじいさんの苦しみがつのってきたのも十時だった。キリストは、苦しみをのがれるための麻薬を飲まなかった。おじいさんにも、麻酔が通じなかった。キリストが死んだのは午後三時。

そんなわけだから、母は横にいたタキオさんに、「タキちゃん、今何時かね」と聞いて、「二時少し前」と知ると、「あと一時間」と、誰に言うともなくつぶやいた。そして、キリストは死の直前に「ウォー」と大きく叫んだというから、三時頃にはおじいさんも大きく叫ぶなり、あばれるなりするのではないかと、内心思い続けていた。その結果が、いま書いた通りである。

母の見守る前で、キリストの苦しみを再現したおじいさん。きっと天国では安らかに暮らすことだろう。

## ■一九七六年九月五日(日)

今朝、夢うつつの中で、幼い頃のことを思い出していた。東一万に移って間もない頃の記憶、アゲを始める前の記憶、兄を兄として意識したのはいつ頃だったのか、等々。

東一万に移って間もなく(だと思う)、南の三畳間で母に抱かれて部屋の奥を眺めていた記憶は鮮明だ。窓からさす日差しは明るくて暖かだった。それが今に残っているぼくの記憶の最古のものだ。二歳のときだろう。

兄とのことでは、祭りのとき、みこしを見に城山の近くに連れて行ってもらったこと、近所の家の庭で兄がパッチンをするのを、ついて行ってながめたこと、便所横に植わっていた木の実を二人でもいだこと、裏庭の壁にボールを投げてもらって遊んだこと、父と母がアゲを習いにいったとき、そのアゲ屋は新立あたりだったと思うが、学校を終えた兄が来て、裏の材木置き場で遊んだり、キャラメルを買いに行つて食べたりしたこと。こんなあれこれが、アゲを始める前の古いこととして思い出される。

そのほかには、うずらの卵を卸しに行く父の自転車に乗せてもらつて豆腐屋の横を通つたこと、その北側の洋館で大きなビワの木を見たこと。同じく、うずらの卵を持って、父の自転車で道後公園横の小川のほとりの家に行ったこと。父が事務所風の家の土間で話している間、ぼくはその前で川の流れを見つめていたこと。

その頃の貧しさ、苦しさは、幼いぼくにはわからなかったが、後になって聞かされた。兄は小学生だったから覚えていようだろう。

アゲの見習いが終わつて、暗くなつての帰り、上一万の本屋で花咲かじいさん(だったか?)の絵本を買つてもらつたのを覚えている。うれしかった。何度も母に読んでもらつた。それが絵本を買つてもらつた最初であり、ひよつとすると、最後だったのかもしれない。

眠りにつく前、母にしてもらつたお話も大好きで、毎日毎日同じ話をあきもせずねだつたものだ。ゴンベさんの種まきの話、デンデンダイコの話、お月さんいくつの話など。何度も聞いて覚えてしまつているのに、母の口から聞かされると、その都度おもしろかった。絵本など使わなくても、実に楽しかった。

遠い幼いころの記憶は、こうしてふと思い出したときに書き残しておくことに意味がある。というのは、時とともにそれは風化し、変容していくものだから。意味づけに整合性を持たせたかのように変容していくものだから。

覚えているのは、最後に変容したものだけになつていくから、変容以前の、ふと思い出したときの記憶というのは、どんな断片であっても、書き残しておくことに意味があり、大切である。書き残しておきさえすれば、それは人生の行程の思わぬ証拠となりうるのである。

ここに書かれている種々の記憶の断片は、後の記憶、つまり今の記憶とは、細部において異なっている。たとえば、南の三畳間で母に抱かれていたときの記憶。それを今のぼくは、東一万町に引越した当日の記憶だと知っている。知っているとより、そのように意味づけている。しかし、二十八歳のこの日、ぼくはどうやらそれに気づいていないようだ。

記憶は何度も想起するうちに、必ず変容する。この変容の過程ほど不思議なものはない。

## ■一九七七年三月一六日（水）

中一のクラスの生徒三十三名が来る。

続々とバス、自転車などでやってくる。中には、バスを乗りすぎし、砥部中近くの派出所に駆けこんで、場所を教えてもらった者などもいた。

予定の十時には三十三人全員が集まった。家中大騒ぎ。けたたましい騒音に、隣近所は大迷惑だったろう。花札、トランプ、チェス、将棋、パチンコゲーム、ドミノ、ステレオ、カセット、ピアノ、エレクトーン、バドミントン、ドッジボール、かんけりなど、ありとあらゆる遊びに全員興じたのだった。

父が小林でいなり寿司をたくさん買ってきてくれたが、またたく間に平らげられた。育ち盛りの少年たちの食欲はすさまじい。菓子など、出すが早いか瞬時になくなってしまう。ぼくも、チェス、将棋、ドミノで大いに楽しんだ。

四時すぎ、全員引き上げる。誰にとっても思い出に残る楽しい一日となったはずだ。教師にはこうした自己犠牲の一日も必要である。

## ■一九七七年三月二九日（火）

昨日入院した。今朝は、朝食のあと絶飲食。十二時頃Mが来る。二時半頃には母も来る。

三時頃、点滴開始。点滴を続けながら手術室に運ばれる。母の心配げな顔。人を遮断して、長い滅菌通路を通ったのち、奥の手術室に入る。タイル張りの明るい部屋。中央に丸い大きなランプがあつて、その下にベッド。運搬ベッドからそれに移される。いよいよ来るべきものが来たと観念する。隣の子どもの手術が長引いているとかで、そのまま二、三十分待たされた。やがて先生が来て、いよいよ開始。手早く顔面が消毒され、体全体におおいかぶせられる。手足が軽くしぼられる。顔面にも、鼻だけ開けて、カバーがかぶせられる。これぞまな板のこい。

直ちに鼻の奥に消毒液がぬられて、鼻柱に中から麻酔注射。メスが入れられ、骨が削られる。局所麻酔だから、削る音が耳の内側からゴリゴリ、ガリガリと聞こえてくる。鼻の他はすべて感覚がある。局所だけ麻痺しているのがかえってこわい。最後には麻酔が切れかかったのか、奥の方が痛み始める。鼻に器具が入るたびに「いたい、いたい」と声を出す。手を握りしめ、腹に力が入り、足が緊張する。ついに終了。ほっと安堵。三十分後であった。

手術室を出ると、顔を真っ赤にした母がいた。鼻にガーゼがつめられて、呼吸が苦しい。

鼻中隔湾曲症で鼻づまりが激しいため、春休みを利用して、思い切って手術を受けたのだった。あのとときのゴリゴリ、ガリガリが、今も脳髄にしみついている。

## ■一九七七年三月三〇日（水）

おかゆばかり。ガーゼが詰められて鼻から空気が吸えないので、食べにくい。氷で鼻を冷やし、一日中ベッドですごす。Mが夜もずっと付きそっている。口だけで息をするから口の中が乾燥してカラカラになる。寝るときは特につらい。

■一九七七年三月三十一日(木)

夕方六時頃父と母が来る。リングを置いて行く。そのすぐあとに、高須賀先生の処置があり、鼻のガーゼを抜いてくれる。鼻から空気が吸えるようになって、口の乾きが消えたのが何より嬉しい。

「これで出血がなければ明日退院してもよい」

とのうれしい言葉。さっそく電話しようとしたが、あいにく十円玉がなく、売店も閉まっていたので明日にのばす。

物が自由に飲み込めるようになったこと、口がカラカラにならずに睡眠できること。まるで天国に来たようすばらしさだ。

■一九七七年四月一日(金)

朝、売店でアイスクリームなどを買って小銭を作り、父母とMに電話。退院は早くとも明日か月曜だろうと考えていたものだから、どちらでも大変な驚きよう。

午前中に高須賀先生に診てもらい、最終的に退院OKの言葉。そのとき処置室で、喉にぽっかり穴が空いた老人を見て、ぼくの手術など手術のうちに入らないと痛感。

十時半頃Mが来て、荷物の整理。十一時半頃父が来て、寝イスと毛布を持って帰ってもらう。隣の福島君や、術後の経過が思わしくない中矢君などに別れを告げ、献身的に世話してくれた看護婦にも別れの挨拶をして、十二時頃、病院を出る。

外は春うららの晴天であった。市駅まで歩き、荷物をロッカーに預けて、そごうの食堂で昼食をとる。帰りのバスから見た堀端の桜は満開だった。淡いピンクを満面に広げた桜ほどみごとな木はないとつくづく思い、古代日本人のセンスに同調する。

戸梶前から家まで歩く道の草々にも、春の息吹が感じられる。

五日ばかり外の世界に触れないでいた間に、自然は足早に春の盛りに駆け入っていた。

■一九七七年八月三〇日(火)

夏休みは今日で終わり。明日は職員会議がある。なまっていた体も、ここ一週間あまりのトレーニングで、元に戻ってきた。

Mの腹が少しへこんだ気がするということで、心配になって山内病院に行ってみる。元気な心音が聞こえたので大安心。

診察を待っている間、立花の裏町を歩いてみた。初めて足を踏み入れて驚いた。まさにここは下町だ。東京の佃あたりの町並みを、もう一層押し詰めたような感じである。狭い路地が網の目のようにはびこっていて、それに沿う家々はいかにも下町風。塀がなく、路地に直接玄関がつきだしている。玄関先での井戸端会議も、実に自然で庶民的だ。

今はもうなくなったと思っていた子供相手の駄菓子屋までが、狭くて薄暗い店を張っている。中で女子中学生が少女雑誌を読んでいたりする。子供時代に戻ったようでなつかしい。そして長屋が多い。人と人が肌をつきあわせて生きている姿がそこにある。

さらに驚いたのは、そうした居住区と一体になって、製材所、鉄工所などの小さな町工場が



いたるところに見られることである。近代的な工場は一つもない。板塀でトタンぶきか、またはくすんだ赤煉瓦造り。そうした工場が狭い路地に面して並んでいる姿は、松山ではほとんど見かけなくなったもの。そこにもまた幼少年期に帰ったようななつかしさが感じられる。

どうやらこのあたりは戦争で焼けなかったようだ。

松山にこうした人情味豊かな地域があることを、ぼくは夢にも考えたことがなかった。大発見だった。警察署長が野球とぼくをしに家にやってくるなどと、大嶋先生が話していたが、そしてそれを先生独特のホラだろうと思って聞いていたが、それはホラでも何でもなくて、ここならさもありなんと思っただけだった。それが不思議でない土地柄である。昔なつかしい、ぼくの子供時代の町筋である。

■一九七七年九月四日（日）

教室を見渡して目につくのは、色白の顔が多いこと。黒々と日焼けしたのはほとんどいない。A高生は地域性に欠けるから、昼間でも外に出ないで、家でゴロゴロというのが多いのだろう。それで大いに勉強するのなら、それもまあ悪くはないが、それでもない。子供らしい活気に欠けた、情けない状況だ。

昨日、王が七五六号の新記録を達成。努力と力で勝ち得たスターの座は、成り上りの人気歌手などとは違って、本当に偉大だ。

昨日、福音寺で赤飯と大きなビフテキをもらってくる。Mの帯巻きのお祝いだ。

■一九七七年九月二四日（土）

ガレージの下の湿気が多いところには、雑草が青々とみずみずしい生気をたたえて生い繁っている。湿地帯だけに、他の箇所との雑草とは種類が違い、コケ類が多い。コケの上に、ひよこ草のような地をはう草が茂って、所々に、背丈の高い草が頭を出している。それらを引き抜くと、下に必ず丸虫がひそんでいる。人間と同様、やはり湿気が多いところが彼らには都合がいいのだろう。

我が家の庭にも、湿地帯、固い乾燥地帯、その中間地帯という風に、土壌、気候の違いが存在し、それぞれに生える植物、住む虫類が歴然として違う。おもしろいものだ。

学校から帰ると、すぐにMを山内病院に連れて行く。定期検診だ。ところが行ってみると、臨時休業だった。勝手に休まれては困る。身重な体を無駄に運ばせた責任をとってもらわねばならない。

■一九七七年一二月七日（水）

十二月一日から四日まで京都に行く。一日と二日は互助会旅行。その後は私的旅行になって、友人宅に泊まる。二日夜は大谷さん宅。松野、Nさんも来る。明け方まで語り明かす。三日夜は松野宅。

学生時代の友人は、会えば直ちに打ち解けて、へだてがない。激動の青春時代をともに歩んだ者のみがつ、気心の知れた心安さだ。こうした友情が、あの頃いとも容易にできあがった

のが不思議でならない。京都はぼくにとって永遠のふるさとだ。

高尾と嵯峨野の寺々を回ったことも、今回の京都行きの大きな収穫となった。島津先生が一緒だったことで、一人ではわからない鑑賞のしかたをいろいろ教わることができた。

回った寺を挙げてみると、

高山寺……石水院、鳥獣戯画等。

神護寺……薬師如来は圧巻。五大虚空蔵を特別拝観。

落柿舎……去來の庵。

常寂光寺……紅葉と銀杏のコントラストが美しい。多宝塔に趣がある。

天竜寺……池を配した庭。寺の権勢を固めるためのものであったとか。

念仏寺……「貞……」とかいう江戸初期の文化人の墓。竹やぶがすばらしい。

祇王寺……紅葉の庭が写真家のたまらぬ魅力らしい。

二尊院……抹茶茶わんを買う。

檀林寺……応挙の絵など、宝物館の内容がすばらしい。

清涼寺……清涼寺流と呼ばれる、ひだの多い本尊。

大覚寺……大沢の池がよい。

大徳寺……禅坊主の話がおもしろい。

平安神宮……裏庭を見る。

## 中期教師時代

### ■カムイ伝と私

(一九七九年十二月、図書館報ビブリオに寄稿)

先日、図書委員からカムイ伝について書いてほしいとの依頼を受け、うなずくと、数刻もせずに、ドサツとカムイ伝全巻が机上に載せられた。そこで初めて全巻を読み通すことになった。

今から書くのは解説ではない。私の主観だけを抛り所に、感想を述べることにする。

京都に市電が走っていた頃、銀閣寺道の電停は学生街の玄関口だった。広い交差点を、定食屋、中華料理店、喫茶店、ラーメン店、一杯飲み屋などがぐるっと囲み、日暮れ時になれば、学生たちの笑い声や話し声が、ガラス戸をびりびり震わせない店はないのだった。

大通りから一歩入ると、そこは何代もの学生たちの垢と体臭が塗り込められた臍物の世界だ。狭い路地に向き合って、古い下宿屋が軒を連ねる。

早朝「花いらんかえー」と白川女の清楚な売り声が響く志賀越道と呼ばれる街道が、銀閣寺道の交叉点から北東に斜めに伸びている。比叡山を越えて滋賀地方に通じる由緒ある古道である。疏水を渡り、目印の石柱を析れてその古道に入ると、日の入らぬ寺院の境内のような、京特有の奥深い湿気が漂ってくる。黒くくすんだ格子戸と冷たく光る打ち水の跡が、遠い平安の昔を偲ぼせる。

凍るような冬のある日、白川の流れに沿ったその道を私は友人の下宿に向っていた。

手押しポンプの井戸のそばを抜け、黒光りする階段を上って、ギシギシ鳴る廊下を渡ると、突き当りが彼の部屋だった。十畳ほどの広い部屋には石油ストーブがガンガン焚かれ、すでに数人集っていた。後期試験の準備のための共同作戦であった。コタツを囲んで夜を明かすことになっていた。みな時を忘れて真剣である。血走った目で鉛筆を走らせ、難解な数式と格闘した。

いったい何時間経ったことだろう。しびれた頭を持ち上げて、窓から外に目を向けると、漆黒だった空が、いつしか青みがかったぬめりを漂わせていた。フーツと誰ともなしに大きなため息をついた。密室の緊張が解けた。痛む腰を押さえて立ち上がると、みなぞろぞろと外に出ていった。近くの子供公園で未明の澄んだ星空を見上げ、凍みる冷気を胸いっぱい吸うのは格別だった。

ブランコを揺すり、鉄棒にぶら下がり、髓の襷から疲れを引き剥がして下宿に戻ると、みなそれぞれに場所をとり、蒲団や毛布を引っかぶって仮眠を始めた。私も寝場所を定めた、そのときだった。部屋の隅に一冊のマンガ本を発見した。訝えた目をもて余しつつ何気なくページを繰ると、これがなかなか面白い。百姓一揆の話であった。早いテンポの展開に忍びの活躍が興を添え、みな寝息を聞きながら、私は一気に読み通してしまった。それがカムイ伝との最初の出会いであった。当時、大学は紛争の渦中にあった。構内のいくつもの建物が大学解体を叫ぶ学生らの手で占拠され、教育、研究活動は半ば麻痺状態に陥っていた。

彼らに同調する者、彼らを排除しようとする者、それらすべての運動を否定する者など、様々な集団が陰に陽に入り乱れ、アジテーションを繰り広げながら騒然としていた。授業のない日が何ヶ月も続くことさえあった。

そんなある日、突如、大学のシンボルである時計台が占拠された。机やロッカーでバリケードが築かれ、頂上からは特製拡声機による「時計台放送」がガンガン鳴り響き始めた。これには誰もが

驚いた。夜と言わず昼と言わず、気の向いた時間に“放送”が始まるのだった。

群集がバリケードを崩しにかかる上から石が飛んでくる。危くて近づけない。下から投石する者もいるが、威力がない。そうこうするうち、学生や教職員が次々とつめかけ、時計台周辺は溢れんばかりの大群衆となった。放送は相変らずガンガン鳴り続けている。一進一退のうちに夜戦に入った。

ベニヤ板を楯にして投石を避けつつバリケードを突き崩すグループも現れた。焦った占拠者達は、牛乳ビンにガソリンを詰めこんだ火炎ビンを投げつけ始めた。これは石よりはるかに危険。私の目の前でも、それは落ちて砕けて一瞬あたりが火の海となった。ズボンに燃え移って跳びはねる者もいる。頭に石を受けて病院にかつがれる者は数知れない。

それでも数千、いや万にも近かったろうと思われる群集は去らなかつた。戦争を知らない私には、これは初めて味わう一種の戦争体験であった。

そんな体験の余韻がまだ醒めやらないころである、カムイ伝のリアルでダイナミックな一揆の描写に出会ったのは。

カムイ伝は学生たちの間でよく読まれていた。そこには権力に抗う民衆の心意気が波打っていた。カムイ伝第一部（三部作とのことだが、第二部以降は読んでいない）全二十一巻を通しての主要なテーマは、江戸幕府の封建支配に秘められている重層構造を露わにすることだと思われる。東北の小藩日置藩内の一農村にすぎない花巻村での庄屋、百姓、非人の対立関係から話が始まって、物語の進展とともに、藩機構、豪商、江戸幕府へと解明のメスは広がり、深まっていく。何がより根源的な支配権力であるかを探ろうというのである。

そこで説かれる支配構造の各段階をかいつまんで述べることにしよう。最も下位に位置する対立関係が非人と百姓である。非人は生産手段を奪われていて、農耕に従事することを許されない。牛馬の死体処理とか物乞い以外に、食うための手段がないのである。最も身近にいる百姓から畜生と蔑まれ、石をぶつけられながらも物乞いに歩くしか生きる道を持たない彼ら。

百姓が彼らを蔑視し憎むのは、苛酷な年貢と夫役による苦しみの捌口を下位者への優越感に求めていることとは別に、非人が、罪人の晒し、処刑、死体処理などの直接の実施者に仕立てられているという、より現実的な理由による。一揆主謀者が非人に処刑され屍を引き回されるのを見て、仲間の百姓が非人に対して激しい怒りをつのらせないわけがない。これは百姓の不満を支配者に向けさせないために藩が仕組んだ罠であった。

やがて、この作られた対立関係に気づく者が現れた。百姓正助と非人苔丸である。正助率いる若者組と苔丸率いる非人衆は、他の百姓たちの抵抗を振り切って連帯し始める。若者組は非人の協力で新田を開き綿作を興す。非人は苔丸の指導と正助の励しで養蚕を始める。これはそれぞれに豊かな生活をもたらすきっかけとなった。

正助の究極の夢は、非人身分をなくし、百姓との共同によって自由な生産活動を可能とすることにあった。その実現のため、正助の目は支配の根つ子を握る者に向っていく。

こうした百姓と非人の連帯を計ろうとする勢力と、それを突き崩して両者の分断による支配の強化を計ろうとする勢力との闘いを描くことが、長編カムイ伝に貫かれた基本構想である。この構想のもと、支配の重層構造が描かれる。

百姓の中における小作と本百姓の関係、百姓と庄屋の関係、庄屋と藩の関係、上級藩士と下級藩士の関係、藩上層部における派閥抗争など、日置藩内に限定しても支配の構造は複雑である。個々の事象に逐一触れることはしないが、派閥抗争に関連して、正助、苔丸と並ぶ中心人物の一人草加竜之進について述べておく。

百姓への苛酷な政策を多少とも緩和させようと願った次席家老が陰謀によって一家断絶の憂き目に遭ったとき、息子竜之進とその剣の師である笹一角の二人は難をのがれて逃亡する。二人は藩主へのあだ討ちをねらって、百姓、非人に姿を変えて機を窺った。

竜之進は、正助、苔丸の感化によって、藩主の命を奪っても、それは首のすげ換えをもたらすだけで、民衆の苦しみを柔らげることにはならないと悟っていく。これは、どこまでもあだ打ちを狙う一角との訣別を意味することになった。

一角は一人江戸に向い、江戸屋敷から鷹狩の遠出をした藩主の殺害に成功する。一角は武士としての大事をなし遂げた誇りを胸に斬首の刑に甘んじる。だが、藩主殺害がもたらした結果は竜之進の予期通り、病死を名目とした藩主交替にすぎなかった。

ここから、民衆の苦しみを救う真の道は何かを模索する正助、苔丸、竜之進らの活動が始まっていく。必然、より上位の支配構造が浮かび上って来る。

換金農業を始めた百姓達と商人との関係、豪商と中小商人の関係、藩上層部と豪商との癒着関係、藩と幕府の関係など。これらを著者白土三平は荒海を渡る船頭のように、独特の構成員でリズムカールに切り回してゆくのである。

やがて、百姓を欺いて巨万の富を得る豪商への憎しみと、大飢饉によるやむにやまれぬ食うための欲求とから、日置藩に、例を見ない大一揆が発生する。花巻村にとどまらず、綿作、養蚕の拡大を通して連携を深めていた藩内全村の農民がこれに加わり、さらに漁民の加担、非人の後押しがこれに続く。

自らの利得に溺れ腐敗し切った藩には、これに対処する力もはやなく、幕府の裁断を待つことになる。これは、主謀者正助らをとらえて言語に絶する拷問を加えながらも、江戸での申し聞きを主張してどこまでも黙秘する彼らを江戸送りにせざるをえなくなった、藩側の敗北を意味していた。

拷問によって瀕死の状態にある正助は、窪んだ目を正面に向け、気力の最後の雫を振り絞って、江戸の白洲に、藩政の墮落ぶりを訴えた。正助としては命をかけた訴えであり、ここに最後の勝利を期したのであった。

小藩とりつぶしを画策する幕府は、これを好機と日置藩を廃絶し、幕府直轄領に組み入れた。このあつけない結末の背後には、家康は非人の出との秘事をつかんだ日置の藩主以下数名の幹部の暗殺に、ついに幕府が成功したという事実がひそんでいた。

正助や竜之進はこの結末によって果して勝利を我物にしたのであろうか。

事態の推移は甘くはなかった。藩を乗り越えることのできた正助も、幕府に期待を寄せたところに限界があった。幕府は日置を直轄領にすると、連帯の方向に高まった民衆の力の切り崩しに取りかかった。

その第一は、非人と百姓の分離である。頭、小頭の支配による縦の非人組織の確立と、人別帳改めの実施とによって、非人を隔離された社会に再度閉じこめようとしたのである。

第二には、連帯の要正助の孤立化である。一揆の主謀者として捕えられた者の殆んどが拷問、処

刑等で命を絶たれた中で、正助ただ一人、非を認めお上に忠誠を誓ったために救われた、との布告を出した上で、舌を抜いて正助を村に帰したのだった。裏切者への村人の対応は言うを待たない。そしてまた、指導者を失った村の状況も。

直轄領代官の支配が旧藩主のそれに比して緩和されるはずはなく、すべてが原点に戻ったかの様を呈してカムイ伝第一部は終る。

重層的支配構造をあげざし、その根源を探ることにカムイ伝の主要テーマを見出し出したのだが、各層毎の支配、被支配の関係は、いわゆる階級対立と、同一階級内での単なる利害対立とに区別されるべきであろう。そのことは、民衆対それを支配する諸々の階層という形で意識して描かれている。特に、支配層内部の利害関係のもつれから来る腐敗した精神構造と、被支配者の側の理想に燃えたけなげな美しさとの対比は当を得てすがすがしい。第二巻から一文を引用しよう。

「澱みには汚物と腐敗があるのみである。流れは力強く美しい。流れに逆って泳ぐ魚はさらに美しい」

この一文だけを前後の脈絡から切り離して読めば、支配者と被支配者の対比と見るよりも、停滞した人間と前進のための努力を維持する人間との対比と見る方が自然かもしれない。

カムイ伝はまた、不当な権力行使に抗う力はいかにあるべきかも示している。

その一つは、皮相の現象にとらわれないで権力の根源を見えることである。正助はその意味で最後の詰めを誤った。これは正助の誤りというよりも、それが当時の歴史的限界であったということだろう。客観的な条件は何ら整っていないかったのだから。百姓や非人の真の解放（それは現在においても未完であろうが）につながる幕府の崩壊は、それから二百年も後のことである。

その二つは、個人的な利害感情に走ることなく、共通の基盤に立って集団の力を発揮することである。一角と竜之進の生き方にそれは象徴されている。個人の剣の強さなど、巨大な歴史の流れの前には一片の徒花にすぎないのである。

これらのことは先に述べた私の大学紛争時の体験にも当てはまる。大学解体を叫んだ者の理論の骨子は単純である。大学は資本家の用を足し現体制を維持する手段の再生産機関にすぎないと決めつける。すなわち、大学における研究活動の成果は、少なくともその応用面を見る限り現体制の維持拡大に役立たないものではなく、また教育活動の面においてもそれは現体制擁護の人員の補充を主要任務とする、というのである。そこから必然的に大学解体の正当性が帰結されるではないかというのが彼らの主張であった。

しかし、大学に吹き荒れたこの運動はカムイ伝の立場からも大きな問題をはらんでいた。第一は、現在の日本における支配体制が民衆の利益に反するものと仮定したとしても、その支配の根源に、彼らの目が届かなかったことである。理事会、教授会を敵と呼び、その機能の麻痺に目的を矮小化してしまったところに、一時は全国をゆるがしたこの運動があっけなく流産した原因がある。

第二は、彼らの行動の直接的動機が、学問への情熱を見失ったことによる焦躁と、それを粘り強く克服することのできない弱さにあると考えられることである。人生の目的を見失った者のいたずらなエネルギー発散にすぎなかったのである。その意味では今日のディスコブームと同質であって、理論づけは紛飾の衣にすぎなかったとも言える。そのような中からは真の改革の力となる民衆の連帯が得られるはずはなく、孤立化のうちに雲散霧消の道をたどったのだった。

次に、カムイ伝の背景を彩る自然と人間の競合関係に目を移してみよう。地表を蟻のように這い

ずり回って些細なことに一喜一憂を繰り返す、いわば二次元空間に生活する人間に対し、三次元的立場から突如として計り知れない脅威と豊かな恵みをもたらす自然の巨きさが各所で語られる。

農村における日照りと洪水、海における荒天など、人はそれに対して、甘んじて受ける以外に抗う手段をもたない。しかも、いかなる不幸を受けても悲しみというものを知らない鳥獣と違い、禁断の実を食べた人間にとって、死に直面したときの悲痛は甚大である。この逆うことのできない巨大な自然の流れに立ち向う人間の姿をカムイ伝は生々と描いている。

魚群の移動によって不漁の続く漁村が商人の手に落ち、水産加工の町と化した。海にこぎ出し櫛と網を握ったその手で男達はノリを煮ることになる。定収を得た喜びとは裏腹に男達の表情は冴えない。そんな中で、青年クシロは一人海の男の意地を守って海に漕ぎ出していき、魚群を去らせたサメの大群と闘う。モリを片手に荒海を沖に向うクシロは、自然に挑む勇猛果敢な男の象徴である。

荒れ狂う高波を物ともせずサメを追う彼の目には、海への限らない愛情と海を捨てた男達への憤怒の念が渦巻いている。命を賭したこの自然への挑戦は決して自然の哲理への反逆ではない。自然との合体がその境地である。

クシロの直情的な自然との合体とは対照的に、百姓正助は理性的に自然との合体を試みる。彼は科学の力で自然を操り、クシロのようにかみ合わぬ歯車を無理に回して自然の懐に飛びこむことはしない。冷静である。正助の科学性の骨頂はダム作りだ。最初に作ったダムは決壊するが、その原因を追求することにより、種々の工夫をこらした新設計のダムを作る。土砂の堆積を防ぐ方法、取水口への水圧の調整など、当時としての科学性の極みを尽す。正助はまた、農具改良にも天才振りを発揮する。後家の仕事を奪うので後家殺しとも呼ばれたという千歯こきの発明などがそれである。

これらの成果を通して彼は自然を支配しえたのかというところではない。より緊密な自然との合体を可能としただけである。自由とは法則を知りそれに従うことである。決して、法則を無視した安易な一人よがりからそれは生まれえない。このことを彼はよく知っていた。自然法則のみならず社会法則に対しても彼が科学性を追求したことはすでに述べた。

被支配者の側のこのような自然との合体を願う気持ちに反して、支配者側は自然に対してあまりに無知で、時として気ままな態度が災害を招いた。

その例は、振袖火事で全滅した江戸の再興のために木材の相場が異常な高騰を示したとき、それに目の眩んだ藩と御用商人が猪突猛進に木の伐採を急ぎ、それがために日置藩をはじめ各地で水害が発生したことである。住民に利益をもたらすとの口上のもと、実は企業利益の虜となって乱開発に明け暮れ、その結果、緑と砂浜の喪失、川と海の汚濁を招いた高度経済成長下の日本を象徴しているようである。

科学技術の発達が自然の支配をたやすく可能にすると考えた所にその根本的な問題がある。原子力時代と呼ばれ、月に人類を送りこんだ時代でもあるが、宇宙は広大だ。人知の及ぶ所はその巨大さに較べれば芥子粒にも満たない。我々は常にこの広大な宇宙空間に思いを馳せて謙虚でなければならぬ。

最後に、カムイについて触れておこう。彼は、これまでに述べたドロドロした人間社会の現実を超越して「人の世の影を行く者」として描かれる。秀でた武芸と忍法によって非人社会を脱し、忍者グループに加わるが、やがてそこでの掟からもはみ出し抜け忍となる。忍法の修行を通して自然法則からの超越すら試みる。すべての支配からの脱出によって完全な自由を得ようと夢見る、非現

実的な理想像がカムイである。もちろん一個の人間にすぎない彼にそれが可能はずはない。その葛藤に苦しむ彼の今後の進む道は、第二部以降に待たねばならないだろう。

『カムイ伝』は、社会生活を営む動物である我々人間の弱さに気づかさせてくれるとともに、様々な生き方の諸相を示唆してくれている。一読に値するユニークなマンガであろう。

## ■雪の里より

(一九八二年一月、父母会報「やまびこ」に寄稿)

分厚い手紙が舞い込んだ。三年前、中三半ばで転校した教え子からのものである。懐かしさに心急いで封を切り、便箋を取り出すと、中からひらりと舞い落ちたものがあった。真紅に色づいた紅葉の一片であった。まるで女学生趣味だな。おかしくなって柄をつまみ風車のように軽く息を吹きかけながら、軽い気持ちで手紙に目を落とした。

ところが読み進むにつれ、これは青春と言うにはあまりに深刻な、自立に向かう一個のかけがえない人生の述懐であることを知り、軽々に読みすごすことのできない厳肅な世界に引きこまれたのであった。一人私にのみ宛てて書かれた手紙ではなく、私に名を借りてなんぴとかに何かを告白する気迫が感じられたので、ここにその一部を転載するものである。

覚えていらっしやいますか、僕のことを。三年前を。

突然忘却の底から細い記憶の糸をまさぐって下さいとお願いする無神経をお許しください。思い出して頂けたことと信じて僕の天路歷程を披露いたします。唐突な幕開きですが、馬鹿な人間のつまらぬ生きざまを、酒のつまみにでもして読み飛ばしてくださいれば幸いです。

三年前のクリスマスの夜、僕は帰省する勇氣を持たないまま、追い立てられるように寮を出て、行くあてもなく、石手川の土手をさまよっていました。顔面がはげけそうな烈しい寒風が吹きすさび、皮ジャンを貫いて寒気が首筋を射抜くような夜でした。クリスマスとはいえ、そんな夜に土手で愛を語らうアベックなどいるはずもなく、少々覗き見趣味に陥っていた僕のささやかな欲望までもが、寒風によって無慈悲にも奪い取られて、ますます孤独に追いやられていったのでした。

親の顔は見たくも、思い出したくもありませんでした。それが僕を無意識に港から遠のかせ、賑わう町中をよぎってついには石手川にまで歩を進ませてしまったのでした。

行くあてもなく、夜を明かす寝ぐらさえ持たない、見捨てられて無にも等しい霞のような存在を、歩き疲れて無感覚になった足裏に感じたのを覚えています。何かを求めて歩くのだという強い虚勢に背を押されながらも、あまりの寒気と孤独のために、みじめな敗北者の影を自分の内に感じざるをえなかったのです。

土手からは町の灯りが見渡せました。ほの青く寒々と輝く松山城の姿も印象的でした。

夜空に浮かぶ不夜城の美しさに見とれているうち、脳裏の映像がいつしか反転し、煌々と輝く夜空の真ん中に暗黒の城が深い陥穽をなして落ち込んでいるのを発見したのでした。

瞬間、目まいでもするように、それらの景色がくるくると渦を巻いて遠のいていき、やがてそれらが無限の彼方に点となって消え去ってしまったその先に、生まれ変わったように新鮮な感覚に包まれた僕がいたのでした。そのとき僕にとって、町の灯りも城の透明な輝きも、もはや価値ある心像とはなりえなくなっていました。



僕は歩みを止めることが恐くなり、希望と苛立ちと恐怖とに責め立てられながら、夜道を逃げるように歩き続けたのでした。追われているのか、何かを求めているのか、それさえよくわからない、朦朧とした霞の中の彷徨でした。

町をはずれ、畑中の道に出、国道を横切り、ときおりすれ違う行人の視線を、目を合わせないように避けながら、そこがどこであるのかもわからないまま、ずんずんと歩いたのでした。ついには疲れ果てて一歩も動けなくなり、夜空を見上げて立ち尽くしたとき、今もはつきり覚えていますが、腕時計は二時二十分を指していました。そこは石がごろごろころがった広い河原でした。

寒さを感じる力はもうなくなっていて、倒れこむように土手の枯れ草の上に身を投げ出しました。見上げた星空のなんと美しかったことでしょう。無数の星が、さえ渡った夜空を埋め尽くしていました。星があんなにも大きくまぶしく煌めくものであることを、そのときまで知りませんでした。天空の重みをひしひしと身に受けながら、息苦しいばかりの思いで、大自然の神秘に触れえた喜びにひたつたのでした。

その夜の感動は僕を生涯支配し続けるものに違いありません。遠い日の母に抱かれたぬくもりのような懐かしさで、今もまざまざとその夜の情景を思い浮かべることができるのです。

星空はいっしょに僕をふわりと宙に浮かび上がらせていました。名も知らぬ星々の一つ一つが言いようもなく親しみ深く、手に取るように近く感じられるのでした。混沌の世に生を受け、言われなく非難され、軽蔑され、そして無視され続けてきたこの僕という存在が、無数にまたたくあたたかな星の光に包まれて、新しい命となつてよみがえったのでした。

そうだ、この体には力がみなぎっている、そう感じて何度もこぶしを高く突き上げたのでした。もはや学校も両親も、僕と関係のあるあらゆるものが意味を失い、暗黒の闇にほうむり去られていました。それどころか、この日本という国のすべてが焼けただれた灰じんの町と化し、僕はその中にすつくと立って天空高く舞い上がろうとしている、そんな幻覚にさえ襲われたのです。

見上げていると、星空がゆっくりと、しかし確実に刻々と回転してゆくのがわかりました。それはまるで、大洋に突き出た岬に立って地球の丸さを感じるのに似た錯覚にすぎないのかもしれないかもしれませんが、そのとき僕には、それが時計の長針の動きを追うよりも鮮明に感じられたのでした。天空の回転を実感することは、地球の自転の実感です。ぼくを乗せたこの地球が、ゴロゴロと音を立てて宇宙をころがってゆく姿がありありと目に浮かびました。

宇宙の深遠はとも言葉で尽くせるものではありません。しかし、百数十億光年と言われるこの宇宙のスケールを、僕はそのとき、星と対峙することによって目で見、体で実感していたのです。僕はその夜の少し前、ある本で、宇宙生成当初に放射され、現在宇宙空間に満ち満ちているバックグラウンド放射の話を、心躍る思いで読んだことがありました。

そしてその夜、星空と一体となりながら、ぼくはそのバックグラウンド電磁波を受信したのです。少なくともその存在を心に強く感じたのです。それは遠い過去からの、時間と空間の出発点と呼んでよいはるかな過去からの便りでした。人はそれを神と呼ぶのかもしれませんが。しかし、僕にとってそれは宇宙創造の母の声でした。全感覚をとぎすましてその声に僕の存在をゆだねたのです。

この感覚に身をまかせた以上、もうこのまま凍え死んでも悔いはないとさえ思いました。そして、母の胸で安らかな眠りにつくように、僕はそのまま静かに目を閉じたのでした。

どれだけ時が経ったのでしょうか。目をあけると空にはかすかに濃紺の光が漂いはじめ、星々の輝

きがその青衣のベールの陰に一つ、また一つと、かき消されようとしているところでした。僕は襲ってくる寒さに身を震わせました。

長い旅路を終えた旅人のように、ゆっくりと身を起こし、地上の姿に目をやりました。橋桁があり、その上を激しいスピードで車が走り去ってゆきます。枯れ草は風にそよぎ、川の水は絶えることなく小石にぶつかっては、チヨロチヨロ、ピチャピチャ、トポトポ、ガオガオと、さまざまな音を広い河原にまき散らしています。すべてが、疲れきった足を引きずってここに身を横たえたときのままでした。しかし、それを感じる僕というこの存在は、明らかにそのときの僕ではありませんでした。なぜだかすべてが遠く小さくなっていき、自分だけが大きくなっていく気がしたのです。

おかしいな。どうしてだろう。こんなことってありえるのだろうか。僕は思わず自問しながら、視線を自分の身に落としました。そして、思いのままに動く手足をしばらく見つめているうちに大きな発見をしたのです。

そうだ、ここにあるこの肉体は確かに僕のものだ。疑いもなく僕のものだ。これを見ているのも僕だ。そのことを自覚している僕がここにいる。僕の存在。僕だけの存在。何物からも独立し、すべての呪縛から自由に解放された僕という存在がここにある。これだけは絶対に疑いようのないたしかなことだ。万物はすべてこの僕という存在が認識するところから出発したように見えるではないか。この絶対にして偉大なる自己の存在よ。

これは僕にとって大発見でした。まるで天と地が逆転し、無限がゼロに、始めが終わりに、内が外に、空間が一点に、一気に転換したような驚きでした。

こう書きますと、カントのコペルニクス的転回やデカルトの一軒家の体験を思い起こされるかもしれませんが、僕は実は唯物論者です。認識以前の客体の存在を当然のこととして認めますし、神の存在は、いかに努力してみても究極のところ信じる事ができません。

認識を超越して存在する客体に、ある一定の基準で価値を付与するものが理性による認識であり、その認識は、主体が自身を確認し、その絶対的存在を確認することによって初めて根拠を持つものであるということに、そのとき思い当たったのだと思います。

僕はあるとき魚の化石を見ました。今にも石から飛び出してきそうな生々しいやつでした。そのとき僕は、遠い過去に生存したであろうその魚に価値（魚にとっては「生きがい」）が、果たしてあったのだろうかと考えずにはいられませんでした。そして、この魚は僕によって見出され認識されたのだから、わずかながらも価値を持ったのだ、しかし、同時代に生きてであろう他の無数の魚たちは、理性によるいっさいの認識を受けないまま、無為に生きて死んでいったのだ。神の絶対理性を信ずる人にとっては、こうした論理は全く意味をなさないものですが、僕にはこう考えるより他に道はありませんでした。

「存在をいっさい認識されず、価値をいっさい付与されることなく、ただ生きて死ぬ」  
何とむごいことでしょう。

僕はそのまますと草原に腰を下ろして、朝雲が真紅に染まるまで空を見上げていました。生まれ変わった自分を心ゆくまで実感しながら。そして、それまで自信なく弱々しく歩んできた自分の道を哀れみをもって振り返りながら。そして更に、これからたどる我が道の、純粹な極限に到る道程を思い描き、あこがれながら。

自己が自己に絶対の価値を付与した瞬間、それは無に帰しても悔いのないものとなるのです。

その後の経緯はもはや無意味であり、記憶からも抜け落ちていきます。気づいたときには神戸の病院のベッドに横たわり、母から転校を強要されているところでした。

「お母さんは気が狂いそうでしたよ。幸い学校には知られずにすんでよかったのですがね」

「私にはあなたの考えることがさっぱりわからないわ。恐くてとても外には出せません」

「今度あんなことになれば、あなた本当に死んでしまいますよ」

そんな声が途切れ途切れに風のように流れてきました。僕は母の唇を見つめているばかり。母の言うまま、なすままに、新学期から地元の中学に転校することになったのです。

母は僕の命の途絶を心配するよりも、そのことによる体面の悪さを心配しているようでした。父は僕の前では無関心を装い、そのくせ僕のいないところでは口うるさく母を責めていたのです。なすべき方策を少しも実行できない小心を母への小言によってまぎらわし、同時に、感情にまかせて一気に転校という大手術を施した母の性急な行動力に、ねたみを含んだ苛立ちをさえ覚えていたのです。

父と母には、その前もその後も、互いを許容し合うことがないための、取るに足らない小さなさかいが絶えませんでした。人間には、相手の気持ちを事前に察知して、それに逆らわないよう言葉や態度を選ぶ人と、自己の感情や思いを何のためにもなく吐き出す人の、二つのタイプがあるようですが、母は典型的な後者、父は本来は前者でありながら母の前でだけは後者になるのです。

僕はすでに、学校がどうであれ、父や母がどういう人であれ、そのようなこととは縁のない隔絶した世界に住んでいたのです。彼らのことを認めはするけど、そこにさしたる価値は付与しなかったのです。自分が大いなる価値を与えるもののみ囲まれて生きよう、そこにこそ純粋な自己の存在意義があるのだから。

大いなる価値、それを付与すべき対象。僕のその後の人生は、それを見出す努力にあったと言っているでしょう。

.....

手紙はまだまだ続くが、途中を割愛する。その間には、物欲にのみ生きていさかいが絶えず、精神的ぬくもりに欠ける家庭生活から、彼が徐々に疎外されていった過程。転校後の高校時代の諸体験（片思い、価値あるものの発見を期した家出、二度目の自殺未遂等）が描かれている。最後の数枚に入ることにする。

.....

長々と僕の天路歷程を述べてきましたが、先生はきつと、馬鹿な奴よと笑っておられることでしょう。いやいや先生のことだから、僕のこうした不健全な生きざまに、共感こそ抱かないまでも、無言で笑みを含んだ頷きを返して下さるかもしれません。

僕は今、京都北山の雪深い山中にいます。長かったこれまでの旅路の骨休めです。

母には、受験勉強の最後の仕上げに出かけると言って、出てきました。学校には母から適当に言いつくろってこれていることでしょう。民家風の宿に泊まっています。これからのことは考えていません。もちろん大学は受けません。世間体を気にかけて、自分の満足を得ることにのみ狂奔し、僕の自由に足かせをはめ続けてきた母への、これが最後の返答です。

母は本当はいい人です。ただ、人間の幸せが何であるかを知らないだけです。視野が狭いのです。時を超え、空間を超えて、一個の人間の幸せ（生きた証し）は普遍的価値にまで昇華されるべきも

のであることに彼女は気づいていないのです。いい大学、いい就職、金もうけ……。これらのどこに普遍的価値があるのでしょうか。

人間らしさ、個性、欲望。これはなかなか魅力的です。しかし、広い時空間の中で独立した存在であり続ける一人の人間の尊厳を思うとき、それではまだ普遍的価値というには何かが足りません。僕はもう、あくせくと理想を追い求めることはやめようと思います。神経を張りつめすぎて、くたびれました。逃避だぞと、脳髓の奥から厳しい声が聞こえてきますが、しばらくはのんびりするつもりです。

ここに来て三日が経ちました。家のことも学校のことも、すべてが遠い過去に埋没したように思われます。解放されたこの自由の感触よ。部屋窓からは純白に輝く山々が見渡せます。太陽のじりじりと焼ける音が聞こえてきそうな静けさです。

僕からすべての汚物が流れ去ってゆくのが感じます。

父も母もいつもと変わらぬ生活をしていることでしょうか。

学校は今ごろ、放課後のざわめきの中にあるのでしょうか。

南極のペンギンは魚を求めて海に潜ったことでしょうか。

太陽をめぐる彗星は暗黒の空間で孤独の旅を続けているのでしょうか。

宇宙の涯では、一つの恒星が生涯を終え、そこに貼りついていた数億年にわたる高度な文明を夢のようにはかなくかき消したのではないのでしょうか。

僕は今、それらすべてに価値あれと願ってやみません。汚れを取り払った僕は、純粹にあらゆる物事に価値を付与します。そして、その価値あるものに囲まれて、僕は僕の自由な道を歩もうと思っています。

そうです、長く探し求めてきたものは、今のこの心境にあるのかもしれない。すべてを許し、あらゆる存在に価値を認め、そしてそれらが織りなす穏やかな光の中で、自己の生きる道を創造してゆくこと。父と母の怒りっぽいけれど人のよい小市民的な生活をも、そのまま認めようと思いません。僕は僕で何者にも支配されずに生きてゆけばよいのです。神経を昂ぶらせて、あらゆる対象に普遍的価値の物指しを押しつける必要はないのです。自己の存在を確信し、その存在に固有の必然を無理なくたどって行けばよいのです。おだやかで明るい雪の光が、それを教えてくれているようです。

今朝、雪の山道を散歩していて、枯れ残った紅葉の最後の一片が白銀の世界にゆらゆらとした軌道を描いて舞い落ちるのを目にしました。同封した紅葉がそれです。僕の存在の証しと思ってお納め下さい。

一九八一年十二月××日

北山、雪の里より

### ■河上肇の爪の垢

(一九八九年三月、「クラスだより」より)

(一)

大学時代に私が所属していたサークルの一年先輩に、経済学部のT氏がいた。そのころ丁氏は三

回生、私は二回生だった。

T氏は年中下駄ばきだった。われわれのたまり場である西部構内のサークルボックスに、乾いた下駄の音を廊下の端からカツカツ響かせながら現れるのが常であった。T氏が廊下に足を踏み入れた瞬間、われわれの耳は彼の到来を察知して、それぞれに熱中している仕事を持ちながら、張りつめたアンテナのように、見えざる標的を意識の内面で追いかけているのだった。

音が止むと、ドアが開く。ある者は読みかけていた本から目を難し、今はじめて気づいたかのごとく、現れたT氏の視線に視線を絡ませる。またある者は、ノートに向かって青春の思いを綴っていた鉛筆を指先にダラリと下げて、放心したように天井を見る。それが昂った彼のT氏への挨拶である。辞書を引き引き語学の予習をやっていた者、ベトナム戦争の戦況を新聞に追い、朱線を入れながら、我がことのように興奮していた者、東京から講師を呼んで開くことになっていた講演会の案内パンフレットを作っていた者、……。

皆それぞれに、意識を開かれたドアに集中させる。何かを期待する幾つもの熱線が一斉にT氏の口元に焦点を結ぶ。

T氏は気が向いたときにしかたまり場に姿を見せない。そのことが、とっつきにくい疎遠な感じをわれわれに与えている反面、遠くて高い存在、われわれの手の届かない所で高邁な精神のみがなしうる仕事に従事している者、そういう印象をわれわれに植えつけてもいた。事実、T氏が姿を見せるときには、いつも何かしら新しい情報をわれわれにもたらずのだった。

小振りながらすつきりと整った目鼻立ち、見据えられるとろけてしまいうような柔らかく潤んだ目の光、何をしゃべっても大きくは開かず横一文字に軽く結ばれている唇。この道具立てだけでも、我々を信頼の泉にひたすのに十分だった。その上、口を開くと、吟味された言葉がゆっくりとあふれるように流れ出て、世のいかなる暗部にも明晰な光が投げかけられる。

私はすっかりT氏の虜になっていた。

その日、T氏は、われわれと交流のある東京の学生が、ある文学賞をとったことを告げ、ひとしきりその話の花を咲かせた。そして、われわれの仕事の計画を尋ね、必要なアドバイスを与え、最後は雑談になった。ところが、ひょんなことから、哲学論争に火がついた。論争の相手は、理学部三回生のF氏。私たち二回生はもっぱら聞き役であった。

テーマは、古くて新しい人間の意志の自由の問題だった。カント、ヘーゲル、シェリング、エンゲルスなど、多くの哲学者の思索の断片が飛び交った後に、F氏は、

「やっぱり意志の自由は根源的には物理法則の支配下に完全に抑圧されていると考えざるを得んだろう。人間による科学の発展は、自由の否定の証明というパラドックスに陥る宿命をもつてるんだ」

と言い、T氏は、

「物理法則、化学法則、生物法則の三段階は、単なる量の違いではなくて、根本には質の相違があるんだよ。人間の行動の自由は化学、生物法則に由来していて、物理法則の支配を脱しているよ」と反論する。

そうしたやりとりがしばらく続いた後、F氏がT氏に

「Tの考えは、初期河上肇じゃないか」

と言ったのである。河上肇！ 名前は知っていた。だが、まだ読んでいなかった。二人の見解の

相違を解く重要なキーワードとして、学生の思考と行動の奥底を支配しているらしき神秘の大王「カワカミハジメ」なる名前を、私は記憶の一ページに「注目せよ」の赤丸とともに、書き込んだ。

「要するにどっちつかずで不徹底なんだよ。真理に潔く身をさらすことができず、いつまでもブルジョワ的因習の垢をしょいこんでいるんだ。気持ちだけは前方を見て、腕を必死に差し出しているけど、いつこうに泥から腰が這い上がらない。そんなところだな」

F氏は今、水辺の微生物の研究に没頭している。はたして当時の会話を記憶しているのかどうか。二十年を経た今日、余暇は年甲斐もなくハードロックを聴いて過ごしているという。独身である。

T氏は諭すような口調で言う。

「Fよ、あまり機械的に物事を考えない方がいいぜ。量子物理の世界に不確定性が動かしがたい原理として内在していることは、Fの方がよく知ってるじゃないか。素粒子とマクロな物質との相違は、もはや何倍という量の差としてではなく、はっきりした行動様式の差として見えて来るはずのものなんだ。構成要素の素粒子が、いくら非人間的な、ある種の必然と偶然のもとに動いているとしても、その偶然というのが大事なんだけどね、その上にまったく独立の行動様式を立てることは、どんな場合でも可能なんだ。完全な物理法則に則った電波の基本技術と、それに乗って送られる情報の多様性を見れば、そのことは明らかさ」

「Tの考えによれば、一般にいかなる法則の上にも、それと独立な新たな法則を積み上げることができるということになるではないか。精神作用を大脳生理から独立させ、神格化しようとする、まやかしの発想だよ。もつと言えば、宇宙法則の上に絶対的な神の権威を認めようとする立場ともなる」

F氏は一直線な唯物論者であった。T氏は言う。

「マルクス主義がインテリの間に好奇の目で迎えられた大正デモクラシーの時期に、乗り遅れまいとわれもわれもと皆がそちらに流れて行く中で、そして、後で見ればそれが生活に根ざさない頭だけの観念的転換であった中で、紆余曲折を経つつも独力で実にゆっくりとマルクスに近づいた河上肇を、Fは生ぬるいと言うのだろう。いつまでもブルジョワの尻尾をぶら下げていると言うのだろう。そして、僕の説をも、神の存在を容認する可能性があるという、ただそれだけの理由で、ブルジョワの尻尾を持つと言いたいのだろうか。気がつかないだろうが、Fの考えこそ、現実を見るに観念をもってするプチブル思想なんだよ」

空が光を失い、星空に変わり始めていた。

「まあいいさ」

二人は口調を緩め、

「メシ食いに行こう」

誰かの言ったこの言葉によって、いつものものにこやかな顔に戻ったのだった。

## (二)

六月の京都は、盆地特有の逃れようのない暑さに呑みこまれようとしていた。

私はひび割れた窓に映る自分の姿を透して、薄闇がひたひたと浸透し始めていることを、二人の論争の隙々に不明瞭な意識で感じとっていたのだが、空腹を抱えてサークルボックスを出てみると、外はまだ意外にも明るい黄昏の中にあった。

砂利が敷きつめられた西部構内には、学生達のいくつものシルエツトが、淡い光とともに行き交っていた。淀んだ暑気にゆらゆら揺れる影となって……。

私たちはザクザクと砂利を踏みながら西部構内を横切った。門を出てふと見上げると、宵の明星がたそがれの空に白い輝点となって浮かび出ようとしているところだった。

「あっ」

私は声にならない声を上げた。子供のころ、遊び終えて見上げた夕空に、

「一番星、二番星」

と星の探しっこをした違い日が、突如思い出されたのである。何に煩わされることもなく無心に星と一体になれたあのころ。久しく星を探すことから遠ざかっていたなと気づかされた。大切な何かを失っていたように思われた。

東大路の歩道の敷石をひとつ飛ばしに歩きながら、私たちは百万遍に向かった。

すると突然、反対側の歩道からこちらに向かって叫ぶ声がした。

「おーい、T」

薄闇の中に白いシャツが浮き上がり、手が振られている。

「T、どうしてる」

もう一度声が響いた。T氏はチラッと目をやった。後ろめたさを秘めた戸惑いが、T氏を一瞬立ち止まらせたように思われた。そしてその後、

「失敬、行くよ」

頼りなくそう言い残すと、東大路を横切っていった。呼びかけた相手とともに、石垣の隙から本部構内に、その姿は吸い込まれるように消えていた。

「あいつはおれらの前ではかっこぶってるけど、経済の連中の間では無責任で通っているらしいぜ」

F氏が思い出したようにそんなことを言った。

百万遍の信号を渡ると、角に寿司屋があった。寿司屋とは言うが、店の半分は洋食店になっていて、学生向けの定食屋でもある。私達は揃って暖簾をくぐった。夕食で賑わう刻限にはまだ少し早いのか、店内は五分ほどの入りで、ちょうど私たちの人数に等しい六人掛けのテーブルが空いていた。

「おやじさん、今日はどうしたんだい。冷房が切れてるじゃないか。汗をかきかき寿司食わせる気かい。客が逃げるよ」

席に着くなり雨宮が言った。雨宮は浅草の商家の息子で一回生。浪人していて年は私と同じだった。

「そうだよ、にぎってる平ちゃんのことも考えてやりなよ。年端もゆかない子供を使ってあくどい商売やってるだからな、おやじさんは」

そう言ったのは山田である。山田は丹後地方の農家の出で、二回生。私とは妙にウマが合った。

他の者が皆定食にした中で、私と山田は

「今日は寿司にしよう」

と、カウンターに腰掛けた。平ちゃんと呼ばれた中学卒の見習い寿司職人が茶を出してくれた。平ちゃんはこの店の主人の甥で、中学時代にひどい登校拒否になり、親や学校をさんざん手こず

らせたという。

「みなをやつてることが何やしらんが俺とは違う世界のこのように思えてきてな。それで学校に行けんようになったんや。ほかの者がやつてるような勉強はやりとうなかった。俺に合うた勉強がほかにあるような気はしてたんや。それでな、畑をやったり、牛を飼うたりしながら勉強する高校があるちゅうのを聞いて、そこに入ろうと思うたんや。けどおやじが、そんなところに入るくらいなら、学校なんか行かんでええ言うて、受けさせてくれなんだんや」

平ちゃんはいつか私にそんなことを言っただけがなかった。

平ちゃんの明るさは持ち前のものだった。それはまた、悩み抜いた経験をもつ者のみがつ、しかもそれをいかなる手段によってであれくぐり抜けることに成功した者のみがつ、ふっ切れた明るさであった。解放された明るさであった。

皿を洗う。茶を入れる。釜の飯を寿司桶に移し、酢を入れてよく混ぜる。まだ未熟ではあるが、真剣な目付きが仕事を楽しんでいた。目の前でなされているこうした作業を眺めていると、何だか私のほうが気恥ずかしくなってくる。

中学高校時代を何の疑問を感じることもなく通過して、ここにこうして寿司を食う自分。それと思うと、平ちゃんが得たはずの何か大切なものを、自分は得そこなっている気がして、言いようのない虚しさが込み上げて来るのだった。

「どうかしたんか」

前方を見詰めたまま黙りこんでしまった私に山田が心配そうに声をかけてきた。

「いや、どうということはないけど、昔のことをちょっと思い出してたんだけだ」

実を言うと、私にも高校時代、自分という存在が破壊されてしまうのではないかと思うほどのことがあった。頭が万力で締めつけられるような感覚だった。

いや、ちょっと違う。自分が無になってしまい、何も考えられなくなったのだった。受験を目前に控えた高三の冬休みであった。誰にも言わず、親にすら秘めてきた経験であって、普段は思い出すこともなかったのだが、どういうわけか、今はこれが唯一、自分が人に誇れる経験のように思われてきたのだった。

「平ちゃんを見てみると、毎日のんきに暮らしている自分が情けなくなってきたね。人生の指針を自分で立てることもなしに、ただ川の勢いに流されるまま、ここまで来てしもうた気がするんだ。こんなことでいいのかと思えてくるんだよ。だけどね、実を言うたら、一度だけ、俺にも人生の転機が訪れたことがあるんだ。小さいことだけど、重大な転機になったんだ、それがね」

山田は寿司をつまみながら顔をこちらに向けた。仲間の間では深刻さから最も縁の遠い呑気者で通っている（と自覚はしないが、人から言われることの多い）私は、顔色を変えずに突き出された山田の顔に、ここで一発深みのあるところを見せつけておいてやろうという気持ちになった。私はポツリポツリと話し始めた。

受験前の経験とはこういうことである。高校三年の冬休み、私は最後の追い込みにと、参考書と問題集を机の上に並べ、受験日までの詳細な計画を立てた。そして、さあ取りかかろうとした瞬間、どの歯車がどう狂ったのか、さっぱりエンジンのかからない自分が腑抜けのように横たわっているのに気がついた。頭の芯に黒い煤が塗りたくられている感じだった。あまりに突然のエンストであった。



疲れてるのかな、しばらくはそう思って休んでみた。一時間ばかり天井を見上げてぼんやりした後、もうよかろうと机に向かってみた。だが、やはり机に何かうと、途端に、何もかもがぼやけてしまつて、意欲が見る間に消え失せていく。

スランプ。そんな言葉も浮かんできた。これは誰にでもあることだ、時が解決してくれるのを待つしかないか。はじめはその程度に、安易に考えていた。親に見られて「どうしたの」なんて言われるのもいやだから、何をする気も起こらないまま、見かけだけは勉強しているかのごとく椅子に座ってぼんやりしていた。

問題集を開いて解こうとしてみた。だけど、なんということだろう。問題の文章がまったく読めないのだった。そこに何が書かれているのか、まったく理解することができない。文字が渦をなして回転し、どうにもとらえることができないのである。

時をおいて、また問題集を開くが、同じだった。数学だろうが、英語だろうが、国語だろうが、物理だろうが、化学だろうが、世界史だろうが、開いたとたん、問題の文字が逃げていく。そこに何が書かれているのか、さっぱりわからない。

これは大変なことになった。深刻な事態によく気づいて、失神しそうになってきた。ノイローゼというものだろうか。神経のどこかがいらだっている。心の中心を失った感じである。中心を求めて模索すると、芯が痛んできて、黒い塊が道をふさいでいるのがわかる。塊はどんどん大きくなっていく。戻ることも進むこともできなくなってしまった。身動きができなくなった。頭が死んだ、死んでしまった、私は本気でそう思った。

だが、不思議なことに気がついた。受験勉強に関わらない本なら読めるのである。新聞は読める。小説も読める。脳がすっかり破壊されているのではないようだ。読めないのは勉強の本、つまり問題集とか参考書とか教科書とか、そういう本だけだ。それらを開くと、いきなり文字がゆらゆら揺れて回転し、まったくとらえることができなくなってしまふ。

これでは受験勉強はできっこない。受験そのものもできないだろう。前途はピシヤツと閉ざされてしまった。そんなことを考え始めて何日か経ったころ、窓から外を見ると、庭に小春日和の穏やかな陽光が降り注いでいた。私は何も考えず、外に出た。無意識に自転車に乗り、無意識にペダルを踏んだ。どこをどう走ったのかはわからないけど、気がつくと、いつもよく来る書店の書棚の前に立っていた。

目の前は岩波新書のコーナーだった。そして、たまたま目に入ったのは「彼の歩んだ道」という本だった。何かに導かれるようにその本を手を取った。有無を言わせぬ力がその本を持ってレジに向かわせた。不思議なめぐり逢いであった。

元京大教授で、当時立命館大学の総長をしていた末川博氏の自伝であった。帰ると直ちに読み始めた。取り憑かれたようにぐんぐん読んだ。日差しが心地よいので、庭に縁台を出し、その上にひっくり返つて夢中になって読んだ。直射日光の下で読むと目に悪いよと、母に注意されたが、構わず読んだ。

受験生であるという意識はすっかり消えていた。頭に引つかかっていた黒い塊も姿を見せなかった。末川氏と私とが一对一で向き合った幻想の時間が流れたのだった。氏の京都での学生生活が私を完全に魅了したのであった。「京大反戦自由の伝統」というものに、かぎりない憧れを覚えた。およそ味わったことのない、舞い昇つたような気分であった。私の全存在が末川氏の学生時代に置換

され、そこから広がる幻の時空が、遠く遊離したところに広大な領地を有して展開されていたのであった。

京都に行こう。京大に入ろう。読み終えた瞬間からそれが私の至上命題となった。そこにしか私の生きる道はないという、切羽詰まった目標であり、憧れであった。

もしもその日私が書店に行かなかったなら、そして末川氏の著書に出会わなかったなら、その後の私はどれだけ違った姿をしていたことだろう。氏の著書を手に取ったのはまったくの偶然だった。だけど、その偶然が私の人生を決定づけたのだった。

歯車の狂いは私の未来を左右する大きな危機と言ってよかった。至上命題が設定されたとはいえ、もやもやと湧き上ってくる黒い塊は、消滅までになお数日を要したのであった。その間はやはり勉強が手につかず、一日の大半を読書で過ごすしかなかった。

「末川さんが命の恩人というわけか」

山田はポツリと言った。

「だから、末川さんの講演は京都に来てからもう三回も聞いたよ。あのニコニコとした丸っこい顔がまるで自分にだけ語りかけてくれているような気がしてね」

「向こうはお前のことなんか何も知らないのにな」

「そう、そこがいいんだよ。だから太陽であり続けるんだ。誰にも見えない強い放射が俺から末川さんに投げかけられている。末川さんはその放射で照り輝いている。勿論それは俺にしか見えない輝きだけだね。そして、末川さんの言葉はあまねく万人に分ち与えられているように見えて、その実、真の意味が通じているのは俺だけなんだ。俺と末川さんをつなぐ暗号のようなものさ。楽しいじゃないか。俺の放射が末川さんに察知されてしまったら、この現実露となって消えてしまい、非現実になってしまう」

「それは現実じゃなくて、夢想じゃないか。現実と夢想が反転しているよ。それにしても、それだけ熱心なのなら一度会ってもらったらどうだ」

山田は軽い気持ちで言ったのだった。私も軽い気持ちで応えた。

「だめだね。人にはしまっておくことにこそ値打ちのある希望というものがあるものでね。これはお前だから話したわけだが、もう誰にも話さないよ。もちろん末川さんに直接会って話すなんて論外だよ」

ところが、こう言ったとき、私の心の内には重大な陰りが生じていた。

これまでの私の人生が坦々とした平凡な道ではなかったことを、そして、挫折の中で人生の深みに触れえたことを、半ば英雄譚のように誇らしげに語ろうとしたのが、山田にこの話をした真実の動機であった。そしてその意味では一種の成功を見たように思われた。山田の口から感嘆の声を聞くことはなかったけれど、山田は普段から感情をあらわに表に出す方ではない。それをよく知っていたので、内心に少しでも驚嘆の気持ちを植えつけることができれば、そしてそれは確かに山田の言葉の響きから感じとることができたので、その点では事態は私の予想どおりに進展していたのであった。

ところが、その満足に一点亀裂が入っていることに私ははつきり勘づいていた。

与えられた勉強を坦々と消化できる理解力を有する者にとっては、人にまさるわずかの忍耐と人並みに幸運を呼ぶ力がありさえすれば、大学に合格することはさして困難なことではない。一般

に受験勉強が悲壯感をともなった苦闘と映るのは、理解力、忍耐力、幸運のいずれかが不完全であるか、または長い準備期間をのうのとやり過ぎしておきながら、直前になって現実の力の限界を越えようとしてもがくことによるのである。

しかも、見逃せないのは、この悲壯な苦闘は、選ばれた者の特権としての性格をすでに持っているものであって、戦う前からその選に漏れた者に内在する悲哀は、そこにおいては全く圏外の無関心事であるという点である。故に、このようにしてつかみ取られた成功には、それがいかなる苦闘を経ていようと、あるいは苦闘らしい苦闘を経ていなかろうとも、そこには人生の真の悲しみが付随していかないのだ。受験生活という好環境に身を置くことのできる特権を享樂しつつ、真の意味における人生の何らの苦悩も経ないまま、いかにも苦勞したと言いたげな顔をぶら下けて入学して来る学生がいかに多いことか。

そうした特権を享樂する一般的学生像と私がどれほど相違しているというのか。空白の十日間ほどが過ぎた後では、何ごともなかったように私は平凡な受験生活に戻っていた。京都という地に、遠い原風景に戻るような懐かしさと憧れを抱く受験生となって……。

十日間のブランクを取り戻すべく、歓喜も悲哀も倦怠感も友情も、およそ人間の感情と名のつくすべてを振り払って、入試問題に即応できる人間へと自分を改造することに全力を注いだのだった。

私の弱みの一つはそこにあった。合格するや、人生における一時的昂揚は瞬く間に萎えてしまい、私はたちまちにして沼地を這いずる人間に墮落してしまった。衝かれれば応ずる弁明の言葉を用意してはいたが、苦しい言い逃れにすぎないことは目に見えていた。

真つ昼間から映画館の暗闇の中に時を浪費する日々が続いたのは紛れもない事実であった。抑圧から解放されたという意識だけが、当時の私のすべてであった。末川氏をはじめとするかつての教授や学生達が、時代の重圧の中で身を挺して守り抜いた「京大反戦自由の伝統」と、それに憧れた一、二ヶ月の熱情など、入学してしまえば塵か芥のように吹き飛んでいた。自由の伝統への激しい希求は、精神的中心を喪失して病的状態にあった冬休みの私には、何より大きな支柱となり、中心回帰への原動力となったのであるが、常態に戻り受験戦線に復帰してしまえば、もはや地位を追われた夢想的憧憬に過ぎなくなったのだろうか。

山田はその点にはあえて目をつむっていた。私の目論見があるいは成功したかと一瞬思った際に、同時に亀裂が入っていると勘づいたのはその意味においてであった。入学当初の私が授業にも出ず、映画館に入りびたっていたことを、すでに重々知っている山田が、そのことをあえて問題とせず、「末川さんに会ってもらったらどうだ」と来たのである。これは私にはなんともきつい、嫌みな言葉であった。

山田の言葉は、実は私のもう一つの、半ば忘れかけていた、誰にも触れられたくない、いや自分自身でさえ触れることに恐れのある、秘められた弱みの急所を衝くものでもあったのだった。咄嗟に「人には、しまっておくことにこそ値打ちのある希望というものがあるものさ」などと、真実を外している訳ではないものの、言い逃れに過ぎない脇道に避難した後、山田の言葉によって、記憶の奥底の暗いひそみに思わぬサーチライトの一閃を受け、胸を突く不快な感覚が地下水となって参み出てきたのは、防ぎようのない事実であった。

映画館通いにも飽きてきた一回生の五月、実は、私は一度末川さんを訪ねたのであった。そのときの経験は、その後しばらく私に原罪の意識をもたらすこととなった。

《注》ここで終わって、続きがない。このあと何を書こうとしていたのか、当時の構想はすっかり忘れて思い出せない。「河上肇の爪の垢」というタイトルからすれば、当然末川博からさらに河上肇へと、そしてさらには自分の弱さの自覚へと筆が進むのであろうが、復元することははや不可能だ。未完のまま勘弁願うことにする。

### ■散る花・咲く花

(一九八九四年四月、「クラスだより」より)

星野富弘さんという人、知っていますか。大学時代に体操選手であった彼は、卒業後中学校の体育教師になったのですが、その直後、生徒への指導中に鉄棒から落下して脊髄を打ち、一瞬にして手足を自分の制御下から奪われたのでした。幸いにして首から上は生き残ったため、人間としての精神活動に支障はありませんでした。だが考えてみれば、首から下の全身が自分のものでなくなつたまま、精神活動だけを与えられた現実は何んと悲惨で残酷なことでしょう。動物的要素をすべて奪われた、精神だけの人間！

我々は毎日、いかに動物的満足を求め、それらに囲まれて生きていくことか。ほとんどそれなしには人間生活と呼べないほどです。考えてみてください。

しかし星野さんはくじけませんでした。筆を口にくわえて絵や文字を書くことを覚えたのです。ベッドに横たわつたまま母親に筆をくわえさせてもらい、スケッチ帳を支えてもらって書くのです。こうして、多くの美しい絵と素晴らしい詩が生み出されました。動物性という人間を包む殻がつるりと剥けて、中から、人間だけが持つことを許された照り輝く精神の玉が取り出されたように私は感じます。

星野さんは私より二歳年上です。今は長い闘病生活を終えて、自宅療養中です。一人では乗ることも動かすことも出来ないけれど、車椅子を押してもらいながら付近を散歩することができるようになりました。そこからまた、人に感動をもたらす作品が次々と生み出されています。闘病記をはじめ何冊かの詩集や画集を出版し、新聞・雑誌でも活躍しているのです。

その星野さんの絵と詩で綴ったカレンダーが私の部屋を飾っています。三月のカレンダーにはぼつてりと大きな椿の花が描かれていて、

「……今まさに散ろうとしている花 そのとなりでは開きかけたつぼみ……」

との詩が添えられています。

散る花と開く花。人生の究極の真理を象徴しているようですね。いつの世にも、若者がいて、壮年がいて、老人がいます。そしていつの世でも若者は若者なのです。その若者も、やがては大人になり老人になって、いつかはその生を終えるのですが、それでもやはり若者は若者だったのです。

今現在若者である君達は、さまざまな障壁にぶつかっては悩み、恋もし、失恋もして大人になっていくことでしょう。そしてその一つ一つの経験が新鮮で潤っているのです。

「自分だけが初めて体験する恋のときめき」

「この世に二つとない喜び」

若者は常にこう感じるのです。だから少々傲慢であり、危険でもあります。だけどこれが若者の特権であり、この感覚がなくなつたときが若者時代の終焉なのです。

若者がこのように自分だけの初めての経験だと信じて疑わない恋のときめきも、実は、太古の昔から若者という若者がすべて体験して来たありふれた現象に過ぎないのです。じいさんもばあさんも、かつてそういう道をたどって来ているのです。私はこのことを考えるとき、なんとも言えぬ不思議な気持ちになり、虚しさを覚えたこともありました。私という人間がことさらにこの世に存在しなければならぬ理由をはたしてあるのだろうか。そんな疑問が湧いてきて、虚しくてたまらなくなつたのでした。

だが考えてみれば、決定的なのは、老人にとつてのそれは「かつて」であり、若者にとつてのそれは「いま」であることです。存在の原点はあくまで「いま」であり、「かつて」は、すでに消滅した時空に属しているのです。消滅と生成の無限の繰り返しの中で、たまたま一つのサイクルに自分が巡り合わせて乗っているにすぎないのだけれども、だから自分の体験はひよつとするとかつての誰かの体験にそっくり重なっていて、その繰り返しにすぎないのかもしれないけれども、それでもやはり「いま」であるが故に新鮮でみずみずしいことに疑いはないわけです。唯一無二の価値ある体験であるのもたしかなのです。自信に溢れた若者らしい生き方こそが、新しい何かを創造する力になることでしょう。

私はもう散る花の部類に数えられるのかも知れませんが、すぐそばで開く君達の花に期待したいと思えます。

## ■少女とバラ

(一九八九年九月、「クラスだより」より)

六月の北海道修学旅行では、皆、胸にたくさんの思い出を刻んで帰ってきたことでしょう。君たちの感想文からそのことが明瞭に読み取れます。函館の夜景、有珠山や昭和新山の堆大な光景、洞爺湖や支笏湖の静かなたたずまい、札幌の都市美、ススキノの賑わいなど、敏感な十六歳の感受力ではとても支え切れないほど多くの印象が、全身に焼きつけられたことと想像します。

ただ、このように短期間に雑多に取り込まれた印象というのはすぐには消化し切れないもので、いったんは日々の生活の中に埋もれてしまい、しばらくしてからゆっくりと、咀嚼されたものだけが新たな整合性をもって思い出されてくる。それが普通です。体験した直後の印象というのは、どんな場合でもあまりに新鮮で強烈なものだから、その新鮮さだけに頼った印象になってしまう、本当の意味での正当な評価の対象となりえないのです。冷却期間をおいた後になお燃えているもの、これだけが真にその人の得た印象と言えるのです。

たとえば、詩や随想といった形に旅行の思い出をまとめようとしたとき、旅行直後の強烈な印象に頼って書くと、観光案内的なつまらないものになりがちです。そういう一般的な観光要素をすべて忘れ、自分という一個の人間の目に何が最も強く焼きついたかを冷静に思い起こすところから旅行記は始めなければならないのです。すると、色鮮やかに咲き誇る大輪の菊の花よりも、野辺にひっそりと咲く小さな雑草の方が、はるかに強く詩情をそそるものであったことに気づかされることがあります。

私は数年前、東欧諸国を旅行したのですが、その際、実に多くのものを見、書き尽くせないほどの印象を仕入れて帰ってきました。それから何年か経った今、最も鮮やかに脳裏に焼きついているのは、レニングラードの運河沿いの土手を子犬を連れて跳ねるように駆けて行った一人の少女のうしろ姿です。バスの窓からチラッと見えて、すぐさま忘れてしまった平凡な一情景にすぎないのですが、なぜか今ごろになって、それが特別な意味をもった重要なショットであったかのように、迫真の姿で浮かんでくるのです。何が重要なのか、自分でも分かりません。ただ、

「ああ、人間なんだなあ。生きてるんだなあ。きらめいて生きてるんだなあ」

と、その情景を思い起こすたび、まぶしく少女の躍動を思う、それだけです。これが私にとってはこの上なく大切な宝物になっているのです。

かつて絵の教室に通っていた頃にも、それに似た経験をしました。バラを描いたのですが、対象のバラが生き生きと新鮮なあいだはどうしても自分のイメージに合う絵が描けませんでした。翌週、再び気を取り直してキャンバスに向かいました。前週と同じバラですが、しなびて色あせていました。ああもうダメか、描けないかと思っただけなのに、せっかくだからと、それを相手に描くことにしました。枯れかかったバラが絵の対象になるとは、それまで思ってもいませんでした。すると、横で見ていた先生が、

「この方が前のバラより、うんといいい絵になりそうだよ」

と、思わぬアドバイスをしてくれたのです。半分やけくそで描いていた私は、描くにつれ、ぐんぐん自分のイメージに合ったものが出来てくるのに驚きました。不思議な体験でした。鮮やかな色彩の陰に埋もれていたバラ本来の生命が、枯れかかってはじめて新しい息吹となって噴き出してきた、そんな感じでした。

人間の値打ちも同じです。社会的に華々しく活躍したり、仕事振りが高く評価されたりしている人に、本当に内面の充実が伴っていることはまれかもしれません。盛りにある当の本人は、外に向けての顔作りに夢中ですから、内部にポツカリ空いている空洞に気づくことはありません。それどころか、そのような人は、内部の充実ゆえに外から見た顔に精彩が欠けている人間に対して、その真価を正当に評価することは出来ないのです。優越感をもって哀れみの情を注ぐくらいが関の山でしょう。

しかし、やがて盛りに一筋影が射し始めると、ふとむなしさを覚える瞬間がくるのです。自分がこれまで寄り掛かっていた枠組みが、いかに自己の内部の充実から縁遠い絵空事であったことか。単なる上っ面の衣にすぎなかったことか。その間に内面に目を向けていれば得られたであろういかに多くのものを失ったことか。それに気づいてむなしさを覚えるときが来るのです。

もしもそのとき、生まれ変わったように新しい生き方で前進するなら、ものを見る目にコペルニクス的な転回がもたらされることでしょうか。これまで価値を認めず、自分よりもはるか下位にいるものとして、哀れみの情で見下していた人間が、実は自分には思いも及ばないはるか高みにすでに到達していて、逆に自分を哀れみの情で見下していたことに気づかされたりもするのです。これを知ってからが本当の人間の始まりです。

社会生活を営むことを宿命づけられている我々人間には、国家という大きな集団から始まって身近な小集団に至るまで、集団の指導者、推進者が必要となります。それにはそれなりの能力が要求されるでしょう。しかし、そうした社会的立場が与えるきらびやかな衣裳は、いかに見ばえがよく

でも、人間の価値を決める基準にはならないことも知らないといけません。本当の価値は、枯れたバラと同様に、きらびやかさの裏側に隠れていることが多いのです。

友達をうまく作れないとか、気後れして人前に立つことができないなどと、くよくよ思い悩んでいる生徒をよく見掛けますが、自信をもちなさい。君達こそが内面の充実に向けて跳躍する可能性をもつのですから。孤独な冬の時代こそ自己充実の絶好機なのですから。常に注目を浴び、陽の当たる道を歩むことに慣れきっている人たちからは、その存在すら信じられない、深い自己充実の道が君達を待っているのです。

内面の充実とは何か。それはひと言では言えないし、人それぞれだし、あえてここでは言わないことにします。ただ一つはつきり言えるのは、自分が自ら勝ち得たものでないもろもろの衣裳をすべて脱ぎ捨てた後に、それでも満足をもって残る何物か、それが内面の充実の必要条件だということです。その獲得には努力が必要です。多くを読み、多くを考え抜くことが必要です。自らをむなしくして学ぶ無私の学習欲が必要です。自己を裸にして分解し、大切なものだけをつかみ出す自己客体視の能力が必要です。そして何よりも孤独を愛することが必要です。初代校長の田中先生が

「孤独の味を知らない者には真実は見えない」

と中学生だった私たちに何度も語りかけてくださったのを思い出します（実は私も本校の卒業生です）。今私にもその意味がわかる気がするのです。

我々の思考や行動は、考えてみると、その大方が外部から持ち込まれた習慣や制度に枠づけられたものです。これはもちろん社会生活を営む上での共通の土俵として必要なものではありません。しかし、旅行がややもすると観光メニューの消化に終わるのと似て、人生の本質の部分で生きようとする人にとっては、これは耐えがたい足枷となるのです。レニングラードの少女のように、あるいは萎れたバラのように、人生には思わぬ所に輝く宝石がちりばめられているのです。

世間一般の価値観に寄りかかり、世俗的な成功を夢見、陽の当たる道を歩むことだけに喜びを見いだす人にはなかなか発見されない、そのような宝石が、自己充実の道には点々とちりばめられています。

一度きりの人生です。どこにでもある海辺の砂を袋にどっさり詰めて、その多さを誇って満足するか、苦しい努力と寂しさに耐えることが求められるけれども、きらめく宝石を手にするのがよいのか、よくよく考えてみる必要があるでしょう。

### ■著作権セミナーに参加して

（一九九七年三月、図書館報オアシスに寄稿）

二月中旬の二日間、授業がなくなった高三担任の特権を行使して、「著作権セミナー」なるものに参加させてもらった。私にとっては未知の世界との遭遇であった。

著作権は特許と違い手続きが不要。これをまず私は知らなかった。創作した時点で自動的に権利が発効する。新奇性や有効性の審査もない。創作性が認められるものであれば、直ちにこの権利が付与される。国内的な著作権法のみならず、ベルヌ条約によって万国でこれは認められる。知性に対するすばらしい権利だ。

著作権は売買・譲渡の対象となる。つまり財産権である。

しかし、著作者にはもう一つの権利、著作者人格権というものが与えられる。これは人に貼りついていた権利であって、たとえお金を出して著作権を買い取った場合でも、著作者人格権の侵害は許されない。

この人格権には三種類あって、一つは公表権。著作者が公表してほしくないとさえ、著作権を買い取った側もそれを公表することはできない。第二は、氏名表示権。これも当然だろう。第三は同一性保持権。耳馴れない言葉だが、これは重要である。内容を歪曲したり、一部分だけを切り取ったような使用は許されないということだ。たとえばある論文の文章から、前後の脈絡なしに一部分だけを抜き取ることによって、あたかも主張が一八〇度転換したかのように見せかけることも可能だろうから、考えてみれば当然である。

この話を聞いて、私は猛反省した。先日、高三の私のクラスで「夢」という卒業文集を作ったのだが、ある生徒の文章があまりに長かったので、勝手にその一部を削除してしまった。文集にふさわしくないとと思われる内容や表現を割愛したという言い訳もできるのだが、あとで本人から不満を漏らされた。

「あれでは骨抜きになって、逆に笑い物になっているみたいですよ」

私は彼の卓越した文章力を十分に認めていたので、そのことへの正当な評価を伝えて、その場は収まったのだが、後味の悪い思いをした。そんなことがあってのセミナーである。

「そうか、あれは教師の権威を笠に着た、彼の人格権への侵害だったな」  
その思いを強くした。

著作権隣接権というのものもある。著作物を実演する者に与えられる権利である。たとえば歌手が舞台上で歌ったときのビデオ、録音、写真などに、その権利は適用される。

著作権の侵害は、無断複製という形で生じることが多い。その点に関していつも気になっていたのは、授業で使うために種々の書物をコピーすることである。しかし、これはある意味、心配なく許されていることを、このセミナーで知った。

法的に著作権の及ばない場所と場合があって、教育機関における授業はその一つであるという。本の一部をコピーして生徒数だけ配る、これは無断で許されるという。ただし、問題集の解答をそのまま引き写したり、ましてやそのコピーをホットキス止めして冊子にする、などは許されない。許されるのは、あくまでその本の売れ行きに影響しない範囲での、参考資料としてのコピーである。

コンピューター・プログラムの違法コピーはかなり常態化している。企業や学校でソフトを一本買い、あとはそのコピーですべてのパソコンをまかなうというのは、よくあることだが違法である。見つかって告発され、莫大な違反金を支払われた例も多いという。気をつけないといけない。

インターネットの急速な普及によって、ホームページなどを利用して、誰もが簡単に創作物を発表できるようになった。私も、これまでに作ったソフトや書きためた随筆類を、自分のホームページに載せようかと思っている。著作権の問題は他人事ではない。



## 坊っちゃんだより (一)

以下は、一九九七年春に始めた私のホームページ「坊っちゃんだより」からの抜粋である。日記風エッセーの形をとっている。

### ■濡れそぼって毛が逆巻く犬

(一九九七年五月十四日《水》)

今日の雨にはリズムがある。強弱がある。しとしとだからだらの梅雨の雨じゃない。か細い春雨でもない。激しい夕立でもない。さっと激しく降ったと思うと、さっとやむ。やむと子供たちはもう傘を手放している。だが、安心してるとまたいきなり降ってくる。

いったい誰だ、こんな日に犬を道ばたにくくりつけたままにしているのは。犬は雨の中、

「なんとかして」

とも

「助けて」

とも言えないので、通りかかる人に哀れっぽい視線を送るのみ。身を横にして休むこともできない。立ったまま、いつ果てるかもしれない苦痛に耐え、じっと飼い主が帰るのを待っている。濡れそぼって毛が逆巻いているではないか。

いくら犬好きの私とはいえ、飼い犬であるのは明らかだし、車でそばを通りかかっただけでもあるしで、助けてあげることができない。自分が雨の中に立たされている気がして、哀れで悲しくて泣けてきそうだ。

この春から、高校編入生の一クラスと中学一年の授業をもっている。高校編入生の進度は猛烈に速い。一年間で二年分を終えるのだから大変だ。昨日と今日と明後日の三時間で、数学Aの幾何を終えてしまうことにしている。突風のような授業だ。

大学入試で幾何(特に証明問題)を出題すると、採点官は気が狂うような思いで答案と格闘することになりますヨ。どうか幾何を大上段から出題するような愚は避けて下さい。そんな願いを込めた今日の授業であった。

かつては幾何の証明問題が本当に大学入試で出題されていたころがあった。これを採点するのに大学の先生はどれだけ苦労したことだろう。経験した人でないとわかるまいが、幾何の証明は、他の数学の問題と比べて、採点には比較にならない困難が伴う。私が学内の二百名ほどの生徒を対象に幾何の証明問題を出題したときでさえ、気が狂わんばかりの思いをした。大学入試は量においても質においても、比較にならない労力だろう。

想像しただけでも、フーツと激しくため息が漏れてくる。濡れそぼった犬どころの話ではない。どうか幾何の証明問題だけは出題しないでください。そう願いながら、突風のように素っ飛ばして幾何を終えようとしているのである。

## ■授業は生身の受け答えで成立する

(一九九七年五月十五日《木》)

帰宅後、重信川の土手をジョギング。先日来の雨で川がすっかり様変わりしている。重信川は天井川で、いつもは水は流れていない。伏流水となって地下を流れている。滅多に流れを目にするとはない、石ころだらけの河原がどんと広がっているだけ。私が住む中流域では、これが常態である。

雨が、それも激しい雨が降ったあとだけ、

「これでも私は川なんです」

と誇らしげに水が流れる。台風のような豪雨のあとは、激しい流れが土手を乗り越えんばかりになることもある。一気に様子が変わるのだ。

重信川は昔から、暴れ川として有名だった。何度も大洪水を引き起こしている。あまりの暴れように堪えられず、全住民がそっくり高みに引越した村さえあった。二、三百年も昔の話だ。

今は日常的に治水工事が行われているから、水があふれることはなくなった。

重信川は中流域でも幅が四、五百メートルはある、なかなかの大河だ。河の中に幾筋もの小さな流れがある。その流れが大雨のたびに大きく変わる。ときには、本来の川の流れと直角に水が流れることもある。河の中の川が、河と直角に流れている。滔々と流れている。豪雨の直後だけに見られる信じがたい光景である。

今日の流れは美しかった。水草を呑みこんだたつぷりの水が、さわさわと音を立てて流れている。見ていると、思わず心の奥がキューンと鳴る。

昨日の幾何の時間、授業の最後の最後に、

「これは大事な定理だけど、証明は簡単だから省略する」

とさりげなく流したものを、今朝、一人の生徒から質問された。猛烈に突っ走った授業の最後の最後、それもチャイムが鳴ったあとで付け足しのように話した内容だった。誰の頭にも引っかかりはしないと書いていたのに、

「先生は簡単に証明できると言われたけど、後でいくら考えてもわかりませんでした」と言う。

こういう質問があると、ぱっとまぶしい光が当たったように嬉しくなってしまう。その生徒は朝早く来て、職員室の前で、私に来るのを待っていたのだ。それを知るとなおいっそう嬉しくなる。嬉しいというより、かわいくてたまらなくなる。

実を言うと、私もその証明を本気で考えてはいなかった。ただ直感で、証明は簡単だろうと思っただけだった。質問されてから、直感が告げていたよりもはるかに難しいと気がついた。うっと一瞬つまってしまった。しかし、何とかその場で妙案を発見した。いわば火事場の馬鹿力というやつだった。

思いついてしまえば、なんの苦労もなかったかのように、それをわかりやすく整理するのは簡単だ。明日の授業でみんなに説明しようと思っている。ただし、苦労の道筋も、つまり、どうして苦労したのかもわかるように説明しないと意味がない。

授業というのは、こうした生身の受け答えを通して成長し、育っていくものだ。芝居のように台

本通りに進むものではない。それが楽しくもあり、難しくもあるところだ。

## ■同和教育に変化のきざし

(一九九七年五月十六日《金》)

放課後、教師を対象にした同和講習会があった。これまでと様子が少し違ってきたかなという印象を受けた。

背後には、同和問題が以前ほど深刻でなくなってきたという社会的現実があるようだ。結婚相手の七割が地区外の人、との報告もあった。なし崩しにこの問題は解消されつつあるのだろうか。本当だろうか。

ともあれ、こうした事情があるからか、部落差別の起源についての見解も変わりつつあるようだ。これまで、学校教育における公式見解は、いわゆる「政治起源説」(農工商を支配するために、徳川幕府が意図的にそれよりも下層の階級を作ったとする説)だった。それが見直されつつあるという。報告する担当者の説明を聞いてみると、

「これまでの説は間違っていました、今後はこうです」

と、こんな調子だ。その正否は別として、お上の見解に揺れ動く現場の主体性のなさが哀れでない。敗戦を境に学校教育が一八〇度転換したときに似ているといえれば似ている。あのときはあれでよかったし、それしか考えられず、当然だっただろうが……。

それにしても、個人の判断を超えたどこか遠くから「これが正しいので、こう考えなさい」と半強制の声が聞こえてくるのはやはり悲しい。事実関係とは別の次元で、歴史への評価が半強制されるのは、何と言っても悲しいことだ。各人が自分で考え、自分で判断すべき問題ではないか。

今日の同和講習会で知ったのは、同和教育が従来のような狭い意味での「同和問題」にテーマを限定せず、もっと広い「人権教育」の立場に立とうとする姿勢が見えてきたことだ。本当にそうならば私は大賛成。本当なのかどうか、しばらくは様子見た。

## ■教育に王道も常道もない

(一九九七年五月十七日《土》)

久しぶりに明るい空だ。照りつける真夏の青空よりも明るい。どうやら黄砂だ。山々が乳色に霞み、きらきらしている。太陽系創生期の星雲ガスを見ているようだ。

中一生にとっては初めての中間試験が来週から始まる。今日の授業は演習。みんなよく勉強してきた。試験の前の緊張感がみなぎっている。授業が済んでも質問が絶えず、なかなか解放してもらえない。乗り遅れた生徒とのコントラストがますます顕著だ。

演習での説明のとき、

「答えだけじゃダメだぞ。理由を書くんだぞ」

と何度も言うが、中一生にはこれがなかなか通じない。遠い彼岸の話に思えるらしい。顔つきを見てみるとよくわかる。十二歳の少年に論理性を求めるのは、無理な話なのか。

無理とわかっていても、

「本当の答案はこう書くんだ」

と、生徒たちが黒板に書いた不完全な答案を一つ一つ添削しながら、書き足していく。鉛筆を動かしてもせず、ぼんやり眺めているだけの生徒を見つけると、

「何やってる。赤鉛筆で書き写しておくんだ」

などと、虚しい雄叫び上げたりもする。それでもいつこう鉛筆を持たない子がいると、叫ぶ気力はもう起こらない。本当に理解力のある子なら、いちいち書き写さなくても、話を聞き、黒板を眺めているだけですべてがわかる。それを知っているから、叫ぶ気力も湧かなくなってくる。

教育には王道も常道もありはしない。その都度、状況に応じて思いつくすべての手を打ってみるだけ。彼らの気分が乗ってきたなと思ったときには少々無理気味にでも突っ走り、あえいできたなと思えば、立ち止まって反芻したり、寄り道をしたり。

長年教師をやっていると、こうした呼吸もわずかながらつかめてきた。

### ■教職員囲碁大会

(一九九七年五月十九日《月》)

今日から中間試験。試験中には、恒例の教職員囲碁大会がある。初戦の相手は、化学のS先生。彼は初段だから五子。少しずつ寄りついて、勝ちが見えてきたところで、最後はしのぎ勝負になった。S氏が間違えずに打っていたら、ひよっとするとこちらの大石に生きがなかったのかもしれない。難しい手どころだった。だが、実戦はS氏が大ポカをして、あっけなく終わってしまった。

こういう場合、S氏はたいはい碁盤を蹴飛ばして立ち上がるのが倣いである。今日もそうするかと見ていると、彼は投了と同時に一言の感想もなく、無言で静かに石を片づけ始めた。そして最後に

「アホらし！」

の一言を残して、立ち去って行った。隣で打っていた先生が

「怒らせてしまうたぞ」

と言う。たしかに、一石一石に悔しさを塗り込めるような丁寧な石の片づけようであった。いつその一つが私めがけて飛んできてもおかしくない状況だった。

### ■自責の思いで苦い茶を飲む

(一九九七年五月二十日《火》)

試験二日目。今日は、私の中一幾何の試験。

朝、試験監督の先生の机上に問題用紙を配り終えたとき、中一生が一人職員室にやってきて聞いた。

「今日の試験で分度器は必要ですか」

私は何を思ったか、彼をいきなり叱りつけてしまった。

「何度も言ってるじゃないか。使うのは定規とコンパスだけ。分度器はいらない！」

「すみません」

と頭を下げて帰ってゆく彼の後ろ姿を見つめながら、悲しくなった。何とばかり物言いをしてしまったことか。自責の思いで苦い茶を飲む。

教職員囲碁大会。二回戦の相手は音楽のK先生。五段。手合いは彼の「先」である。今日の碁は危ない場面がなかった。うまく打てた。結果は九目勝ち。

頭はまだ風邪でぼんやりしているが、昨日ほどじゃない。集中力が戻ってきた。でも声を出すのが辛い。試験中のため、授業がないのが幸いだ。

最年長の犬のメリーに食欲がない。寝たきりだ。熱もあるらしい。元気に走り回っていた頃がなつかしい。時の流れはなんと無情。がんばれメリー。

### ■富士のシルエット

(一九九七年五月二十一日《水》)

今日は試験の中休み。生徒たちにとっては自宅学習日。教師にとっては骨休めの日。土曜日が休日でない分、雀の涙のような今日のような日が学校にはあるのだ。

試験の採点を抱えてはいるが、なかなかその気になれず、終日原稿書き。締め切りと義務感に追われた仕事ではあるが、日常の惰性からふっと逃れたくなったときに手をつける、ある種、楽しいな仕事でもある。結構はかどった。

夕方、重信の土手へ。風邪が治りきっていないので、長いジョギングは無理。犬と一緒に二、三キロ走る。川の土手は意外に高度があつて、土手から松山平野が一望できる。茜の空を背景に、山々や瀬戸内の島々が浮き上がって見える。夕空を背にしたこのシルエットが私は好きでたまらない。心の底が洗われる。すべてを忘れて無心になれる。

府中でのN社時代、屋上から毎日のように眺めた富士山を思い出す。夕方、屋上に上がると、丹沢の山塊で左斜面をわずかにけずられた富士山が、みごとにシルエットをなして浮かんでいた。

美の極致だと私には思えた。

青春まったただ中だったあのころ。干からびてとうが立ち始めた今。その隔たりが、なんだか昨日と今日のように思えてなつかしい。今日もまた、静かな夕光に包まれた山々を見つめながら、吸い込まれるように深い感慨にひたるのであった。

二十年の成長なんて、自然は屁とも思わない。吹き飛ばしてしまう。実際、何が変わったというのだろう。自然の前には、人の一生など、あつてなきがごとしだ。

### ■TOKYOソロイスツの演奏を聴く

(一九九七年五月二十二日《木》)

松山平野を煙がおおう。空は晴れても太陽はない。鼻炎のもとだと煙たがる人もいる。心地よく鼻腔をくすぐってくれると歓迎する人もいる。酸っぱくって、喉と鼻にキュンとくる匂い。

平野を埋め尽くす大たき火、一斉の麦焼きだ。松山平野の風物詩。今日から始まった。

パチパチと音を立て、赤い火が麦秋の畑を舐めていく。昼間の赤い火は悪魔の舌。夕暮れ時の赤い火は狼の喉。

あゝまた時が巡ってきたなあ、春が終わったなあ、夏が始まるなあ、そんなことを実感させてくれる大たき火だ。

夜、市民コンサートにでかけた。TOKYOソロイスツ。ピアノ、バイオリン、チェロの三重奏

団。すばらしいでき。

一人一人の個人技がしっかりしている上に、息がぴったり合っている。紅一点、チェロの向山佳絵子さんは、二十歳代後半の伸び盛り。いくつものコンクールで優勝あるいは上位入賞を果たしたのち、一九九〇年、ガスパール・カサド国際チェロ・コンクールで一位になった。

曲目は、シューベルトとベートーベンのピアノ三重奏曲。いつものことだが、演奏会では目をつぶって聴くことにしている。演奏を見ると、視覚に惑わされて音空間の広がりが消えてしまうから。目をつぶれば、すべての音が体内空間に飛び込んできて、舞い狂い、踊り狂ってくれる。

やがて、3D絵画に焦点が合ったときにように、突然、音空間と肉体の波長が合体し、体全体が共鳴のしびれに呑み込まれるときが来る。その瞬間、音楽は異様な輝きをもった渦となり、波となつて、私めがけて押し寄せる。心地よいリズムと強弱が、まるで生き物のように、私を恍惚の境地に誘い込む。

音楽の根源は、リズム、すなわち繰り返しのように思われる。風であり、波である。寄せては返す単調な響きの無限の繰り返し。私はこれに弱い。しびれてくる。

## ■空間のイメージ

(一九九七年五月二十三日《金》)

中学一、二年は今日から授業。答案を返し、簡単に説明した後、新しい単元「空間図形」に入った。「平面の決定」を考えさせる。

「同一直線上にない三点で平面が決まる」

これがなかなかイメージできない生徒が多いのに驚いた。

カメラの三脚などの例を挙げ、あれこれ説明するが、それでもわからないと言い張る生徒が何人もいる。三本の指先と下敷きで実験をさせてみたりもする。全員が

「わかった」

と答えるまでに、十分以上かかってしまった。

「わからない」

と答える生徒本人よりも、その言葉を聞く私の方が、

「なぜ？何がわからないの？」

と聞き返したくなる。

空間をイメージするのは恐ろしく難しいものだ。それを事実でもって知らされた。

風邪がようやく治りかけてきた。すっかり忘れていた「元氣」というものがよみがえってくる。

けだるくってぼんやりしていたモヤモヤがやっとこれで退散してくれた。本を読む意欲も復活し、『比較惑星学』を二十ページばかり読み進めることができた。

ホームページを始めると、見知らぬ方、昔の知り合い、教え子など、いろいろな方からメールが届く。心のこもったメールをいただく嬉しくなる。日常生活では交際上手といえない私だが、メールはそれを補完してくれる。つくづくメールのありがたみを思うこのごろである。

## ■朝が早くなってきた

(一九九七年五月二十五日《日》)

これが歳というものだろうか。近頃、朝が早くなってきた。休日は特に早い。といっても、やりたいことが山のようにあって、それが楽しみで、のんびり寝ていられないというのが本音なのだ。早朝、妻と一緒に犬を散歩させる。例によって重信川の土手。朝の強烈な光を正面から受けると目がくらむ。そのまぶしさが、体内に生気をみなぎらせてくれる。

午前中から夕方まで、原稿書きに没頭。人はたいてい遊びでリフレッシュを図るのだろう。私の場合、自分の仕事に没頭していれば、それが最大のリフレッシュになる。日々の「生計のための仕事」がそれだけ干からびていることだろうか。

日曜日は、干からびた仕事から解放され、これが自分の仕事と信じられる仕事に没頭できる。これがなにより楽しい。やはり休日には私にとってかけがえのない安息日なのだ。

疲れた頭を休めるには、夕方のジョギングが何よりだ。重信川の土手を六キロほど。今度は夕陽を浴びて、ああなんて幸せだろう。

## ■ノラ部屋

(一九九七年五月二十六日《月》)

月曜日は授業がない日。私にとっては休養日だ。

午前中、教師用の書庫でゆっくり新聞を読む。「書庫」というのは名目で、実は休憩室だ。「ノラ部屋」と呼ぶ人もいる。仕事のないノラたちがペチャクチャしゃべってゴロゴロしている部屋。そういう意味だ。一日中忙しく走り回っていないと気のすまなかったある先生(すでに退職された)が、この部屋をそう呼んだのが始まりらしい。

ノラ部屋には、応接セットと八畳ほどの畳の間がある。壁一面が書架になっていて、そこに百科事典や国語辞典、教育関係の書籍や雑誌などが並べられている。一応「書庫」の名目を保ってはいる。主だった新聞と何種類かの雑誌も置かれていて、コーヒーやお茶を飲みながら一服するのにちょうどよい。畳の間には碁盤が数面あって、ここはいつでも碁会所に早変わりする。

一時間ほどかけて新聞に目を通し、あとは数学研究室に戻って自分の仕事。

午後は、高校文化連盟の囲碁専門部会に出席するため外出した。六月に行われる高校囲碁選手権(県大会)の日程などを決める。ついでに各校の力量について探りを入れる。ここ何年も我が校が連続優勝しているのだが、今年も勝てるのかどうか。感触は、「今年もどうやら大丈夫」。我が校の生徒の上をゆく生徒はいなさそうである。

## ■ヘール・ポップ替屋

(一九九七年五月二十七日《火》)

中一생が宿泊研修に出かけた。二泊三日。今年はクラス担任になっていないので、私は同行しない。

六年前に同行したとき、オリエンテーリング、キャンドルサービス、ドッジボールなどとともに、カヌー体験があり、私は生まれて初めてカヌーに乗った。

おそろおそろの漕いでいる間は大丈夫だったが、少しくまくなつたかなと思つて、くるつとターンしたとたん、なんと上下逆さまに半回転。水の中に頭が突き刺さる。一瞬何が起こつたのかわからない。とにかく必死にもがいて、さらに半回転。なんとか空中に顔を出す。死の恐怖から逃れ出たのだった。

以来、カヌー恐怖症になつてしまった。

近頃は、オリエンテーリングに代わつて座禅がメニューに組まれているらしい。

なに、座禅？ 中一生だよ、十二歳だよ。

へール・ボップ彗星は去つてしまった。もう見ることはない。古巣への何千年もの帰途についたようだ。おまえの後ろ姿をもう一度仰ぎ見たいもの。肉眼では無理だが、父が天体望遠鏡を持っている。父も面倒なのか、このところしまいっばなしで、使おうとしない。借りてこよう。肉眼の視界から去つたおまえに、もう一度最後の手を振るために。

## ■インターネットがマスメディアに

(一九九七年五月二十八日《水》)

最近、新聞や雑誌でインターネットに関する記事が多くなつてきた。新聞、テレビ、ラジオといった旧来のマスメディアに加えて、インターネットが新しいマスメディアとして、その地位を確立しつつある証拠であろう。

インターネットは、情報の送り手と受け手の二元論を捨てよと主張している。送り手が同時に受け手になり、受け手が同時に送り手になる。そうした錯綜したクモの巣からこそ新しい価値が生み出されるというのである。

少数の送り手が、多数の受け手の思考傾向を支配するという、従来のマスメディアの構図はここにはない。あまたの送り手とあまたの受け手によって織りなされるカオスの糸が、いかなる価値体系を紡ぎ出すのか。知るのはひとり天のみである。

ただ、インターネットのクモの巣に乗る情報を見ていて、近ごろ疑問に思うことがある。

情報って何？ 知識の切れ端のこと？ たとえば

「相対性理論を作り出したのは誰？」

「ニュートンです」

「ブー」

「アインシュタインです」

「ピンポーン」

そんな軽薄な情報が飛び交っているのも事実である。

一冊の本がインターネットで読めるかも。半年近く前、私がインターネットを始めた動機はそれだった。だが、残念ながらそれは夢にすぎなかった。大半のホームページが、グラビア週刊誌を目指しているように、私には思えた。

インターネットをまだ十分に活用できていない私の偏見かもしれないが……。

それにしても、テレビが視聴率を気にするように、ホームページがアクセス数のみを気にするようになる、いわゆる「楽しけりゃ」主義が横行し始める。目先の奇抜さと人目を引く趣向のみが



価値をもつ世界に、インターネットも捕縛されていくことになる。これはちょっと考えものだ。

## ■インターネットに期待するもの

(一九九七年五月二十九日《木》)

アメリカでは国立国会図書館が蔵書の相当数をデジタル化し、インターネットで閲覧できるサービスを始めるといふ。すでに実績を上げていく上に、さらに大規模な実施計画を立てているといふ。今日の新聞で見た。

対して日本では、そうした計画は俎上にも上っていないというから驚いてしまう。インターネットという媒体への評価が決定的に遅れている上に、情報に対する概念があまりにもお粗末だ。

情報は、ハウツー的な実用性で評価するものではない。思索と技術という、人類の文化的蓄積の開示こそが真の情報である。旅行ガイド、チケット案内等の、そのときどきの実用に供する情報だけが情報のすべてではないはずである。

しかも、文化的蓄積の深奥をデジタル化して手軽に利用可能にするには、それを実現し更新するための方式、手順、検索方法が重要になる。おそらくはそれ自体が一個の科学となり、技術となり、産業となるほどの人知の傾注が必要であろう。安易な発想ではできないし、一人の力でできるものでもない。

私がインターネットに期待していたものはまさにそのような、学びと研究と知的好奇心に答えてくれる情報であった。現段階では、期待はずれであり、失望感の方が大きい。

えらそぶった言い方をしたが、再び謝らねばならない。私は言うだけで、何もできないのだから。実現してくれたらありがたいなど、ただ期待するだけである。

## ■豊穣の土色

(一九九七年五月三十日《金》)

中一生成が昨日、研修から帰ってきた。聞くと、カヌーで沈没者が続出したらしい。最初はこわごと慎重に乗るから大丈夫だが、慣れてくるとスピードを上げたり、ターンしたり。それが沈没のもとだ。私の六年前とそっくり同じ。人間、変わらぬものだ。

松山平野は、麦刈りと麦焼きが済んで、今は田植えの準備であわただしい。先日まで金色の穂が風に揺れていた麦畑も、今は一面、ふっくらとした豊穣の土色。何かが起ころうとする予感がみなぎっている。

土の豊穣感には懐かしい。

個を超えた懐かしさだ。自然と一体となっていた太古の人間の「生命」と「力」へのあこがれが、私の内に甘やかによみがえってくる。はるばると時を渡って、男たちの祈りが低音の響きとなって私の体を包む。

すでに水の張られた田もある。土と水は命の母。あぜ道に立って田を眺めていると、つくづく命の母だと感じずにはいられない。

中間試験中に終えるはずだった囲碁の決勝戦が今日になった。相手は生物のS氏。二段。四子だ。S氏は巷では三段で打っているというから、四子はきつく、いつも苦戦する。今日も、中盤の戦い

を終えた時点で少し足りない形勢。そのままヨセに入ってしまったら負けが目に見えている当方としては、紛れを求めるしかない。それにまんとS氏はひっかかった。結果は、終盤間際のS氏の投了。別にだまし手を打ったのではない。難しい戦いに引きこんだ当方の作戦勝ちと、まあ言っておこう。

## ■高校総体

(一九九七年五月三十一日《土》)

中一생たちの話を聞くと、研修のメインメニューであったはずの座禅はわずか五分間だったという。禅僧の講話が一時半。そのあとに座禅が五分間。

なんだこれは。言葉も出ない。一時半を静かに耐えて講話を聞くことが、すでに修行であったということだろうか。

真っ青に晴れ上がった空を見るのは久しぶり。同時に暑気も戻ってきた。この夏空のもと、昨日から県の高校総体が開かれている。

我が校はサッカー会場。グラウンドに正規のサッカーコートが二面とれる学校は我が校しかないらしく、毎年会場になっている。

朝からグラウンドは熱気と喧噪の渦だ。選手だけじゃない。応援がにぎやか。これではとても落ち着いて授業などできない。

それにしてもサッカー人気は大変なものだ。昔は高校生のスポーツといえば、まず野球だった。サッカーは脇。それが、Jリーグができてから逆転した。

応援の女子生徒がとにかくにぎやかである。我が校は男子校だから、今日のように校内に女子生徒があふれているのを見ると、なんだか異世界に来たようだ。圧倒される。選手の母親も大変だ。

食事や飲み物の世話、ユニフォームの洗濯、それに大声を上げての応援。

普段の練習試合でもこうだと言うから、これは親ぐるみの世界か。尋常ではない。こんな下支えがあつて初めて、将来のJリーガーが誕生するというわけか。

## ■犬の集団心理

(一九九七年六月四日《水》)

老犬メリーが元気を取り戻した。後ろ足を引きずっているのは相変わらずだが、寝たきりの状態からは脱出した。

考えてみると、メリーはずいぶん長く我が家の一匹犬だった。甘え犬だった。ところが、半年ばかり前から新入りが三匹も仲間入りしたのだから、若者の勢いにたじたとって老けこんだのだろう。新入りに溶け込めず、彼らが遊び回るのをチラチラと横目で見ながら、庭の隅に引きこもることが多くなってきた。

それをこちらは老衰だとばかり思って、もう歩けないんだから散歩は無理と決めつけていた。だがよく見ると、若者三匹を散歩につれて行くとき、メリーはいつも恨めしそうな流し目で

「本当は一緒に行きたいのに」

と訴えている。それに気づいて、先日一緒に連れていって見た。

驚いた。けっこう歩く。老け込んではいない。ときには負けまいと走ってみたりする。急に老いてきたのは、単なる精神作用であつたらしい。まだお払い箱ではないと知ると、みるみる元気になった。運動するものだから、食欲も戻った。

今日など、自分を馬鹿にして無視するチビどもに吠えかかりさえした。こんなことは初めてだ。犬の世界にも明らかに集団心理と呼ぶべきものがある。彼らは人間のようになにを隠すことを知らない。だから感情表現がストレートであり、露わだ。喜怒哀楽が手に取るようにわかる。互いが抱いている感情が一目でわかる。

われわれ人間も、普段は包み隠されている深い部分の心理は同じかもしれない。それを表に出さないで、さも平然と暮らしているのが人間社会なのかもしれない。

### ■犬のいじけ

(一九九七年六月六日《金》)

老犬メリーの続編。犬種はシェルトイー。鼻筋の通った愛らしい顔だ。上の娘が幼稚園のときに買ったから、もう十四歳になる。婆さんとはいえ、顔つきに衰えは見られない。いつときかげりを見せていた食欲も、再び若い者に負けない旺盛さを取り戻している。弱いのは足腰だけだ。

ヒガミ根性は誰にも負けない。いじけ心と言おうか。

今日も若い三匹と一緒に散歩に連れていったが、土手に上がる取っつき段が上がれない。わずかに三十センチほどののに、後ろ足が弱くからびよんと飛び上がれないのだ。何度やっても上がれない。するとたちまちいじけてしまった。他の三匹が土手を歩き始めたのを上目遣いに見やりながら、こそこそと逆方向に戻り始めた。幼児がすねるのと同じ心理だ。すねて注意を引いて、抱き上げてもらおうという魂胆である。ミエミエの手を使う。

「メリー、メリー」

いくら呼んでも、チラつとこちらに顔を向けるだけ。足は逆方向を向いている。段を上がれなかった恥ずかしさに堪えられないといった感じ。口でものは言わないが、目つきと物腰で心理のすべてを語っている。

最後はメリーの魂胆に乗っかるしかない。土手の上まで抱き上げてやった。

土手に上がると、現金なもの。ちびどもにはまだ負けないぞと、急いでついて歩く。どこからどこまで正直者だ。心を隠すことも、フリをすることもない。困れば困り、恥ずかしければいじけ、いじけの要因がなくなってしまうえば、もういっばしのその場の主役だ。心のままに生きている。あがままに生きている。

メリーを見ているとぼくは自分が恥ずかしくなる。心を隠すことばかりの自分が恥ずかしくてならない。

### ■教師の権威って？

(一九九七年六月七日《土》)

六月は学校行事が少なく、勉強が一番はかどる月だと、学生時代、誰かが言っていた。じとじとと湿っぽくって、しかも暑くてたまらないのに、ホントかいなど、そのときは思った。だが、今

思い返すと、急所をついている。六月は暑くないのだ。湿っぽくないのだ。梅雨の本番は六月ではない。七月なのだ。梅雨は六月というのは作られたイメージなのだ。幼いころ、どこかで誰かにすり込まれたイメージのようだ。しかも学生にとって、六月は、たしかに時間がたっぷりある。学校行事が少ないのだから。

その上、夏休みが刻一刻と近づいてくる。その気配を楽しめるのも六月だ。

六月は明るいのだ。ジューンブライドという言葉もある。じとじとじめじめでは、花嫁も幸せな気分になれないだろう。六月の特性に今日初めて気がついた。

そういえば、今日、宿題を忘れた中一生に、

「放課後残ってやってしまえ」

と叱りつけて命令しておいた。その後こちらにも、そんなことケロッと忘れて、三時過ぎ、一仕事終えて数学研究室から職員室に戻り、机の上を見ると、

「部活の先輩に絶対に来いと言われたので、宿題はできません」

と置き手紙がある。腹が立つより、笑ってしまった。

ふむふむ、これでよし、これでよし。

部活の先輩の命令は教師の命令に勝るのだ。当たり前だ。そこに権威を振りかざして割り込む教師は、愚か者の典型だ。彼がひっそり教室で宿題なんかやってたら、かえって叱り飛ばしてやりたいくらいだ。

### ■日曜日の朝はコーヒー

(一九九七年六月八日《日》)

日曜日の朝は、真っ先にコーヒーを沸かす。これが決まりだ。三杯分のコーヒーを沸かし、朝から午後にかけて三杯飲む。砂糖やミルクはいらない。ブラックの苦みを楽しむ。

しかも、日曜日の朝食は、我が家ではセルフサービスと決まっている。上の娘が高校生の頃からそうだった。お母さんに休みをあげようと、暗黙の了解が娘との間にあったように思う。

それに、週に一度くらいは自分で包丁をもつのも悪くない。それがかえって楽しみでもある。といても、たいしては前日の残り物か、茶漬け、インスタントラーメンなどで済ますのだが。それにトマトやキュウリを切って添えれば出来上がり。今日は冷やし中華を作った。それとナスの塩もみ。これは私の大好物だ。

こうして軽い腹ごしらえをしたあとは、ずっと机に向かっていた。今日は一步も外に出なかったように思う。やりかかった仕事に熱中すると、時のたつのを忘れてしまうのが私のくせだ。夏休みだと、三日も四日も熱中し通しのことがある。

終えても終えても、やりたい仕事次から次と出てくるので、いつもフル稼働。哀れなな性分に生まれついたものではある。

### ■三代の校長

(一九九七年六月十一日《水》)

この四月、本校では校長が交代した。新校長は三代目。

初代校長はえらい人だった。長く大学教授をしていた学者であったと同時に、青少年教育に心の底から情熱を傾けていた。ひたむきで、真摯で、物事の限界を心得ていた。高校教師に学問で身を立てることを期待せず、その意味では教師連を見くびっていた。自由に泳がせ、伸びるに任せ、沈むに任せた。

若気の至りで、私が教師になりたてのころ、学内で研究紀要を作ったらどうですかと進言すると、「できるわけがない。そんな能力のある人間、校内のどこにいますか」と一蹴されてしまった。が、しかし自由を尊び、教師をも生徒をも、自分の価値観で縛りつけることのない人だった。気持ちよく泳がせてもらった。

初代校長がドイツ学派だったのに対し、二代目は中国派だった。漢文の専門家だった。初代校長は生徒への訓辞をヒルテイーで貫き、二代目は孔子、孟子の包装紙で包んだ。

二代目は自分の主張を最小限にとどめ、見ようによっては無能。だがその実、教師の隠れた能力をよく観察していて、各人の仕事ぶり、書くものなどにはこまめに目を通していった。実務家を側近として配することで成り立つ、温厚な高邁紳士であった。

三代目は一気に若返った。実務に長け、最大の能は雄弁である。初代のように透徹した大局観をもっている人なのか、二代目のように個々の教師の隠された能力を見抜く力を持っている人なのか、そこらあたりは今のところ未知数。

なぜ今、こんなことを書いたかというところ、二代目校長の「退任にあたって」という文章をワープロで清書する仕事をまかされる中で、前校長の思索を丹念に追っかける機会を得たからだ。訓辞などで普段耳から聞いていたことと内容は変わらないが、それを本人がしたためたものを丹念に読むうちに、これまで気づかなかった「偉さ」のようなものが見えてきた。

儒者としての風格はあっても、哲人としての冴えを感じることはなかったのだが、今日初めて、二代目の思索に哲学があることを知ったのだった。

### ■補習が長すぎると叱られる

(一九九七年六月十二日《木》)

熱心に補習をやりすぎると、叱られてしまった。事情はこうだ。

高一編入クラスは在来生より進度が遅れているため、ほぼ毎日補習がある。そのうちの木曜日が私の補習の日と定められている。他の教師はたいして、この補習を七時間目の時間帯で切り上げている。だが、私はそのようなものと考えていなかった。七時間目の授業というよりは、補習。つまり、足りない部分を補う授業と考えていた。だから時間にかかわらず、やるべきことをやりたいだけやる。それを補習と考えていた。だから、五時過ぎ(ときには五時半ごろ)までやるがあった。今日もそうだった。

ところが、これでは寮生は帰寮した後、食事と入浴のどちらかをカットしないといけないならしい。そのことをある生徒が親に言った。親はそれを地区別懇談会(今の時期に各地で行われている)で取り上げた。その会に出席していた教員は、

「補習は七時間目にやることになっているのだから、そんなことは絶対にありません」とか何とか、反論したらしい。そこからその会は大もめになったというのだ。親は、

「食事もさせない学校、風呂にも入らせない学校、部活もさせない学校」と、言いたい放題。険悪なムードになったらしい。

そのことを、今日、おりもおり、補習を終えて職員室に戻ってきたとき、教頭から聞かされた。「五時までには切り上げて下さい」

とのこと。部活をやっている生徒はたいいてい、五時半まで練習し、それから寮に帰っている。だからその感覚で補習をしていたのだが、一人の生徒と一人の親が強硬にそれを問題にしているという。

少しでも多く教えてやり、少しでも早く在来生に追いつかせようと思ってやったことが、裏目に出たわけだ。

別にこんなことでショックを受ける私ではないが、なんだか割り切れない思いがしたのも事実であった。

### ■うっぶん晴らし

(一九九七年六月十三日《金》)

勉強というのはいきれいな事ではない。上品に、手を汚さずにやるなどという勉強はない。汗と涙でどろどろになりながらやるのが勉強だ。少々補習が遅くなったからといって、親に泣き言を言うような者に勉強なんてできるわけがない！

昨日のうっぶんを晴らすかのように、今日の高一編入クラスの授業で私は吠えついておいた。

「親に馬鹿なことを言ったのは誰だ」

とも。もちろん名乗り出るとは思っていないが、私を支持する顔つきが大半だったので、昂ぶった気持ち少しは風いだ。

学校というのには不思議なところだ。宿題を出さず、補習をせず、日常のテストもせず、それ故に生徒との間に何の波風も立てずに気楽に暮らしている教師と、毎日宿題を出し、それをチェックし、補習をし、小テストをやり、それが故に生徒との摩擦もときには甘んじて受けねばならない宿命にある教師と、二色に分かれている。

管理職はたいいてい前者のグループから推挙される習わしである。後者にはそのようなことをしている暇はないのだから。

二代目校長は、それでも、日々汗を流している教師の現実に必死になって思いを寄せていた。見ているのがよくわかった。ややもすれば遊離しがちになる境界を、謙遜と敬愛の思いで接着してくれていた。

今後は、うっぶん晴らしをせねばならない場面があらゆるところで増えてくることだろう。

### ■ネズミ出現

(一九九七年六月十六日《月》)

我が家にネズミが現れた。先日から台所でガサガサ音がすると思ったら、何とネズミだった。ネズミ用の毒餌を置く。すると、夜の間に全部平らげ、糞が流しのあたりに散乱している。何という食欲、そして何という無謀。ここに現れましたよと、証拠をしっかりと残している。

数日これをやればいなくなると思うが、昨日は夢にまでネズミが出現した。真っ白な大きなネズミが枕元、手の届くところにやってきて、まるで兎のように愛らしく走り回る夢だ。その白さはたとえようもなく美しかった。夢判断はこれをどう解くのだろう。

### ■まっ黒黒助はもういない

(一九九七年六月十七日《火》)

高二生は今、北海道に修学旅行中。今日は、高一と高三だけのクラスマッチ。今日のような炎天下で一日スポーツに汗を流すのは、かつての私には日常茶飯事だった。だが、今は遠い過去だ。炎天下に立つことが恐い。日に焼けすぎることが恐い。皮膚ガンが恐い。今は、ジョギングにしても、たいていは夕暮れ時にやることにしている。

テニスに明け暮れていた頃の、あの真っ黒黒助の私はもうどこにもいない。

図書館報「ビブリオ」に載せる推薦図書原稿を書いた。『ニーナの日記』。スターリンの粛正甚だしきころのモスクワで、感性豊かに生きた少女の日記である。私は昔、ソ連時代のモスクワやレニングラードを訪れたことがある。その思い出とも重なって、身に迫る。

愛、自由、そして生き甲斐を求める行動力。これらは国や時代を超えて共通する普遍的人間性の発露だ。そのことを強く思う。

### ■台風接近中

(一九九七年六月十八日《水》)

高二生が二便に分かれて北海道修学旅行から帰ってきた。先着組は五時前に学校着。帰るとすぐに、棋道部の連中が部屋にやって来た。日曜日の大会に出る高一生の相手をしていたときだ。

「暑い、暑い。北海道は涼しかったのに」

疲れた様子もなく言う。

「何が涼しかったものか、テレビの気象状況で、向こうも二十七度と云ってたぞ」

野暮なことを言ってみる。しかし思えば、カラリとした北海道はヨーロッパの夏に似て、木陰は冷え冷えとしていたはずだ。

楽しんできた彼らの顔は、数日前よりもはるかに明るい。

台風が近づいている。このまま直進すると、明後日には四国上陸か。

我が校には明文化された規定があって、午前六時現在（接近中ならそれ以降でも）暴風警報が出ていると自動的にその日は休校になる。授業があるのかないのかと、次々に電話がかかって回線がパンクした教訓から、何年前だったか、こうした規定が作られた。

教師の身で不謹慎かもしれないが、内心、台風接近を期待の目で見守る我が輩がいる。

### ■期待は裏切られるためにある

(一九九七年六月十九日《木》)

台風はどうやら西に向かった。愛媛県は暴風雨域からはずれる見込みと、帰りの車で、ラジオが告げている。残念な思いがよぎると同時に、期待はいつもこうして裏切られるものと、達観した

気持ち直ちに湧き出してくる。

先週、補習を遅くまでやりすぎないようにと、教頭から釘を刺された矢先だったのに、今日の補習はまたも五時半まで。五時には終わるからと約束して始めたのに、やりだすと終わらない。生徒たちも仙人顔で諦めの権化と化している。文句を言う者は一人もいない。

最後に、

「今日は特別やるが多かったからね、来週からは五時には終わるから」

と、石のように固くなった彼らの心を新たな期待感でほぐすことも忘れない。

期待は裏切られるためであることを、彼らもまたこうして覚えてゆくのである。

### ■新聞に特集が出るらしい

（一九九七年六月二十三日《月》）

昨日の囲碁優勝が今日の愛媛新聞に載り、しかも長年にわたる連続優勝だというので、後日、愛媛新聞に特集が出るらしい。今週中に取材に行きますとの電話があった。何年連続の優勝なのか、私自身忘れてしまった。

我が校の棋道部（囲碁・将棋部）は以前にもラジオの番組で紹介されたことがある。そのとき、私のインタビューも放送された。自分の声をラジオで聞くのは気恥ずかしくて、聞くに堪えなかった憶えがある。

一昨年は、全国高校囲碁選手権の会場でインタビューされ、「打ち込め青春」という全国版テレビでそれが流された。声だけではない、顔出しだった。一流プロがたむろするそばで、大会の感想を聞かれ、物知り顔では答えられず、かといってインタビューの期待に応じないわけにもいかずで、立ち位置が定まらず、まさしくしどろもどろ。聞くにも堪えず、見るにも堪えない哀れなことになった。

そういえば、数年前、囲碁全国大会の県代表になったとき、愛媛新聞夕刊（タブロイド判）で、紙面の半分くらいの大きな顔写真とともに、私の囲碁・短歌人生が特集記事になったことがある。記者が家に来て、長時間インタビューされたものが記事になった。といっても、その記者、短歌の同人仲間であって、身内のヨイシヨ記事のような妙な気分がしたのも事実であった。

今回のがどういうものになるのか、まだ知らない。

### ■平成3年発行！

（一九九七年六月二十五日《水》）

中一数学の教科書に、正八面体をデザインした切手の写真が載っている。

「この切手、見たことがある者はいるか」

と聞くと、

「平成三年発行！」

と皆が声を上げる。たしかによく見ると「平成三年」という文字が小さく読める。

だけど私には彼らの言っている意味がわからなかった。「見たことがあるか」と聞いているのに、彼らの答えは異口同音に「平成三年」。問いと答えがかみ合っていない。何が何やらわからない。



しばらく経って、ようやく事態が呑みこめてきた。

「そんな古い切手、見たことがあるわけじゃないでしょう」

こう彼らは主張しているのだ。

平成三年がそんなに古い昔？ 私は仰天してしまった。「たかが六年前」と言いかけて、ハタと気がついた。六年前は、彼らが小学校に入学した年なのだ。誰かが小生意気に

「僕らの人生の半分ですよ」

と言った。

「先生には六年前なんて、昨日のことみたいなものじゃ」

そう言って笑いつつ、時の流れの苛烈さに頭を痛打されていた。私にとっては一瞬の苛烈、だけど彼ら中一生にとっては柔らかな毛布にくるまれたようなソフトタッチの六年間。長い長い夢のような六年間。

私も自分の人生を振り返るとき、今の六年間は瞬く間だが、小学校の六年間はなんと長かったことか。彼らの言葉ではないが、今になってさえ「人生の半分」と言いたくなるほど長かった。無限に続く道のりだった。六年前が昨日のことだなんて、よくもまあ彼らの前で言えたもの。恥ずかしくって、馬頭星雲の陰に消え入りたい気分だ。

あの頃にもう一度戻りたい。戻れないよな。

### ■ツバメでありたい

(一九九七年六月二十八日《土》)

今日は台風で休校。先週の台風七号の際は、「ひよっとしたら」の思いを見事に裏切られた。今回の八号は真逆。まさかの襲来だった。いきなりの休校。

私の仕事場である自宅の二階から、隣のスーパ―とその駐車場が見下ろせる。突然の突風に男が走った。亀の子のように首をすくめて走った。危険に遭遇したときの刹那の行動。笑える姿だから、笑ってしまう。

風とともに雨も猛然と襲ってきた。横殴りの雨が窓を打つ。

子供もずぶぬれになって家に駆け戻る。だけど子供は首をすくめたりはしない。きゃっきゃと笑って雨と風を全身で受ける。

ツバメも負けない。ゴーゴー吠える風を突っ切って、さっとかすめ飛ぶ。さっそうたる雄飛だ。

雀はおそれをなして巣に戻る。風がやむと、合間合間を縫いながら、群をなしてバタバタと飛ぶ。

カラスもカーカー鳴き叫んで恐怖感あらわ。

私はツバメでありたい。群れることなく、さっそうと一羽、風を切って飛ぶツバメ。

### ■酸っぱい味を人は知らない

(一九九七年六月二十九日《日》)

重信川の川筋がまた動いた。台風の仕事だ。普段、水は伏流水となって見えない地下を流れている。そのため、見かけは半涸れ状態の広い河原だ。そこに、人が築いたかと目を疑うばかり精巧な瓦礫の堤防ができ上がった。それに沿って真新しい流れが急流をなしている。さわさわと心地よい

音を立てて……。

自然は泰然として動かなく見えるけれども、時として激烈に変化する。人が住むのは変化と変化のはざま、不安定の時空。その不安定を不安定と知らず、泰然を永劫に続くと思える悲しい錯覚の中で人は生きている。自らが住む「今」を、激烈な変化から守られた奇跡のとき、特別に優遇されたとき、平安のとき、安定のときと信じて、激甚を遠い過去かかるとなる未来に追いやらねば生きられない哀れな存在、それが人間だ。

太陽を見た。落ちる寸前の煌々たる巨大な太陽。人の知恵の芽生えぬ太古から、太陽は毎日変わらず巨大な深紅の塊となって落ち、雲が流れ、河が何度も瓦礫の堤防を築いてきた。

理性に認知されることなく、悠久の時を彼らはひたすら刻み続けた。それが自然。

理性の無謀を思う。傲慢を思う。激動の末に行き着いた特別な安定系、完全系の中に今があると信じる脳天気を思う。今を激動のただ中であると信じようとしないう悲しき傲慢。

生命の本質はバトンタッチだ。だから常に新しい。そして常に愚かだ。ほのかな恋心を、自分のみが知る人類史上唯一の至宝だと若者は思う。ばあちゃんも、じいちゃんも、人たるものすべてが一度は味わった酸っぱい味だと彼らは知らない。

だから自信家ぶる。科学が自然を支配したとさえ思う。無数の甘い果実の中心核に、酸っぱい味、危険な味が秘められていることを、人は知ることがない。

## ■CATVテレビの取材

(一九九七年七月二日《水》)

棋道部への取材は、愛媛新聞の記事になるのかと思っていたら、愛媛新聞傘下のCATVテレビとのこと。

今日は予備取材。明後日が本番の撮影取材。十五分番組になるのだという。棋道部だけで十五分とはえらく長いなあ。そんなに時間が保つかいな。

棋道部の歴史を物語る写真なども用意してほしいというので、今夜は古いアルバムを引っ張り出して大あらわ。

放映は七月十日。一日に五回流するという。CATVはだいたいこうだ。同じ番組を何度も繰り返し流すのだ。

## ■テレビ出演の巻

(一九九七年七月五日《土》)

昨日、棋道部にテレビ取材班がやってきた。取材班といっても、ディレクターとアナウンサーとカメラマンの三人。放課後、二時間ほどかけて撮影した。

主役は県大会個人戦優勝のU君と二位のN君。彼らへのインタビューと私へのインタビューがあり、あとは、部員たちの練習風景、過去の戦績を記す優勝カップや優勝盾、出場記念の写真などを撮影する。

普段は鷹揚で、ときには横柄にすら感じられる高一のN君は、人が変わったように緊張している。カメラの前で撮ったU君との練習対局は、まるで囲碁を覚えたばかりの子供のような内容だった。

緊張のあまり頭が真っ白になっているのがわかる。

それに引き替え、高二のU君は落ち着いている。

平常心を保つことのなんと困難なことか。

## ■時間の空回り

(一九九七年七月十一日《金》)

春から熱中していた原稿が一段落。読書で頭を休めることにした。

まずは『宇宙のゆらぎが生命を創った』(桜井邦朋)。時間の非可逆性、宇宙の進化とともにある生命、時間を自己に引き寄せる生き方など。示唆に富む視点に目を開かされる。

続いて、トーマス・マンの『魔の山』。そこでも時間の問題が多く語られる。

宇宙の進化時間とは独立に、個の中で時間は速くも、ゆっくりも、そしてときには踏みとどまりつつも過ぎてゆく。

今夕、犬を散歩させていて、不思議な現象に遭遇した。

まず老境の二人の婦人とすれ違う。すれ違うやいなや、二人はただちにUターンして、私のあとをついてくる。えっ、なんだこれは。

二人はやがて別の道をとった。しばらく行くと今度は定年間近と思われる夫婦とすれ違う。夫が小止みなく話し続け、妻がうなずいている。続いて、長い迂回コースをとって、元の道とは縁もゆかりもない町筋を歩いていると、何とその夫婦が向こうからやってくる。相変わらず夫がしゃべり、妻がうなずいている。何ということだ、これは。

さらに、我が家に近づいた頃、犬を連れた若い奥さんとすれ違う。

いったん家に戻り、別の犬を連れて再び散歩に出る。しばらく行くと先ほどの奥さんとまた出会う。極めつけは、三匹の犬を連れた初老の男。すれ違ったあとランダムに角を曲がっているうちに、さらに二度も角々で出会ったのである。しまいには顔を合わせたたん、二人は同時に吹き出してしまった。

逆行不可能な時間であっても、こうしてときには空回りし、何度も同じテープを再生することがあるものらしい。

## ■一学期終了

(一九九七年七月十二日《土》)

今日から期末試験。

この一学期、長かったのか、短かったのか見当がつかない。無我夢中で走り通した数ヶ月だった。長いフルマラソンを走り通して、今はゴールまで百メートルの心境である。残る百メートルは試験の採点だ。それが終われば、しばしの休息。読みたい本、新しいプログラミングなど、計画はすでに山をなしている。どれも食うための仕事じゃないのが何よりいい。

一昨日放映された棋道部の十五分番組。なかなかよかったと、多くの人から声をかけられた。残念ながら私の家では愛媛CATVが映らないので、当の本人は見えていない。主役の生徒たちも見えない。

■数学は読んで覚えるもの？

(一九九七年七月十五日《火》)

宅浪しているK君が、質問にやってきた。彼とは二年間クラス担任としてつき合った。京大を受けて失敗したこの春、予備校に行くことを極力勧めたが、自分で頑張るからと松山に踏みとどまった。以来、ときどき学校にやってきては、質問がてら気分転換に雑談して帰るのである。

今日は彼と四時間つき合わされた。質問は最初の一時間だけ。教えているうちに、彼の勉強方法のあまりの異常さに、これでは空回りして何も身につかないと気づいた私は、話題を勉強の方法論に切りかえた。

彼の受験勉強は「赤チャート」(六冊)の解答を読むこと。それだけだ。だから持ってくる質問も、チャートの説明文で意味のつかめない箇所を教えてほしいというだけ。手と鉛筆はまったく使わない。もちろん自分で解くことなどしない。

「いちいち解いていては時間がかかるでしょう。短時間で理解するには読むのが一番です」これが彼の言い分だ。六冊のチャートを十日で終えましたとも言う。あきれて物も言えなかった。これをきっかけに、勉強の方法論にとどまらず、人生論にまで広がる大激論になった。最後には、「そこまで言うのなら、自分のやり方を押し通してみたらいい。楽な道を歩んでみたらいい。けど今後はもう面倒を見ないよ」

こう最後通告を発するところまで発展した。すると、「それでは困るんです。教えてくれる人がいないと勉強できないんだから」弱気なところもチラリと見える。

ともかく話は平行線のまま、最後は喧嘩別れのようなことになってしまった。こうして言い合えるのも、考えてみれば、在学時代からの信頼関係あればこそ。そのうちまた、

「教えて下さい」

と電話してくるのは目に見えている。

■夏休みは無限の可能性

(一九九七年七月二十日《日》)

一昨日のこと。期末試験が終わった瞬間、目の前にいた生徒が思わず拳を上げて素っ頓狂な声を張り上げた。

「さあ、夏休み！ 夏休み！」

彼は狂ったように飛び跳ねながら、誰かれとなく握手を求める。

そうなのだ。彼にとって夏休みは無限の自由と無限の可能性の塊なのだ。狂気とさえ呼べる可能性なのだ。可能性を秘めた何物かではない。可能性そのものなのだ。喜びそのものなのだ。

私など、夏休みが始まると、早くも心の隅に、終了の日が見えてしまう。秋風が立ち、日暮れがうんと早くなり、積乱雲が風の流れに孤独をかこち、何かが果てる寂寥が家々の壁をあかねに染める。そんな情景が見えてしまう。

若いって、なんてすばらしいんだろう。経験が浅く、無知なるが故に、未来に無限の可能性を見

る。その純真さ。なんてすばらしいんだろう。

## ■時効直前の逮捕劇

(一九九七年七月三十一日《木》)

全国高校囲碁選手権を終え、松山に帰るために生徒たちと羽田を発ったのは二十九日午後六時四十分。まさにそのとき、福井市で福田和子の逮捕劇が展開されていた。

翌日彼女が護送されてきた松山東署は、市民と報道陣でときならぬ人だかりとなった。

松山東署は私が子供時代を過ごした上一万界隈のすぐそばだ。五年生のときだったか、学校の社会見学で東署を訪れたことがある。そのとき見せてもらった薄暗い留置場が、今も生々しく記憶に残る。衝撃的な体験だった。

鉄格子のはまった狭くて暗い部屋。まるで動物園のサル小屋のように、廊下の番人からは丸見えのその部屋。こんなところに入れられたらたまらんなあと、子供ながらにプライバシーのなさや薄汚さに哀れを覚えたのが思い出される。

福田和子はその留置場で夜を過ごす身となった。といっても、署の建物は後に建てかえられたから、私が衝撃を覚えたあの留置場ではないのだが……。

空港に迎えに来た妻から逮捕のニュースを聞いたとき、とっさに浮かんだ思いは、不謹慎ながら、「哀れよなあ。あと三週間か。その三週間で我慢してひっそり暮らしていたら、時効になって逃げおせたのに。せつかくの十四年十一月の逃亡生活が、最後の最後の気のゆるみで水泡に帰したではないか。なんとということだ。しかし、これが人間の弱さというものかなあ」

といった感じ。追いつめる警察を強者、逃げる犯人を弱者と、私の感性は直覚する。弱者の味方を本性とする私にとって、福田和子は捕まった瞬間、哀れみと同情の対象と化したのだった。

十五年前の事件は今も記憶に新しい。ずいぶんあこぎなことをして逃げたものと当時は思った。今ももちろんその思いが変わりはない。しかし十五年間、彼女の手配写真を駅や街角で目にし続け、どれもが色あせ、青白くなった紙がはたと風になびくのを見るにつけ、思いの本質はいつしか変容していった。

彼女は私と同じ年だ。しかも、住んでいた地もさほど遠くない。ひょっとしたら同じ小学校に通っていた可能性さえある。同じクラスになったことはないが、同学年に彼女はいたのだろうか。なんだか親しみの情すら感じられてきた。

あともう少しだ。静かにひっそり時効を迎えろよと、ひそかに念じ、応援していた私に罪はないと、誰か保証してくれる人はいないだろうか。

## ■川はオーケストラ

(一九九七年八月一日《金》)

台風の後水が重信川を下る。

普段、河床の水が流れることはない。水は伏流水となって地下を流れている。豪雨のあとにのみ、一過性の水が流れる。その一過性の勢いで上流から岩や小石が押し流されてくる。水が引くとそれらは河床にたまり、堆積する。

重信水域は、中央構造線の活発な地滑り地帯にある。流域はそのために、砂利採取業者の巣窟になっている。

普段は水が流れないから、いったんたまった岩や小石は、よほどの洪水がない限り、もはや動くことはない。

こうしたことが地質年代を通じて繰り返された結果、重信川の河床はずんずん上がり、ますます水は表面から姿を消していった。

川床は付近の平地よりもうんと高い。典型的な天井川だ。

天井川なるがゆえに、重信川はかつて「暴れ川」として名を馳せた。台風や豪雨のたびに氾濫したのだ。河床が高いから、あふれると一気に田畑、人家を呑みこんでしまう。全長三十数キロの中規模ながら、川幅と景観が大河の様相を呈するのは、氾濫が繰り返された結果なのである。

江戸の初期、足立重信が川を改修し治水に努めた。そのため重信川と呼ばれるようになった。もとは伊予川と呼ばれていたらしい。

重信川の土手はここ二十数年、私が最もよく走ってきたジョギングコースである。砥部町に住んでいた十年間も、今の家に引っ越してからの十数年も、心持ち下流と心持ち上流の違いこそあれ、暑い日も寒い日も走り続けた。四季折々の川の姿を堪能してきた。

先日、台風から数日を経た重信川に読書に出かけた。曇り空で日差しが弱く、読書に最適の光量だった。川を見下ろす土手に腰を下ろして、約二時間、時を忘れて『魔の山』に没頭した。川は珍しく水を流し、広々とした河原のあちこちに網の目のように水流を巡らせていた。どの水流も一つ一つは幅数メートルから、せいぜい十メートル。うねりうねってクモの巣のようにはびこっている。河原は至るところ中州である。

どの水流も土色に濁って、逆巻いている。川音を楽しみながら読書に耽る。

絶えることのない川音。まるでオーケストラだ。リズムがあり、メロディーがあり、音色の違いがある。

通奏低音をなしているのは、あちこちのたぐさんの川音が入り乱れて渾然一体となったサワサワ、ゴーゴー。バックグラウンドの水音である。これは絶えることがなく、しかも方向によるムラがない。まるで宇宙の背景放射だ。河床一帯を包んで耳の底に響いてくる。一つ一つの水音を一個の恒星の光にたとえるならば、バックグラウンドの水音は天の川の乳の色といえる。個々の光、個々の音が境界を失って、乳色に融和し、個を昇華させた姿である。

ぼんやりしていると、このバックグラウンドしか聞こえてこないが、耳を澄ますと、実に多くの音がある。音がその陰でリズムを刻み、メロディーを奏でている。ピチャピチャ、ドボン、ピリュ、ゴボツ、チュリュ、パチツ、トポトポ……。実にさまざま。これらは比較的近くから、つまり眼下の水流から発せられる水音に違いない。夜空に恒星として見分けられる光にたとえてもよい。天の川の乳色にとけ込まないで個を主張している、いじらしくも愛らしいこれら。



水の流れない石ころだらけの重信川

崩れて流れ出す岩や小石の量は膨大だ。上

それぞれはランダムのようなようであり、また一定の周期を保っているようでもある。軽妙な混沌と規律が私の耳を打つ。人の手では作り出せない、不思議なリズムとメロディーだ。聞くともなしに聞いているうち、いつしか天に昇る心地がしてくる。魅せられ、捕らえられ、抜け出せなくなっていく。たしかに一つの世界、音空間が広がっている。

捕らえられているのは私だけではない。虫たちもそうだ。トンボが水に捕らえられている。彼らは群になつたり、個になつたりしながら、川面をすいすい飛んでいる。よく見ると、川の流れと同じ速度で彼らは川面を下る。ゆっくりと、ヘリコプターのように……。そしてあるところまで下ると反転し、猛スピードで元の場所まで舞い戻る。そして再び川の速度にあわせて川面を下る。これを飽きることなく繰り返し返している。おそらくその飛行範囲が一匹の、あるいは一つの群れのテリトリーなのであろう。

彼らは彼らなりに川のリズムを感じ取っているにちがいない。その中に無意識のうちに身を沈め、自ら自然の一現象となつて暮らしているわけだ。

そう、現象なのだ。意識せざる現象なのだ。現象としてバックグラウンドに溶け、しかもテリトリーを持つ身として個を主張している。無意識のうちに……。

人間はいつこの無意識を捨て、バックグラウンドに溶けこむことをやめたのだろうか。バックグラウンドからの遊離を文明と呼び、それを意識するようになったのはいつからだろう。

文明ははたして成功に向かいつつあるのだろうか。それとも破綻へと向かいつつあるのだろうか。私にはわからない。行く先に靄がかかつて見通せない。

土手から見ると山々の重なりがすばらしい。空は曇り、山は靄に包まれている。まるで山水画だ。遠くの山は霧に霞み、近づくとつれ尾根がくつきり見えてくる。

一つの山塊はいくつもの尾根を持つ。晴れ渡っていると、すべてがあまりに明瞭で、尾根は遠近によって分離されず、すべては一体となる。ぼんやりと霞んだ日には、尾根は単色の一つの世界にとけ込んでしまつて、まったく分離されない。

今日のような適度な曇り空のときにだけ、すべての尾根がみごとに立体的に浮かび出る。遠くは霞み、近くは明瞭に、尾根の一つ一つがまるで立体めがねで見ているように、奥行きのある空間に納まつて見える。

太古の昔からこうした光景は何度となく繰り返し返されてきた。しかし、それを味わう知性と理性が生まれない昔、それはただむなしく繰り返し返される現象にすぎなかった。地上に生命が芽生えて三十数億年。気の遠くなるようなその長い期間のほとんど全期間、山々や川の流れは無為にリズムを、メロディーを刻んできたのであろう。誰に味わわれることもなく、無為に、しかも厳然と。生命はその繰り返しの中にバックグラウンドとして溶けこんでいた。

バックグラウンドから遊離した人間という生命体が生まれたとき、自然のリズムは、ただそこにあることから、眺め味かわれるものへと昇華したのであった。自然の側から言えば、それ自身を探求し、味わい、観察する存在をその内部に保有したことになる。

バックグラウンドから離れば離れるだけ、人間は傲慢になっていく。自然を支配し、コントロールしている気になってくる。

行き着く先の究極の危険に、人は深く思いを馳せなければならぬだろう。

## ■人はみな盗人ヤドカリ(一)

(一九九七年八月十八日《月》)

近ごろよく絵を描く。描いていると、時空間における自分の小ささ、儂さが見えてくることがある。

自然そのものとか、何百年の歴史を経た人工的建造物とかがかもす、時空間におけるどっしりとした安定感に比べると、私という人間の頼りなさはまるでかげろうだ。もちろん人工的建造物は長い年月のうちには滅びようし、自然でさえ地質年代的時間の中では水飴のように形を変える。あらゆる時空の現象は、通り過ぎる旅人にすぎない。まさに芭蕉の「月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり」だ。

この悠久の変転の中で、ほんの一瞬、この地球上に住まわせてもらっているにすぎない私という人間は、いったい何を目ざし、いかなる存在意義を持っているのだろう。考えると、漠とした闇に投げ出されたような恐怖に襲われてくる。

「人はみな盗人ヤドカリ」、これが思いの果てに浮かんでくる、私なりの一つの結論だ。盗人が平然と所有者顔をして一つの世界を占め、それはやがて次の盗人に盗まれる。占めていたものは、かりそめの宿。ヤドカリにすぎない。

この連鎖の中でほんの一瞬、何かあるものの担い手になること、うまくすれば後代に残されていく文化と呼ばれるものの担い手になること、これが一個の人間の存在意義、生きる目的、生の証しではなからうか。そんな思いだ。

人類の、というよりも生命の連続とした連続性において、この盗み盗まれる連鎖は何にも勝って価値ある輝きのはずである。

だが、よくよく考えると、こういう塩梅に割り切られてしまうのでは、「個」の価値がへこみすぎていやしないだろうか。

そうなのか、所詮はそれだけなのか。生きている意義はバトンを落とさないうで運動場を一周するだけのことなのか。

そんなことになる。むなしさがこみ上げてくる。ただ生きていることに加えて、多少の知恵を与えられてしまった人間なるがゆえに味わわれる宿命的悲哀なのだろうか。

生きていることにいかなる意味をもたせようとも、それをいかに飾り付け、きらびやかに見せようとも、所詮は一個のリレーランナーなのか。声援を受け、晴れやかに駆け抜ける人もいれば、誰からも注目されず、影のように走り終えてしまう人もいるだろう。

しかし、所詮はリレーランナーだ。走り終えた人はみな同等の役割を果たしたのだ。これぞ平等、人間の理想の姿だ。万々歳だ。

だけどやはり、これではなにか虚しさが残る。走っていたときに受けた声援とか、走り終えたあとの評価とか、それらがすべて平等の名の下に平らかになることへの虚しさだろうか。そうではなさそう。

内に燃え立つ充実感、それこそが大事で、声援や評価などは、はるかに低位。そう考えるのは私だけではないだろう。しかし、その高位の充実感さえ、時間という容赦ない融合作用のもとでは無に帰する宿命をもつ。それが虚しいのだ。哀れでならないのだ。



今の世界を生きている人の生の証し（生きた価値）は、百万年後の世界に、はたして記憶として、記録として、何らかの形をとどめているだろうか。人類の長い歴史の一ページに、ひと言でもいい、書き記されているだろうか。おそらくは大海を漂う泡ほどにも形をなさず、痕跡はきれいさっぱりかき消されているだろう。

二足歩行や火をおこす技術のように、「誰が」が意味をなさない集合的な形で、何かがかすかに痕跡をとどめていたならば、もうそれでよしとせねばならないだろう。

こう考えると、結局行き着く結論は、通りすがりの盗人ヤドカリだ。スポットライトが当たって、時が今を告げている瞬間にのみ、その今を盗んで起き上がり、かっぱれかっぱれと浮かれ踊るけれども、やがてスポットライトが次を照らして、今が過去へと流れ去った瞬間、パタンとふたが閉まって闇の底へと倒れ込む。こうした連鎖が次々に繰り返される操り人形のドミノ倒し、それが生命なのではないだろうか。

一人の人間の生は、一個のドミノにすぎないのではないだろうか。生きていて何だろう。古い神社や、おい茂った樹々、川の流れなどを見つめていると、私は遠い過去へ、そしてはるかな未来へと、恐れをこめた熱い視線を向けざるをえないのである。

### ■人はみな盗人ヤドカリ(二)

(一九九七年八月二十四日『日』)

絵を描こうと、ある対象をじっと見つめていると、これまで気づかなかった微細な構造や巨視的な構造が驚くほどはつきり見えてきて、衝撃を覚えることがある。古い神社を描いているときなど、特にそうだ。向かい合っているうちに、その社殿が私に心を許し、まるで打ち明け話をするように、美の神秘を眼前に繰り広げてくれることがある。

屋根のそりの見事な曲線、何層にも重ねられた複雑な瓦、その意匠、屋根の突先にのった獅子瓦のすばらしい造形、破風の見事な彫り、横木にさりげなく彫り込まれた細工、壁板の微妙な並び、等々。樹々に隠れてひっそりと忘れられたように鎮座している小さな社にも、古い時代の宮大工の丹誠込めた創意と工夫が、生命を維持する血流のように、脈打ち流れているのがわかるのである。

日々の暮らしから切り離され、その存在が人々の意識に上るのは、せいぜい正月と秋祭りするときくらい。そんな小さな社だが、それは樹々の茂りの奥でひっそりと、しかも確実に生き続けている。土埃にまみれ、床板はギシギシと音を立てて今にも破れそう。それでも生きている。脈々と命の息を保っている。命をかけて刻んだ匠たちの造形力と、無になった心とが、いつまでもそこに貼りついている。

複雑かつ精妙な意匠と、枯れたような色調とに、困惑の極みを味わいながら描いているとき、社は私に何かを語りかけてくる。何かを感じさせてくれる。

それは時間の集積だ。命の伝承だ。この場所で、この空間で、かつて血のにじむ努力を重ねた人がいたという事実だ。この土も、ひっそり静まったこの冷気も、この木々の葉擦れの音も、きらきらきらめく木漏れ日も、この閉じた小空間に生起するありとあらゆる現象が、かつてなにがしかの人物の創造空間に属していたのだ。その人の創作意欲の所有物であったのだ。かつてこの壁に、何日も、何ヶ月も、あるいは何年も、張りついて精魂を傾けた人物がいたのである。

そう思うと、なんだか不思議な気分になってくる。私が第一発見者になったような、誇らしさに満たされた気分だ。美の王宮を発掘したような気分。この社殿を造った宮大工が、評価されることも、認められることも期待せず、ただひたすら自らの美の技量をそこにぶつけ、外部からは決して見ることでできない奥の奥の細部に至るまで、意匠を凝らして作った創作物。何百年か昔に作られて以来、誰に気づかれることもなく、ひっそりとそこにあり続けてきたその意匠。

宮大工の心がじかに伝わってくるこうした手の込んだ細工と対峙しながら、様々な思いに身をゆだねていると、時を超えてその人物と対話している気分になってくる。彼の鑿や槌の音が今もありありと響いてくる。

認められることを目差して作られた美には嫌みがある。鼻をつく。

しかし、ひっそりと森の奥にたたずんでいる小さな社の造形には、川の流れや山の姿に似た、自然のおおらかな「美そのもの」が顕れている。邪心がなく、ひたむきである。

数百年にわたって、この鎮守の社は、瞬間瞬間を生きる人たちに安らぎを与え、彼らに瞬時の占有を許し続けてきたのであろう。

若い二人が人目を忍んで語らう愛の舞台となり、彼らの熱い抱擁と口づけの舞台になったこともあるだろう。戦火に追われた人たちの逃げ処になったこともある。あるいはまた、にぎやかな祭りの舞台となった時代もあったことだろう。歌垣などが行われたこともあったかもしれない。

それぞれの時代を生きた人々が、この小さな社をおのが占有物とし、それぞれに生活の一場面としてきたのである。

これは神社にかぎらない。海も、山も、川も、あらゆる存在物が、瞬間瞬間の盗人ヤドカリに占拠され続けてきたのである。

山を見て思う。この山のみごとな稜線を眺めながら、私と同じように思いにふけた人は、過去に何人もいたにちがいないと。夕陽に輝くこの美しさを、同じように眺めて、感動の涙を流した人は数えきれずいるだろうと。この山は、この感動は、私だけの占有物ではない、私は盗人ヤドカリにすぎないのだと。

## ■夏の終焉

(一九九七年八月三十日《土》)

無限の可能性を秘めていた長い夏休みがいよいよ終わりの時を迎えた。始まりの瞬間に私が抱いた予感が現実となったのである(当たり前のことだがね)。二十八日から補習が始まり、学校はけだるい休眠状態から覚醒した。

人為による夏の終焉など蹴散らかして、自然界は依然として真夏の暑気を保っている。入道雲はもくもくと湧き、戸外に出た瞬間にむっとくる熱気は相変わらずだ。

だがよく見ると、夏は疑いようなく終焉に向かっている。

その一つは、夕立が降らなくなったこと。夏の頂点(八月初頭)からの二週間ばかりが、私の経験でいえば夕立のシーズンである。それを過ぎると夕立はパタッとやんで、秋風が立つ。昼間の熱気を透過して小止みなく吹く風。カーテンをひるがえす風。その清涼感はどうも夏ではない。

二つ目は、明け方の涼しさ、いや肌寒さと言ってよい感覚。誰もが体験しているところだろう。

さらには、日暮れがぐんぐん早くなっていく。  
 まだある。夕焼け空の寂寥感。沈む太陽が家々の壁を真っ赤に照らした夏の力感はずでに過去。  
 西空は今、黙して変化する神秘のグラデーションを、静かに力なく示すのみ。それこそが真の実像  
 であると言わんばかりの、永遠の寂寥感を伴って……。

この夏、卒業生が何人もわが家にやってきた。すでに社会人になっている人、卒業したばかりの  
 人……。かつて教室で、生徒と教師という、一種の上下関係で結ばれていた我々が、今は、未来に  
 パラ色の可能性を秘めた存在と、非可逆的に夢を失う一方の哀れな存在とに打ち変わっている。そ  
 れを痛々しくも実感させられるのが、ひよっとすると衰えから身を守る一つの手段かもしれないと、  
 自らに言い聞かせつつ悲哀の涙を舐めている私なのである。

### ■夕日公園

(一九九七年十月九日《木》)

松山から車で一時間弱、双海町の海岸にシーサイドパークと名づけられた小公園がある。人はこ  
 れを夕日公園と呼ぶ。山が一気に海になだれ落ちている切り立った海岸線に、階段状のテラスが延  
 々と続く。座ると、目の先は傾斜のきつい砂浜と水平線まで見渡せる海。道具立てはそれだけだ。  
 遊具のたぐいは一つもない。不要なのだ。

モダンなカラーテラスに腰を掛け、若いカップル、子供連れ、さらには老年の夫婦までもが、毎  
 日大勢やってきて夕日を眺める。

潮騒を聞きながらそのときを待つ。やがて真っ正面に夕日が落ちる。海のだ真ん中に落ちていく。  
 雄大なドラマ。

ドラマを味わうというよりも、それを固唾を呑んで見つめる醍醐味を味わうために人は来る。見  
 つめるうちに、体にたまった澱が溶け去っていく。気分がすーっと軽くなる。

海に長い尾をたなびかせながら落ちていく夕日。やがて半円となり、点となり、最後のその一点  
 が落ち尽した瞬間、あーっと、声ならぬ声がテラスに響く。

### ■電車通勤

(一九九七年十月二十四日《金》)

昔は電車通勤だった。それがいつからか便利さの魔力に取り憑かれて、マイカー族に身を墮して  
 いた。車はたしかに便利な移動手段だ。だけど毎日乗っているとこれくらい人を空疎にするものは  
 ない。出発地と目的地を点と点で結ぶ機械、人をハンドルに奴隷のように捕縛する道具、魂から精  
 髓を抜き取る注射針、それが自動車だ。

近頃、車をやめて、電車通勤に戻った。電車にはさまざまな魅力がある。一つは、何と言っても  
 本が読めること。片道三十分、往復で一時間。その間、毎日、本が読める。これは比類ない魅力だ。  
 第二は、歩くこと。家と駅、駅と職場(学校)の間は必ず歩かねばならない。健康的だ。しかも、  
 歩くとおのずと自然と接する機会が増える。ときには詩的な、ときには自然科学的な発見をするこ  
 とがある。

歩きの世界は幼子の世界だ。幼子の視点は地面に近い。大人よりもはるかに自然と身近だ。歩い

ていると幼子になる。草花や木々、小石や水の流れ、あらゆる自然が赤裸々の姿をまぢかに見せる。堪能するまで立ち止まることもできる。

第三に、電車の中では多くのマスの人間存在を至近にし、実に多様な刺激を得ることができ。女子高生の他愛ないおしゃべり、OLの社内人物評、茶髪の男子高校生のナンパ体験談など。聞くともなしに聞いていると、知らざる世界を覗き見ることができ、これほど楽しいことはない。

とはいえ、車の中で一人孤独に運転するのも。疲れた心身を休め、自我を取りもどすのに有効であるのはたしかである。仕事を終えてほっと安堵の息を吐くのは、いつも帰りの車の中だった。どちらかがよくて、どちらかが悪いという話ではない。時と場合によるのである。今は概して電車に価値を置く私なのである。

## ■七夕やしろ

(一九九七年十一月二十八日《金》)

学校の西、瀬戸内海を見下ろす小高い丘の中腹に福水神社という、さして大きくはないが由緒ある神社がある。

昔神功皇后さまが三韓を征し給ひてお引上げの後、応神天皇さまをお産みあそばされて御東上のせつ、此の地に船を寄せられまして湯水を奉る。里人福水神社と申し上げる様になりました。

と由来書にある。

滅多に人が訪れることはないと思えるこの神社の石段は、人の腸を思わせるほどくねくねと長い。私も昨日、初めて登った。途中、ふと見ると、藪の中へ、あるかなきかの細径がついていた。荒れ放題の藪を掻き分けて入るのは、地獄に通じているようで勇気がある。でも、見つけた以上は入りたい。恐怖に震えながら藪を掻き分けた。しばらく行くと、意外にも、狭いけれども開けた小空間に出た。

そこには幼児の背丈ほどの小さな石碑があって、「七夕やしろ」と彫られている。石碑のそばには雛祭りの内裏くらいの祠があって、これがどうやら七夕やしろらしい。

中に親指ほどの恵比寿様が入っている。

唐突に現れた「七夕やしろ」のロマンチックな文字に私は魅せられた。きっと遠い昔の物語がこの「やしろ」には秘められているのだろう。だが、石碑の裏側を見ても、どこを探しても、ヒントになる言葉は一つもない。

七夕の日に、一人の幼な子が悲劇に遭遇したのだろうか、ひよっとすると亡くなったのだろうか。そんなことも想像したが、祀られているのが恵比寿様であることを思うと、それはなさそうだ。

単に七夕を祀る(祝う)だけの社なのか。それもちょっと不自然すぎる。

恵比寿様は幼くして病死した我が子の遊び道具だったのだろうか。それを親がこうして小さな祠



七夕やしろの石碑とほこら

に祀ったのか。それならとりあえずのところ筋が通る。何と言っても恵比寿様は親指ほどの大きさなのだ。

踏み入った小径は、濃縮された時間の壁を抜けるトンネルであった。覗いてはならないヴェールをめぐったような、言いようのない恐怖が襲ってきた。私は足早に逃げ出すしかなかった。

## ■クリスマス祝会

(一九九七年十二月十七日《水》)

昨日で二学期が終わり、恒例のクリスマス祝会が行われた。

神父のメッセージは、地球環境問題から始まって、最後は「すべてを捧げる人になれ」というもの。マザー・テレサが残した言葉だという

「自らに痛みを感じるまで、人にすべてを与え尽くしなさい」  
で締めくくられた。

自己満足や他からの賞賛を目的とした偽善的な奉仕は言うまでもないが、自分のために最後の一物を温存した上で人に尽くすことも欺瞞であると、マザー・テレサは言っている。なんと厳しい言葉だろう。

それで思うのは、アッシジの聖フランシスコが、財産をすべて人に施した上で、着るものも捨て、裸同然で、食べ物も鉢鉢で得ながら修道生活に入った姿である。フランシスコもマザー・テレサも、苦痛をあえて友としながら、何を希望としていたのだろうか。

自虐的に苦痛を味わうだけが目的であつたはずはない。フランシスコは、十字架上で手足に釘を打たれて血を流すキリストの苦痛を、おのが苦痛として追体験することを究極の目的とした。かつてそんなことを読んで覚えがある。

最後の一物まで捨てたフランシスコにも、人が残っていた。つまり弟子が。そして彼を支援する貧しい大衆や、さらにはローマ法王さえもがいた。彼は清貧をモットーとする孤独の修道者であると同時に、組織の指導者であり、絶大な影響力を発揮するカリスマ的超能力者でもあつた。

彼の心は常に満たされていた。彼にとってさえ千年を越える過去の出来事であつたキリストの処刑を、彼は自らの苦痛を通して追体験しようと厳しい修行を行った。だが、その細くとぎすまされた感性の向こうに、彼は揺るぎない自信で自らの住む地を確かめていたのであつた。

捨て尽くしたのは、世俗の財産であり、家族の団欒であり、身を包む衣類であり、生きるのに余分な食物であつた。人から見れば、それは限界を超えた苦痛であつたろう。しかし、フランシスコには、それは決して耐えがたい苦痛ではなかつた。代わって、揺るぎない精神の安寧を手に入れたのだから。神によって保証された安寧を。

私のような日本人は、絶対存在たる神を信じるヨーロッパ人とは発想の根幹が食い違っている。

「社会に役立つ人になりたい」

日本人は子供のころからよく言う。そのようにいつのころにか教え込まれたのだろう。だが、社会というのはあくまでも相対的關係である。相対的關係をいくら引き伸ばしても、絶対存在に行き着くことはない。

絶対的存在には、人それぞれが自分の内で、原初の無をじつと深く想像してみる以外に遭遇する方法はない。キリストの苦痛を、私は宇宙の原初的無に見るのである。

と、そんなとりとめもない幻想に、神父のメッセージを聞きながらひたっていた私であった。

## ■文系人間と理系人間

(一九九七年十二月十八日《木》)

これまで私は、プログラムを書くのにもっぱらC++を使ってきた。ところが数ヶ月前から、PortlandのC++Builderというのに乗り換えてみて、これが実に使いやすいのを知った。

クラス・ライブラリーが充実している上に、よく使うクラスはコンポーネント化されていて、ビジュアルに組み込めるようになっていて、プログラマーがなすことは、プロパティーの細部のコーディングだけでよい。C++によるプログラミングになじんできた者には画期的である。車で言えば、マニュアルからオートマチックに乗り換えたようなものだ。

もちろん外部からは見えない内部処理の部分はビジュアルでやれるわけがなく、これまで通りC++で書く。これは仕方ないし、それがプログラマーの腕の見せ所でもある。ともあれ、元来は本質的でないユーザインタフェースにかかわる手続きが簡素化されたのありがたい。

なぜこんなことを書いたかという、それが理系人と文系人との、世の中のとらえ方の違いにかかわることだと思っただけである。

文系人は、科学技術はブラックボックスでよいという。理系人間の目で見ればそれこそが本質であるところの内部処理には関心がなく、とにかく結果が出ればよいというのである。つまり、ユーザインタフェースだけあればよいというのである。文系型の人間は、理系人間の創造物を既成の事実として借用し、それによって理系人間そのものを使用し支配する立場にあると錯覚する。

会社組織で言えば、理系人間が働いている研究開発や技術開発分野、さらには製造分野は、文系型の人間から見ると、いわゆる「現場」にすぎず、それは中身のわからないブラックボックスであってよい。それに対して、文系型の人間が働いている、経営や営業企画などの分野は、「管理部門」とか「サポート部門」などと呼ばれて、上位に位置すると見られている(錯覚されている)のである。

学校組織でも同様である。「教育現場」下位、「非現場の管理部門」上位」という感覚で仕事をとらえる人がいるものである。

私などの理系人間は、そうは考えない。ブラックボックスの部分こそ大事であると考え。現場を離れている人たちは、現場の環境をよくするための、あるいは現場相互の意志疎通をはかるための、交通整理の役割を果たしてくれれば、それでよいのである。本質的な仕事の場合はあくまで現場なのだから。

プログラミングでいえば、ユーザインタフェースにあたる部分が文系人間の仕事場であり、それはプログラムの内実には無関係であって、内実と外部との意志疎通のためのいいあんばいの踏み台になることだけがその任務なのである。

文系人間が勢威を誇っている組織は、何であれ、退廃と墮落の巣窟になる危険をはらんでいる。現場が力を持つ組織にはそれがない。理系人間には、ドロドロした人間関係の汚泥は無縁。真理の

ほかに価値を見いだすものがないのだから。

## ■わが川、重信川

(一九九七年十二月二十日《土》)

ジョギングを毎日の日課にしている。距離は五キロから十キロ。重信川の土手が定番だが、他にも五種類ほどのコースがあって、その日の気分で走りわけける。振り返ると、この土手を走り始めてもう二十年になる。走っても走っても、走り飽きることはない川である。

一昨日の愛媛新聞に興味深い記事が載っていた。

「南吉井村大字牛淵字井口付近の重信川堤防が約六十七間(百二十メートル)にわたって決壊、逆巻く濁流は牛淵より北野田方面に侵入しつつあり、前記個所より少し東手の堤防約二十間(三十六メートル)も決壊せり」

大正元年九月の愛媛新聞からの転載である。

ここにある「南吉井村大字牛淵字井口付近の重信川堤防」というのは、私がいつも走る土手である。記事によると、昭和十八年と二十年にも同規模の決壊があったという。

重信川が暴れ川であることは、何かの本で読んだことがあったし、老人たちから話に聞いてもいた。天井川という地理的状况を考えれば、当然とも言える現象である。このことはすでに書いたこともあるが、一昨日の新聞記事で、私の聞きかじりの知識に真実という太い心棒が通った気がした。

想像空間に一滴の真実が添加されると、その瞬間から、想像の翼はとどまるところなく広がるものである。スコットが『ミドロジアン』を書いたのも、そんなきっかけからだった。ある夫人から寄せられた手紙に、彼女が一人の気品あふれる老婆に出会ったことが記されていた。そのほんの短い出会いの話が、スコットの想像の翼に火をともした。「一滴の真実の添加」となったのである。

スコットランドの片田舎で生を送った一人の老婆の過去が、こうして波瀾万丈の長編小説として世に出ることになった。『ミドロジアン』は、わずか一通の手紙をたたき台として、スコットがすばらしい想像力で無限のイメージ空間を創造した作品であった。

私にとって、一昨日の新聞記事は、スコットに対する一通の手紙にも匹敵しそうな衝撃であった。彼のような作品を生み出す力は私にはないが……。

## ■伊藤整と小林多喜二

(一九九七年十二月二十一日《日》)

伊藤整の『近代日本人の発想の諸形式』を読んだ。伊藤整は、文体といい、彼自身の発想の基本形態といい、私の精神構造に強く共鳴する作家である。

高校時代に小説『氾濫』を読んだのが彼との出会いの最初であった。次いで、彼が小説を書き始める前の詩人時代の詩集を読んだ。最近では、『詩人の肖像』が強く印象に残っている。ふるさと小樽で中学生生活をともし、同じ演劇部の仲間でもあった小林多喜二との交友など、なかなか興味深い。

『近代日本人の発想の諸形式』で、明治から太平洋戦争に至るまでの、日本人作家の発想の基本

をいくつかのパターンに分類している。だが、その中に小林多喜二の名前は出てこない。プロレタリア作家を評論する中においてさえ、中野重治、宮本百合子、佐田稲子などが語られても、小林多喜二はただの一度も登場しない。不思議である。

多喜二を暗示する個所はある。

多喜二は伊藤整にとって、少年時代からの友人であり、ライバルであった。あまりに身近で、しかもあまりに遠く隔たってしまった同業者とも言えた。

多喜二が思想を貫き通した末に、拷問によって死に至った真実を、伊藤整が冷静に受け止められなかったのは理解できる。

彼は語る。

資本主義社会を根本から否定するマルクシズムの理論を自分の中に育てた青年たちが、昭和の初年に文学の場に数多く現れた。……。青年たちにとっては、それらの思想は理論的に考えられた善と正義の規範であったから、思想弾圧は、彼らを多くの場合絶望的な反逆気分押しやった。現実には検挙されて非人間的な取り調べや拷問を受けたものは、警官や判検事たちに対して強烈な憎悪感を抱いた。……。思想弾圧は、多くの若い文学者をしてある時は表面的にはその思想を放棄させ転向させるという擬装を強いたが、ある場合には、絶対の強制に対して絶望的に抵抗するという衝動をも目覚ませた。そして、死をもつてもその行動を貫こうとする焦念を生かすこととなった。

さらに次のように語る。

文学者の場合、実践生活が尊重されるという日本の文壇では、この絶望的な行為すらジャーナリズムを意識してされる危険がある。革命的行動は、ジャーナリズムの中では発表価値のある演技である。……。それを意識しながら思想運動に身を投ずるといふ例が昭和初年にいくつもあった。そのとき、文士の革命行動は演技化されているのである。それは強められ、演技的に闘われた後、同じように弾圧されて、悲惨な状況で終わる。

ここまで語りながら、整はなおも多喜二の名前を出すことをためらっている。馬鹿な死に方をしたという思いが、幾重もの複雑な感慨に包まれた衣裳の裏に縫い込められているのがわかる。軽薄な文士革命家と多喜二を見ていないのは言うまでもないが、多喜二に「革命的演技者」の可能性を見ていたのも真実で、それは少年期をともに過ごした者にのみわかる直感であったろう。

豊かな才能をもった友人の、悲惨でしかも英雄的な死が、多喜二の名を口に出して語ることを無意識に拒絶するほどの衝撃を整にもたらした。『近代日本人の発想の諸形式』における革命文学への不透明な口調から、激烈な多喜二ショックを私は感じとったのだった。それは多喜二アレルギーと呼んでもよいほどのものだった。安易に手を触れられないほど、遠く隔たった存在になったのだった。

## ■ディレッタントの悲哀

(一九九七年十二月二十四日《水》)

風が強い。寒さはさほどでないが、犬と一緒に土手を走っていると、向かい風に立ちすくんでしまう。



そういえば去年だったか、同じような真冬の空っ風の中、土手をジョギングしていて、啞然としたことがあった。最初の五キロほどは追い風で、しかも追い風であることにも気づきもせず、楽々と走ったのだが、帰り道、風を正面から受けることになった。体を精一杯前方に傾けていないと後ろに吹き飛ばされそうな強風だった。

泣きたい思いで、とにかく帰り着くことだけをひたすら念じてあえぎあえぎ走った。そのときである。不意に後ろから赤いウインドブレーカーが現れた。あれっと思ったときには、体のそばをすり抜けていて、たちまち前方に出た。そして、あっという間に遠のいて行った。呆気にとられて後ろ姿を見つめるばかり。夢のような出来事だった。

私のような素人ジョガーとはまるでレベルが違う。勢いが違う。スピードが違う。向かい風など屁ともしないで突き進んでいった。

プロとアマの違いだ。囲碁の世界でも同様である。プロに指導碁を打ってもらって、どうしてもヨミの深さがちがうのかと、あきれ返ったことが何度あったことか。

「これでよし。しめしめ。さあ参っただろう」

と、胸を張って打ったのに、思わぬ次の一手を放たれて、

「ええっ、なんだこれは」

と目をまん丸くして相手の石を見つめたことが何度もあった。

あるときは、まったくヨミになかった手をわずか二、三秒の考慮で打ち下ろされ、瞬時に我が方の石が捕縛の憂き目に遭ったこともある。石が複雑にからみ合った場面で、さまざまな選択肢があるけれども、どう打ってもわが方の石は助からない。よくよく考えてそれがわかった。それを相手は瞬時に見抜いたのだ。

「あんなすごい手が一瞬にして見えるものなんですか」

あまりのことに、対局後、相手のプロ棋士に尋ねたのだった。

「ええ、まあ」

それが答えだった。なんと馬鹿げた質問をしたものよと、すぐに気づいた。子供のころから切磋琢磨して厳しいプロ修業を積んできた人に対する質問ではなかった。あまりに失礼な質問だった。

これはどの世界にもあることだろう。素人が物知り顔に得意がっても、その道のプロから見れば見戯にすぎない。しかも、たいていの場合、素人はその違いに気づいてもいない。実際、差はわずかなのかもしれない。だけど、そのわずかな差が乗り越え不可能な差であって、両者は深い断崖で隔てられているのである。

素人芸は所詮ディレタントなのだ。趣味者なのだ。好事家なのだ。実を言えば、これは私にとって、人生の悲哀の源泉でもあるのだ。

## ■いわさきちひろの絵

(一九九七年十二月二十七日《土》)

書斎の壁に絵が六枚並んでいる。数年前、カレンダーから一枚ずつ切り抜いて押しピンで止めていったもの。二ヶ月で一枚の絵だったから、この六枚がすべて。一年がかりで貼り終えた。どれもいわさきちひろの絵だ。

毎日眺めているが、厭きることがない。仕事をしていると、デイスプレイの向こう側に必ずこの絵たちがいる。真つ正面に居るのは赤い洋服を着て横座りした女の子。右手は体重を支えて床をつき、左手は胸の前で黄色い落ち葉をつまんでいる。親指、人差し指、中指の先がそつと落ち葉の葉柄をつまんだ形は、くるつと丸まって円になり、小指は円から飛び出して、すつと前方に伸びている。

落ち葉をつぶさないようにと、そつとつまんだ微妙な力の入れようが、この絵にふるえるような不安感と緊張感をもたらしている。同時にそれが少女の揺れ動く気持ちの表象ともなって、愛らしさを高めている。

体重は床についた右手のひらの付け根に集中している。その力の余波で、右手の指先は行き場のない窮屈なラインに折れている。あどけない指のたわみがいかにも自然で、美しい。

耳の横にリボンで結んだ二本の髪が垂れている。顔はやや左にかしぎ、くりつとした黒目がやや下方に向いている。鼻と口はあるかないかの微かなタツチで描かれている。

きゅつと結んだ薄い唇と伏し目がちの黒目の視線とが、三次元の仮想光線を前方に発して、それがちようど私に焦点を結んでいる。

微笑んでいるのか、もの憂げなのか、いずれともつかない少女の不可思議な熱線を、私はここ何年も浴び続けてきた。

去年、女性彫刻家カミーユ・クロードルの作品展を見に行った。「フードをかぶった少女」という作品に魅せられた。敬虔なカトリック信者であろう少女が、深い祈りの世界に埋没している。かぶったフードの深さが祈りの深さを表徴している。

私はその作品に、百年の時を慎ましく生きてきた命を感じた。彫像に仕上げられた生命は、時を超えて永遠に、若さと瞬時の眼差しを、さらには制作者の美的感性を、まるでライトブルーの氷に詰め込んだように、固化してしまう。

百年前の制作現場の息遣いが生々しくそこに感じられ、今まさにノミを入れている手を、時の経つのを忘れて想像していた。

造形芸術は、美的に構成された生命の永劫回帰なのか。それとも無に帰することを拒絶された屍なのか。よい作品はきつと前者であろう。

### ■プログラミングで年を越す

(一九九八年一月六日《火》)

新年の感慨は歳とともに薄れてゆくらしい。十二月三十一日から一月一日へ、つまり、古い年から新しい年へと足を踏み入れた瞬間の何とも言えぬ胸苦しい思いは、今となっては遠い昔物語になつてしまった。

今の今まで自分を運んでいた年が、その瞬間から過去に置き去られ、しかもそれがただ川向こうに置き捨てられたというのではなくて、この世界から永劫に消えてなくなったという厳粛な事実。人の死にも等しいその事実を、取り巻く空間の微妙な緊張感から読みとつたときのすさまじい恐怖は、青年だった私には耐えられない逼迫感をともなった。

時間の神秘と、無の直覚。これを最も峻厳に味わうのが、大晦日の午後十二時であった。

今回はどうだったろう。四十代最後の大晦日であり、新年であったにもかかわらず、感慨は他人事だった。通り一遍の新年しか迎えられなかった。例年であれば、遠くの寺から地を這うように響いてくるゴーン、ゴーンの除夜の鐘を聞きながら、一人机に向かって思いに耽り、それを日記にぶつけるのが常であった。今年はそれさえなかった。

いったい何をやってたんだろう。妻や娘が階下でテレビを見ていたときに、私は二階の書斎で机に向かっていた。それはたしかだ。しかし、日記帳に向かわず、プログラミングに熱中していた。夢中になっているうちに、気がつくとすでに古い年は去り、新年に入っていた。思いに耽る隙も、感慨もないまま、我が身はすでに新しい年に突入していた。

私は毎年二、三ヶ月、プログラミングに熱中するくせがある。ふと思いついてやり始めると、寝食を忘れてしまう。その間、頭は散文になる。自己を見つめて思いにふけり、読書を通して別世界に遊ぶ。その種の楽しみは、その間、私からはぎ取られてしまう。

「知識データベース」と仮に名づけているソフトが、やっと昨日、細部のデバッグが終わって、完成を見た。自分が使うだけなら、細かいバグや使い勝手など、さほど気にすることもないが、今回はネットに載せて人に使ってもらうことを念頭においていた。だから、ずいぶん細部に気を使った。

なんとか完成を見て、いつもの自分が戻ってきた。

自然を味わい、その神秘を探り、同じ目で自分の内部を見つめる。これが本来の私だ。しびれて無感覚になっていた部分にじわっと血流が戻ってきた。その快感が、いま私を包んでいる。

ちようど冬休みも終わったところ。新しい精神生活の始まりだ。

## ■本当に不況？

(一九九八年一月十二日《月》)

二週間ほど帰省していた長女が、今日発った。最後だからと、昨日は雨をつけてモーニング・バイクングを食べに出かけた。

車で五分ほどの、よく行くレストランだ。この風雨だから客はいないだろうと思っていたのに、なんと店は大にぎわいだった。松の内の日曜日だからだろうか。普段は日曜日でも、ここまで混むことはない。店のオーナーもびっくり顔だ。

二日にも別の和風レストランに行った。そこも入り口に行列ができる盛況だった。用意した食材があつという間に底をつき、昼には店を閉めようと思うと、オーナーはあきれ顔。

「正月早々こんなにお客が来るとは思いもしていませんでした」

正直者のオーナーは、半分照れた笑顔で訥々と言った。

こういうのを見ると、不況不況と言うけれど、不況ってどこにあるんだろうと思ってしまう。今の不況は、庶民の不況ではないようだ。得体の知れない、どこか遠くの不況だ。濡れ手に泡でもうけていた連中が、バブルがはじけたと叫びながらのたうち回っている。

だから、あらゆる出来事が庶民には不透明。庶民のあずかり知らぬところで生じた火事は、庶民のあずかり知らぬところで消してもらいたいもの。儲かるときには儲けを庶民に裾分けする気などさらさらない連中が、どうにもならなくなった今、庶民の台所から一律いくらで義捐金を出してく

れと叫んでいる。そんな印象の今の不況だ。

本当に不況なんだろうかと、疑心暗鬼になってしまふ。不況を口実に、誰かがどこかにため込んでいるのでは？ そんな気にさえなってくる。気がするどころか、きつとそうだ。ほとぼりが冷めて皆の意気が消沈した頃、やおら立ち上がってくるのは彼らだろう。さんざん庶民から吸い上げた拳げ句、それを庶民に返す気もなく、ふたたびもうけに向けて突っ走り始める。きつとそうなる。

## ■関東は大雪

(一九九八年一月十五日《木》)

関東の大雪は記録的らしい。かつて府中に住んでいた頃、今回のような大雪を経験した。二、三十センチは積もっただろう。新婚の妻や近所の小学生たちと雪だるまを作った。かまくらも作った。雪投げで遊んだ。まるで子供だった。子供のように若かった。

今回の降りようはあの比ではないのかもしれない。

娘が神奈川にいて、成人となった。だのに成人式に出ず、春休みの海外旅行のためにバイトをすと言っている。親の感覚で子を縛るのはいやだから、したいようにまかせたのだが、この天気の中、振り袖で出席する新成人をテレビで見ていると、娘がちよっとかわいそうになる。しかし、出席率が低かったと聞くと、今度は少し気が楽になる。親心って、なんて現金で単純なものなのだ。

松山は雨。昨夜は猛烈な風も吹いた。季節はずれの低気圧が通過したのだ。この低気圧が今日、関東に雪をもたらした。

大雪というと、暖冬予想に反するようにも思えるが、どうやらそうでもないらしい。逆に暖冬を象徴する現象だという。大陸の高気圧の張り出しが弱いのだ。例年ならば、大陸高気圧によって、今ごろの日本(太平洋側)は晴れて寒いはず。ところがそれが弱いものだから、まるで春先のように太平洋の低気圧が日本付近を通過する。太平洋から大量に供給される水蒸気が上空で冷やされて大雪をもたらす。

雨で犬を散歩させられず、庭を勝手に走らせておく。

その間、人間は家で逼塞だ。虚子の俳句を読んだ。読みながら、百年という時の経過が日本の自然や風俗を変えてしまったことを痛感した。だが反面、生きている人間の一瞬一瞬の感性に、何の変化もないことも知る。二千数百年も昔のプラトンを読んでいてさえ、そこに生きている人たちの感性は今となんの違いもないことを、あきれくらいい思ひ知らされる。だまし合い、自己弁護し、友を求め、心の奥では真実を求める。

たかが百年で人の本質が変わったりはしない。思えば当たり前すぎる当然の事実であった。

## ■『田園の憂鬱』に思う

(一九九八年一月十九日《月》)

昨日の日曜日は模擬試験の監督で出校。

一人で一日監督するから、神経を監督に集中できるわけがない。ときおり机間巡視でぐるぐる回るが、大半は教卓に座って本を読む。これが模試の監督の余得であり、楽しみでもある。

昨日は佐藤春夫の『田園の憂鬱』を読んだ。詩人の文章である。自然の微妙な綾が感性豊かに描

かれています。百年前の武蔵野はずれの田園である。

茅葺き屋根の古びた家を、

「目眩しいそわそわした夏の朝の光の中で、鈍色にどっしりと或る落ち着きをもって光っている」と形容できる主体に、私ははるかなあこがれを覚え、同時に百年の文明の毒を忌まわしく感じた。

実は「目眩しい」をどう読めばよいのかわからないのだ。「目眩」が名詞としては「めまい」とか「めくらまし」であるのはたしかだから、とりあえず「めくらまし」と、頭の中では読むことにしたが、そんな形容詞が日本語の中にある気がしない。当の本人は「まぶしい」のつもりで書いている気もする。なら、頭の「目」は要らないはず。目眩く（めくるめく）という動詞もある。だがそれが「目眩しい」という形容詞に変化することはないだろう。

まあ、つまらぬ詮索は脇に置くとして、人間は自然の表面にどこまでもオブライトをかぶせ続け、薄皮で塗り込め、自然とのなまの接触を忌避する暮らしをシステム化してきた。そのシステムを文明と呼び、都市化と呼び、便利で機能的とありがたがっている。

人はこうして自らを人造化し、人以外の自然物を「汚れ」と感じる感性を培ってきた。かつては、裸の尻を地面にぺたりとつけて座り込み、火を囲んで肉を手づかみにほうばる暮らしを続けていた人間である。岩影で星の瞬きを仰ぎ見つつ眠った人間である。

ふと思った。今自分が飲もうとしている水は、長い地球史の中で逃げも隠れもせず、さまざまな生命を支え続けてきた水だ。この同じ水、同じ水分子を、何千年、何万年、何千万年の昔の生命が、喉を潤し、命をはぐくむために使ってきたのだ。

## ■おお、薔薇、汝病めり

（一九九八年一月二十二日《木》）

『田園の憂鬱』の残っていた半分を、昨日終えた。

都会生活に倦み疲れた主人公（二十歳代半ばの佐藤春夫自身か）が、元女優である妻と犬二匹と猫一匹を連れて東京郊外の田園に引っ越すところから話は始まっていく。村人の生活にとけ込むでもなく、かといって無縁をつらぬくでもなく、ほどほどの交わりを保ちながら、何一つ仕事をせず、ぶらぶらと不思議な精神世界をさまよっている。

妻は彼に同情し、理解を示しながらも、意識の半分は東京暮らしの方を向いている。

犬と猫のみが、狂気と紙一重の彼の崩壊を防いでいる。幻聴、幻視につきまといられる彼にとって、二匹の犬は、幻聴幻視の世界の使者であり、同時に、彼を救う現実世界の現実的存在そのものでもある。あるときは彼自身となり、またあるときは彼から離脱して浮遊する精神の担い手ともなる。

大正初期の作品とは思えぬ斬新な精神世界の描写である。

最後には薔薇が、虫に食われ炭に焼かれ灰にまみれた「病める薔薇」が、彼の崩壊を救う予兆となる。そして何度も何度も

「おお、薔薇、汝病めり」

が繰り返される。再生の予兆と見ることができ。

何とも不思議な作品であった。物語性はまったくなく。筋道がない。どここれは小説である。それ以外に属すべき範疇は見当たらない。随筆、哲学的散文、散文詩、そんなものではない。十分

に構想され、練り上げられた小説である。私小説などと、安易に括ってしまうこともできない。作品を容れる物理的空間は、引越した古い茅葺き屋根の家。そして語られている真の空間は、彼の精神的内面。だからそこでは、脈絡をもって語られるべき話の論理的整合性など、そもそもありはしないし、必要でもない。

読み終えたときの不思議な不安と安堵、さらには、自分の精神のよりどころをたしかめたくなる気持ち。読者の心を微妙に揺さぶるこの力は、作品が持つ時を越えたエネルギーを証明している。

### ■入試の採点は戦いの場

(一九九八年一月二十九日《木》)

二十五日に中学入試、二十六日に高校入試があった。どちらもその日のうちに採点を終え、二十七日に選考会議と事務処理。合格発表は二十八日。処理の速さは一級品だ。

結果はすべてレタックスで家庭に送られる。掲示板による発表は数年前から取りやめた。受験番号だけの掲示であっても、個人情報開示上の問題がある。

入学試験は選別するためにある。学内での平常の試験とは意味が違う。たった一度の、わずか数時間の頭の働きが、その後の人生を左右する。採点結果の数値テーブル上に、厳然たる合否の境界線が引かれ、テーブルが、いや人間が、二つのグループにふるい分けられる。

入学試験が人間的である場面は、あるとすれば、採点現場のみである。いったん数値がはじき出されてしまえば、待っているのは機械的なコンピューター処理のみ。人間的要素は舞台の裏にかき消されてしまう。

採点していてもいつも思うのは、同じ答えに行き着いていても、得点が違ってくる場合があることだ。これは採点ミスとか採点基準のゆらぎではない。答案の書き方の問題である。

採点者(たとえば私)に解答の意図するところがスツと伝わってくる答案には、一目見ただけで(つまり一字一句を追わなくても)満点が与えられる。それに反して、どこをどう見ても解答の筋道のわからない答案がある。最後の答えは合っていたとしても……。

ひよっとするとこの受験生は、私などよりうんと頭が良くて、素早いひらめきで途中の筋道や計算をすっ飛ばしているのかもしれない。だけど不運にも、私を説得させられない答案には満点は与えられない。容赦なく減点される。そういう場合、一枚の答案に五分も十分も、あるいはもっと時間を使うことがある。素早いひらめきの一端でもどこかに記されていないだろうか、必死に探し、考えるのだ。

その時間が、人間的な戦いの場面となる。一枚の答案用紙をはきんで、受験生と採点者とが激しい応酬をする。

「この数値の出ってくる理由を答案のどこにでもよい、ひと言書いてくれさえすれば、納得して満点をあげられるのになあ」

「いやいや、そんなのは僕の頭にとっては当たり前すぎることですよ。ほら、チョチョイのチョイチョイ。暗算で終わってしまうのではないですか」

「悲しいかな、そのチョチョイのチョイチョイを答案の中に書いてくれないと、私にはとても理解できないよ。超論理というやつだ。いやいや待てよ、ひよつしたら私が知らないだけで、受

験世界では公然と認められている特殊な定理とでも呼ぶべきものがあるのかな」

こうして、しばらく悩まされる。場合によっては、数学科の教師全員が頭を揃え、受験生の意図するところを探り出す努力をする。そのうち誰かが「あっ」と叫んで、その論理を解読できる者が出てくれば、受験生の勝利である。

誰にも解読不可能な場合には（数学科の教師全員の無能力を意味しているかもしれないが）、結果は「ダメ」、つまり減点である。その線引きは、ときには運・不運としか呼びよれない場合もある。

このわずかな減点が、結果として合否の線引きにまで影響を及ぼすこともあるだろう。これもまた運である。

### ■通過される者

（一九九八年二月二日《月》）

昨日は高校の卒業式。穏やかな日差しを浴びて、四十期生が巣立っていった。

式が終わると、目の前を二百四十九名の卒業生が通過していく。拍手を浴び、照れながら、わき上がる思いをかみしめるように口元を引き締めた彼らが通過していく。

一団が通過したあと、在校生も父母もぞろぞろと出て行った。教師連も出て行った。最後に私はぼつんと取り残された。そこは空っぽの空間だった。拍手の残響がいつまでもこだまする空間だった。天井を見上げ、虚空に何かをまさぐっていた。

「取り残された」という思いが私を包んでいた。こうして来る年も来る年も、ひとつととりに取り残されるのだ。

彼らは、さっそうと列をなして通過して行く。「未来」という光輝に満ちた世界に向けて歩んで行く。

これまでいったい何人が私の目の前を通過していったことだろう。

私にはもう未来はない。ないのだろうか。光輝あふれる未来は、もうないのだろうか。墓の幻影をむなしく抱いて暮らしてゆくほか道はないのだろうか。

私にも卒業式を下さい、そう叫びたい気持ちに襲われた。

帰ってテレビをつけると、教育テレビで小林光一九段と新鋭の羽根六段の碁をやっていた。激しい戦いの碁で、最後には羽根六段が天下の小林九段をねじ伏せてしまった。「よくやった」と拍手したい一方で、小林九段に「通過される者の悲哀」を感じ、思わず我が身に重ねざるをえなかった。これが人生なのか。通過されてこそ、人生は人生たりうるのか。蕭々とそれを受容するしかないものなのか。

### ■命のはかなさと永遠の価値

（一九九八年二月八日《日》）

朝から猛烈な風だ。これを何と呼ぶのだろうか。やはり春一番だろうか。それにしても、吹き荒れようがあまりに激しい。「春一番」が感じさせる優雅で詩的な趣はまったくくない。

突風にあおられながら、激しく雪が舞う。大きなべた雪だ。運転していると、ときに視界がきかないくらいになる。横殴りに舞う。よく見ると、舞い狂っている雪に濃淡の縞模様がある。密度ゆ

らぎだ。密度の濃いところが、まるで大宇宙を漂う銀河のように、紡錘形になったり、糸のように伸びたりしながら、猛烈な勢いで目の前を流れてゆく。

フロントガラスに打ちつける雪はペチャツと音を立てる。押しつぶされると直径二、三センチにもなる。窓が冷え切っているので、しばらくは溶けないでくっついていてる。

湿ったべた雪にもちゃんと結晶がある。これはちょっと意外だった。チカチカと針状に分岐して四方八方（正しくは六方）に伸びた結晶。まだまだ成長途上の若々しさが感じられる。伸び盛りの若者がいきなり窓に打ちつけられて、あえなく最期を遂げたのである。そんな武士道的な死の姿がそこにある。

次々と彼らは窓に打ち当たって倒れていく。風に吹きあおられる空間は戦場なのだ。敵味方入り乱れて荒れ狂う戦場なのだ。人間はこうした修羅場を幾度となく経てきたのだ。一つしかない命と命が激しく格闘し、互いを消し合っていく。

命が最も軽くなる瞬間。そして命の奥で、命をつないでいる何物かが、最も鋭く光輝を発する瞬間。それが戦場での死の場面なのだ。

雪の激しい乱舞を前にして、彼ら一つ一つの命の軽さと、はかなさと、その奥にある永遠の命（彼らを彼らたらしめている自然原理）を、思わず感じとった私であった。

### ■桜の中に取りこまれた私

（一九九八年二月十六日《月》）

犬を乗せて重信川の上流に出かけてみた。河川敷に公園があり、桜の裸木がぐるりと公園を囲んでいる。花の季節にはすばらしい花見公園になるだろう。だが今は誰の目も引かない裸の木々たち。こっそり、ひっそりと公園の隅々に埋もれている。

しだれた枝を手にとってみた。さわると一瞬身が縮むほど冷たい。凍えている。これでも生きているのか、君たちは。

この冷たさ、凍えように、自然の哲理を感じてしまった。太陽、寒風、雨や雪、あらゆる自然現象を、そのまま無抵抗に受容するしかない生物の哲理を。これが生き物なのだ。自然の中に産み落とされ、自然を住処とし、自然を摂取して生きることを、ためらいもなく受容している彼ら生物。ただ人間だけが、自然を忌避し、自然を敵に回して生きる知恵を身につけた。

抵抗は、見放され捨てられることにつながるだろう。寄る辺ない人間よ。哀れな人間よ。そう思ったとき、私は桜の中に取り込まれ、彼らの時空に埋めこまれていた。私は一瞬、桜になっていた。桜の凍えの中に身をすりこませていた。桜は早くも蕾をつけて、春の胎動のさなかにあった。じつと耐えながら、春を待つて、せつせつせつと蠢いていた。

### ■無と有の連結

（一九九八年三月十二日《木》）

時間と空間は、実在物の入れ物、バックグラウンドというよりは、それ自体が物理的実在であり、生成物だとみなされるようになっていく。素粒子が生成・消滅を繰り返すように、時間や空間もまた生成し、消滅する。ビッグバンによって宇宙が作られる前がどうなっていたのかという、誰もが



抱くであろう素朴な疑問に、時間はビッグバンとともに創り出されたものだから、「その前」という世界は存在しない(少なくとも、この我々の宇宙には存在せず、見ることはできない)と、今の物理学は答えてくれるようだ。

考えていると、「無」こそが世界の真の姿ではないかと、恐怖とともに思えてくる。

絶対確定的に存在している自分という存在(これは自分の感覚によって確信できる)と、絶対的に無であった宇宙(そこには時間も空間も物質も一切合切すべてがなかった)との間に折り合いをつけようとすると、私はいつもとてつもない恐怖に襲われる。「時間も空間も何もない」という状態を思い浮かべる恐怖からは、多少は解放されてきたように思う。だが、何もない「無」から、今ある自分という「有」がどのようにして生まれたのか、なぜ生まれまいといけなかったのか、その連結をはかる恐怖にはまだ打ち勝てていない。

もし「有」が生まれていなかったなら、宇宙は永遠に「無」のままなのか。永遠という概念さえそこにはないだろうから、「無」であり続けるという言い方もできないだろうが。

要は「時間も空間も物質も何もないままである」こと。それが宇宙の本質だろうか。いったいどういう世界なのだ、それは。世界とさえ言えない世界。考えていると頭がクラクラしてくる。目眩がしてくる。

その何もない「無」から「有」が生み出される物理法則だけは、「無」の中にすでに内包されていると、物理学者は考えているのだろうか。本気なのか、彼らは。

ますます頭が錯乱してくる。

### ■三月十六日は永遠の春

(一九九八年三月十九日《木》)

十六日から春休みに入った。

この三月十六日は、昔から私にとって春のあたたかさを象徴する特別な日になっている。中学三年を終えようとしていたこの日、当時もやはりこの日が春休みの初日だったので、友人数人と自転車で小旅行に出かけた。弁当を持って朝早く出発し、瀬戸内海を左に見ながら今治方面に向かった。潮風がすがすがしい、あたたかな日であった。

途中、景色のよい砂浜があると、自転車を止めて海を眺め、相撲やキャッチボールを楽しんだ。そしてまた、自転車をこぐ。こうして高縄半島西岸をぐんぐん北上していった。私たちにとってはまったく未知の世界の旅路であった。

そのときの言いようのないあたたかな日差しと潮の香りが、いまだに三月十六日を私の内部で特別な日としているのである。気温は十六度だった。

以来、十六度は、冬の寒さから春のあたたかさへの転換点として、私の内部に植えつけられた気温になった。春の兆しを象徴する気温になった。

三月十六日が寒い日であることを許さない。三月十六日は永遠にあたたかな春の陽気の日でなければならぬ。しかも気温は十六度でなければ。

今年もやはりそうだった。

## ■ 一歩遅れているのもよいではないか

(一九九八年三月二十九日《日》)

いま我が家は私一人だ。帰省していた長女が妻と一緒にタイ旅行に出かけ、障害のある次女は私一人では面倒を見きれないため、短期入院となった。四匹いる犬のうち大型犬のリョウは、これまでの訓練士の家に預かってもらい、今私と暮らしているのは世話の焼けない三匹の中・小型犬だけである。

夕方、犬を連れて重信川の土手に出かけた。この土手は私のメインのジョギングコースであり、自然の懐に抱かれて時を忘れることのできる最愛の場所、私の精神そのものである。

私がよく走る土手の一部が改修された。この種の改修は、天井川であり暴れ川である重信川では、治水のために恒常的に行われている。改修の結果、土手の上に細長い芝生敷きの公園ができた。長さは一キロ以上ある。心地よい芝の公園で、犬を走らせるには絶好だ。

改修が済むと、公園に苗木が植えられた。ずらっと並んだ苗木には、もちろん私も気づいていた。だが、それが何の苗だか考えてもいなかった。あまりに幼く、か弱い苗だったものだから、それが何の木なのか、考える気もしていなかった。

今日見ると、何百本もの木が花をつけていた。いつも視界に入っていないながら、育っていることにさえ気づいていなかった。花を見てわかった。桜だ。なんとうっかりしていたのだろう。

見事な紅。初々しくてみずみずしい。誇らしげであり、恥ずかしげでもある。木たちはまだまだまだか弱く細いから、花はわずかだ。空がすかさずかしている。

歩きながら見ていくと、一斉に花開いたように見えながら、まだ裸木のままのものが何本かある。天に梢を突き立てて、孤高の姿をさらしている。悲しくも、また美しく……。

どの世界にも、個性というものはあるらしい。並みに従うのも悪くはないが、そうでないのもよいことだ。非主流を貫くのもよいだろう。一歩遅れているのもよいではないか。孤高を貫く桜の方が、なんだか可憐で、けなげで、いとおしい。まるで私を見ているようだ。哀れで、悲しげで、ちょっと誇らしげにさえ見えるではないか。

## ■ 過去、現在、未来は幻想にすぎない

(一九九八年四月十日《金》)

妻と娘がタイ旅行をしている間、なんと自炊の訓練をした。これまで手料理のレパートリーは、せいぜい肉野菜炒めか、卵焼きか、みそ汁くらいのものであった。レシピを見ながら焼きめしやハンバーグを作ってみた。レパートリーがわずかながら増えた。

フライパンを片手でポンとひっくり返す技術も練習した。これまで〇点だったものが、二〇点くらいになった。こんな些細なことが、やればできるじゃないかの自信になって、楽しくてならない。この歳になって進歩を実感するのは、なんとも嬉しく、新鮮な喜びだった。

時間の流れが一樣でないことは、アインシュタインの天才的頭脳が、数学を手段として導き出したものだった。実験的に導いたのではなかった。その検証が、宇宙的規模でなら、これまでさまざまなまされてきたが、地球上の実験によって検証されたというのには驚いた。

重力によって時間が遅れることが、地球表面のわずか数十メートルの高度差の二地点(つまり、

ほんのわずか重力に違いがある(二地点)で、実験的に確かめられたというのである。原子時計はナノ秒単位で時間を計れる。それを利用して、有無を言わず計測したのである。

「過去、現在、未来」という、我々が何げなく受け入れている概念が、物理的にはいかに根拠のない、あやふやなものであるかもわかってくる。宇宙空間という巨大な時空間において、まるで波が押し寄せてくるように、時間の尖端に「今」と呼ぶべきラインがあつて、それが押し寄せてくるというイメージはまちがいのようだ。時間は、時により、所により、状況により、流れ方は異なる。光という、宇宙の根元的存在者にとっては、その内部に時間は流れていない。光が一万光年の距離を一万年かかって到達すると見るのは地球観測系の我々の見方であつて、光自身の中では、光は一万光年の距離を時間ゼロで、つまり瞬時に到達している。これは明白なことである。

光速度にきわめて近い速さで飛ぶ粒子は、半減期数十秒の短寿命の粒子であつたとしても、何万年も離れたところから死に絶えることなく地球に到達する。つまり、その粒子の中では、何万年もの距離を飛ぶ間に経過する時間は数十秒以下なのである。人間が仮にその粒子に乗って飛ぶとすれば、うーんと背伸びして、さて煙草でも吸おうかとポケットをまさぐってライターに火をつける、その間に彼は数万光年の彼方に到達している。これはSFでも何でも無い、現実の物理現象である。もちろん彼の肉体が、そっくりそのまま向こうに届く保証はなかるうが……。

「過去、現在、未来の区別は幻想にすぎない。だけどそれは頑強な幻想である」  
アインシュタインの言葉である。

### ■潰瘍性大腸炎、深刻化の予兆

(一九九八年四月十八日《土》)

新年度の授業が始まって一週間になる。今年の担当は高一の数学。

昨年度は、教師になって最も気楽な年だった。クラス担任がなかったから。今年は再びクラス担任復活である。一年間気楽にすごしてきた身には、クラス担任の仕事はなかなかきつい。過去二十数年、それが当たり前であり、そうでない我が身を想像することもできなかったのだが……。

早速、「腹が痛い」、「熱がある」と、登校を渋る生徒が現れた。担任の出番である。まず母親と話をし、家庭内の様子や中学時代(といっても同じ学校だが)の様子を伺う。さらに、去年の担任に話を聞く。その上で本人と面談。そうした手順を踏んだ結果、なんとか登校できるようになった。ひとまず安堵の息をつく。

一人片づくとも、また一人、同様の事例が発生した。クラス担任は大忙しだ。

それとは別に、私の体調が悪い。持病の腸の病気が頭をもたげてきたのである。潰瘍性大腸炎という難病で、発症したのは三十六歳のとき。緩解期と激甚期を繰り返すのが特徴だ。最初に診断されたとき、主治医から、

「これは決して治ることはなく、一生つき合っていけないといけない病気ですよ」と告げられた。

持病を抱えた初期のころは、年に二度ほど激甚期を迎えていた。その都度、一、二ヶ月は運動できず、じつと我慢の日々が続くのだった。それが徐々に治まってきて、緩解期を長く維持できるようになってきた。近ごろでは二、三年に一度の激甚期ですむようになっていた。今度のは二年半ぶ

りだ。

立って仕事をするのが苦しくてならない。授業の合間に、何度も何度もトイレに駆け込む。その都度、薄気味悪い鮮血まじりの下痢が出る。表現しようのない腹の痛みと不快感がつきまとう。家に帰ればたちまちダウン。

激しい激甚期が来ると、死と隣り合っている自分を覚悟する。今回もそうだ。

「ついにその時が来たのか」

いつも思う。今回は遺言状を書いておこうと思いついた。こんなことは初めてだ。日々の生活の中では、人生の本質にかかわる話がなかなかできない。だから、妻や娘に、普段は話題にすることのない私の内面を書き残しておこうと、ふとそんな思いがわき上がったのである。重大な決意と言わざるをえない。

## ■退院はしたものの

(一九九八年五月十八日《月》)

四月二十日から三週間、持病の潰瘍性大腸炎が悪化して、入院していた。退院後の回復もはかばかしくなく、退院して一週間になるが、仕事は休んだままである。自宅で静養しながら、通院治療を続けている。

潰瘍性大腸炎は国から難病指定を受けているやっかいな病気で、症状がひどい激甚期と、それが治まって何ごともなく生活ができる緩解期とを執拗に繰り返す。原因、治療法ともわかっていない。激甚期の症状は、大腸からの出血、発熱、激しい下痢など。経験しないとわかるまいが、大腸がそのような状態になると、全身が重苦しくて、けだるくって、立ったり座ったりの生活さえが困難になる。

発病してからの十四年を振り返ってみると、激甚期を迎えても、主治医の適切な処置で、たいていは仕事を休むことなく、最悪の状態を一週間ばかりで乗り越えていた。あとは仕事をしながら徐々に回復し、ひと月かふた月のうちには完全な緩解期に移行することができた。

ところが今回の悪化は、これまでとまったく様子が違う。あまりにも症状が重い。入院せざるをえなくなったのは今回が初めてである。入院すると、腸に負担をかけさせないために完全絶食を命じられた。点滴だけで生きながらえた。その間に体重は五キロ減り、いまだに元に戻っていない。出血が止まってようやく重湯や三分粥が食べられるようになったときには、うれしくって涙がこぼれた。その後は順調に回復すると自分でも思え、主治医もそう判断されていた。しかし、思惑違いはそこから始まった。

いつまでたってもいっこうに下痢が止まらず、散歩その他、少しでも体力回復のための運動をすると、決まって熱が出て、ときには出血をぶり返す。

それでも一応退院はしたが、基本的にはほとんどよくならないまま今を迎えている。生徒たちや、授業を代わって引き受けてくれている同僚教師には申し訳ない思いでいっぱいだ。でも、どうにもならない。不甲斐なさに泣きたくなってくる。ひよっとすると回復しないまま廃人になってしまうのではないか。そんな不安さえ脳裏をよぎる。

気長に腰を落として治すしかない、遠のこうとする気力を必死につなぎ止めている毎日である。

## ■熱気の国に帰還

(一九九八年七月七日《火》)

ずっとベッド暮らしを続けていた。五月中旬に十日間ほど退院していた時期をはさんで、四月中旬から、長い長い入院生活だった。五月の退院中も症状はいっこうによくならず、そのまま連続的に入院となってしまうものだから、元気になって退院した今の正直な感覚は、「気づかないうちに季節が一つ通りすぎていた」というところ。浦島太郎の心境だ。

腸の病気だから、腸を休めるのが一番というわけで、入院期間の約半分は完全絶食を強いられた。胸から点滴用のカテーテルを差し、寝ても醒めても四六時中、点滴を伴とした生活だった。胃腸は空っぽ。栄養源は点滴のみ。人間、いざとなればどんなことにも耐えられると、身をもって実感した。

退院して、病院から一步外に出たときに受けた真夏の太陽の強烈な照りつけは、生涯忘れられそうにない。入院した四月中旬は、桜の木々が花から葉へと色どりを変えつつある時期だった。それから二ヶ月半、監獄のようなベッド暮らしを続けているうちに、外部世界は確実に季節を一つ巡らせていた。

私は地球を離れ、相対論的準光速飛行の旅に出ているのだろうか、あるいは竜宮城で夢を見ていたのだろうか。夢から覚めて一步外に出てみると、そこはいきなり夏の国だった。季節を一つ、瞬時にやり過ぎ、むっと鼻を突くような熱気の国に立っていた。

真夏の太陽の直射は心を躍らせ、生気をよみがえらせてくれる。不安の影を引きずって病院の玄関を出た私を、なんの前触れもなく、強烈な太陽の直射と熱気の渦が迎えてくれた。目をしばたき、驚くと同時に、言いようのない懐かしさに涙した。慣れ親しんだふるさとに戻ってきた感覚だった。

「帰ってきたぞ」

腹の底から叫びたくなった。

退院後もしばらくは用心しながら自宅で静養するようにとの主治医の忠告なので、残りわずかとなっていた一学期は、そのまま休ませてもらうことにした。仕事は二学期からとなる。

少し早めの夏休みを迎えたわけだ。この休みを利用して、何か実りある精神活動をしたいなと思っている。それが何であるかは、長い眠りから覚めたばかりで、皆目見当がつかない。

五十歳代は第二の思春期だと、たしか神谷美恵子さんの『心の旅』に書かれていた。ちょうど五十歳を迎えたばかりの私だ。まさに第二の思春期の始まりだ。これを機会に、新しい戦いに挑みたい気持ちになっている。

## ■川の中の不思議な妖怪

(一九九八年七月十四日《火》)

長く続けてきたジョギングは、今回の入院を境にやめざるをえなくなった。今は代わって散歩だ。入院中に読んだ『脳内革命』によってすっかり散歩の愛好者になっている。

散歩していると、思わぬ発見をする。車の運転やジョギングからはまったく見えなかったパター

ンが見えてくる。自然が自分に近づいてくる。拡大され、生命感をもって迫ってくる。土をいじって遊んでいた幼い日を取り戻したような感覚だ。文明という名の壁が自然を隔ててしまわないうちの、はるか昔の人類の目を取りもどしたような感覚と言おうか。

ふと立ち止まって、川の流れに目をやってみた。岸辺の雑草が、水面に映って、永遠の揺らぎに身をまかせている。青空に浮かぶ白雲は水底深く影をなし、風によるのか流れによるのか、ゆらゆらと止まることなくうごめいている。川の底では、小石や貝殻がとりどりの光を放ってきらめいている。実体とも影ともつかない混沌の中できらめいている。

なおも小川を見つめていると、あっと驚くような、目にしたことのない光景に遭遇した。突然だった。まるで気泡でできたような立体感のあるひし形が、縦にも横にも同じパターンで、ずらつかぎりなく並んでいる。それが流れのままにゆらめいている。思わずあたりを見回してみた。そのような影をなす実体はどこにもない。何かが水面に映っているのではない。にもかかわらず、古城の石垣のようなみごとなパターンは、疑いようなく、くつきりと眼前にあって揺らいでいる。

狐につままれていたのだろうか。

神秘のひし形をじっと見つめているうちに、やがて正体に気がついた。

これは風を受けて川の両岸から斜めに進んでくるかすかな風紋の合成像だ。両岸から等速度で寄せてくるから、合体すると無数のひし形のパターンができあがる。

だが不思議なことに、その像は水の表面には存在しない。表面は荒れた世界だから、そこに像を結ぶことはできないのだ。何ともいえず微妙な深さに焦点を結んでいる。人の視線の焦点距離が偶然うまくその深さに合致したとき、そのときにだけ、突如現れる妖怪なのである。

こんなことってあるものなのか。川面を見つめながら、あまりの不思議と美しさに時のたつのを忘れていた。

## ■父の遭難

(一九九八年八月二十三日《日》)

春から夏にかけて長い入院生活を余儀なくされた上に、七月末には父が山で遭難するという思わぬアクシデントに見舞われた。体力の回復と心の平安を取り戻すのにずいぶん長い期間が必要となった。

父は若いころから石鎚山に特別な愛着を抱いていて、これまで何度登ったかしれない。八十六歳という高齢ではあるが、体力は歳よりもうんと若く、今年の夏も出かけていった。いつもなら連れがあるらしいが、今回は連れがなく、一人だった。そこに不運の元があった。

しかも、近ごろでは人がほとんど歩かなくなった登山道を選んできました。といっても父にとつてはなじんだ道だ。

去年は笹が生い茂っていて踏み入れず、断念したのだが、今年は草が刈り取られていて、いかに人を招く様子だったものだから、ついついその道に入り込んだと父は言う。

行くうちに、崩落箇所遭遇した。冷静であれば引き返しただろう。だがその日、父はなぜか心急いでいた。用心して渡れば大丈夫と、悪魔のささやきが聞こえてきた。それを信じて、残っている土に足をかけた。体重を乗せた。とたんずるつと土が滑った。滑落である。

そのまま落ちていけば、命はなかっただろう。だが幸いなことに、崖に引っかかっていた倒木にぶつかった。なんとか一命を取り留めた。木にしがみついた父は、全身を強く打って動けない。翌朝まで身動きも眠ることもできないまま、じっとしていた。

翌日、その木を離れ、ササや灌木を頼りに谷底に下りた。谷水だけで命をしのいで、救助を待った。発見されたのは、父にとつては遭難四日目、捜索開始から三日目のことだった。

私たち家族（母と兄夫婦と私たち夫婦）は、捜索が長引くにつれ、最悪のケースを想定せざるを得なくなってきた。希望は抱きつつも、諦めの方に気分が傾きかかった捜索三日目、本部に待機していた私たちのところに発見の一報が届いたのだった。

「見つかりました」

と第一報。さらに数分後、

「元気そうです」

と第二報。聞いた瞬間、緊張が一気にゆるんで、その場に崩れ落ちてしまった。目の前が霞んで、夢かうつつかもわからない。

「ありがとうございます」

と言おうとするが、声がつまって言葉にならない。

もう生きては会えないだろうと、半ばあきらめていた父が、再び私たちの元に戻ってきた。ヘリコプターにつり上げられて、病院に運ばれたのである。びっくりするほど元気だった。歳をはるかに越えた父の体力を、今さらのように思い知らされたのだった。

救出劇は全国ニュースにもなった。その数日後、一通の手紙が届いた。ある老人グループの代表からだった。

「お前なんか老人の風上にも置けない奴。死ね、死ね」

こんな調子の過激な内容である。私には、父が悪いことをしたとは思えない。九十歳に近い老人が山に登ってはいけないという法はない。老人は老人らしく、おとなしく庭いじりでもしているべきという一般通念が、人知れず体を鍛える努力を続けてきた老人を縛ると思えない。

もちろん、消防や警察や猟友会の人たちによる大規模な捜索を誘引したという点で、大迷惑をかけたのではあった。だが、それは悪意から出たことではなくて、一瞬の不運から出た、やむを得ない突発事故だった。

にもかかわらず、老人が老人に対して「死ね、死ね」と何度も繰り返す極言に、私は尋常ならざる悲しみを覚えずにはいられないのだった。

## ■スリッパとの遭遇

（一九九八年九月二日《水》）

四ヶ月ぶりの出勤となった先日、職場の靴入れにスリッパとジョギングシューズが、まるで昨日まで使われていたかのような顔つきで収まっていたのに驚いた。長い入院生活は、春と夏とを截然と断ち切る不連続線であった。死の淵から蘇生した私にとって、この世のすべてが新しい甦りだった。

にもかかわらず、登校するなり無意識にふたを開けた九十番の番号をもつ私の靴箱には、何食わ

ぬ顔でスリッパが収まっていた。あれはそう、四月十八日の夕方だ。翌日から長く入院することになるとは夢にも思わない私は、いつものようにスリッパを靴に履き替えると、それを靴入れに差し入れた。そのときのまま、微動だにせず、スリッパは私を待ち続けていた。少しゆがんで置いてしまう手の癖を、四ヶ月間、化石のように凍結して、それは時の流れの枠外で静止していた。

蘇生した私に起きた一瞬の出来事ではあったが、スリッパは強い衝撃をもたらしただけだ。『ソクラテスの弁明』の中で、死刑を宣告されたソクラテスが、  
「死は誰にとってもよくわからない。恐れるものではない。それよりも真実を探求する心を忘れることの方がこわい」

といった意味のことを述べていたと思うが、私も、衰弱しきって死の淵に立たされたとき、そんな思いであった。そして、元気になって出勤した日の衝撃的なスリッパとの遭遇。これは、この世界の真実を垣間見させてくれる契機になったように思う。

時間の不思議、生と死の不思議、連続と不連続の意味等々。  
人にとって、この世界には、思索と気づきの材料は無限にちりばめられているものである。

### ■創意は量では計れない

（一九九八年九月十二日《土》）

学校は今、生徒たちの楽園だ。明日の文化祭に向けて、彼らはさまざまな催し物の準備に忙しい。普段は飾り気がなく殺風景きわまりない校内が、大音量のBGMと、奇妙な演出の舞台と化している。理解しきれぬエネルギーが全校に満ちている。

私は棋道部という囲碁・将棋クラブの顧問をやっている、例年部員たちがながしかの創意と工夫で文化祭に参加している。だが今年は、顧問が一学期間、丸っこいなくなってしまったものだから、部のエネルギーが消沈し、文化祭準備も手抜き気味なのがひと目でわかる。

小道具類は昨年のをそのまま流用。対局場に貼りつける懸賞詰め将棋の問題も、去年作ってボツになったのをそのまま使う。新たな創造がほとんど見られない。

でも、私は満足だ。理由の一つは、準備に集まってくれた部員たちが、思ったよりも多かったこと。

一学期間の空白によって部は事実上壊滅しているものと覚悟していた。ひよっとすると部長と私とで泣きべそをかきながら細々と文化祭準備をする羽目になるのかと、そんな最悪のケースさえ思い浮かべていたのだった。ところが、ふたを開けると、例年の半数とはいえ、十名ほどの部員が懸命に働いてくれ、それなりの創意を發揮した。

満足の第二の理由は、その創意である。たった今、「新たな創造がほとんど見られない」と書いたばかりではあるが、この言葉に矛盾はない。目に見えるハードの点では、新しい創造は全くない。だが、昨年の小道具をどこにどう飾るか、どうやってこの一室を棋道部らしく見せるかという、いわゆるソフトの面では、彼らはよく創意を發揮した。

その創意も、量にすればわずかなものだ。しかし彼らが頭を使って工夫する姿を目にしながら、私はこの上なくさわやかな気分させられた。創意の多寡や大小なんて重要ではない。そこに創意があるかないか、大事なそれはそれだけだ。



彼らの創意によって、部屋の前の廊下には、去年の残り物である発泡スチロール製の将棋の駒が、天井から細い糸で雨のようにつり下げられた。例年になくいいムードである。それぞれの部署の準備に追われながら慌ただしく通りすぎる生徒たちの中には、

「おっ、すごいな」

と声をかけて行く者もいる。このひとことが部員の心にどれだけ大きな喜びをもたらしただろう。仕上がりを見守っている私には、彼らの心の中の高揚感が筒抜けにわかる。

### ■伝統はこうして形成される

（一九九八年九月二十五日《金》）

来ない来ないと言われていた台風が、今ごろになって立て続けにやってきた。そのせいで、運動会は一週間あまり延び延びになり、やっと昨日実施された。

運動会では、高三生のアトラクションが人気である。長い伝統になっていて、毎年彼らは受験勉強の合間を縫って練習を重ね（といっても一週間ほどだが）、運動会での発表をよい思い出にして卒業していくのである。

内容は、広い運動場を舞台にしたコント風のどたばた劇や、ダンスなど。大人の目には、たいていが馬鹿げた自己満足である。大人たちが、白けた視線に気づきもしないでひたすら騒いでいる。そんな見方もできる。

だが、それは醒めすぎた見方だろう。下級生にとっては、ド迫力の空騒ぎとエネルギーのすさまじさは驚異であり、羨望の的である。それがやがて、日常性をうち破って何かをなし得る最上級生というものへのはるかな羨望の念となり、「やがては自分たちも」という意識に転化していく。こうして伝統が形成されていく。伝統は瞬時のインパクトによって点火され、継承されていくものなのである。

秋祭りなどの伝統行事が代々引き継がれていくのも、同様の精神作用によるのであろう。きっかけは子供時代に受けた圧倒的なエネルギーの衝撃である。神輿の鉢合わせや、巡行の際の勇壮な掛け声と怒濤のリズム。これが子供の心を恐怖に近い衝撃波で襲う。

文化性や芸術性は、そこでは何の力にもなりはしない。馬鹿げた空騒ぎであろうと自己満足であろうと、構いはしない。大事なのは巨大なエネルギーのうねりなのだ。その濛々とした渦の中に巻き込まれた経験が、何十年にもわたる深い郷愁の念となり、それが伝統という形で結実するのである。

### ■プログラミングに熱中

（一九九八年十一月十六日《月》）

暇を見て趣味のプログラミングに熱を入れている。今やっているのは、Textの穴を埋めるソフトだ。クヌース氏の作になるTextは、理数系の人には必須の文書作成ソフトであろう。私もずいぶん長くお世話になってきた。

これを使い始めると、数学の文書をワードや一太郎で書く気にはとてなれなくなってくる。仕上がるの美しさ、修正の容易さ、数式入力のスPEED（生産性）、インテリジェントな構成員力、い

れをとつてもワープロソフトはT e xにはとてもかなわない。

だがT e xにも欠点がないわけではない。図形を描く能力の貧弱さ、ボックスへの文章の回り込み機能がないこと（HTMLにはその能力がある）などである。数式においても、大きなルート記号や大きな括弧などには、見栄えにぎこちなさが残る（ワープロソフトよりははるかにましだが）。

T e xのすばらしい文書作成能力を引き継ぎながら（まねながら）、さらに上記の欠陥を補うソフトは作れないだろうか。そう考えて夏から手がけているのが、P i c t u r eと名づけたソフトである。文書作成能力はほぼT e xの線に到達した。図形機能も完成に近い。数式における大きなルートや括弧の問題も解決した。さまざまなパラメータの入力に、直接の数値だけでなく、数式や変数を使うことができるのも特徴である。

数式を入力するだけで曲線を描くことができる機能、任意の領域を任意のパターンで塗りつぶす機能など、図形機能における実用的なアイテムも多数用意した。今はまだ私的に使っている段階だが、やがてはフリーウェアやシェアウェアとして公開できればと考えている。

### ■激しい落雷

（一九九八年十二月三十一日《木》）

昨夜、突然の激しい落雷に震え上がった。机に向かっていると、突然、戦争勃発かと思うような猛烈な炸裂音が響き、窓ガラスがびりびりと振動した。しかも立てつけに何度も何度も。テレビをつけると、市内のあちこちで停電が発生しているとのこと。昔なら、神の怒りかと身を縮めるところだ。

しかもそのとき、偶然にも聖書を開き、旧約聖書の「民数記」を読んでいた。エジプト脱出後、さまざまな苦難の末にようやくカナンの地を眼前にしたイスラエルの民が、神の力に対して不安を抱き、不平を言い、反抗し、それに対してモーセを通じて神の罰が下るといふ場面だ。まさに劇的な効果音となった。震え上がってしまった。さまざまな悪の芽をもつ自分に神の罰が下ったのかと、突然の轟音の瞬間、本気で思ったのだった。

今は落雷から一夜明けた大晦日の午後だ。雲一つなく晴れ渡った穏やかな空から、暖かな日差しが降り注いでいる。旧約聖書には、

主は、忍耐強く、慈しみに満ち、罪と背きを赦す方。

とある。神の慈しみが、いま空からあまねく降り注いでいるのであろうか。

### ■老人たちの死（一）

（一九九九年七月二十日《火》）

去年の春から夏にかけて悪化した潰瘍性大腸炎は、いったん治ったかに見えたのだが、そして二学期からは仕事に復帰したのだが、年が明けた今年の一月、再び悪化した。しかも、いっそうひどい状態になった。その結果、一月から六月まで、またも長い長い入院生活を余儀なくされた。その間の病院での話である。

一月から二月にかけて、私は四人部屋の窓際のベッドに釘付けになって、燦々と降る冬の日差しを浴びながら、生死の境をさまよっていた。いっこうに下がる気配を見せない高熱にうなされる一

方で、ひっきりなしの下血、嘔吐、激しい腹痛。身も心も苛まれつづけた。

二月末、ようやく死の淵から這い上がり、窓外に広がる早春の田園風景を楽しむこともできるようになってきた。そのころだった、隣のベッドに、七十歳代半ばとおぼしき老人が入ってきた。いかにも気の弱そうな老人で、ベッドに上がるなり蒲団をひっかぶり、息をひそめて存在感を隠してしまった。

付き添ってきた奥さんは老人とは真反対。存在感をみなぎらせている。いきなり同室の一人一人に、女性にしては骨太の声で挨拶し始めた。しかも、声を発した瞬間から女主人のように空気を独り占めにし、ときおりけたたましい笑い声さえ上げるのだった。いつでもスポットライトが当たっている、信じて疑わない女性のようだった。

私のそばにやってきたとき聞いてみると、ご主人は大学病院で肺の手術を受け、回復に向かい始めたのでこの個人病院に移されたという。ときおり息苦しくてゼーゼー言うことはあるが、数週間の入院で家に戻れるだろうとのことだった。

奥さんは我々同室の者に一渡り声をかけ終えると、肝心の老人には

「がんばるんよ」

と言いつつ残しただけで、姿を消した。台風一過、奥さんがいなくなると、私は老人が哀れに思えてたまらなくなつた。夫婦は二人合わせて半分にすれば、ほどよくなるようにできているとは言いが、この夫婦はあまりにもアンバランスだ。おそらく老人は、長くこの調子で、身を縮めたままの人生を送ってきたのだろう。常に大樹たる奥さんの陰に隠れ、こまごま叱責されながら、小さくなって生きてきたのだろう。その生き方がいつしか習性になってしまったのだろう。

その日の夕方である。トイレに行くときは看護婦を呼んで下さいよと、念を押されていたにもかかわらず、老人は一人でベッドから起きあがった。おぼつかない足取りで廊下に出た。ペタペタという足音が聞こえる。私は何気なくそれを耳で追っていた。するとその音が、ドタツと大きな衝撃音に切り替った。続いてゴツンという鈍い音もした。

廊下で立ち話をしていた二人の看護助手が、直ちに気づいて走り寄ってきた。しばらくすると、看護婦も数名ばたばたと駆けてきた。老人は重症患者用の部屋に移されてしまった。

事の成り行きを、私はすべて耳で追っていた。倒れたときに響いたゴツンという音が気になったが、ともかくこれで一件落着いたのかと、そのときは思った。

事件はそのあとに起こった。老人が突然暴れ始めたのである。何かがガタンと倒れる音がする。看護婦が

「それ抜いちゃだめよ」

と必死に止めようとしているのから察すると、どうやら点滴台を突き倒し、点滴を引き抜こうとしているらしい。さらに、

「なんでこんなところにおるんじゃ。わしは帰る」

老人は大声で叫んで、廊下に這い出してくる様子。

「ここは病院よ。おじいちゃん、わかる？」

看護婦が必死に諭すが、老人は事の成り行きがてんで理解できていない。この病院に転院してきたことも、先ほど廊下で倒れたことも、すべてが老人の記憶から吹っ飛んでいる。

気がつくくと、ベッドに寝かされて点滴を打たれている自分がある。ここがどこかもわからない。

白衣の女に取り囲まれて、ひよっとすると毒殺されようとしているのかもしれない。

と、そんな切迫した恐怖感が、老人の様子から察せられた。

老人は看護婦に諭されても、押し戻されても、必死に抗い、逃げようとする。

「助けてくれー。わしは帰る、わしは帰る」

何度も大声で叫んで廊下に出てきては、看護婦に連れ戻される。

そうこうするうち、睡眠薬でも注射されたのか、静かになった。今度こそは、ひとまず落着か。

そう思った。だが、本当の事件は、そのあとに起こったのである。

翌朝早く、看護婦たちのばたばたと急を告げる足音に、眠りを破られた。同室の患者のうちで元気のよい青年が、部屋を出て様子を見に行った。

「あのじいさん、死んだようですよ」

戻ってきた青年が言った。あつけない死にようだった。

病院側に手落ちはなかったのか。看護は適切だったのか。廊下で転倒して頭を打ったときも、さらには暴れ始めたときも、処置をしたのは看護婦だけだった。医師は来なかったように思う。どの医師が老人の主治医になっていたのかは知らないが、もしも主治医が居合わせなかったとしても、院長が駆けつけるのが筋だったのではなからうか。

これはやはり手落ちであろう。しかも、死因は手術をした肺とはまったく無縁の、頭の強打である。入院して一、二時間後の頭の強打である。

老人が勝手に廊下に出たときの一瞬の事故だから、防ぎようがなかったとも思えるが、やはりその後の処置には、かすかな疑念と不信感が湧いてくるのはたしかだった。しかも、この疑念をあからさまにする出来事が、このあとさらに起こったのである。

## ■老人たちの死(二)

(一九九九年七月二十三日 《金》)

老人の死からひと月ばかり経過した三月末、私の病気はまたも悪化した。

いったんは良好になり、さらに自然治癒力によって快方に向かい始めていたので、ステロイド剤を継続して使うことに主治医がためらいを見せ、そのため、あと一山越せば完治するという局面で、不運にも一気に麓まで転がり落ちてしまったのだった。これについては何の不満も疑問も抱いてはいない。ステロイド剤は副作用の強い薬である。安易に使って軽々しく「はい治りましたよ」というのは、医師として慎まなければならぬことだと、多くの人から聞かされてもいたし、素人向けの医学書などで読んでもいたから。

この病気にとりつかれて十五年ほどになるが、最初の十四年間は、ときおり周期的に悪くなることはあっても、たいていは少量のステロイド剤の助けを受けつつ、自分の治癒力で治ってきた。主治医はそういう経過をずっと十五年間見続けてきたので、今回も最後には自力で治るだろうと判断したとしても、そのことに落ち度があるはずはない。現に当事者の私も、順調に快方に向かっていた三月時点では、四月の初旬には退院できるだろうと、それがあたかも約束された筋道であるかのごとく、疑うことをしなかったのである。

そもそも私の病気が入院するほど悪くなったのは、昨年の四月が最初。そして今年の一月初が二度

目である。昨年は春から夏にかけて二ヶ月半ほど入院し、今年は冬から夏にかけて五ヶ月間の入院となった。この二度の入院を通じて、一度とことん悪くなってしまうたら、それを自力で完治させるだけの治療力を、私の肉体はもはやもっていないと、悲しくも、心底思い知らされた。ステロイド剤の助けが必要な体になってしまったのだ。しかも、大量に、継続的に。主治医も同様の認識に立ったはずである。思えば五十歳がその峠であった。

治療力と抵抗力の思わぬ低下を洩々受け入れながら、出直しの闘病生活に入った四月のある夕方、熱にうなされたまどろみの中に、ただならぬ気配が飛びこんできた。耳を澄ますと、廊下で女性の叫び声がある。殺気立った叫びだ。

「人殺しー。お父を返せ。こんな病院、叩きつぶしてやる。院長、出てこい。殺すぞー」

物騒な言葉が矢継ぎ早に放たれる。叫びとともに、ガチャーン、ガラガラガラと、何かが叩き割られたり、投げつけられたりする音がする。入院患者が恐怖で凍りついてしまったのがわかる。物音の出所はナースステーションらしい。看護婦も恐怖のあまり声が出ない。同室の青年が部屋の入り口からそっと顔を出して様子を窺うと、興奮した女性が棍棒のようなものを手にして、ナースステーションを出たり入ったりして暴れているという。ナースステーションにある医療器具や書類を片端から投げつけたり、棍棒で叩き割ったりしているらしい。

やがて院長がやってきた。

「ここは入院病棟だから、下において、お話を伺いましょう」

初めのうちは、女性の興奮を鎮めようと穏やかに対応していたのだが、

「お前が院長か。お父を殺したんはお前じゃ」

と、ますます興奮して暴れるものだから、院長も

「何を言っとる。とにかく下で話をしよう」

と、声を荒らげて力づくで引つ張っていったようだった。

しばらくは、なおも女性の激しい叫び声が、階段を通じて二階にも響いていた。やがてそれが納まって静かになると、入り口を閉ざして恐怖に震えていた患者たちが、そっと戸を開けて姿を見せるようになった。

「恐ろしゅうて、腰が抜けよったがね」

「そうよなあ。あんなんもって暴れられたらたまらんがな」

「この前、頭打って死んだおじいさんの娘じゃなからうか」

などと、ひそひそと話し声が聞こえてくる。

そういえば、猛り狂った声の調子は、たしかにあのときの奥さんの血を引いている。老人が入院した日に奥さんが初対面の同室者にいきなり示した、部屋の女主人のような物言いを思い出した。

「ひどいことする人じゃねえ。患者さんに何かあったらどうしてくれるん」

看護婦の声も聞こえてきた。恐怖からようやく解放されて、ナースステーションを片づけ始めたようだった。

それにしても、どちらに非があるのだろうか。ナースステーションをめっちゃめっちゃにした非は、当然女の側にある。しかし、老人が亡くなったいきさつに思いを馳せると、おそらく病院側にも責任がある。老人を吊って一段落ついたとき、病院への家族の怒りがどうにもたまらなく膨れ上がったのだろう。

### ■老人たちの死(三)

(一九九九年八月九日《月》)

先の老人の死から数日後、隣のベッドに今度は八十を少し過ぎたと思える老人が入ってきた。付き添って来た四十代とおぼしき男は、老人に対して

「おい、お前」

と、ぞんざいな呼び捨てだ。どういう関係かといふかったが、聞いていると、やはり息子らしい。

老人の方が息子に

「……して下さい」

と馬鹿丁寧だ。奇妙な親子である。

老人は足が不自由な様子。ベッドから床に下りるのも一苦勞。とても歩くことはできそうにない。携帯トイレをベッドの脇に置いてもらって、それで用を足すのだが、それでも、使うたびに看護婦や看護助手の手を借りねばならない。何度もナースコールを押すのは申し訳ないとも思うのか、我慢して漏らしてしまうこともしばしばだった。

食事はとれるようで、食膳が運ばれてくると何とかベッドに起きあがり、オーバーテーブルに置かれているそれに箸を運ぶ。私は一月の入院以来ずっと口から食事のとれない状態が続いていたものだから、食事時といってもすることはなく、ベッドに横たわったまま同室の患者の食事姿をぼんやり視界の隅に納めているだけ。点滴暮らしが長くなると、自然な欲求である食欲はすっかり消えてしまつて、人の食事姿を眺めていても、「食べたい」とか「うらやましい」とか、そういう気持ちはまったく浮かんでこなくなる。老人の食事姿を一枚の風景画として、絵空事のように眺めていたのだった。

老人はオーバーテーブルからずいぶん距離をとつて座っていた。そのぶん膳が遠くなるから腕を目一杯伸ばさないと膳に届かない。必然、箸の運びが不安定で危なっかしくなる。みそ汁の椀を口に引き寄せるときなど、手がぶるぶるふるえてこぼれてしまう。とても見ていられない。

いったん体を起こして座を占めてしまうと、位置を変える余力はもう残っていないのか。不安定な食事姿を、はじめはそんな風に解釈していた。しかし、それにしても、いつもいつも遠くに座る。少しは座る位置を学習すればよいのにと、人ごとながら気になってしようがなかった。ベッド暮らしが長くなると、そんな些細なことが気にかかるのだ。

やがて理由が分かった。老人は視野が狭いのだ。食膳全体を視野に入れるには、食膳から離れて座るしかない。これは生理的必然、いや物理的必然なのだ。

様子を見に来た看護婦が、ときおり気を利かせて、

「おじいちゃん、お膳が遠すぎやせん？ 食べにくいでしょう」

と、オーバーテーブルを老人の近くに移動させてあげることがある。当然の親切なのだが、すると老人の手元がたちどころに狂い始める。箸でおかずの皿をつついているとき、その横にある湯飲みを手の甲でひっくり返したりする。しかも、湯飲みがひっくり返って布団がびしょぬれになったことに、老人は気づかない。湯飲みの転落は、視野の外の出来事なのだ。

老人は耳も遠く、しゃべりも少々困難な様子だった。老人が入ってきた初日、

「足がお不自由そうですけど、どうされたんですか」

と聞くと、それまで無表情に空を見つめていた横顔に、パッとほにかんだような笑顔が浮かんだ。汚れを知らない神々しい笑顔だった。視線の先は無限遠点にまで届いている。意識が過去をさまよひ、何かをまさぐっているのがわかる。笑顔の奥から今にも言葉が吐き出されるものと、私は期待して待った。ところが老人の口は開こうとしない。顔を浮かべたまま、油の切れた機械のように顔をガクガクと苦勞して私の方に向けた。

私の姿が視界の中にとらえられたようだ。そして、

「何？」

という表情を浮かべた。私の問いかけの意味がつかめていなかったらしい。声を大きくして、もう一度聞く。するとまたもあの笑顔が戻り、今度は口を開いた。つかえつつかえ、聞き取りにくいかすれ声で語り始めた。

聞きとれない部分には想像も交えながら何とか聞き取ったところでは、足が不自由になった理由は自分にもわからないという。少なくとも足の治療で病院にきているのではない。大学病院で肝臓の手術を受け、その回復療養のために、この個人病院に転院させられた。これは、先に亡くなった老人と同一パターンである。

この個人病院と大学病院との強い関係が想像された。実際、院長はかつて大学病院で外科部長を務めていたし、院長以外の数名の医師も、みな大学病院から来ている非常勤医師である。私の主治医も例外ではない。

私も当初は大学病院で診てもらっていた。そのときの主治医が、今もそのまま主治医である。その主治医がこの個人病院に非常勤で来ることになったからというので、こちらに回されたのだった。入院など思いもしなかった十年以上も昔の話である。以来、症状の悪化が見られるたびに、この病院に来て診てもらうようになった。

### ■老人たちの死(四)

(一九九九年八月二十六日 《木》)

老人が隣のベッドで生活するようになった数日後、微熱の治まらない体をベッドに横たえてうとうとしていると、廊下にカツカツと乾いた靴音がした。病室ごとに入り口の名札を確かめながら近づいてくるようだ。

四六時中ベッドに縛られていると、外界との連絡路は耳だけになっている。聴覚からくる想像力は普段の何倍もとぎすまされていた。

靴音は明らかに新来者のものだ。しかも若い女性だ。心の弾みとかすかなためらいが、乾いた響きの中に混在しているのも読みとれる。

靴音は私のいる四人部屋までやって来ると、ピタッと止まった。中の様子をうかがっている。続いて、一步一步忍び足で入って来た。老人のベッドサイドに立つと、また止まった。

靴音の主は、眠っているのか醒めているのかわからない老人の目元をしばらくじっと見つめていた。やがて意を決したように

「Sさん、こんにちは。お元気そうですね」

明るくて躍動的な、そして少し甘えるような声で呼びかけた。病棟では生粋の松山弁がもつぱらの標準語になっていたものだから、突然発せられた東京言葉に、私は稲妻に打たれたような衝撃を覚えた。老人は声には気づいたが、相手の分別がまだつかないらしい。

「私です。Aです。ほら、向こうの病院の」

「あっ、ああ、ああ」

「覚えてらっしゃいますか」

「覚えとるよ。来てくれたんじゃないな」

老人は急に元気を取り戻した。女性はベッドサイドのスチールいすに腰かけた。なんだか不思議な雰囲気である。

女性がよく響く美しい声には、親しい間柄を思わせる甘えの調子が感じられた。一方、老人が必死に絞り出すかすれた声には、干上がっていたはずの異性への繊細な思いやりの調子が呼び戻されている。いつもの老人の姿はそこにはなかった。

日常性から遊離した、不思議な異次元空間が二人を包んでいた。聞くともしに耳に入った二人の会話から察すると、女性は大学の医学部生のようにだった。歳は二十二か三。対する老人は、八十余歳。恋人と言うにはあまりに不自然、不自然すぎる。

こちらに転院する前、老人が大病院で手術を受けたことは、すでに聞いていた。二人の出会いの場がその病院であったのはまちがいない。しかし、これほど歳の離れた二人を親しくさせたきっかけが何であり、現在の関係をいつたいう呼べばいいのか、私にはさっぱりわからなかった。不可思議な関係としか言いようがない。既成の概念に治まらない関係、それを表す言葉をもたない関係。とりあえずそう考えておくしかなさそうだ。

単なるボランティアとか親切心で女性が老人と接しているのでないことだけは、どうやらたしかなようである。そもその出発点はそうだったかもしれないが、今は明らかに一歩進んでいる。といつても、将来を約束するような恋人関係であるはずはない。はっきりしているのは、こうして一緒に時を過ごしていることに、二人とも、ある種のときめきを感じていることである。女性の方にも、親切心を越えた心のときめきがあるのがわかるのである。

「そうそう、お花を買ってきたんですよ。Sさん、花瓶ありますか」

女性はスチールいすの下から花束を取り出した。老人が答えないうちに、

「ほら、あの花瓶、こちらに持ってきているのかしら」

ロッカーの中や棚の上を調べ始めた。そして小振りながらふつくと形のよい花瓶を探し出した。水を入れ、無造作に花を差し込んだ。花嫁修業の経験がない女性だなど、とっさに私は判断した。それがかえって新鮮でうぶに感じられ、素朴な若さがまぶしくてならなかった。

最後に、

「また来ますね」

と立ち上がった。だが、すぐには帰ろうとせず、しばらく老人を見つめ、

「握手しましょう」

と、いきなり右手を差し出した。思わず老人もつられたようにごつごつした手を差し出した。女性も老人の手にもう一方の手を重ね、いつとき祈るような様子を示していた。その手をそっと離すと、



「じゃあ、帰ってきます。お元気でね。また来ます」  
若々しい靴音を残して立ち去っていった。老人の目は放心したように遠方を見つめ、口元はいつまでも笑みを浮かべたままだった。彼の笑みは周囲の誰かに向かうものではない。自分自身の内面に向かう笑みだった。

## ■老人たちの死(五)

(一九九九年九月十一日《土》)

老人は、真夜中すぎに決まって活動的になった。ガサガサ、カタカタと物音がする。昼間は忘れていた排尿感覚が、夜になると顕在化するらしい。この物音で、私は毎夜、一度は眠りを破られるのだった。

看護婦からはナースコールを押すようにと何度も言われているのだが、その都度押すのが申し訳ないとも思うのか、二度に一度は尿尿瓶を使って一人で用を足そうと試みる。暗い病室での手探りだから、大変な時間と労力を費やした挙げ句、たいていは布団や下着を濡らしてしまう。最後にはやはりナースコールを押すことになる。大騒動でシーツを交換したり、下着やパジャマを着替えたりする羽目になってしまうのである。

「おじいちゃん、またパンツの替えがなくなったねえ」

看護婦が荷物の袋や戸棚を点検しながら困り果てた声をあげるのもしばしばだった。

「家の人が来たとき、少し多めにパンツを入れてもらうように言っといて下さいね」

看護婦は念を押すのだが、老人がそれを実行したのを聞いたためしがない。

家の人というのは、息子とその嫁である。二人一緒に来ることはなく、週に二度ばかり、どちらかがやって来て、洗濯物を交換した。

嫁が最初にやって来たのは、老人が入院して十日余りもたったころだった。

「おじいちゃん、元気にしてますか」

物腰の柔らかな、おだやかな声だった。一語一語ゆっくりと区切る、粘りのある声である。老人はいつものかすれ声で、

「早よ来てくれりゃよかったのにな」

と、不満げだ。

「なんぼ忙しいゆうても、近いんじゃけん、来れんことはないじゃろ」

「それはそうですけど、M子が高校に入学して、いろいろあわただしかったものですから」

「ちよくちよく来てやな。あれも口では毎日来るゆうときながら、来やせんのじゃ」

「すみません。私も勤めがありますから、毎日は無理かもしれませんが、できるだけ来ます」

嫁はそう言って、もってきた洗濯物を棚に並べ、汚れ物を袋に詰めた。そして花瓶に目をとめた。

「お花がありますね。誰か来られたんですか」

「うん、ちよつとな」

老人は口ごもった。

「あの人ですか、また」

「いや。うん。まあそうじゃ」

「そうですか。毎日来てくれるんでしょう、あの人」

「いや、そんなことはない。この間一回来ただけじゃ」

嫁はそれ以上問いただすことはなく、黙って花瓶をもって流しに行き、水を交換した。

嫁が袋を下げて帰って行くと、老人はぐったりと疲れきった様子で枕に頭を沈め、うつろな視線を天井に向けた。やがてそのまま眠りに落ちたようだった。私はその姿をときおり視界の隅に入れながら、「朱夏」という小説を読んでいた。午後はたいてい八度近くまで熱が上がって、読書の気力もなくなるのだが、その日はなぜか気分がよかった。

読みながら、意識の片側で老人のことを考えていた。老人には四つの顔があるように思われた。一つは、一人でベッドに横になっているときの、眠っているとも醒めているとも、あるいは物思いに沈んでいるとも、なんとも判断しようのないうつろな顔。二つ目は、私とときどき声を交わすときに見せる、澄み切った笑みと心の内をのぞき込むような鋭敏な視線をもった顔。三つ目は、Aさんにだけ見せる、ときめきと生気と喜びにあふれた顔。そして四つ目は、息子と嫁に見せる、愛想と嫌みをないまぜにした無表情で投げやりな顔。

どれもが仮面ではなくて、そのときどきに精一杯生きていることを証しする表情に私には思えた。老人はどんなときにも必死に生きてきたのだし、この先も、必死に生きていこうとしているのだった。

### ■老人たちの死(六)

(一九九九年九月二十九日《水》)

老人が生まれ育ったのは瀬戸内海に浮かぶN島である。その島で若くして父親からミカン畑を受けついで。島の斜面は日当たりがよく、しかも年中潮風にさらされているので甘くてうまいと、島ミカンの評判はよいのだった。

老人の人生はミカン一筋だった。一年ほど前までは、現役で働いていた。

「わしはミカンのことしかわからん人間じゃ。八十を過ぎてても軽トラックを運転してな。畑に行くにも、ミカンを運ぶにも、トラックなしではすまんかった」

老人は昨日のことのように、目を輝かせて、島の生活を話してくれた。島の話を始めると、顔には生気がみなぎり、頬がゆるみ、白い歯がすばらしい笑顔を作るのだった。

足が萎え、立つことさえおぼつかない老人を見ていると、一年前までこの人がきつい段々のミカン畑で毎日働き、トラックでミカンを運んでいたとは、とても想像できなかつた。しかし、足はたしかに萎えてしまったけれども、手はごつごつと硬く手袋のように大きい。半世紀にあまるミカン作りの風雪の歴史を、それは濃密に示していた。

老人は父親から畑を譲られたことに大きな責任と重荷を感じながら生きてきたようだ。

老人には弟がいた。弟は島の学校を卒業すると、ただちに大阪に出てしまった。父親は二人の兄弟に畑を分割して継がせたかったようだが、弟には島で働くつもりがまったくなく、長男である老人が一人でミカンを作るしかなかった。やがて老人が結婚すると、それを境に父親は仕事を引退し、長男が一家の主となってミカン畑を経営することになった。

弟は戦争にとられ、フィリピン沖の海戦で戦死した。島を出て以来、「あんなやつ」と、次男のこ

とをいつも親不孝者のように言うのを口癖にしていた父親は、次男の戦死の報を聞くと、悲しきで飯が喉を通らなくなり、次男の後を追うようにして死んでしまったのだった。

「親父は、小さいころから、本当は俺より弟をかわいがってた。弟にはよっぽど家におつてもらいたかつたんじゃろう」

老人は遠い昔を思い起こしながらつぶやいた。

嫁をもらうことなく死んだ弟と、孫を見ることなく死んだ父親。この二つの魂を鎮めて生きることを宿命づけられた老人にとって、以後のミカン作りは、重荷以外の何ものでもなかった。若いころには、外に出て働きたいという衝動に何度も駆られたが、その都度、ミカン畑という逃げようのない強い束縛に捕捉され、結局、島を離れることはできなかった。

老人には遅くなって息子が生まれた。子供はその一人だけだった。かわいがりすぎたのか、親のことを顧みない子に育ってしまったと老人は言う。息子にはミカンを継ぐ意志がなく、島の高校を卒業すると、一目散に島を離れて松山で就職した。

父親が生涯をかけて開拓した畑を、自分の代で再び荒れ地に戻してしまうことになる。その宿命を知りながらも、老人は八十二歳になるまで畑を守り通したのだった。

「親父が苦勞して水を引いた場所とか、石垣を積んだ場所とかを見とるとな、土にしみこんどる親父の汗に申し訳ない気がしてならんのじゃ」

今はそれらすべてを雑草の茂るがままに放置している。それが堪えがたく、語りながら目に涙を浮かべるのだった。

老人は二年ほど前、肝臓に異常が生じ、息子の家に近い大学病院で診てもらった。そのときは小康を得て、いったん島に戻ったのだが、再び悪化した。そして一年前、ついに島を引き払って息子と同居し、そのまま病院に入院してしまった。以来、島には戻っていない。

「畑がどうなつとるんか、ようはわからんのよ」と言う。

私の体温が比較的低い午前中、しかも老人が目覚めているわずかな時間、少しずつ話を聞く中で浮き彫りになった老人の人生の筋書きは、このようなものだった。

戦時中、老人も短期間ながら召集を受けたようである。しかし、外地に出向くことはなく、内地で訓練を受けている最中に終戦を迎えた。兵士として戦った体験はない。そのためだろうか、老人の年頃の人によくある、戦争を懐かしむような言葉が、老人から洩れることはないのだった。

私の父が見舞いに来たとき、父も老人と話をするようになった。父の方が二、三歳年上である。父は、日中戦争、太平洋戦争と、二度の召集を受け、特に太平洋戦争では、五年半もの長い戦地暮らしの末に帰還したのだった。老人がN島の出身であることを知ると、

「わしの一番の戦友にN島の人がおつてな、T君というんじゃが、いつの間にか連絡がとれんようになった。あんた知らんかいのう」と言う。

「Tさん？ あゝあゝ、知つとるよ。じゃけどあの人、いつじゃったか死んでしもうたがな」

「そうか、死んだんか」

父はガクツと力を落としたようであった。

父は二十代から三十代前半という、人生がもつとも充実し、華やぐべきときを、戦争に明け暮れ

てすぐ宿命をもって生まれてきた。父にとつては、戦火の中を共に生き残った友人ほど貴重な存在はなかった。私は子供のころ、そんな戦友の話を何度も聞かされたものだ。

歳をとると、いつしか互いの連絡は疎遠になり、生きているのか死んでいるのかさえわからなくなってきた。しかし、思いはいつまでも変わることはなく、生きているうちに一度は訪ねてみたいと常々考えていたようであった。

戦友中の戦友であったT氏の死を知らずとも知らされた父は、八十六歳にして目を潤ませた。すでに人生の秋を過ぎ、冬に入っているとはいっても、父はかくしゃくとして元気だし、車を運転すれば、山にも登る。まだまだ同年輩の友人の死が信じられない気分なのだった。

父と老人を見比べたとき、老人にはすでに人生の終焉を迎えるもの悲しさが漂っていた。やがて訪れる死というものを、すでに予感させる何かがあった。島暮らしのころを懐かしみ、生き生きと語ってはくれても、意識は島を離れていた。過去は老人にとって遠く望見する幻影にすぎなかった。人生のあらかたを過ごした島を捨てたことにより、老人は過去との接点を失っていた。過去だけではない。自分という存在そのものの土台を見失っていた。足をしっかりとつけて生きるべき地がもはや老人にはないのだった。

それでも、島での生活を語るとき、うっとりとした喜びの表情を見せた。これは、今の自分の依って立つ基盤のなきの裏返しなのかもしれない。切れてしまった人生を、果ててしまった人生を、老人は無意識のうちに受け入れているようであった。

老人のいのちの灯火は、過去を語るときにのみかすかに燃え立った。それを思うとき、Aさんの存在はなおいっそう不可解なものに思えてくるのだった。

## ■老人たちの死（七）

（二〇〇〇年六月五日《月》）

『老人たちの死』を書き始めたのは、長い入院生活からようやく解放された去年の七月だった。九月には六号まで進み、順調に完結に向かうはずだったが、六号を最後に頓挫してしまった。

頓挫の理由は、六号を書いたのちに突如訪れた意識の転換であった。当たり前前の人生であれば、生涯で最も重い荷を背負って峠にさしかかろうとしているはずの五十歳という歳にして、退院後の静養期間とはいえ、半年にあまる解放と自由な日々を与えられたのである。職場復帰は次年度から（つまり今年の四月から）という約束になった。

これは大きな喜びであり、同時に何か巨大なものの到来を予感させるものともなった。前途にっらなる茫洋とした日々の輝きを見たとなん、頭の中に形容しようのないエネルギーが渦をなして押し寄せてきた。それは過去との連続を許さないエネルギーであった。『老人たちの死』は意識から遠のいてしまった。

そのエネルギーが半年間の解放の日々の中で何を結実させたかは、まだ語るべきときではない。長かった気ままな日々が過ぎ、何事もなかったように旧来の暮しに引き戻されている今、『老人たちの死』を再開させようと思立った。中断中、多くの方々から、心配やら励ましのメールをいただいているのだから。中には「生きているのか」というメールさえあった。

描き始めようとして、少々戸惑っている。構想のメモ書きを紛失していることに気がついたから。

薄れかかった記憶だけを頼りに書き始めねばならない。

長かった入院生活を思い返すと、N島出身の例の老人のことが、やはり私の心にもっとも強く焼きついている。

Aさんという若い女性によって、こけ落ちた頬の片面に鮮やかな光が投げかけられ、残る片面には、息子夫婦という鈍くて重い光が反照もなく宿されている。それが私の目に映った老人の姿であった。

老人はつねづね、

「散髪したい、散髪したい」

と口癖のように言っていた。私を見るところ、ごま塩頭のその髪は、ミカン作りの風雪をくぐったスポーツ刈りで、さほど伸びている風もなく、散髪に行く必要などどこにあるのかという印象だった。にもかかわらず、週に一、二度息子がやってくると、とりつかれたように、

「散髪せんとおう」

としわがれ声で何度も繰り返すのだった。

老人にとって、散髪は、髪を刈ることよりも、顔のひげ剃りを意味していたのかもしれない。ごわごわとした無精ひげが顔から生気を失わせている。老人は自身の顔を手で触ってみて、そう感じていたのだろう。藪のような無精ひげを耐え難く感じていたのだろう。

自分の顔に自信をもつことが、いかに困難なことか。私は鏡の前に立つたび、あるいは写真を見るたび、そう感じないことはない。持って生まれた顔形は変えようがない。だが、それが発する光は、内面を磨けば輝いてくるかもしれない。そう思ってみるが、いっこうに輝く気配を見せないのが真実である。湧き上がってくるのは苛立ちと哀しみばかり。

老人は、Aさんと向き合う都度、ときめきを覚える反面、彼女のもつ華やいだ若さと自分の発する老いの臭いとに、埋めがたい溝を感じ、消え入りたいほどの羞恥に震えていたのではなからうか。散髪は老人にとって、羞恥から抜け出すための、必要不可欠な、象徴的手段と化していたのである。若さとの接点をもたらししてくれる唯一の希望の窓、それが散髪に行くことだったのだろう。

## ■老人たちの死(八)

(二〇〇〇年六月二十四日《土》)

桜の季節が過ぎて、新緑のほんのりした香りと草花のとりどりの色彩が、田園を盛りの春へと急歩調でいざない始めたころ、カツカツと軽快に響く乾いた靴音が、廊下の端から伝わってきた。病室のよどんだ空気に、それは心地よい高周波のうねりをもたらした。

清新な一陣の風となつて、それは老人の枕元までやって来た。

そのころ私は止むことのない発熱のけだるさに悩まされていた。快方に向かいつつあった病状が再び悪化し、肉体のみならず精神的にも、絶望の淵に追いやられていた。苦しさに耐えるには、ひたすら目をつぶって眠るほかなく、イヤホンから流れてくるラジオの音楽だけが唯一の慰めとなっていた。うとうとと眠っては醒め、醒めては眠りしている私にとって、ラジオの音楽は遠い世界から寄せてくる、心地よい潮騒であった。

Aさんの靴音と、それが部屋に忍び入って老人の枕元に立つ気配を察知したのは、たまたま眠りから醒めて、ぼんやり天井を見上げているときだった。

老人は気づいていない様子だった。軽いいびきが洩れていた。Aさんは手にしてきた紙袋からガサガサと何かを取り出すと、オーバーテールに置いた。

その音に気づいたのか、それともAさんが発する存在波が老人の無意識に届いたのか、老人は細く目を開いた。

「ごめんなさい、起こしてしまって」

ひそめてはいるが、いつものように明澄で心地よい声だった。

「あつ、ああ」

「わたしです。こんにちは」

「ああ、ああ、あんたじゃったんか」

かすれた老人の声もいつもの通りだが、眠りの余韻から醒めるとともに、それは驚きと喜びの色彩を帯びてきた。あごから頬の無精ひげに思わず手をやった。

「昨日帰ってきたんですよ。しばらく帰省してたものですから」

Aさんは東北地方の町の名をあげた。その町は偶然にも、私にとって学生時代の甘く切ない思い出を秘めた町だった。大学のクラブで知り合った同級の女性に恋心を寄せていた私は、夏の全国大会で仙台に行った帰り、彼女の帰省に合わせて一緒にその町まで出かけたのだった。招待もされていないのに、勝手に行って行ったというのが正しい言い方だった。そしてなんと彼女の家に二泊させてもらったのである。広大な干拓地や湖や半島を二人で歩いた。

Aさんの話を聞きながら、そんな片思いの過去が蘇ってきた。

老人ははにかんだ笑みを浮かべて、Aさんを見つめた。

「もう卒業してしもうたんかと思うとったんじゃ」

「卒業はまだですよ。もつともつとお勉強しないとね」

「そうか、勉強か。ええな、若いもんは」

老人は、ミカンを継ぐ宿命を負わされた若いころを思い出していたのにちがいない。島を出て勉強したいという思いも、おそらくはあったのだろう。だが、「長男は親の跡を継ぐもの」という既成の概念によって、それは圧殺されてしまった。当時は父親の言葉にただ従っただけだたかもしれないが、動けない身になった今、したくでもできなかった勉強というものに激しい憧れの念を噴き上げられ、それが後悔とないまぜになって、脳裏を駆けめぐったのではなからうか。

「これお土産です」

Aさんはオーバーテールに置いていた木箱からこけしを取り出した。それを老人の手に握らせた。さほど大きくはないが、大量生産の安物ではないことは一目でわかった。一級品の風格を帯びていた。

「わしはなんにもあなたにあげるものがない、いかんのう」

「心配しないでいいのよ。Sさんが退院して働けるようになったら、島にミカンをもらいに行きますからね。早く元気になって下さいね」

しばらく話が弾んだ後に、Aさんはベッドにかぶさるように身をかがめ、またも老人の手をとって、祈りを捧げている風だった。そして、いつものように、

「それじゃあ、また来ますね」  
言い残して去っていった。後ろ姿を追う老人が、これまでになく寂しげに見えた。

## ■老人たちの死(九)

(二〇〇〇年七月一日《土》)

あるとき老人に思わぬ訪問があった。なんと母親が見舞いに来たのである。信じがたいが、実の母親だった。八十数歳にして、その母親が見舞いに来たのである。

数日後、私の母がやってきたとき、こんなことがあったよと、思わず語らないではいられなかった。母も芯から驚いていた。母の母親は母が十四歳のとき、世を去ったのである。私の祖母である。その祖母がもしも生きていたとしても、老人の母親の歳にはかなわなかったかもしれない。

老人の母親は愛媛県で最高齢ということだった。松山の老人施設に入所しているらしい。

車イスに乗り、施設の人に介助してもらってやって来た。ご一行様という感じで、なんだかざわざわとして、物々しかった。

「どお？ ちよつとはようなつとんかいのう」

「うん、ちよつとはな」

「ほうか、そりゃよかった。あの子らはどうなん？ 世話してくれよんかいのう。人のことなんか考えん子になってしもうとるけんのう」

「ああ、甘やかして育てすぎた。それでもまあ、なんとかやってはくれよる」

「ほんなら、まあええけん」

百を越えても、口はなかなか達者のようだった。

何日かして、老人は、とうとう散髪に行くことになった。病院からさほど遠くない散髪屋である。息子が車イスで連れて行き、そのまま終わるまで待っていていけばよいものを、老人を置いたままいったん家に戻ってしまった。家までは車で十分もかかりはしないから、まあその気持もわからぬではない。

老人は散髪が終わったものの、いっこうに息子が来ないものだから、店のあるじに手伝ってもらって散髪屋を出た。足は不自由でも腕力には自信がある。一人で車イスを動かせるのであるじに言い、あるじもそれを信じて送り出した。病院は県道をはさんではいるが、遠くない。迷うはずもない。大きな看板があるし、ほとんど目の前と言ってもよい。

ところがだ。老人はミカンで鍛えた腕力の持ち主にはちがいないが、何と言っても視野が狭い。歩道の縁石にぶつかかった。車イスごとコトンと転がった。頭をコンクリートに打ちつけてしまった。たまたま通りかかった人に助け起こされ、息子が迎えに来たときには、すでに集中治療室で処置を受けていた。

ころんだ衝撃が強かったのと、打ち所が悪かったのと、もはやあの明るい笑顔が戻ることはなかった。意識が戻ることもなかった。

私は熱のない午前中、点滴台を犬の散歩のように引っ張って、二度ばかり老人を見舞った。呼びかけても答えてはくれず、驚くばかり硬くて大きな手の平を、ただ握ってあげることしかできなかった。

数日後、静かに息を引き取った。なんともあつけない幕引きであった。

Aさんとの不可解な関係は、結局真相を知る機会なく、終息したのだった。

「散髪したい」

と執拗に繰り返されていた言葉は、Aさんの若い活力への、老いの引け目に端を発していたように思われる。散髪すれば、彼女に面したときに、老いの醜さを少しでも和らげることができるのではないか。老人の切な願いが、そこに潜在していたのはまちがいない。

その散髪が悲劇を引き起こそうとは、老人も、息子も、想像さえしていなかった。

人生とはこういうものだ。予定された道を坦々と歩んで人生が果てることなど、誰にもおよそないのである。どこかで必ず、一度や二度は、思いもよらない劇的場面に遭遇する。それが人生を断ち切ってしまうこともある。そうでないこともある。

私もかつて、何度か死の危機に直面した。ほとんど三途の川を渡りかかったことさえあった。そのときは、本当に「向こう側の世界」をのぞき見た（気がした）。その都度、誰かの手によって引き上げられた。幸運だった。

老人は散髪をなし終えた。願いつづけてきたことをなしたのである。大きな満足と喜びを味わったはず。そして、その直後、人生の歩道を、いや崖道を転がり落ちていったのだった。

哀れよなあ。なんと哀れだ、人生というのは。

### ■天空にくり抜かれた丸い穴

(二〇〇一年三月二十三日《金》)

二年間にわたる事実上の休職を経て復職したけれど、この一年、どことなくごちない自分におどおどしながら過ごしてきたのも事実だった。はた目には、それ以上に不安げに映ったことだろう。だが、私の内部は、案外、活気に満ちていた。

コツコツせつせと短歌を作ったこと。プログラミングに熱中したこと。この二点だけでも、日々の暮らしの中にとぎめきと、寸暇を惜しむ心をもたらずのに十分だった。

プログラミングにおいては、なんとか一応の成果を得、Vector というソフトウエア・ライブラリに二つのソフトを載せることができた。予想以上に反応がよく、載せた当日、早くもユーザーが現われ、しかもその数が増えてきたのは驚きだった。

ユーザーが増えるのは、ありがたいことではあるが、同時にしんどいことでもある。「こういうことができるようにしてほしい」とか、「こういうことをしたいけど、どうすればよいか」といった、機能追加の要望や質問のメールが次々に届く。対応に大わらわの毎日となった。

それはそうと、春である。ふたたびめぐってきた春。「早春」という言葉が私は好きだ。この言葉には、身が引き締まって、震えるような響きがある。ぬくみなどまだちつとも感じられない二月中旬、冷え切った水と空気に一瞬ぬるみを感じられたとき、そのときが私にとつての早春だ。寒風吹きすさぶ中、ふつと明るい日差しが降りかかり、よく見ると桜の枝がふつと赤い芽吹き腫れ物をつけている。これが早春なのだ。

梅がぽつぽつと咲き始め、殺伐とした冬の光景に彩りの波紋を広げていく。

盛りの春を謳歌していた梅たちも、今は盛りを過ぎてしまった。花は落ちた。梅は桜とちがって、



花を落とすと、元の裸木に戻る。だが、裸木とはいえ、冬のそれではなくて、少し色づいている。みずみずしい薄緑の枝を、つんつん天に向かって伸ばし始めている。

いま田園を埋め尽くしているのは、真っ黄色な菜の花だ。田の畦や休耕地は黄色い絨毯と化している。独特の土臭さをはらんだほの甘い香り。それがあたりに満ちている。この菜の花に春を感じない人はいないだろう。

それと、そうそう黄砂。春の象徴だ。晴れた日にもかかわらず、付近の山々はどんより霞み、山水画のような光景になる。

夕刻の太陽の妖艶なこと。黄砂の中に落ちていく太陽は、したたるとす黒い血痕だ。天空にくり抜かれた完膚無きまでに丸い穴。どす黒い穴。その向こうに太陽という実体があるとはとても思えぬ。匠の手でくり抜かれた狂いなく深い穴、無だ。まん丸な無だ。

### ■諦念こそが人生

(二〇〇一年四月十一日《水》)

新学期が始まったばかりというのに、はや春を通り越して夏が来たような暑気だ。先日まで春をいろどっていた満開の桜も、芽吹いてきた葉に追いつて立てられるように、はらはらと散り始めた。あと数日で文字通りの葉桜になりそうだ。

日を追って変化していく桜を眺めていると、散っていく花びらに自身を重ねてみないわけにはいかない。地に敷く花びらの一枚一枚が人生における諦念だ。その重みの中で生きている自分に、ハッと気づいて驚かされる。踏みしだかれる花びらの、いや諦念の、なんと悲しくむなく美しい残滓であることか。

人生は、まだ見ぬ先に輝いている希望の光と、後方に無惨にうち捨てられた悔恨が織りなす、リハーサル抜きドラマであろう。渦巻いているのは、いやおうのない諦念である。諦念が堆積し、腐れ、死臭を放ち、なんとも言えぬ郷愁をさえ伴っている、それが人生であろう。

幼いころにはたつぷりの砂が盛られていた篩いの中に、気がつくつと、大して輝きもしない数粒の砂が残っているだけ。ああ、所詮はこれだけだったのか。愕然として受け入れる。その諦念こそが人生なのだ。

盛りを永遠にとどめたいという願いは夢にすぎない。それを、いにしえ人はよく知っていた。移ろいのはかなさをいかに美的に諦念として演出するか。そこにこそ彼らは価値を見いだした。いにしえ人の桜遊びの真相はそこにあっただと思われる。

### ■永遠のノスタルジア

(二〇〇一年七月三十一日《火》)

毎日のように歩く池の土手道がある。大型犬リョウの散歩コースだ。毎日歩いているのに、その都度、何かが変化している。四季の風情を飽きることなく楽しませてくれる。

今の時期、池をぐるりと巡る土手道は、人の背丈よりも高い萩の群生で埋め尽くされている。両側から迫る萩のトンネルを、人も犬も身を縮ませ、よけるようにしながらぐり抜ける。

萩は冬になると枯れつくし、あれだけ勢威を誇っていたのに、哀れな茎の残滓だけとなる。踏め

ば容易にポキポキ折れる。

春になると、まず青草が芽を吹き出してくる。土手はすっかり青草の原となり、人は秋のことなど思い出すこともない。

黄金色が風に揺れる麦秋の五月、土手はまだ青草だ。田園が満々と水をたたえる田植えの六月、おもむろに萩が芽を吹き出してくる。

萩は強靱だ。青草はたちまち下草へと追いやられ、見る間にあたりは萩の勢力圏となる。つんつん伸びる枝先にはみずみずしい薄緑の葉っぱが次から次と噴き出してくる。抑圧を越えて解放された生命力の激しさというところ。楕円形の小さな葉っぱが無数に枝を埋め尽くす。

七月半ば、可憐な花が咲き始める。紅紫あかの小さな花だ。

萩が花をつけ始めると、私は秋の訪れを感じてしまう。これから夏の盛りというのに、夏至を過ぎた自然界は、秋への準備を着々と始めるのである。

日の入り時刻が日を追って早くなっていく。鋭いトゲで孤高を主張していた土手のアザミが、いつの間にかやら脇に追いやられている。

群がる萩の葉叢を透かして真っ赤な夕日が燃えている。なんと悲しいノスタルジア。人類不変のノスタルジアだ。これぞ秋、人類の秋、宇宙空間の秋だ。

この池に、北に帰らない鴨が二羽棲みついている。一羽は茶色い羽の雌。もう一羽はみごとな色どりに輝く青色首の雄。ヒナができる様子はないが、おしどり夫婦だ。いつ見ても、一緒に並んで泳いでいる。

ある夕方、珍しく雌だけが池の中央をゆっくり進んで、隣に雄がいない。

「グエー、グエー」

と、もの悲しく鳴く。何度も何度も鳴いている。あまりに物悲しくて、土手を歩く私までもが悲痛な思いに誘われる。いやな予感が頭をよぎる。

翌日も、翌々日も、泳いでいるのは雌だけだ。ときおり「グエー」と悲しげな声を上げている。雄は死んだのだろうか。いたずらな子どもに殺されてしまったのではなからうか。

遠いシベリアの地で生まれ育った二羽だ。偶然の計らいによってこの池に舞い降り、ここを棲みかとして毎日楽しく過ごしてきた。なのに、相方が突然消えてしまった。鳥とはいえども、これは堪えがたい悲しみだろう。

消えた雄のことよりも、雌の行く末の哀れに、私はやり場のない悲しみを覚えるのだった。愛する雄が二度と帰らぬ遠い地に去ったことを、彼女ははたして知っているのだろうか。

「グエー、グエー」

といつまで虚しく叫び続けるのだろうか。死というものを、鴨ははたして想像できるのだろうか、できないのだろうか。

雌鴨の哀れは、私自身の悲しみに重なる悲しみであった。得られるはずもない何かをいつまでも追い求め、いたずらに爪を空に向けている私。過去から未来へと連なる悲しみのノスタルジアを、永遠に捨てられないでいる私。

ふと思った。ひよつとすると雄は、雌が産んだ卵をどこかの葉陰で抱いているのではなからうか。そんな期待をこめて百科事典を調べると、

「鴨の雄が卵を抱くことはない」

と冷徹な記述。雄のけばけばしい羽色は卵を抱くには危険なのだと言われている。そうか、そうか、そうなのか。やっぱり雄は死んだのか。

ところがだ。もうあきらめていたある夕暮れ、波のない静かな水面を、何事もなかったように二羽の鴨が連れそって泳いでいた。ほっと安堵すると同時に、

「なんだなんだ、あれだけ心配させておいて、なんちゅうことだ」  
あまりのあつけなさに、拍子抜けと、祝福の気分と、少しばかりの怒りの気分さえ味わったのだ。雄鴨はどこに行ったのだろうか。ひよつとすると別の池に飛んで行って、浮気でもしていたのではないのか。お前、そんな奴だったのか。これはいくら考えてもわからない神秘だ。

### ■野良犬の矜持

(二〇〇一年八月十六日《木》)

毎夕の犬の散歩が私の日課だ。かつて犬は四匹だったけど、最年長のメリーが死んだので、今は三匹。それでも同時には無理なので、必ず二ラウンドする。

大型犬リヨウが行くのは、我が家より北。鴨が棲み、萩が茂る池を通るコースだ。中型犬のピーと小型犬のマルタは一緒に散歩し、これは我が家より南。あわせて約一時間というのが、春夏秋冬変わらぬ私の日課なのである。

リヨウの通るコースがくせ者で、バリエーションは何通りもあるが、どのバリエーションを選択しても、途中で必ず野良犬のテリトリーを横切る。

野良犬の集団は二つある。どちらも今春生まれた兄弟とその親だ。

彼らが住処としている巣は、どちらも民家からやや離れた畑の隅。古い農機具や空き箱が置き捨てられていて、雨風をしのぐにも、身を隠すにもちょうどよい。

乳離れした子犬が巣から出てきてびよんびよん跳びはねるようになって、そこに巣があることに気がついた。怖れを知らない子犬らは、巨大なリヨウのそばまで寄ってくる。遊ぼう、遊ぼうと前足でちょっかいを出す。ときにはリヨウの尻尾をかんでみたりする。

リヨウは驚いてうなりを上げるが、子犬を相手にする気などないらしく、くんくん臭いをかいで警戒の身構えをするだけ。

野良の親は心配そうに巣の入り口から見つめている。ときどき子犬に、用心するようにと吠え声を上げる。

はじめのうちはそんなことで、特に危険もなかったのだが、やがて子犬が成長してくると、野良の一家はテリトリーを主張する徒党と化してきた。人間に対しては特段何もしないのだが、散歩の犬がやって来ると、縄張り意識を露骨に顕わし、遠巻きに吠えるのである。

こちらが移動すると、追いかけてくる。距離を縮める。ものを投げつける素振りをしたり、足蹴にする素振りをする、一瞬は遠のくけれども、すぐに吠え声を倍加して迫ってくる。

犬の習性や心理は理解しているつもりだから、これが危険を帯びたものでないのは私にはわかる。しかし毎日、しかも二個所でこれをやられると、うるさくてしょうがない。

動物は自然の中で自由に生活するのが一番だと思う。地球はあらゆる生物の共存の場だ。人間は

そのうちの一種族として生かしてもらっているのにすぎない。動物を毛嫌いしたり、押しのけたりする権利があるはずはない。

にもかかわらず、犬を散歩させていると、すれ違っただけで、顔を引きつらせたり、身をよじらせたりして、恐怖と嫌悪を露わにする人がいる。アパルトヘイトのように、動物を完全にシャットアウトした世界を地球上に作らないと安心できないとでも、その人は考えているのだろうか。悲しいかぎりだ。

野良犬を嫌悪したり、怖がったりする気持ちは私にはないが、毎日吠えさせてられると、さすがに辟易し、このまま放置はできないと考えるようになってきた。

ちょうどその頃、同じように考える人が増えてきた。迫ってくる犬に棍棒を振り下ろしたり、小石を投げつけたり、野良犬に向かって逆に猛犬を突進させたりする姿を見かけるようになってきた。

困りものの野良犬ではあるが、これはあまりにかわいそう。私の気持ちは複雑だった。そしてついに、重大事態となったのである。

誰かが保健所に連絡したらしいのだ。保健所員によって餌を入れた罠がいくつか仕掛けられた。野良犬はただでさえ食べ物に不自由し、一日中餌を探してうろついている。この罠はてきめんだ。仕掛けられてから数日のうちに、あれだけ群がって吠えかかっていた彼らがいなくなったのである。

あっけなく静けさが戻ってきた。

町に静寂が戻ると、何とかしないとけないと考えた自分が恥ずかしくてたまらなくなってきた。恥ずかしいというより、罪を犯したようで、いたたまれない気持ちになったのだ。遠巻きに吠えていた犬たち一匹一匹の顔が浮かんできた。彼らは罪もないのに、みな、罠にかかって捕らえられたのだ。今ごろきつと、動物園のライオンの胃の腑に納まり、第二のお役に立っていることだろう。自らの命を完膚なきまでに犠牲にした悲しいお役だ。ああ、悲愴なり、悲しいかなだ。

あの犬たちはいったい何のために生まれてきたんだろう。何のための命だったんだ。考えれば考えるほど哀れでたまらなくなってきた。

彼らは行くところ行くところ、悪魔のように追い払われ、棒きれで打ちのめされ、小石を投げつけられ、空きっ腹をごまかすためにスーパーの裏口で残飯をあさり、挙げ句には、生まれて初めての大ごちそうに目がくらんだ。その瞬間、生きる自由を奪われたのである。あのごちそうが幻覚だったらよかったのにと、保健所の薄暗い檻に入れられた彼らは考えなかっただろうか。

そんなことを思いながらリヨウを散歩させていたつい先日、やせ細って畑を横切っていく一匹の犬を見かけたのだった。アツと思わず叫んでしまった。見覚えがあった。

「おまえだな、よくもまあ生きてくれてたなあ。あーあー」

思わず男泣きに泣いた。抱きしめてやりたくなくなった。愛おしくなくなった。犬も私の心を読み取ったようだ。でも、近づこうとはしない。野良犬には野良犬の矜持がある。魂がある。プライドがある。それを貫き通して、毒餌を食らわず、骨と皮ばかりになって生き抜いたのだ、おまえは。

抱かれるだけの心を許してはいないが、見ているだけで、万感迫るものを覚えずにはいられないではないか。

おまえはきつと人間嫌いの一匹狼になるだろう。

それとも、またも家族を作って、いつそう人間嫌いとなつた盗賊集団の群れを率いるのか。

いずれであつても、リヨウと私に出遭つたときだけは、またも激しい戦いを仕掛けてくれてもいいよ、震え上がるほどの迫力で吠えかかってくれてもいいよ。がっちり受け止めて上げるからね。極上の迫力と甘噛みで、激しい戦いを演じようではないか。周りからは、誰が見ても、これは本物の縄張り争いだと信じさせられるように、手抜きやインチキを一切感じさせない戦いをしよう。だけどね、本物の悪意を持った人間やその犬には、決して手を出すんじゃないよ。そつと隠れているんだよ。どんなに怒りを感じ、飛び出したくなつたとしても、じつと我慢して、行きすぎるのを待つんだよ。

リヨウと私だけだよ。吠えかかっても、飛びかかっても許されるのは。それさえ守れば、君たちはこの地で大丈夫だ、生きていける。死の危険を感じないで生きていける。そのうち誰かが、そつとエサを置いてくれたりもする。そこまで行けばシメたものだ。君たちは、彼に従属するように見えて、実は大いなる自由を得、許されて野道を自在に駆け回れるパスポートを得たことになるのだ。つまり、この町で認められた存在になるのだ。

もしかして、誰かの家に連れて行かれて、暖かなねぐらと、おいしいご飯を与えられるかもしれない。そのとき、おそらく君は逆に耐えられなくなるだろう。もしもそうなれば、散歩の途中、いつでもリードを外し、林の奥に逃げ出せばよい。君は外せなくても、きっと飼い主が外してくれる。ボールを投げて、「さあ、取つておいで」とでも言つて。そこをねらつて駆け出すのだ。ボールなどおつぽり出して駆け出すのだ。私とリヨウが、必ず援助の手を差し伸べて上げる。

選ぶのは君だ。つながれるのをよしとするなら、逃げなくてよい。自由な選択が、君には任されている。素晴らしいではないか。これが人間と動物の共存生活なのだ。

## ■森のイメージ

(二〇〇一年八月二十日《月》)

私がよく足を運ぶ場所に日吉神社という小さな社やしろがある。ちよつと郊外に出ればどこにでもありそうな社だが、訪れる人がほとんどいず、しかも情趣に富むという点では、ちよつとどこにでもない社である。

日吉神社は松山市の東のはずれ、播磨塚台地と呼ばれる広い台地の南西斜面にある。そもそも播磨塚という地名は、その昔、播磨の国の国司であつた小楯おだてという人に由来している。小楯は、清寧天皇が后も皇子もなまじ亡くなつたため、その皇位継承者を探していたとき、履中天皇の孫に当たる二人の皇子(袁祁王Ⅱ顕宗天皇、意祁王Ⅱ仁賢天皇)を、播磨の豪族の新築祝いの宴で見つけたという。古事記のくだりである。

彼はもともとこの播磨塚あたりの生まれの人だつた。老いて国司を辞した後は故郷に戻り、播磨様と呼ばれて崇拜されるようになったということだ。

小楯も毎日目にしていただろうが、この台地にはかつてたくさん古墳があり、それ故、「播磨様」の「播磨」にさらに「塚」がついて、この付近を播磨塚と呼ぶようになり、この台地を播磨塚台地と呼ぶようになったのだつた。

残念なことに、これらの古墳は、台地の大部分が陸軍駐屯地(今の自衛隊松山駐屯地)として接收された際、破壊されてしまい、今は形をとどめていない。

ところが近ごろ、接収をまぬがれていたミカン畑を整地した際、その下から未盗掘の古墳が発見された。六世紀初頭の前方後円墳で、みごとな副葬品が多数見つかった。播磨塚古墳と呼ばれるようになった。

日吉神社は播磨塚古墳のすぐそばにある。神社には、拝殿の奥、一段高いところに、ひっそりと隠れるように本殿が鎮座している。本殿の造作はすばらしく、みごとな彫刻が東西南北の板壁と破風に丹念に彫り込まれている。

驚くばかり精緻な作りの本殿だが、正面の拝殿からはその存在すら気づかれない位置にある。そのため、付近をよく知る人の他にはほとんど参拝する人のない秘殿となっているのである。

本殿の彫刻もさることながら、私は日吉神社の裏手一帯、播磨塚台地の南西斜面を占有する鎮守の杜もがなにより好きだ。空を覆って昼なお暗い樹林。その中を、自衛隊正門前に抜ける細い小径が続いている。

十数年前、はじめてこの樹間の小径に足を踏み入れたとき、なんだか懐かしい森の小径の典型を見たような、不思議な気分にはいったものだ。先人の魂が樹間に響き、今なおこだましているような、沸々としたエネルギーを感じたのである。

西ヨーロッパでは、キリスト教が浸潤するより前、大地母神をあがめる土着のケルト文化が広がっていたと言われている。ケルト文化のさらに前には、ストーンヘンジやストーンサークルを残した巨石文化の民がいた。ケルト人は、先住者が残した巨石に神秘を感じ、その地下には大地母神の理想国があるだろうと考えた。ときにそれは、海の彼方とされたり、深い森の中とされたりもしたようである。

ところが、ローマ帝国の拡張とともにキリスト教がケルト文化を駆逐し始めると、大地母神は罪の象徴である魔女とされ、大地母神の理想国は地獄あるいは煉獄として恐れられるようになった。

それとともに、理想の国に至る通路、あるいは理想の国そのものであった深い森が、限らない恐れの対象となり、その根深い心情がグリム童話に見られるような「魔女の住む怖い森」のイメージを作り上げたのだと、私は想像する。

日吉神社の鎮守の杜を歩くと、薄暗さに戦慄を覚え、身構えはするものの、ここに人間と自然の深い交感のエネルギーが蓄えられているのを感じ、懐かしさを覚えるのである。

西洋であればキリスト教以前の、日本であれば仏教以前の、これは原始人間の自然依存性（自然との一体性）の表れなのかもしれない。

### ■黄昏はあまたの一日の凝縮である

(二〇〇一年九月三十日《日》)

季節はすっかり秋だ。暮れ方のすがしい風に乗る、キンモクセイがほのかに匂ってくる。

曼珠沙華の燃える朱色が、一斉に空を仰ぐ埴輪のように、田の畦を埋め尽くしたも束の間だった。今はもう、彼らの頭はぼうぼうと乱れ、名残りの色をわずかにとどめるばかり。残るは、通りかかった子供らにほきほきと首を折られるか、さもなくば老いさらばえの姿となって、見苦しく朽ち果てるのみだ。夢見るように立ち上がった彼らの運命は極まった。夕闇迫る畦道で、死への長い眠りに落ちようとしている。

沈む夕日の巨大な真円が際だつのも秋だ。人類は太古の昔から、真円のアイデアを夕日に見てきた。夕日の真円こそは、個を超えて共通する人類の潜在的アイデアだろう。

夕暮れと暁は、闇と光の境界線という点では同一現象と言える。しかし、われわれにもたらす印象はまったく別物だ。私は常々そう思ってきた。

レヴィ・ストロースの『悲しき熱帯』に、この思いを代弁してくれる個所を発見した。さわりを少し引用させていただこう。

夕方と朝ほど違ったものはない。夜明けは一つの序奏であり、日没は昔のオペラでそうだったように、始めにはなく終わりに演奏される序曲なのである。……。曙光は何の予言もしない。それは天気予報の働きをするのであり、雨が降るだろうか、晴れるだろうかというのである。日没の場合、事情は異なっている。それは初めと中と終わりのある、完全な一つの上演である。このスペクタクルは、十二時間のうちに相次いで起こった戦いや、勝利や、敗北を、縮小された一種の映像として、だが速度をゆるめて示すのである。暁は一日の始まりでしかないが、黄昏は一日を繰り返してみせるのだ。(川田順造訳)

黄昏というのは、単に過ぎ去ったその一日をスペクタクルとして見せるだけでなく、多くの一日を、人類が経たあまたの一日の集まりを、そしてそれを通して、人類の多くの悲しみを、喜びを、それらすべてを凝縮してわれわれに見せるもの、私はそんな気がしている。

落ちていく数分のドラマの中に、私はいつも太古を見るのである。

### ■久しぶりにゴルバチョフ

(二〇〇一年十月三十一日《水》)

キンモクセイの甘い香りが満ちている。金色の花弁が葉っぱの奥から吹きこぼれんばかり。

記憶では、キンモクセイが咲き始めるのは九月末から十月初め。そして、十月の第一週あたりが盛りとなる。松山で言えば、秋祭りの時期。ちょうどそのころである。今年もそうだった。その時期、キンモクセイは盛んに香り、花をつけた。

ところが盛りを過ぎて、いったん散った後なのに、キンモクセイがふたたび勢いを取り戻して、咲いてきた。一度目の恥じらうようなほのかな香りから、今は一転、むせかえるような強い香りだ。

キンモクセイというのは、毎年こうだったのだろうか。日記を読み返すと、去年もキンモクセイは二度咲きした。だが、二度咲きは必ずしも毎年の現象ではなさそうだ。年々の気象の具合とか、さまざまな条件によって二度咲きするのだろうか。キンモクセイにはむらがある。

ふと思った。このむらつけをキンモクセイのルーズさに結びつけるのは酷なかもしれないと。キンモクセイに「咲け」と命じる条件は、秋が深まる気象の変化の停留点に当たっているのかもしれない。変化の微分係数が一瞬ゼロになったとき、それがキンモクセイの咲く時期だとしたならば、咲き出す時期の決定に迷う姿や、その末の二度咲き、狂い咲き現象に、妥当な解釈がつきそうに思う。

気温が何度になったらではないのである。気温の変化率が一瞬ゼロになったとき、それがキンモクセイの咲く時期なのではなからうか。これは私の単なる思いつきであって、何の根拠もありはしないが……。

開花時期の不運な特性を持つキンモクセイと違い、彼岸花は、夏の騒がしさから、静謐の秋へと季節がなだれ落ちていくときに咲く。花開くべきタイミングを尖鋭に感知できる環境下に開化を迎える、それが彼岸花の律儀の実体なのかもしれない。

最近久しぶりにゴルバチョフの名前に接した。彼がいまも政治にかかわっているのか、それとも悠々自適の日々を送っているのか、それは知らないけれど、アフガニスタン問題に対する彼のコメントが、新聞に載っていた。

「アフガニスタンに関する私の経験から、米国に一刻も早くアフガンから退去するよう忠告する」さらにブッシュ大統領に、

「戦争はテロに対するものであって、アフガニスタンの民間人に対するものであってはいけな」と言い、

「アフガンでの戦争は狂気の沙汰。何十年も続く可能性がある」と指摘している。

実際、最近の報道を見ると、アメリカのアフガン攻撃は、当初の計画通りの短期決戦や、電撃的な勝利をもたらすものではなくなりつつあるようだ。泥沼化の様相を呈しつつある。

パキスタンで一人の義勇兵がタリバン支援に立ち上がったとも言っている。タリバンはそれを、「今は必要ないから待機しててくれ」

と断る余裕すら示している。アメリカの思惑通りにことが運んでいないのはたしからしい。

そもそも「仕返し」という子供じみた発想に端を発した今回の戦争を、大人の目で冷静に見つめて抑制する政治家が、今どうしても必要だ。日本にそれを求めようにも、小泉政権には無理。

人類はどこまで幼稚化し、歴史を退行させるのだろうか。この戦争で利を得ている人が誰なのか。それを考えれば、馬鹿げた破壊と殺戮、武器の大量消費に、「ノー」の声がわき上がっても不思議はないと思うのだが……。

## ■最後の一葉

(二〇〇一年十二月六日《木》)

師走を迎え、木々は紅葉から落葉へと、あわたたしい変身のさなかにある。冬に向かう樹木の変身は、実に多様で個性的だ。樹齢も環境も樹木種もすべて同一であると思われる街路の並木でさえも、早々と裸になったものがあるかと思えば、風に吹きちぎられそうな葉を頑強に持ちこたえているものもあり、中にはてっぺんにまだ緑の葉を元気に茂らせているものもある。老化の進行はさまざまだ。個性は人間だけの特権ではなさそうだ。

職場の裏山である大峰ヶ台(松山市総合公園)は私がよく行く散歩エリアだが、木々の彩りの多様さにはいつも驚かされる。同じ樹種であっても、どれ一つとして同じ色合いの紅葉はない。ソメイヨシノは春にはあでやかな花で人を楽しませ、今は赤銅色の紅葉で人を魅了する。年に二度、華やかな大舞台を演出するのがソメイヨシノである。

だがこの赤銅色、ひと言で括ればたしかに「赤銅色」と呼ぶしかないのではあるが、近づいてつぶさに一枚一枚の葉を眺めると、とても赤銅色などと単純に言ってしまうものではないことに気



づく。葉によって色合いも輝きもすべが違ふ。赤褐色の強いもの、黄緑がかつたもの、紅色に輝くもの、茶褐色のもの、……。

一枚の葉を切り取っても、べったりと一色で塗りつぶされていたり、はしない。場所場所によって色も輝きもすべて違ふ。

こうした葉が混然と入り乱れ、蔭になったり、日差しに照ったり、風に揺らいだり。空間と時間の狭間の中で、無限のアトランダムで揺れ続けている万華鏡。それが一樹の桜の晩秋なのである。

大峰ヶ台の山頂には、オオシマザクラ、カンザン、イチヨウなど、どれも桜の仲間だが、春の美しさにはそれぞれに異なった味を持つ桜が多数植わっている。これらもまた、今、個性あふれる冬への変貌の最中にある。多いのはオオシマザクラ。一樹一樹を見ていくと、とても同じオオシマザクラと見えない。たっぷりとした黄褐色と薄緑の葉に包まれているものもあり、天を突く細枝ばかりとなったものもあり、今まさに風に吹かれて葉を一齐に振り落としつつあるものもあり、それらが山頂広場を点々と秋色に染めている。

先日、天気の良い昼下がりに、イチヨウの木の下のベンチに腰を下ろして、遠足に来ていた幼稚園児を眺めていた。彼らはいつときキャーキャーと甲高い叫び声を上げて走り回っていたが、先生の笛の合図とともに、さあーっと一齐に山を下っていき、一瞬にして山頂が静寂の中に落ち込んだ。そのときだった。足元で乾いた音がした。ガサツとたしかに何かの気配だ。ハツとして辺りを見回してみたが、なにもない。しばらくすると、またガサツ。

わかった。イチヨウの葉が風に吹かれて落ちる音だった。一枚の小さな葉。それがドキッとするほど大きな響きを立てて落ちるのである。大発見だった。半年かけて蓄えられた重力エネルギーが、落下とともに一気に解放されて、地面に落ちるなり、空気を揺り動かす力となるのである。

その気になって耳をそばだてていると、ガサツという、清とも濁ともつかない音が、あちらこちらで不定期に響く。聞くうちになんだか心地よくなってきた。ランダムな中にも不思議なリズムが感じられる。そのリズムに感性が共鳴したとたん、私は宇宙と渾然一体になっていた。まるで空から降ってくる陶酔のリズム。

このリズムこそ芸術ではないのか。芸術は人の英知の届かぬ彼方、人の世に先行するはるかな過去から、それを誰に鑑賞されることもなく、ひたすらあまねくあり続けてきたのではないのか。人が時空を越えて、見えない目で、聞こえない耳で、内なる感性だけを頼りに、その源泉にたどり着いたとき、人は芸術にふれ、創作を生むのではなからうか。

人はあるとき偶然、その味わいを知り、秘密の琴線に触れ、その瞬間、無限の虚空に充満している究極の喜びにひたることのできるのだ。

雲一つない秋空が私を包んでいた。イチヨウは見る間に裸になっていった。時間は、あるときは速く、あるときはゆっくりと、私たちのまわりを流れていく。私は一本のイチヨウが急歩調で葉をむしり取られてゆく不思議な時の流れに立ち会ったのだ。

そして、なんとという不思議だろう。最後の瞬間、小さな葉が一枚、軽く握っていた私のこぶしの中に吸い込まれてきたのである。音もなく落ちてきた。何の輝きもない、無惨に乾いた葉っぱだった。最後の一葉だった。

私はそれを握って立ち上がり、天を突くイチヨウの小枝をなでてみた。小枝にははやくも、春を待つつぼみがぶつと小さくふくらんでいた。樹皮は氷のように冷たく硬く、人を拒んでいながら

も。

## ■冬至を過ぎて

(二〇〇一年十二月二十五日《火》)

冬至を過ぎた。いよいよ年の瀬だ。冬至といえば、いつも思うことがある。冬至の定義だ。百科事典を見てみると、「太陽が黄道上の最も南に来る時。その日、北半球では、夜が一年で最も長く、昼が最も短い」とある。

それはその通りだろう。だけど不思議に思うのは、生活実感として、日の暮れが最も早いのは決して冬至の日ではない。それよりうんと手前の十一月末か十二月初めだ。冬至のころにはすでに明らかに日は長くなっている。私の住んでいる松山でいえば、夕方五時は、十一月末にはほとんど真っ暗。だけど、冬至の時期である今、夕方五時は十分明るい。

日の出でいえば、冬至の時期の今、朝の七時は明るんでいる。しかし、一月に入り、一月十日ごろだと、朝の七時はまだ暗い。例年そうだ。この冬も間違いなくそうだろう。

こうした現象をふまえて、あらためて冬至の定義を見ると、「日の出が一番遅い」とか「日の入りが一番早い」とか書かれている本が一冊もないのを、宜なるかなと思うのである。冬至を過ぎて、日の出はどんどん遅くなっていく。しかしそれを上回る速度で日の入りが遅くなっていく。だからトータルすると、冬至には夜が最も長く、昼が最も短いのである。

夕方犬の散歩をさせていて、つくづくそれを実感する。冬至をまだ迎えていないにもかかわらず、十二月に入ると夕空の明るみが日を追って長くなっていくのだ。数日前には暗かったはずの時刻に、西空の茜が長くたなびいているのを見ると、「日が戻ってきたな」と体の底から実感し、一種の喜びを覚えるのである。

冬至はその意味で、折り返し点を過ぎたあとにやってくる単なる通過点だ。もちろん、太陽が黄道上の最も南に来る（つまり太陽が落ちる地点が最も南にくる）という厳正な瞬間が冬至であるのはまちがいない。「単なる通過点」というのは言いすぎであろうが……。

この奇妙な現象が生じる正確な理由を私は知らない。だが、多分こうだろうと思うことはある。それは、地球の公転軌道が楕円であり、しかもその近日点（太陽に最も近づく点）が北半球の冬至のころに当たるとすれば、上の現象に説明がつくということだ。

というのは、地球の自転角速度が季節によらず一定であるのは当然だが、公転角速度の方は太陽からの距離によって、つまり季節によって変動する。近日点のあたりでは公転角速度が大きくなり（ケプラーの第二法則）、その分、見かけの一日（夜明けから翌日の夜明けまで）が二十四時間よりも長くなる。それが北半球の冬至のころ、つまり今ごろだとすれば、上の現象に説明がつく。

なぜなら、時計は常に二十四時間で一日だから、実際の一日が二十四時間よりも長い今は、必然的に夜明け時刻も日の入り時刻も少しづつ遅れていくことになる（前日の夜明けから二十四時間経っても、次の日の夜明けは来ない）。

上の奇妙な現象が生じる理由はこれで明らかだ。

『理科年表』で調べてみると、近日点は今の時点、実際、北半球の冬至のころに当たっているようだ。これで上の推論にまちがいが無いことを知る。なぜ近日点が北半球の冬至のころなのかは知

らない。しかも、「今の時点」がどれくらいタイムスパンで言う「今」なのかも知らない。それにしても、日没時刻や日の出時刻という日々の生活実感から、地球の公転軌道が楕円であること、さらにはその近日点が北半球の冬至のころであろうということまでわかるというのは、なんと面白いことだろう。

### ■教師とは悲しいものよ

(二〇〇二年一月二十一日《月》)

教師をしていると、悲しくてならないことがある。柱に頭を打ちつけて泣き出したほど悲しくなることがある。

何が悲しいのかと言えば、十年一日のごとく同じところに留まりつづけている自分が情けなくて悲しいのだ。教師というのは、眼前を通り過ぎていく無数の若者たちに、いつとき何かを教えては、見送る、停滞した存在だ。ひととき自分を指差し眺め、そして去っていく見物人どもを、檻の中から悲しげな目で見つめている動物園のサルのような存在だ。

その悲しみを端的に表現している文章に出逢ってしまった。山本有三の随筆集から少し引用させていただく。

その昔、東国のある住職が、門徒を連れて京に上った。京の手前の追分け道のところへゆくと、大きな棒ぐいが立っていた。それを見ると、門徒の一人が尋ねた。

「あれはなんですか」

住持はすぐ答えた。

「道しるべの棒ぐいです。右へゆけば京、左へゆけば伏見と書いてあるのです」

「それは読めないこともありませんが、あの棒ぐいはいったい何ですか」

門徒は畳みかけていった。

住持はしばらく答えられなかったが、やがてうつむいたままいった。

「あれは私です」

こんなふうな話を、一、二年前読んだことがある。その当時、私は教師をやっていたので、「あの棒ぐいは何ですか」といったことは、かなりどしんと自分に響いた。私もまた一個の棒ぐいであつたから。実際、若い旅人に向かって「おまえは右に」、「おまえは左に」といわぬばかりのことを、私はやっていたのだ。その前から教師という職業には、どうも自信がもてなかったが、これ以来、私の足もとは一層ぐらつきだした。もちろん、融通のきかない棒ぐいでも、道ばたに立って、

右、京。左、伏見。

と、きっぱり言い切れるだけの信念があつたら、私は泰然として、その職にとどまっていたろう。しかし、私にはとてもそんな力がなかった。そうした揺るぎのない心境に、早く達したという願いは、非常に深いけれども、それはまだまだ先の問題である。それよりも、今の自分にとって最も切実な欲求は、「右へ」とか、「左へ」とか、人の道を案内することではなくて、自分自身が進まず、京に上りたいということであつた。かつて道しるべの棒ぐいが、京に上ったためしがあるか。そう思うと、自分はじつとしていられなくなった。

ついに私は、思い切って教師の職をなげうった。そして去年から、新たなワラジをつけて、あらためて自分の道を歩き出すことにした。

何とも悲しい教師という職。よほど強い信念か、あるいは実力か、さもなければハツタリか、さらにさもなければ突っ立つ棒ぐいであることに気づかずにいるか、いずれかでなければ堪えられない職、それが教師なのであろう。

「今の自分にとって最も切実な欲求は、「右へ」とか、「左へ」とか、人の道を案内することではなくて、自分自身がまず、京に上りたいということであった」

ああ、私自身を何と痛烈に表象している言葉だろう。二十数年前に教師になった瞬間から、これは私の心の奥を占めつづけてきた。教師はいわば隠れ蓑。それに埋没していない時間が、私自身の真の時間であった気がする。そして、実際そのように生きてきた。決して成功したとは言えないが、少なくともそのような生きるべく、努力してきたのであった。

### ■生かされている

(二〇〇二年二月二十八日《木》)

気がつくと、今年もはや二ヶ月が過ぎた。春はすぐそこだ。というか、今が春だ。二月の春、三月の春、四月の春、五月の春、それぞれに情趣の異なる春が私を待っている。それぞれに人を幸せにする何かの底から湧き上がってくる。生きている幸せをこの時期ほど痛切に感じることはない。

三年前、人生の道がなお先に続くものだと、自分自身まったく信じることができないまでに、苦しみと絶望の縁に立たされていた私は、今こうして生き返り、生かされていることに、ありがたみを誰よりも強く感じるのである。

「元気に快復したから話すんですがね」

と、先日、主治医に打ち明けられたことがある。

「実はあの頃、これはもうダメかもしれないと、何度も匙を投げかかったんですよ。どんな手を打つても、いっこうに快復する兆しが見られず、連日連夜高熱が続いて、半死半生でしたからねえ。最悪の事態を考えて、東京にいる娘さんに連絡して、来てもらっておいた方がいいですよと言ったのもあの頃でした」

その頃私は、人が味わう一日分の苦痛を、一秒一秒に濃縮して小やみなく味わわされていた。生きていくのか死んでいるのかさえ自分にもわからず、かといって意識がまったくないわけではない。意識はうすぼんやりとあるのだが、あまりの苦痛の連続に、耐える力はどうに限界だった。そんな一刻一刻が間断なく続いていった。

生きていること自体が、私には耐えがたく苦しいことだった。体を丸め、歯を食いしばり、ひたすら一瞬一瞬を耐えていた。

それが三年前のこの時期だった。一月下旬から三月初めにかけての四十日間、生と死の境をさまよい続けたのであった。見舞いに来てくださった牧師が、それをキリストが悪魔の誘惑に悩まされつつ荒野で断食した四十日間にとえ、きつとなんらかの生まれ変わりがありますよと、祈り、励ましてくださったのだった。

最悪のあの時期をはさんだ一年三ヶ月ほどが、私の闘病生活だったわけだが、この時節が来るたびに、三年前のあのころを、思い出さずにはいられなくなる。そして、生かされている幸せに涙するのである。

いつの頃からかはわからないが、自然を目でとらえるだけでは物足りず、嗅覚で、味覚で、触覚でとらえる習慣ができてきた。散歩しながら、今の時期だと、梅やスイセンや菜の花や、その他もろもろの樹々や花々を、触り、匂いをかぎ、ときには口に含んで味わってみるのである。梅のかすかな甘酸っぱい香りは、胸一杯吸うと、天に昇るような心地になる。スイセンの芳香は王家の香りだ。菜の花の土臭い香りは、自分の生命が自然の生命とつながった一つの世界の中にあることを、瞬時に体感させてくれる不思議な力をもっている。

風もまた不思議な生き物だ。実在のない実在。陽光の隙間を突いて駆け抜けていく虚の中の虚。風には今がない。頬をかすめて吹きすぎていき、その感触を楽しもうとしたとき、すでに姿はそこにはない。あるのはただ過去の残り香と、未来からのいたずらっぽい含み笑いだけ。だけど風は、私のすべてをつかみ、すべてを知って、届かぬ彼方にいつだっている。

こうして、自然の中に日々生かされている自分に、幸せを感じないではいられないこのごろなのである。

### ■覇権の終焉

(二〇〇二年三月二十一日《木》)

今年は春の訪れがいつになく早い。いつもなら蕾がようやくふくらみかかる今の時期、あたりはすでにあでやかな満開の桜だ。

必然、梅のアイデンティティが遠のいた。梅は一月下旬に咲き始め、二月いっぱいかけて満開を迎える。それが三月中旬まで続き、おもむろに桜の蕾と入れ替わる。これが例年のパターンだ。

梅の花びらは頑強で、桜のようにハラハラと散らない。干からび、しぼんで、醜態をさらしながらも、小枝に貼りついていて。梅はまた、桜のように無臭ではない。ほのかに甘い香りを放つ。梅林に入るとその香りが全身を包み、ニーチェがサロメに愛を語った百年前のイタリア田園にいるような、不思議な幻覚を覚えることさえある。

この梅が今年、盛りの色づきを誇示する間もなく、黄砂と共にやってきた怒濤の桜に一掃されてしまった。梅の梅らしさは儂い予兆と期待だけで終わりを告げた。梅は桜と並ぶと、ふくよかさにおいて勝負にならない。春霞に合うのはやはり桜なのだ。存在価値を失った梅は、背景に溶けこむように身を隠すしかない。梅は早春にこそ似合う花である。爛漫の春ともなると、そもそも体質が合わないのだ。

今年梅の梅らしさが奪われた年であった。

ブッシュはアフガニスタンで、太陽とならず、北風を演じつづけている。たった一人の旅人の衣を剥ぐために、世界に猛烈な北風を吹きつけている。自らが他者に与える実害と不快には鉛のように鈍感になり、それに抗して立ち上がる各地の群衆を、いっそう強い北風で追い払おうとしている。

この仕打ちがいかなる結末をもたらすのか。世界がかつて味わったことのない悲惨な結末で終わるのか、それとも、これまた世界がかつて味わったことのない大きな高笑いで終わるのか、あるい

は果てなく戦いが続くのか。いずれにしても、

「二十一世紀はアメリカの覇権の終焉とともに始まった」

と、後の歴史書に書かれる事態になることは、相当な確度で言えそうに思う。

## ■なぜ私はこの肉体に終生一体なのか

(二〇〇二年五月六日《月》)

雨。この雨で勢いづいたものがある。ミカンの花だ。家の前には道路を挟んでミカン畑が広がっている。無数の花卉から発せられる芳醇な香りが風に漂い、思わず胸いっぱい息を吸い込みたくなるほどである。

このミカンの香が、雨で一段と濃さを増した。窓を開けると、一瞬にして催眠にかけられ、夢見心地だ。

小さいが、ぼつとりとした花びら。雨が上がり、雲間ができると、たまっていた滴が純白の花びらをぶるつと揺すって落下していく。次から次と落ちていく。ぷるぷるぷると、あちらでもこちらでも、全宇宙を内に宿した光の玉の行列だ。

ミカンにかぎらず、厚くてぼつとりした花はたいい芳香を放つ。今は花のころを過ぎてしまっただが沈丁花。そして、今盛んに香るのは、レンギョウ、ジャスミン。どれも花びらの形が似ている。レンギョウは真つ黄色、ジャスミンやミカンは純白。色の違いはあるが、どれもよく似ている。

香る花と香らない花。それぞれに特性を生かして、長い生存競争を勝ち抜いてきた。しかも、今が競争の最終地点にあるはずはない。安定点でもない。「今」に大きな意味などない。今はこれまで同様、苛烈な競争過程のただ中にある。人の一生と較べれば、あまりにゆっくりとした、見ようにも見られないほどの過程ではあろうが……。

地球の生存環境は常に姿を変えながら実に多様だ。平坦に変化することもあれば、破局的な変化を遂げることもある。その多様さに生き物は身を適応させながら、それぞれのニッチで生き抜いてきた。形を変え、生き方を変えて生き抜いてきた。環境の変化に適応できずに死に絶えた生物も多い。結果、今ある生物群が生まれたが、これが最終の安定群であるはずはない。この先、どんどん変化していくだろう。

ヒトも同様だ。現在が進化の最終段階ではない。最高地点でもない。安定地点でもない。現在を特別な最終地点、選ばれた地点だと錯覚するのは、変化が一人の生に比べて極度にゆっくりなのを見誤った幻覚にすぎない。やがてはヒト属も滅びるだろう。

連綿とした生命の長い流れの中で、自己を自己だと認識できるようになった、この自分をつくづく不思議だと思ふ。しかも、なぜ私はこの肉体に終生一体なのだろう。肉体を構成している物質は常に外界とオープンに行き来しているにもかかわらず。

うたた寝をしながら、今日、あまりの不思議に思わずピョコンと跳ね起きてしまった。

## ■野に咲く花のアイデンティティ

(二〇〇二年六月八日《土》)

初夏の花々が咲き乱れている。心惹かれるのは名もない小さな花だ。いや、名のない花なんてあ

るはずはない。どんな花にも名前はあるのだろう。私が知らないだけだ。

とはいえ、名前にどんな値打ちがあるというのだろう。人の便宜でつけられた名前。分類に必然性などあるわけではないのに、研究の便宜や、生活とのかかわりの便宜、そのために人はあらゆるものに名前をつける。

レヴィ・ストロースの『野生の思考』によれば、原始的種族にも我々と変わらぬ思考力があり、それぞれに身の回りの自然物を分類し、名前をつけている。

パターン認識の立場からすれば、いかなる諸物にも、それらを分類する唯一の必然性などない。分類の基準(目的)を人が主観をもって設定して初めて、そこに分類という操作が可能になる。

これを「醜いアヒルの子の定理」と呼んで、数学的に証明した本をかつて読んだことがある。たとえば、美しい白鳥たちの中に醜いアヒルの子が一羽いたとして、それを分類するために白鳥とアヒルとの間に一線を引くのは、人の先入観や主観がなせる幻想作用だというのである。分類されたグループ間のパターン認識上の距離は、どのように分類したとしても変わりはないというのである。

たとえばこの例であれば、なにも色で分けなくても、体重で分類してもよいだろうし、泳ぎの速さで分類してもよい。他にもいくらでもある。分類の基準はいつでも主観であり因習なのである。

分類の基準は社会生活のありようや伝統に大きく左右される。よく言われることだが、たとえば生活の中に馬がほとんどいない民族にとっては、馬を指す言葉はまったくないか、あっても「馬」という一つだけだが、馬と日常的に暮らしを共にしている民族にとっては、馬のわずかな違いに応じて、それを指す言葉が十種類も二十種類もある。それだけ緻密に分類されているというわけだ。

野道にしゃがんで、足元に咲く小さな花々を見つめていると、不思議な気分が襲われることがある。人はこれを「ツユクサ」とか「イボクサ」などと、一律に括って呼んでいるのだが、よく見ると一つ一つの小さな花にもはつきりした個性があつて、その一つ一つが何かを語りかけてくる。

もしも人が、あなたも私も一緒くたに「人間」と呼ばれて処理されてしまったら、いい気分はないだろう。「日本人」、「インド人」、「フランス人」、これでもいやだ。そんな分類の言葉では括れない個性がそれぞれにあり、アイデンティティーがあると抗議するだろう。

花もやはりそうではなからうか。というよりも、花はわれわれの分類を度外視した世界に生きている。人間による名づけなど、どこ吹く風だ。彼らは彼らの世界を生きている。自然の中に、自然のままに。理性という得体の知れない幻影の束縛を屁とも感じず、自由に、あるがままに、最大の個を主張して生きているのである。

野道にしゃがんで、子供のように無心に花々を見つめていると、小さくてもそれらがこの世界にたしかに存在し、時間の中を、この私と同じ時間の中を、何も思わず、ひたすら在るがままに風に身を任せながら、そして目の前の私に

「自然であれ、自由であれ」

とロゴス以前のロゴスで語りかけながら、それらは今を生きていることが、骨の髄まで感じられるのである。

自然って、在るって、生きているって、なんだろう。名もない小さな野草と私とに、はたして違いなどあるのだろうか。ましてや、人が「上」、野草が「下」などと、いったい誰に分類できるのであろう。